
シーカー

安部飛翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シーカー

【Nコード】

N3599Q

【作者名】

安部飛翔

【あらすじ】

迷宮都市アルデリア、それはかつて10柱の邪神達との聖戦において劣勢にあったこの世界の神々が、自らの戦力となる人間達を生み出すために創り上げた修煉場。

邪神達を封印し、聖戦が終り永い年月が経った今でもその機能は生きて活用され、神々が残した伝説の武具などの財宝も山ほど眠り、迷宮の奥深くには聖戦の戦力として召喚された異界の神々さえ住まうという。

贖罪の為、邪神を倒す力を求めそんな迷宮都市アルデリアにやって

きた主人公スレイは探索者となりその才能を発揮し成長し、様々な美女・美少女と出会い関係を持つ。

その中でスレイは自らの魂の秘密を知り、その秘められた力に覚醒すると共に、自らの野望に目覚め、唯一絶対の最強へと到る為、また他の男の女を除いたあらゆる美女・美少女を己が物とする為、また己が心を躍らせる強敵との戦いを求めて、己が道突き進み貫き通す。

全ては最強の邪神、即ち最強の“真の神”を打倒し、己こそが唯一絶対の真の最強へと到るその為に。

※アルファポリス様より書籍化・出版した為、アルファポリス様の指示により第一章〜第三章をダイジェスト版に差し替えました。

※第四章の改稿版の投稿を開始しました。

第1章ダイジェスト

扉を軋ませ探索者ギルドに黒髪黒瞳のそれなりに整った顔立ちの、黒い服装をした一人の青年が入って来た。

腰まで伸ばした赤毛と茶色の瞳の闊達な美少女、迷宮探索者達の間でアイドルの様な人気の受付嬢リリアは少々驚く。^{シーカー}

その青年は年若い身ながら熟練した探索者が漂わせる風格の様な物を纏っていた。

青年の雰囲気は探索者ギルドは一時静寂に包まれるも、すぐにギルドには喧騒が戻ってくる。

気にする様子も無く青年はリリアに向かって歩み寄ってきた。

「探索者として登録したいのだが」

「は、はい。ギルドへの探索者としての登録でございますね？かしこまりました。それではこちらの書面に必要事項を記入して頂けますでしょうか」

思わず上擦ってしまった声に羞恥に頬を染めるリリア。

スレイと名乗った青年は、その様子を気にも留めずに、そのままリリアと会話し書類に必要事項を記入していく。

そしてリリアは他の職員の手が空いていないのを見て、審査と探索者としての肉体改造まで、初めて自分が最後まで担当できる事に喜びつつスレイをカウンターの横の扉から奥へと案内するのだった。

スレイは案内されながら過去に想いを馳せていた。

スレイの人生が変わった二年前を思い出す。

あれからスレイは剣の師と魔法の師について学び、実戦においては二人の師すら越えた上で、五ヶ月前に故郷のトレス村を旅立った。腰に提げた刀も、剣の師が用意してくれた故郷のシチリア王国の軍刀サーベルの中でも特別に質の良いものだ。

魔法の師も魔力付与を行ってくれた。

そのようなそれなりの業物故に盗賊に狙われる事も多かったがスレイは全てその刀と自らの魔法で解決してきた。

そしてようやく辿り着いた目的地である迷宮都市。

誰もが富と名声を手に入れられる可能性のある、野望を持った者が集まる場所。

だがスレイがここにやってきたのは贖罪の意識から力を求めている事であった。

「こちらです」

辿り着いた部屋には探索者になろうとする者の現在の力を測り、肉体を探索者として改造し、資格を発行する魔導装置と魔法陣があった。

「それではスレイさん、この魔法陣の中央に立って頂きますでしょうか？」

リリアの言葉に従い魔法陣の中央に立つスレイ。

そんなスレイに肉体改造により魔物の魂の力を経験値として取り込み肉体を強化できるようになるレベルアップのシステムを説明するリリア。

そしてスレイの了承を受け、リリアは装置を発動した。

「え？何これ！？」

スレイの肉体改造の儀式が終わり、発行されたスレイの探索者カードの特異な能力値を見て驚愕の声を上げるリリア。

「どうした、何か問題でもあったのか？」

後ろから覗き込み声をかけるスレイに、ビクッと反応したリリアは恐る恐るスレイを振り返り探るように見る。

黒髪黒瞳のそれなりに整った顔立ちに、細身で引き締まった身体をしているが、それ以外は何てことのない十代後半の青年だった。

その特異な能力値を反映するような特徴は外見上どこにも無い。

「い、いきなり後ろから声をかけないでよ！驚いたじゃない！」

近づいた顔になぜか心臓の鼓動が速くなったリリアはごまかすように大声で怒鳴り、スレイは素直に謝罪するのだった。

カードに書かれている年齢は十八歳とまさに見た目通りの年齢だ。だがスレイの能力値は肉体改造をしたばかりで、しかも神の祝福も無いというのに、とびつきりに無茶苦茶だった。

筋力のEは鍛えられた体から順当と言っても構わない、体力と魔力のDもかなり高めだが異常というほどではない。

だが敏捷のSは既に超一流の領域だ、器用のAも一流の探索者に与えられる評価だ。

精神のEXに至っては伝説級と言ってよいだろう、動の極致を極めたバーサーカーも、静の極致である明鏡止水を極めた聖職者でも精神のステータスはせいぜいSSといったところだろう。

ごく普通の性格にしか見えない青年がEXなどという精神力を持っているのが逆に恐ろしい。

さらに運勢のG、運勢の悪い人間は強力なモンスターとエンカウントする確率が上がる、この最悪の運勢ならば邪神とエンカウントしても不思議ではないとすら思える。

そして特性の「天才」、これが一番の問題だ。

歴史上天才と呼ばれた者は数多くいるが実際に特性として備えていた者など全くの皆無だ。

神の祝福が無いのは、どこの神殿にも属していないという事で多少珍しい、職業が無いのはLVをある程度上げないと初級職に就く事ができないので探索者に成り立てでは当たり前の事であった。

職業は初級職で系統を決め、後は↓中級職↓最上級職と一本道だ。隠し最上級職があるという噂があるが、リリアにはそれが本当かどうかは分からないところであった。

ちなみに迷宮都市の存在するクロスメリア王国は「称号・勇者」と「職業・勇者」の者に特権を与え、全員囲い込んでいる。それ故に小国でありながら大国と同等の発言力を保持していた。

「それで俺の強さは、現時点ではどのくらいなんだ？」

リリアの話を聞きながらも、そっけないスレイの態度にリリアも

やっと落ち着きを取り戻す。

そして能力値の内訳と探索者ランクの計算方法を簡単に説明し、スレイの能力値はあまりに偏っていて参考にならないかもしれないが、現時点ではC級相当の探索者だと説明した。

最後に、迷宮探索は能力値だけでどうにかなるものではないので、最初は初心者用の迷宮で探索に慣れ、後は神殿に寄付して何かの神の祝福を受けておくべきだと助言する。

「色々と教えてくれて助かった、感謝する。だが、悪いが俺は無神主義者なのでな。祝福を受けるのは止めておく」

「本当に無茶はしないようにね！それと今度来た時も私を担当に指名してね！色々アドバイスしてあげるから！」

スレイは頷き、そのままギルドを立ち去った。

腰まである明るめの茶色い髪をカールさせ、髪と同じ茶色の瞳をした目の下になきぼくろのある二十八歳の妖艶な未亡人、宿屋“止まり木”の女主人フレイヤはいつものように仕事をこなしていた。

結婚前まではS級相当の探索者だった凄腕で、不埒な事を考える輩は皆手痛いしっぺ返しを受けている。

そこに黒髪黒瞳の青年、スレイが訪れた。

フレイヤはすぐに探索者になるために迷宮都市にやって来たのだろうと当たりをつける。

そして客として宿の帳簿に名前を記してもらい、十日分の宿泊費1000コメルを受け取った後、フレイヤは何故か、客に対し普段はしないような問いかけをしてしまう。

「スレイさん、ですね？やはり貴方も探索者になる為にこの都市へ来たのですか？」

「ああ、先ほど登録してきたところだ」

やはりと思いつつも、フレイヤは自らの行動に僅かに疑問を覚える。

その時、母譲りの茶髪と亡くなった父譲りの碧眼のフレイヤの六

歳の娘サリアが、カウンターへと走りこんできてスレイにぶつかる。そしてスレイをじっと見たサリアは突然耳を疑うような言葉を発してスレイに抱きつく。

「パパーッ!!」

集まる客の視線、だがスレイの若さに一部フレイヤに気のある男の客達を除き、他の客はそのままそれぞれの話題に戻っていく。

そしてフレイヤはスレイの顔立ちや雰囲気がいりし日の主人に似ている事に気が付いた。

サリアに遊んで頼まれた承したスレイは、最後にフレイヤの名を尋ねると、サリアを抱き上げて外へと歩いていった。

フレイヤは久しぶりに自らの胸が高鳴るのを感じていた。

スレイは探索者登録から二日目にして、探索者にとって最初の関門と呼ばれる『始まりの迷宮』の最下層『試練の間』まで潜っていた。

「始まりの」とうだけあって、舗装された通路に、整えられた石壁や天井、光源は不明だが何故か明るい内部。出てくるモンスターも皆弱い。

その為、スレイは全てのモンスターをあっさり薙ぎ倒し、尋常ではないスピードで最下層へと辿り着いていた。

スレイとてサリアの忠告を忘れた訳では無いが、その類稀な才能故に、彼の命が危険と感じられるような状況は一度も無かった。

そしてモンスターの死体より換金できる部位を剥ぎ取ると、道具袋に収める。

胸ポケットから探索者カードを取り出すと、経験値欄の数値が増えレベルが5に上がり、特性に闘気術と魔力操作が増えていた。

これらの能力を身に付けた事により、探索の途中から劇的に進行スピードが上がった。

闘気術とは身体や武器の内部を闘気で強化し、直接的に様々な能力を数値にして＋１ランクずつ強化する技術だ。

魔力操作とは身体の外に魔力で干渉し、世界の法則そのものを書き換える、すなわち空気抵抗や重力といった物理的束縛を無視して、相対的に＋1ランクの能力値と武具の強化ができる技術である。

そしてこの両者を併用すれば、体内と体外への干渉で、＋2ランクの強化が可能となる。速度一つとっても闘気により自らの動きを音速まで引き上げ、魔力により空気抵抗などの阻害要因を無くす事で容易く超音速、雷速を実現できるのだ。

しかし強化された能力を扱うのはスレイであっても慣れるのに時間がかかった。

そしてレベルがなかなか上がらない事に苦笑する。

スレイは無職でありながら闘気術と魔力操作を併用できるのがどれほど稀有なことであるか気付かなかった。

ただレベルが5になっているので、刀を扱う事が本分であるスレイは、特に職業に拘りは無いがこの迷宮をクリアしたら剣士になるうと決めていた。

ちなみにカードに表示される能力値の内、名前・年齢・レベル・職業は誰にでも見えるが、その他の部分は持ち主以外には見せないようにもできる。情報秘匿機能もきちんと備わっていた。

スレイは自分の刀を見て僅かに苦笑する。

今の彼の装備は迷宮都市を訪れた時点と比べ、防具を布製のものから多少丈夫な黒革のジャケットとズボンに替えた程度だ。

その布の服や革の服も、カードの装備欄に表示される以上は装備としての効果のある特殊な製法で作られた物ではあるのだが。

スレイはスピード優先の剣士として軽装を信条としていた為鎧などに興味は無かった。

しかし、故郷からの旅の中で数多くの盗賊や野生のモンスターを刃こぼれ一つ起こさず屠ってきた刀が、迷宮の魔物との戦いでかなり切れ味が落ちているのに、迷宮の魔物の質の高さを感じずには居られなかった。

師からの餞別とは言え、使えない武器に拘ってはられない為、

この探索後の武器の交換を考える。

ちなみにこの階層が『試練の間』と呼ばれるのには理由がある。
初心者用の迷宮にあって、ようやく初めてのボス級モンスターと遭遇する階層なのだ。

ちなみにボス級モンスターは何度倒しても一日経つと復活するらしい。

中級までの迷宮では魔法陣で同種の別個体のモンスターを召喚し、上級以上の迷宮では他に同種が居ない単独の個体ばかりなので、強引に魂の力を回復させ生き返らせているらしい。

スレイは神々の悪趣味さに苦笑する。

突然女性達の悲鳴が響き渡り、『試練の間』最奥部に駆け付けたスレイが見た物は、重武装をした人型のモノが三つ死体となった凄惨な光景だった。

他三人の生きている人間と、惨劇を引き起こしたであろうモンスターを確認する。

生存者はスレイと同年代の青年一人と悲鳴の主だろう少女二人。
バルディッシュという形状の戦斧を構え、茶色い瞳に戦闘意欲を宿し、ツンツンの尖った茶髪の青年は傷だらけになりながらも少女達を守るように立っている。

尖った耳をして豪華な金色の髪を腰まで届くツインテールにした、髪と同じ金色の瞳に恐怖を湛えながらも、もう一人の少女を抱きしめているのは、絶世の美貌を持ったエルフだ。

片や抱きしめられてる腰まであるストレートの茶髪に同じ茶色の瞳から涙を流している少女は全く動けないでいるようだった。

三人は全員名門の探索者養成学園、エルシア学園の制服を着ている。

そして惨劇を生み出しただろう、重武装を纏った巨大な人型の骸骨、B級ボスモンスターのアンデッド・ナイトは、巨大なハンマーを青年へと振り下ろそうとしていた。

スレイはこの場に相応しく無い強敵に驚きながらもすぐに闘気術と魔力操作の併用で雷速に加速する。

一瞬で茶髪の青年の前に躍り出たスレイは、振り下ろされたハンマーを弾き、その体格差からは信じられない事に、一撃でアンデッド・ナイト本体ごと吹き飛ばしていた。

広間の石壁にめり込むアンデッド・ナイト。

落ち着いて三人に語りかけるスレイだが、アンデッド・ナイトがめり込んだ身体を石壁から引き剥がす音が聞こえると、そちらに向き直る。

「いや、話は後で聞くことにしよう。今はあいつを片付けるから、お前達は大人しくしている」

再び雷速に突入したスレイは、コマ落としのように一瞬で消え去り敵の眼前に現れると、敵の右肩を肩当てごと容易く切り裂いた。

それでも左腕を伸ばす敵に、スレイは空中に魔法で空気の足場を作って踏み込み、勢い良く地上に着地、伸ばされた手を躲す。そしてまた一瞬で敵の前まで移動し、敵の片足の脛の部分叩き斬る。そして残った逆の足も同じ様に叩き斬った。

膝立ちになったような状態のアンデッド・ナイトに、スレイは瞬時に頭蓋骨目掛け飛び上がると、そのまま魔力操作を解除し、空気の抵抗のある中で超音速の刀を振るい、巻き起こる衝撃波と同時に魔力の刃を放ち、敵を頭蓋骨から股関節まで真つ二つに斬り裂く。

空中にまた足場を作り、思いつき踏み出すと、敵の胸元、人体で言う心臓の部分にあった、アンデッド・ナイトの核に思いつき突きを放つ。

アンデッド・ナイトの核は砕け散るが、それと同時に師から授かった刀も粉々に砕け散ってしまった。

スレイが三人に向き直ると、青年は糸が切れたように気絶し、二人の少女は動けず立ち尽くす。

探索者ギルド本部、ギルドマスターの個室。

なぜかそこにはギルドマスターとスレイと三人の被害者の他に、ギルドの受付嬢リリアがいて、今回の事件のおかしさをスレイに説明していた。

「それで、どうしてお前までここにいるのだね。リリアよ」

威厳ある声の、厳しい顔つきをした壮年の男性、年齢故のアッシュブロンドとなった髪と髭を蓄えた四十代後半と思われる茶色い瞳の男性、探索者ギルドのギルドマスターである。

ギルドマスターとは、光髪ヴァレリアの最高司祭・聖王が神託により選んだ人物であり、神々が作り上げた修練場である迷宮都市を管理し、国家と同等以上の権力を持つ探索者ギルドを束ねるに相応しい傑物だ。

そして繰り広げられる会話に、リリアがギルドマスターの娘と知り納得するスレイ。

ギルドマスターはゲッシュ・アルメリアと名乗った。

次々に名乗るスレイと三人。

そして三人に真摯な態度で謝罪し、今回の探索がエルシア学園の卒業試験だったことから、三人の成績を調べ、卒業に問題無いレベルと判断し、卒業に便宜を図り、犠牲となった試験官だった教師達の家族にも便宜を図る事を約束するゲッシュ。

スレイはその言葉に嘘が無いと感じ、ゲッシュに好感を抱いた。

三人は怪我と精神の療養ということで連れていかれ、室内には三人が残るのみとなる。

ふと微笑するリリアに、ゲッシュは三人も死者が出ているのに不謹慎だと注意を促す。

「ええ、そうだったわね。ごめんなさい、お父様」

素直に反省するリリア。

つい好奇心から何を笑っていたのか尋ねてしまうゲッシュ。

リリアは登録時にスレイの運勢の悪さから、邪神にエンカウントしても不思議じゃないと言ったのだが、いきなりアンデッド・ナイ

トに遭遇したことに、本当にそういう運勢なんだなと思って、と応える。

「すまないがスレイくん、君の探索者カードを全能力値まで含めて見せてもらっても構わないだろうか」

「まあ、隠すような事も無いし構わないが」

カードを見て驚きを隠せないゲッシュ。

思わず色々と推測してしまうが、確証は無い。

ただ、スレイが特殊だということは理解したゲッシュはスレイに語りかける。

「スレイくん、君に話しておきたいことがある」

そしてリリアに席を外すよう告げるゲッシュ。

だがリリアは今回の事件は人為的なもので、召喚の魔法陣がランダム召喚に描き換えられていたという事だろうと指摘してみせる。

微かに驚くゲッシュ。

そんな父親に舌を出して見せ、リリアは自分にも色々情報網があるのだと告げた。

呆れたような感心したような溜息を吐き、スレイに向き直り語りかけるゲッシュ。

「何故俺にそのことを？」

ゲッシュは彼なりの茶目っ気を出し、運勢Gのスレイなら今回の犯人の工作にまた巻き込まれる可能性も高いと思ったので心構えしてほしかった事、もしかしたらそのままスレイが事件を解決してくれる可能性もあるからと答える。

「それはギルドの仕事では？」

「だから、念の為に、なのさ」

ゲッシュは悪戯っぽく笑う。

ギルド本部を出て、職業神の神殿に向かうスレイ。

リリアはスレイに本当に初級職が剣士でいいのかと何度も尋ねる。スレイが考えを変えない事に呆れたリリアは魔法を使える可能性

についての話をするが、その事から既にスレイが魔法を使える事を
知り驚愕する。

「魔法なんて魔力と知識があれば誰でも使えるようになると思うが」
不思議そうなスレイに、何処で習ったのかと聞くリリア。
師から習ったと答えるスレイに、リリアはスレイの師匠が魔法剣
士だったのかと尋ねる。

スレイは剣士と魔術師の二人の師がいただけだと答える。

そしてスレイの二人の師匠が元A級相当探索者で、シチリア王国
の元宮廷騎士と元宮廷魔術師である事を知り驚くリリア。

なぜそんなに自分の事を知りたがるのか聞くスレイに顔を赤くし
て好奇心だと答えるリリア。

「なるほど、確かにあんたは『好奇心は猫をも殺す』を地で行きそ
うなタイプだな」

リリアは思わず思いつき怒鳴るのだった。

雑多な賑わいを見せる職業神の神殿に、思わず疑問を零すスレイ。
そんなスレイに、学園に通えないような子供や、外から来て基本
的な技能も持たずに探索者になったような人間に色々と教える職業
訓練所の役割も果たしている事を説明するリリア。

ふと、酒に酔った赤ら顔の男が寄ってきてリリアに声をかける。

公爵家の息子を名乗ったその男は、リリアに突然婚姻を迫る。

うんざりした様子のリリアに、言葉を挟むスレイ。

そんなスレイに男は酔っ払いの中に紛れていた屈強な男5人を呼
び寄せる。

「何を考えているのよダグ！この神殿で騒ぎを起こすつもり？そん
なことをしてただで済むとでも」

リリアの言葉に父が公爵だから問題無いと、現実を見据えていな
い答えを返すダグ。

5人の男達が剣を抜くも、闘気術で手の固さを強化し、魔力操作

により剣の原子構造を分解した結果、スレイは手刀で5本の剣を斬り落とす。

そこへ駆け付ける無造作に腰まで伸ばした金髪と碧眼が美しい、白皙の麗人たる神殿騎士。

ダグと五人の男達は陳腐な捨て台詞を残して逃げ出す。

呆れたような雰囲気が満ちる場に入った神殿騎士は戸惑いを隠せない。

神殿騎士としてのジュリアに与えられた宿舍の個室。

先程起こった事を聞き、興味深げにスレイを眺める神殿騎士ジュリア。

ジュリアは探索者カードの見せ合いを提案する。

ジュリアのカードを見ながらこれが一流と呼ばれるS級相当の探索者の能力値だと説明するリリア。

明確に彼女以上の探索者となると世界中に知れ渡るSS級相当の探索者か、レベル99まで到達した『称号・勇者』ぐらいのものでろうと告げる。

「そうなのか？」

「ええ、それ選ばれた一部の人達以外は、レベル80未満で成長限界に到達してしまうから、レベル81でまだ成長の余地のある彼女はかなりのものよ」

納得するスレイに、ジュリアが驚いたような声で問いかけた。

「スレイ君、君は無職なのに闘気術と魔力操作の両方を扱えるのかい？これは驚いたな。それならあの状況も納得できる」

ジュリアの言葉に、リリアが魔力操作とは何かと質問する。

魔力操作についてリリアに説明するジュリア。

スレイは何故公爵家の息子とやらがここに居たのか尋ねる。

リリアは次男だから一旗上げようと取り巻きを連れて迷宮都市にやってきてると答え、ジュリアは笑いながら、リリアに一目惚れしたのも理由のようだねと補足する。

そして先程のダグの様子に不思議そうにするスレイに、実力も性格も目標に見合っていないければあなってしまうという典型だ。大人しく父親から一部の財産を相続して自分に見合った人生を楽しく生きれば良いと思うんだがね。と辛辣な言葉で話をしめくくった。

あれから、スレイに非は無いので好きにしていっていいと言われたので、スレイは一人クラスアップをする為の受付へとやってきていた。

番号を呼ばれ、剣士へのクラスアップを望む旨を伝えたスレイは赤い札を渡され奥へと進むよう案内される。

奥にはいくつかの扉があり、一人の男がいた。

赤い札を渡すと、剣士へのクラスアップですか、と言われ、右から二番目の扉を案内される。

部屋に入ると巨大な魔法陣と機械装置があり、白銀の髪と蒼い瞳の、儚げな雰囲気なスレイと同じ年頃の少女が立っていて、何故かスレイを見ると驚いたような表情をする。

だがすぐに平静を取り戻しフィーナと名乗ると、クラスアップについての案内をしてくる。

肉体への苦痛を注意され、儀式が始まるが、スレイは苦痛の声一つもらす事なく、立ち位置も動かずに立っていた。それに驚いたように感心するフィーナはスレイに名を尋ねてきた。

「スレイだ」

フィーナはスレイにカードを見るよう案内する。カードの職業の項目には確かに剣士の表示が追加されていた。

そしてスレイに別れの挨拶をするフィーナ、その瞳には何か希望の色が宿っていた。

スレイが閑散としたクラスアップの待合所に戻るとリリアとジュリアがいた。

そしてリリアはそのままギルドの換金所を案内する旨を告げる。不思議そうなスレイに不機嫌そうなリリア、含み笑いをするジュ

リア。

「あんたも一緒に来るのか？」

ぶしつけに問いかけるスレイに苦笑するジュリア。
そしてそのまま三人は探索者ギルドへと向かった。

探索者ギルドに入った三人にいくつもの視線が集まる。

「神狼？」

そんな中ジュリアに向けられた呼び名に疑問の声を上げるスレイ。
その二つ名の由来を語るリア。

「ところで、未知迷宮とはなんだ？」

ジュリアに感嘆しつつも、出てきた知らない言葉を尋ねるスレイ。
リアは呆れつつも上級者用の迷宮よりずっと深い、ギルドや超一流の探索者でも何階層まであるか把握していないいくつもの迷宮があり、それを総称して未知迷宮と答える。

その後もリアの説明は続き。

「なるほどな。感謝する。おかげで良く分かった」

率直に礼を述べるスレイに顔を赤くしてそっぽを向くリア。

そんなリアの様子をジュリアは生暖かい視線で見つめていた。

探索者ギルド内換金所で順番待ちをする三人。

三人の番に回って来ると、ふくよかな体格をしたまとめてアップした黒髪に茶色い瞳の三十代くらいのメアリーというらしい夫人がリアとジュリアにちゃん付けで呼びかける。

恥ずかしそうなりリアとジュリアだが、メアリーは気にしない。

「ふむ、リアちゃんと一緒に来たって事は、この子がスレイくんかい？」

「ああ、確かに俺がスレイだが」

「あんた3000コメルとミスリル製の装備と、どっちの方がいいかね？」

いきなりの問いにとまどうスレイ。

メアリーはスレイの倒したアンデッド・ナイトの装備がミスリル製だったため、換金するか、ギルド内の鍛冶工房で素材にして武器を作るか選べると説明する。

スレイはミスリル製のサーベル二本を注文し、残りは換金してもらうよう頼む。

メアリーは計算し、ミスリル製のサーベル二本の素材分と手数料を引くと残りは1000コメルと案内する。

それで頼むと告げ、スレイは道具袋の中の換金アイテムを300コメルに換金した。

「ところであんた、魔法の袋はまだ持っていないのかね？」

訝しげなスレイにメアリーは説明する。

空間系魔法で作られた、入れる物の量や大きさを見え、重量も感じず、必要な物を念じるだけで取り出す事もできる魔法の袋。

迷宮の到達した階層にマーカーを付けておいて、一瞬で迷宮を脱出したり、次の探索でマーカーした階層にすぐ転移して探索を再開できる、同じく空間系魔法で作られた飛翼の首飾り。

ある程度以上の探索者ならば必須のものだという。

説明を忘れていたリリアを見やるスレイ。うなだれ殊勝な態度のリリア。

流石に言い過ぎたかとスレイはフォローする。明るい顔になるリリア。

スレイはメアリーに値段を尋ねるとどちらも500コメルだという。

そして金貨13枚、換金分の1300コメルを受け取ると、サーベルは鍛造に二日はかかるだろうから、二日後にでもギルド内の鍛冶工房に行ってくれと案内される。

ついでにメアリーはギルド内の銀行についても説明する。

ギルド内の銀行にお金を預けると、探索者カードを使った支払いが、ギルド内の銀行に預けたお金の分だけこの迷宮都市の店ならどこでもできるようになる。

また探索者カードは本人認証の為、他人が持っても何も表示されないようになっていて、安全かつ便利になっている。

だから換金したお金はすぐにギルド内の銀行に預ける事をお薦めするとメアリーはべた。

都市外でお金を使う時には流石に引き出す必要があると最後に付け加える。

「なるほど、大変為になった。説明感謝する」

頭を下げ礼を言うと、スレイは踵を返し換金所の出口へ向かう。

その後を慌ててリリアとジュリアが追った。

メアリーは面白そうに笑うと仕事へと戻っていった。

「次の方どうぞー」

その後、スレイは早速ギルド内の銀行へ全財産を預け、道具屋で魔法の袋と飛翼の首飾りを購入、預金欄が300コメルになったことを確認すると、都市の武器屋で当座の武器として鋼鉄のロングソードを二本用意した。刀が扱われてなかった為仕方が無い。

その日は、そのまますぐリリアとジュリアとは別れた。

宿に戻ると不機嫌なサリアに抱きつかれる。そんな様子を笑いながら見ているフレイヤ。

出会ってからほんの二日だというのに、この母娘は完全にスレイに心を開いていた。

スレイ自身もこの環境を気に入っている事に気がつく。

そして明日一日サリアと遊んでやる約束をし、何とか離れてもらう。

結局次の日はサリアと遊んでやり、フレイヤと際どい会話などして親交を更に深めた。

その日まずは初級者向けと言われる『静炎の迷宮』に潜り、スレイは自らの肉体の変化を確かめていた。

岩盤が掘られてできた迷宮で足場も広さも安定しない。

何体もの魔物を倒し奥まで進み、そして今また二匹のオルトロスと一体のウィル・オー・ウィスを相手にしていた。

闘気術と魔力操作を併用したスレイは岩盤の足場の悪さを物ともせず、一気に雷速に至り、壁や天井なども足場にしてウィル・オー・ウィスを容易く切り裂く。

そのまま壁に蹴りを入れ、一瞬で地面に着地し、ドンッと大きな音を響かせ地を蹴る。

そしてオルトロス達に反応する間も与えず、二本目の剣を抜き放ったスレイは、二本の剣でそれぞれ二つずつ、計四つのオルトロスの頭を首を斬り裂き刎ねていた。

無造作にオルトロスの胴体に近づくと、喉の奥から固い感触のものを抜き出す。

それは二つの赤く燃えるような輝きの宝石であった。

火炎石、火を吐くモンスターはたいいていこの炎の力を込めた宝石を体内に持っている。

スレイはそれを腰に下げた魔法の袋に無造作に突っ込むと、戦闘の感触を思い出す。

自らの身体の一部のように自在に動いた剣。

剣士職になってからの剣技の補正というものが確かに大きいと認めざるを得ない。

そして新しく取得した思考加速の特性。

雷速すらもスローモーションに感じられる程の思考の加速をもたらし、完全に動きを制御できていた、さらに魔法の構成を編む高速化にも利用できる優れた特性だ。

さらに闘気と魔力の融合という特性も手に入れていたが、これはまだ未使用だ。

スレイは辺りを見渡すと、この迷宮もまた光源が無いのに一定の明るさが保たれてる事に疑問を覚える。

そしてカードを取り出し、現在自分が単純に計算してB級相当の

段階にいる事を知る。

そのままスレイは階層にマーカーすると、飛翼の首飾りで迷宮を脱出した。

ギルド内の換金所でスレイはテーブルいっぱいには戦利品を広げる。呆れたようなメアリーだが、程なく鑑定を終えると1500コメを渡してきた。

次にギルド内の銀行へ向かう。

「すまない1500コメ預けたいんだが」

カウンターの女性はメアリーと同じく三十代のようなのだが、まだ若々しく大人の色香を感じさせる、細身の身体に豊かな胸を備えた金髪碧眼の女性であった、アリアというらしい。

そのまま15枚の金貨を預けると、以前の事を覚えていたのか驚いたような顔をする。

そして差し詰めギルド期待の新人ってところかしら、まあケリーに比べればまだまだですけど、などと呟く。

スレイは何気なくケリーとは誰だ？ 有名人なのか？ と尋ねる。

それにアリアは恋人だと答え、まあ彼には他にも恋人がいますがと当然の様に言い、ギルドの子飼いでS級相当探索者だから有名じゃないけど実力は折り紙付きだと答える。

恋人が一人でないという言葉に、上級の探索者は多くの女性を囲う事も珍しくないと思いつく。

そして銀行を出ると、ギルド内の鍛冶工房へと向かう。

そこには様々な武具が整然と並べられ一人のドワーフが中央のテーブルに座っていた。

そしてスレイが用件を告げると、両手を触り探られる。

ドワーフに名を尋ねるとダンカンと名乗り、剣の柄の調整の為奥へと入っていった。

スレイは両手で二本のサーベルを握り、素振りをして感触を確かめる。

ダンカンがスレイに剣を握った年月を聞き、二年と聞いて驚いていた。

スレイはついでにロングソードの柄の調整も頼むのだった。

数分後、工房から出てきたスレイはちょっとした興味で仕事依頼の掲示板を見ていた。

「あ、あの！」

そこで突然声をかけられる、相手はアンデッド・ナイトより助けた、エルシア学園の三人であった。

高慢なエルフの中でも唯一他種族に対しても友好的に接するグラナダ氏族のエミリア。

探索者として功績を上げ、一代貴族となったグラナリア男爵家の長男アッシュと長女のルルナ。

今ではエルシア学園を卒業し、初級探索者と変わらない身である。三人は先の事件により迷宮探索にトラウマを抱き、スレイにパーティを組んでくれるように頼み込む。

結局三人の勢いに負け、パーティを組む事を仕方なく了承し、三人の意向で、一回限りの短期登録ではなく、登録解除を行うまでは解除されない長期登録を行う事になるのだった。

そして互いに探索者カードを見せあい、三人はスレイの能力値に驚愕の声を上げる。

三人組と明日の待ち合わせを約束するとそのままスレイは帰途についた。

宿に戻るとサリアが出迎えてくれる、フレイヤやサリアとはまるで親戚のように親しい関係を築いていた。

そして夕飯時はフレイヤとサリアと共に団欒の一時を過ごした。

スレイは過去の悲劇を夢に見た。

人の魂の転生の輪へと入り込む事で神々の封印を逃れた邪神ロド

リゲーニ。

自らを守って死んだ幼馴染フィノがその魂を宿し、死んだ事により邪神として覚醒したその日。

彼女はフィノ自身の両親を殺し、そしてスレイの恐怖の感情を全て喰らう、スレイが覚えているのはそこまでであった。

目覚めたスレイは外を見る、まだ日の昇らない早朝、スレイにとってはいつもの起床時間、日課の剣技の修練を行う為に宿の外に出る事にする、何時も通りのスレイの朝だった。

スレイが今日も探索に出かける事に不満なサリア。

連日での探索は探索者としても珍しい、迷宮の危険性を考えれば常に最高の状態で望むべきだからだ。

フレイヤも心配するが、スレイは今日は約束があると伝え、早めに終わらせると告げると、帰ってきたら遊ぼうとサリアに約束すると、昨日の三人との待ち合わせ場所に向かった。

静炎の迷宮、スレイは確認したい事があった為襲い掛かってくるモンスターを全て屠りつつ、三人とオルトロス一匹の戦いを見守る。三人はスレイの予想通り、連携して実力を発揮すればアンデッド・ナイトにも勝てただろう強さを発揮し、オルトロスを屠る。

三人にどうやって自分がいなくてもいい様に、先日的事件の恐怖を克服させるか悩むスレイ。

探索を終えた後、スレイは三人に目的を聞く。

アッシュはクロスメリア国王、勇者王アルスから公爵位を賜り、強大な戦闘種族、竜人族の国、晃竜帝国の第二皇女、癒しの竜皇女エリナに求婚することだと答える。

竜人族の第一皇女、闘竜皇女イリナと、第二皇女、癒しの竜皇女エリナは国民人気も高い。

過去のいきさつでエリナと文通しているというアッシュに感心するスレイだった。

ルルナは普通にそれなりの功績を上げ新しい爵位を手に入れ良い殿方と結ばれる事だと答える。

エミリアはグラナダ氏族の為有望な人間族の男性と婚姻する事も考えていると告げる。

スレイを挟み火花を散らす二人をアッシュはニヤニヤと笑いながら見ていた。

換金所で収入を山分けし、約束通りサリアと遊び、むずかる彼女を寝かしつけたスレイ。

「まったく何が精神EXだか。運勢Gは妥当だが」
戦闘に関してしか評価基準にされない能力値に愚痴を零すスレイ。思うようにいかない現実には愚痴ばかりが零れ出る。

ただ強さを求めているつもりだった、ロドリゲスを殺し贖罪をする為最強にならなければならなかった、だが周囲の人間関係に巻き込まれる自分の弱さに呆れるスレイ。

その時ドアがノックされた。

豹のライカンスロープであるフレイヤはこの満月の夜発情期を迎えていた。

スレイという夫に似た青年に惹かれる女の自分と、強い雄へと惹かれる雌の自分。

夫が居た時でさえなかった抑えきれない欲情に突き動かされ、そのままにスレイの部屋の扉をノックする。

フレイヤを部屋に招き入れたスレイは後悔していた。

扇情的な格好のフレイヤが酷く発情している様子で立っている。

そのままスレイは唇を奪われ、濃厚で甘いキスをされる。

冷静にフレイヤを諭そうとするスレイ。

だがフレイヤの妖艶で魔性な色香に蜘蛛の糸に絡められていくような気がする。

そして自らの欲望に対する抵抗を諦めたスレイは、そのままフレイヤを激しく求めていた。

乱れ疲れ果てた様子で自らの隣で寝ているフレイヤに、自らの女癖の悪さに頭を抱えるスレイ。

十八歳になった日から今まで、スレイの女性関係は爛れたものだった。

自分の最低さと独占欲に呆れるスレイ。

フレイヤの格好を整えてやり、日課の剣技の修練の為、宿の外へ出るのであった。

円形闘技場、迷宮都市で神々が唯一迷宮以外で創った建造物。

今となってはその性格な使用目的は謎であるが、現在は多くの探索者達が鍛錬場として使う場所である。

ちなみに探索者養成学園の生徒達の実技授業の場も、殆どがこの円形闘技場だった。

模擬戦闘を開始するスレイと三人組。

軽く三人をあしらうスレイ。

その後、最初から中級魔法を使ってきたエミリアに、無詠唱で下級魔法を使いスレイの強化を阻止するべきだったと告げる。

その後闘気と魔力の融合について質問するアッシュ。

闘気と魔力の融合は、その構成要素であるエーテルでの純強化ができ、圧倒的な強化が成される事と、発展系として、闘気と魔力の融合により、分離された第一質量プリマ・マテリア、全ての原質となる要素を留め、スレイの適性により“切断”の“絶対概念”を持った剣を創造できる事を説明するスレイ。

その後ノリノリで説明していたスレイに理由を尋ねるアッシュ。

「昔、二年前まで俺の夢は学校の先生だったんだ」

アッシュは爆笑していた。

数秒後、粗大ゴミとなったアッシュ。

エミリアが闘気と魔力の融合について具体的にどのような物なのか尋ねる。

エーテルによる強化は未使用で、プリマ・マテリアの剣はまだ使用不可なので分からないと答えるスレイ。

説明に意味が無かった事を告げるスレイに笑う二人の少女だが、今度は粗大ゴミが誕生する事はなかった。

エミリアは結局自分はどうすればいいのか訪ねる。

ただ単に牽制の重要性を知ってほしかったと告げるスレイ。

明日三人の連携で自分に勝てれば三人で十分やっていけると分かる筈と言うと去っていくスレイ。

パーティを解消するつもりらしいスレイに、それを阻止する為の作戦会議を行う三人。

朝、剣技の修練から戻ったスレイを待っていたのはカウンターの前でアッシュ、エミリア、ルルナの三人が土下座するという奇妙な光景だった。

パーティを解消しないでくれと頼む三人。

「これは、どういう状況なんだ、フレイヤ？」

後輩から相談を受け、誠意を見せてみたらどうか、と言ったというフレイヤ。

そして自らもエルシア学園の卒業生である事を明かす。

フレイヤの為にもう少しだけ付き合ってやるから、迷惑だから土下座を止めろというスレイ。

喜ぶ三人に、言葉を聞きとがめるスレイ。

「あの”フレイヤさん?”」

そして元S級相当探索者で、“疾風のフレイヤ”などと呼ばれ、

今でも時々エルシア学園で臨時講師をする事があるという情報を知る。

フレイヤを見やるが、女は謎が多い方が魅力的でしょう？などと
言われスレイは苦笑するしかなかった。

次の日、再びの模擬戦闘でエミリアはアドバイス通り下級魔法で
スレイの強化を阻止してくる。

スレイは左腕を犠牲として多大なダメージを受けるも、そのまま
三人を一蹴するのだった。

スレイの無茶に回復魔法をかけながら説教をするエミリア。
パーティを解散する為なら負けても良いのに、パーティを続ける
となると途端に負けず嫌いを発揮するスレイの面倒くさい性格に呆
れる。

スレイは真面目な表情になると、エミリアに謝罪した。

それでは、と明日自分の買い物に付き合ってもらう事を提案する
のに、ルルナがずるいと抗議の声を上げる。

明日二人の買い物につき合わせてもらうと答えるスレイ。

不服そうに見つめ合うエミリアとルルナだが、諦めたように女性
の怖さを思い知らせるとスレイに告げるが、スレイは遠い目をして
幼馴染達の事を思い出しつつ、充分それは思い知ってると言う。

そんな中、アッシュが自分には何もないのかと騒ぐのに、イリナ
にエリナとの仲を応援してやれという手紙でも書いてやると提案す
るスレイ。

イリナと知り合いなのかと不思議そうな三人に、昔誤解で戦って
引き分けた事があると答えるスレイ。

そしてその時点からさして成長していない自分の力にどこか自嘲
気味なスレイをルルナが焦る事は無いと慰める。

大陸全体を見れば平和だと言うその言葉に、スレイは自らの抱え
る秘密を思い、何も言えず頷くも、力への強い渴望を胸に秘めたま

ま、宿への帰路についた。

夜中、窓から抜け出そうとしてフレイヤに見咎められる。

三人が居る間は夜中の探索で不足分を補うと言うスレイ。

「迷宮でそんな無茶が通用するとしても」

スレイは二つ目の比翼の首飾りを弾いてみせつつ、闘気と魔力をフル活用すれば充分可能だとニヤリと笑ってみせる。

心配するフレイヤに自分を信じるよう告げ、自信に満ちた笑みを浮かべるスレイ。

「スレイさん」

フレイヤはただ無事を祈り、彼の名前を静かに呼ぶしかなかった。

静炎の迷宮を突き進み、一気にボスモンスターが存在するだろう広間の前までやってくるスレイ。

モンスターを一掃すると、スレイはフレイヤとのやり取りを思い出し、自分の女への弱さに苦笑いする。

故郷でも何故かやたらとツンケンしていたもう一人の幼馴染の村長の娘を助けたところ言い寄られて肉体関係を持つことになり、近所に住んでいた五歳ほど年下の女の子に大きくなったらお兄ちゃんのお嫁さんになるー、とせがまれ、仕方なく玩具の指輪をプレゼントしてやったこともある。

他、旅の途上での事を思い出し自己嫌悪に陥りそうになるも、思考を切り替え能力値を確認し、闘気と魔力の融合を一度試してみようと思い立ち、純エーテル強化を行う。

光の反射を目で受け取り脳が映し出すタイムラグのある世界とは違う、エーテルが捉える本当の“現在”そのものの世界。

感覚に酔いそうになりながらも、スレイは今までとは全く違う段階に到達した自分を確信する。

静寂がたゆたい、赤く輝く部屋、中央に居る炎を纏った巨人、B

級ボスモンスター・イフリート。

知性を感じさせないその姿、だが現在のスレイにはそれが擬態であることも、正体までも理解できる。

そしてスレイは炎の精霊王とイフリートに呼びかける。

叡智を感じさせる瞳を見せたイフリートはより高温の蒼き炎を身に纏い、広間までもが蒼く染まる。

「おぬし、何者だ？」

S級相当、炎の精霊王イフリート、神々にこの地に縛られボスモンスターのふりをして、探索者に経験値を与えてやる、イフリートの尊厳を踏みにじる神々の作り出したシステム。

自由が欲しくないかと尋ねるスレイに、しかしイフリートは神々に縛られてるのは事実だが、か弱き人々を高みに導くのは自ら望んだ事、そうでなければ自らの消滅してでもこの呪縛から逃げていると答える。

自分を縛り付けるシステムが無くなっても、今果たしている使命をこれからも果たし続けるかと問うスレイに、当然と答え、我が誇りを疑うかと怒りを見せるイフリート。

スレイは得たり、と笑い、ならばイフリートを縛るその鎖を自らが砕こうと告げる。

神々の力に人の子の力が及ぶ訳も無いと答えるイフリートだが、スレイが纏う輝きに、純粋なエーテルを感じ、驚愕する。

スレイはエーテルにより世界の理からその身を外し、亜光速で走り抜けながら刀を一閃させる。

そして呪縛は破られる。

スレイに礼を告げたイフリートはスレイに特性…炎の精霊王の加護を与えた。

カードの表示を見て、これじゃあ人に見せられないなと苦笑いするスレイ。

エーテルの強化による反動で倦怠感を覚えるも、そのまま迷宮を脱出する。

その夜のスレイの探索は終わった。

グラナリア家の邸宅、ルルナはスレイとの買い物に着ていく服を選んでいた。

「うわ、お前、何だよこの有様」

そこへ現れた双子の兄アッシュの無遠慮な態度に怒りが芽生える。そのまま何も考えない発現でルルナの逆鱗に触れるアッシュ。

「お兄さまの馬鹿ー！！！」

闘気を込めた渾身の拳に気を失った兄を放置し、ルルナは服の吟味を続けるのだった。

エミリアは悩んでいた。

元々グラナダ氏族のエルフの中でも抜きん出た美貌を持つという理由で、人間との交流を、特に有望な人物との関係を深める為に送り込まれたエミリアである。

そんな命令に反発し、その責務を果たすつもりなど無かったエミリアはかわいい服など持ってきていないし、この迷宮都市でも必要を感じず買う事は無かった。

今回ばかりはそれが災いしていた。

スレイとの出会いに運命すら感じたエミリアはギルドで彼をみかけた時、彼との縁を失わない為強引にパーティを組む事を願い出た程に思いいれている。

エミリアは決意した表情をすると、祖父が自分に持たせた大きく胸元の開いた少し過激な衣装を取り出す。

そして恥ずかしさを我慢してその服を着る事にした。

約束の一時間前にスレイは待ち合わせ場所にやって来た、今は三十分前というところだ。

時間の余裕を持って待ち合わせ場所にいるのは幼馴染達の薫陶の賜物である。

そしてさらに十五分程待っていると、喧騒を引き連れルルナとエミリアがやってきた。

周囲を男達が追うように歩いている、面倒臭い事この上なかった。スレイに待たせてしまったかと声をかけるルルナとエミリア、返す言葉は決まっていた。

「いや、まだ約束の十五分前だし、何より俺も今来ただかりのところで」

三人のやり取りに男達が捨て台詞を告げながら去っていく。

「二人とも綺麗だ。よく似合ってる」

幼馴染達の躰の賜物か、自然と褒め言葉を発していた。

ルルナとエミリアは頬を赤くしつつも「二人とも」と纏めた事に苦言を呈す。

だけど総合的にはプラスだし、そんなに女心を勉強されても困るという二人。

そして三人は買い物に繰り出した。

見事に荷物持ちとして扱き使われたスレイ、流石に女性服や下着売場に付き合うのは勘弁してもらったが。

買い物が終わり、カフェテラスでお茶をしている時、突然エミリアがカップを落として割ってしまう。

顔色の悪いエミリアは先の事件で死んだ筈の試験官だったアレスタ教官を見たと言げる。

ルルナは他人の空似ではと言い、エミリアも納得を示す。

そしてルルナとエミリアは莫大な散財をし、スレイはエミリアとルルナをそれぞれの宿と邸宅へと送り届け、エーテル強化による疲れが回復しない為その日夜中の探索を諦めた。

ギルド内でアッシュがルルナとエミリアの散財に叫び声を上げる。迷宮探索に必要な回復薬や魔力回復薬のアイテム類は、特に迷宮都市では非常に高価だった。

スレイ自身は必要と感じた事は無いがそれらは間違い無く探索者としての必需品である。

かなり余裕のあるアッシュの預金で消耗品や必需品をやはり経験不足故か「必要以上」に準備して、探索の準備は終わった。

静炎の迷宮で、一昨日の夜中、スレイが放置したモンスターの換金部位は、どうやら他の探索者により持ち去られていたようで、三人が不審を感じる事が無かった事にスレイは安堵した。

そしてスレイ自身は自らに襲い掛かってくるモンスターのみを倒す事に徹し、殆どのモンスターの相手は三人組に任せ観察する。

実戦経験を得て、三人の連携や個人技能もどんどん成長していく。

これならあと少しでパーティを解散しても問題なかろうと考える。パーティ解散の際には友人付き合いは続けたい事と、自分の事情も差し支え無い範囲で話そうと思う。

それに時々だったら臨時のパーティ登録をしても構わない。

そうして目処を付けたスレイは三人の後を付いていくのであった。

やはり素質があるのだろう、三人はイフリートとの戦闘で見事に勝利を収める。

イフリートがB級ボスモンスター程度に力を抑えていたとは言え、あのアンデッド・ナイトと同レベルである。

倒されたふりをしたイフリートはスレイへ意味ありげな視線を向け笑っていた。

送られてくる魂ではなく精霊の強大な力。

流石にこれはやりすぎだろうと思い、苦笑するスレイ。

三人とスレイは大幅なレベルアップを果たしていた、三人に至ってはランクもC級相当へと上がっている。

これならあと一つくらい迷宮の探索後パーティ解散も可能だろうとイフリートに感謝する。

ギルド内換金所、メアリーはパーティの戦利品から一つの火の精霊石を持ち上げるとその純度と大きさに溜息を吐く。

あり得ない事だが火の純元素が籠ってるんじゃないかと思える程の純度だと感心する。

そして他の戦利品は全部で1万2000コメル、その火の精霊石一つで10万コメルになるが、火の精霊石だけは武器強化に使ってはどうかと尋ねる。

スレイは全部換金して構わないと言おうとするが、他三人は世話になっているし、スレイの武器の強化に使ってくれと頼み込む。

スレイは他の換金額は他三人で山分けしてくれと言いい、それでも自分の方が得をしてしまっているがと三人の厚意を受け取る事にする。

気にしないでくれという三人にスレイは笑う。

「そうか、こういう時には他に言うべき言葉があったな。ありがとう三人共」

メアリーは四人を見て目を細めて笑っていた。

鍛冶工房でダンカンにミスリルのサーベル一本と火の精霊石を渡し、刀の強化を頼む。

強化に丸一日かかるので次の日に来てくれと告げられ、そのまま鍛冶工房を後にする。

するとギルド内が常になく騒がしかった。

「久しぶりだな、リリア」

スレイがリリアに話を聞くと、ギルド内の死体安置所から、アンデッド・ナイトの事件で死亡した教師の内一人の遺体が消えた事と、アンデッドに殺された為アンデッド化した事も考慮して人海戦術の搜索依頼を出しているの、初心者探索者や、ギルド職員が慌しいのだと答えが返って来た。

エミリアはその遺体とはアレスタ教師のものかと尋ねる。

「確かにそうだけど、どうしてその事を？」

エミリアは以前カフェテラスでアレスタ教師らしき姿を見掛けた事を話す。

リリアはアンデッド化している可能性が高い事を知り、上にも伝えて置くと言う。

エミリアは協力を申し出るが、休むように告げられ、他の仲間からも説得され、納得して頷く。

四人が出て行く中、スレイの背中にリリアがもっと顔を出すように呼びかける。

「そうだな、考えておこう」

そしてギルドの外へと出て行った。

そのままスレイは三人と一緒に宿に来てもらう。

そして次の迷宮探索後、パーティを解散する事を切り出す。

驚く四人に、スレイは自分にも目的がある事と、三人にも自信が付いてると思うと語り、友人としてはこれからも付き合いたい旨と、臨時のパーティなら組むのも構わない事を話す。

フレイヤは本当に三人で問題無いか確認し、スレイが頷くとそれならと納得する。

そしてルルナは目的を聞くが答えられず、エミリアはパーティ解散は必須なのかと聞き肯定され、アッシュは重々しく次が最後でだが俺たちとの友人関係は続けていきたいと言うんだな、と重々しく告げ、肯定され黙り込む。

数十秒後。

「わかった」

アッシュは頷くとエミリアとルルナを説得する。

そしてけじめの為に、フレイヤはパーティ解散の晩餐を作り、四人はテーブル席で明るく騒がしい一時を過ごし、時間が遅くなった為、三人も宿に泊まる事になった。

夜、スレイはルルナとエミリアに呼び出され、二人の部屋を訪れた。

買い物の時と同じ服装の二人は真剣な表情で待っていた。

そして二人揃ってスレイに告白をする。

スレイは自分が今関係を持っている相手がいる事を話すが、二人は知っていると言え、フレイヤのことだろうと尋ねる。

「知っているなら何故？」

二人はそれでも自分達二人も恋人として愛してくれるなら構わないと告げ、次で最後の探索と聞き友人関係では物足りない、恋人になりたい、証が欲しいと言う。

フレイヤも後押しをしてくれたと言い、スレイが独占できるような相手じゃない事は分かっていると告げる。

スレイは自分にとって都合が良すぎる展開に呆然とするが、二人はあまりに魅力的だった。

「本当にいいんだな？」

最後の確認、二人の肯定の返事、そしてスレイは二人の身体を征服し尽くすために、あらゆる方法でその身体を開かせていった。

翌朝、スレイは両脇に温もりを感じて目を覚ます。

昨夜、初めての痛みを感じていた二人に、少しやり過ぎたかと自省する。

部屋を出て、宿の廊下、アッシュは通過儀礼としてスレイを殴る。そして満足したように笑って拳を収めた。

そのままエミリアの豊かな胸について下世話な質問をしてくるアッシュ。

スレイはボディブローを見舞うと、このことはエリナに報告しておこうと言い、そのまま宿の階段を下りる。

フレイヤに昨日の二人の事はどういふつもりか尋ねると、後悔しないよう後押ししただけだと言い、それにスレイが二人をそういう対象として見ている事にも気付いていたと言う。

「ただ、あの娘達にかまけて、私の事を忘れたりはいしないでね？」
スレイは何故かただ頷くしかなかった。

ギルドにやってきた四人は鍛冶工房で強化の代金1500コメルを支払う。

ダンカンが持って来たミスリルのサーベルは柄の火の精霊石が埋められ刀身が赤く染まっていた、その空気にスレイ以外の三人は思わず気圧される。

刀身が赤く染まっているのは魔力が完全に浸透している証、ここまで鮮明な赤に染まっているのは火の精霊石の純度とダンカンの腕の賜物だろう。

実にとんでもない代物だったというダンカンの言葉。
礼を告げるスレイ。

ダンカンが笑い、次も何か手に入れた時は自分の所にもってこいと言った。

換金なんかしてどっかの貴族に流れるなんてもっての他だと。

頷いたスレイは鍛冶工房を出ると受付に向かう。

そしてカウンターに居た受付嬢にリリアを呼び出してもらおうと、慌てて奥からリリアが走り出てくる。

だがスレイの後ろの三人を見てリリアのテンションは下がり、不機嫌そうな顔になる。

気付かずスレイは昨日の教師の死体の件はどうなったか尋ねる。

『始まりの迷宮』での目撃談から、初心者探索者達が『始まりの迷宮』に潜って搜索していると答えるリリア。

そのまま何やら言いたげなりリアを残し、スレイはギルドを出ると、スレイは三人に対し、最後の探索を『始まりの迷宮』にする事を提案した。

三人の同意を得たスレイは、今回の件はなるべくなら自分達の手で片を付けようと言うのだった。

闘気も魔力も使わず素で振るったのに、モンスターを斬り裂く時、全く抵抗が感じられない事に、強化された刀の性能に瞠目するスレイ。

圧倒的なスピードで迷宮の地下九階まで下りてくるが、他の探索者達に全く出会わない事に不吉な予想が脳裏を過ぎる。

だが予想は予想に過ぎず、そのまま四人は奥へと進むのだった。

最下層、最奥の広間の手前で濃厚な血臭と圧倒的なプレッシャーに立ち止まり三人を制止するスレイ。

以前旅路で見た竜化した闘竜皇女イリナすら遙かに越えたプレッシャーを感じる。

また血臭からここに潜った初級探索者達の末路も知れた。

一度戻りギルドに知らせるか、と検討するスレイ。

「だ、誰か助けてくれえ！」

助けを求める悲鳴に、他の三人が最奥の広間に突入していく。

しまったと思うも、もう遅い。

こうなってしまうては、スレイとしても三人を見捨てるという選択肢は無い。

すぐさま闘気と魔力を融合し、純エーテルによる強化を行い、亜光速で最奥の広間へと突入した。

最奥の広間へ突入した時、生きた人間はアッシュ達三人だけだった。

先程の悲鳴の主も殺されたらしい。

アッシュ達は圧倒的なプレッシャーに地に押さえつけられ動けないでいる。

「ほう、まだ新しい客人がいたか」

視線と共にプレッシャーがスレイに向けられる。

エーテル強化したスレイならば動けない程では無いが、少し様子を見る事にする。

プレッシャーが逸れた事で、何とか上体を起こしたアッシュが、その男にアレスタ先生と呼びかけ、アレスタ先生のアンデッドが何故それほど力をと尋ねる。

先生と呼ばれ、肉体が生前教師だった事を知り、男はどこか面白げに会話を続ける。

なぜ私とそのアレスタという男のアンデッドなどと思ったのか、と。

だが視線とプレッシャーはスレイに向けられたまま、スレイ以外の三人を脅威と置いていないのだろう、そしてそれは事実だ。

アレスタ教師がランダム召喚の魔法陣によって召喚されたアンデッド・ナイトに殺されたからだ、と、ルルナが答える。

ランダム召喚、見立てた未熟者の顔が見てみたいと笑う男。

エミリアも上体を起こし、ランダム召喚だからアンデッド・ナイトが呼び出されたのでは、と問いかける。

アンデッド・ナイト、やはり異物は混ざる様だな、肉体も脆弱に過ぎんし、改良の必要があるようだ。

言うなり、男は教師の真似事のように、知者が愚者に智を与えるが如く説明を始める。

まずあの魔法陣は封印の地より這い出る為応用を施したランダム送還の魔法陣、その出口だと。

もっとも送り出せたのは意思の一部のみ、しかも何処に出るのか分からない、そんな無数の試みの末に、一部とは言え、自らの意志をアレスタ教師の肉体に宿しここに居るのだと。

そして常軌を逸した名乗りが発せられる。

彼は遥かなる過去に封じられし、上級とされた三柱の邪神の一柱、“智啓”の邪神シェルノートだと。

それが、スレイにとっての二度目の邪神との邂逅であった。

静寂するその場。

だがスレイはエーテルの囁きを聞き、ひたすらに目の前の存在を打倒する方法を探す。

“切断”の“絶対概念”の剣ならば邪神の本体にすら通用すると囁かれるが、それは今のスレイにはまだ扱えない。

そこにエーテルと精霊が別の選択肢を与えてくれる。

時間稼ぎは三人に完全に頼り、スレイは時間との戦いに没頭するのだった。

封印された邪神がこの世に出てくるなんて不可能な筈と、ルルナは叫ぶ。

邪神ではなく邪神の一部だと訂正し、永遠に続く封印などあると思うのかと尋ねるシエルノート。

神々に創造された勇者様達の封印を、邪神とは言え破るなんて、と叫ぶアツシュ。

シエルノートは尋ねる、君達是我々邪神について、そして自分達が崇める神々についてどれだけの事を知ることか。

口ごもるエミリア。

シエルノートは続ける、恥じる事は無い、知らされてないものを知るはずもないのは当然の事だ、と。

そして“智啓”の邪神たる自分が智を啓こうと言う。

まず邪神がこの世界を訪れた理由は、この世界が壊せない世界だから惹かれて来たのだと、シエルノートは告げる。

「壊せない、世界？」

スケールの大きさに理解ができないアツシュ。

シエルノートは続ける、邪神とはかつて自ら世界を創り、そしてその世界を自らの力で滅ぼしてしまった真の神、創造神にして破壊神、別の世界で最高神だったものだと。

最上級の邪神“憤怒”イグナートに至っては無数の高位多次元世界を一瞬で塵と化したらしいとも。

そしてこの世界で崇められる最高位の神、光神ヴァレリアや闇神アライナは人間や闇の種族を創造しても、世界を創造などしていないと言う。

この世界を創ったのはかつて真に最強たる最高神として全次元全世界に知られた超神ヴェスタであり、その身体が材料な故に最高位の世界であり、世界の名はヴェスタと呼ばれ、自分達邪神すら壊す事ができないのだと。

だからこそこの世界に惹かれ邪神は集ったのだと。

アッシュ達三人は理解すらできない話にただ呆然とするだけ。

シエルノートはまだ続ける。

不完全な神々でありながら、彼らが作り上げた“後期対邪神封印システム 職業・勇者”は巧みで面白い封印で、邪神を一時封じるには足りたが、永遠の封印など不可能で既に封印は緩み始めていると。

まだ直接世界に顕現する事が不可能だから、自分のような知能派の邪神はこのような小細工を弄している訳だが。

もはやこの場は語り続けるシエルノートの一人舞台であった、三人に理解できているとはとても思えない。

苦笑したシエルノートは話を締めると、スレイに尋ねる。

「準備はできたかね？」

プレッシャーを緩めるシエルノート。

「どういうつもりだ？」

シエルノートはただ笑い告げる。

自分の悪い癖で自分のプレッシャーに耐えたスレイとスレイの用意した手段に好奇心が湧いてしまったのだと。

さあ、見せてくれ、と促すシエルノート。

スレイは今とは下らないプライドは要らないと、敵に与えられたチャンスに無様に縋りつく。

いずれ邪神にさえ届く刃を手に入れるため、なにより守らなければいけないものがあるのだから、今は生きなければいけないのだ。

エーテルで周囲の世界の法則を弄り、仲間達を守りながら、亜光速でシエルノートに襲い掛かるスレイ。

だがその斬撃は全て防がれる。

そしてシエルノートの真の神の力を用いての反撃。

スレイに向かい光速で迸る光球。

スレイはより強く自らの肉体をエーテルで強化し、世界への侵食も深くして、ついには光速へと到達する。

スレイとシエルノート以外の世界は静止し、スレイは全ての光球に対応する。

「素晴らしいな。その若さで我が光速の攻撃に対処するとは、とてもない才能だ」

止まったままの世界の中で、数え切れない程の斬撃を放つスレイに、その刃を片手で防ぐシエルノート。

シエルノートは何かに気付いたようにハッとした顔をする。

スレイの纏うのがエーテル光だと気付いたシエルノートは、純エーテルを自在に操るスレイを、世界を構築した後残った最高神ヴェスタの遺骸の全てを使い、邪神を滅ぼす為に神々が創り出した“前期対邪神システム 特性…天才”と看破する。

かつて特性…天才のその無限の成長力と傲慢な性格を恐れた闇神アライナの手によって魂の全てまで滅ぼし尽くされた筈のヴェスタの御子たる者が、今また自らの同類を全て滅ぼした神々の尖兵としてまだ働くとは皮肉だな、と言いながら、力をより高めていくシエルノート。

やはりこのままでは及ばないと確信したスレイは、力を借りて邪神を貫く刃を手にとると決心する。

通常のミスリルのサーベルを床に突き刺し後方に飛び退るスレイ。

そしてシエルノートの言葉に答える。

「そんなつもりはない。ただ俺は、俺の成した事の責任を取る為、そして守りたいものを守る為に戦うだけだ」

それから自らに囁きかけるエーテルと精霊の声に答え、まずは一言告げる。

「ブレイク！」

シエルノートの眼前に突き刺したサーベルが込めておいたエーテ

ルの遠隔操作で粉々に砕け散り、スレイの編んだ構成のままミスリルの粉末が立体型かつ積層型の魔法陣をシェルノートを中心に創り上げていく。

続きスレイが強化したサーベルの柄に詰められた火の精霊石を叩き割ると赤い小さな輝きが現れる。

「火の純元素だど？」

驚くシェルノート。

スレイはエーテルと火の純元素を融合させる、燃え上がる炎。それは純粹なる炎、世界の始原たる炎だ。

驚愕するシェルノート。

スレイは始原の炎を叩き斬るように魔法陣の内側に放つ。

始原の炎と魔法陣は、その内側に宇宙開闢の熱量を現出させる。

焼滅していくシェルノートの仮の肉体。

滅びながらも悦びの表情を湛えるシェルノート。

スレイに何れ自らの真の肉体で見える時まで、更なる高みを至れと言が残す。

「もとよりそのつもりだ！！」

そしてシェルノートが滅びると同時に、スレイの持っていた強化されたミスリルのサーベルも虚空へと消滅していき、全てが終わった。

ギルド本部ギルドマスターの個室。

ゲッシュは大っぴらにできない事情の為相応の報酬を出せない事を詫びるが、スレイはそれよりも邪神などと荒唐無稽な話を信用されたことが驚きだと言う。

あれから今回の件は強力なアンデッドと化したアレスタ教師の仕業として片付けられた。

都合の良い事に、シェルノートのプレッシャーでアッシュ達三人の記憶は曖昧だ。

ゲッシュはギルドの子飼いの探索者の占術により邪神の力を確認

したと告げる。

しかしそれでも半信半疑なスレイ。

あと、占術に長けた子飼いの探索者の存在に、邪神を倒した手段が探られていないかと微かに警戒する。

そしてゲッシュは用意していた大きめの木箱を開き、赤い刀身と蒼い刀身を持った二振りの刀とその鞘を見せた。

明らかにディラク刀の造作、感じる力は先日の強化したミスリルのサーベルの比ではない。

「これはいったい？」

神々の武具の一つ、シークレットウェポンの双刀だと答えるゲッシュ。

既に究極級アルテマのシークレットウェポンを持っていたアルス王の探索者時代にとある迷宮で入手したのを買い取ったものらしい。

伝説級レジェンドだろうと鑑定されているもので申し訳ないのだが、と謝罪する。

手に握るとしっくりとしすぎるほどに手に馴染んだ。

「どうだろう、これが報酬で不足は無いだろうか？」

過剰なくらいだと答えるスレイ。

最上級である究極級アルテマのシークレットウェポンを持つのは『職業／称号・勇者』達とSS級相当探索者でも有名な鬼刃ノブツナくらいとされる。

SS級相当探索者でも中級ミソロジーの神話級か双刀と同じ最下級レジェンドの伝説級が大半らしい。

そしてS級相当探索者に至ってはシークレットウェポンを持つ者はごく僅かで等級は言わずもがなだ。

いったい何を企んでるか勘繰りたくなる高すぎる報酬だと言うスレイに苦笑するゲッシュ。

邪神の復活に備え単純に戦力が欲しいとゲッシュは言う。

ギルドの子飼いや勇者連中などこの国には腐る程戦力が居るだろうとスレイは言うが、ゲッシュはそれでも不足だと言う。

苦笑し、不用意な発言だというスレイに、ここだけの話で頼むと気軽に続けるゲッシュ。

他国にも話を伝え戦力を募ろうとさえ思っているらしい。闇の種族の国ヘル王国にまで頼ろうというゲッシュの器に驚くスレイ。

以前の邪神との“聖戦”で傍観者に徹していた闇の種族への偏見は根強いのだ。

尚更自分の力が必要とは思えないが、まあ手を貸すくらいは吝かじゃないというスレイ。

邪神となれと決して他人事ではないのだ。

スレイは部屋を去る。

ベルを鳴らし現れたギルド諜報員に早速各国に知らせを送るよう告げるゲッシュ。

驚く壮年のギルド諜報員、スレイの言葉を信用するのかと尋ねるが、ゲッシュは彼は信用できる、私の勘だと断言する。

すぐに頭を下げ、謝罪し、早速通達を出すと言え去る諜報員。

ゲッシュは自分の代で邪神の復活などに立ち合いたくないものだが、せめてリリアだけでも、子を持つ父親としての思いを零した。

いずことも知れぬ空間。

絶望の邪神クライスターと言葉を交わす享楽ロドリゲーニ。

上級と呼ばれた邪神ロドリゲーニが人の肉体となり弱くなった事に笑うクライスター。

まあねと気軽に肯定しつつ、別格のイグナートに比べれば自分達なんてどんぐりの背比べだと思うけどとロドリゲーニは告げる。

そしてその空間にやってきた用件を尋ねるクライスターに封印を解きにと答えるロドリゲーニ。

いがみ合っていた過去から訝しむクライスター。

ロドリゲーニは過去にクライスターと同じ下級邪神、希望エクスターを滅ぼした特性…天才の中でも最強と呼ばれたオメガの話を

す。

そして転生した肉体の幼馴染がそのオメガの生まれ変わりだと告げる。

面白い偶然と言うクライスターに、ロドリゲーニは自分が彼の魂に引き摺られた可能性も考えていると言う。

そして、弱くなった代償に色々と面白い術を手に入れた自分ならクライスターを解放できると告げる。

代償を尋ねるクライスターにオメガの生まれ変わりスレイと戦ってほしいと答えるロドリゲーニ。

何を企んでるか尋ねるクライスターに、あっさりとスレイに期待しているから、君を当て馬にしたいと理由を告げる。

当て馬扱いは腹立たしいが、提案を受け入れようというクライスター。

かの男の生まれ変わりの絶望の表情、貴様の思惑を破り現実にしてみせようと告げる。

ロドリゲーニは早速儀式を始めると告げる。

そしてクライスターは別れを告げ引き籠もる。

そしてスレイに語りかけるような一人言を呟くロドリゲーニ、スレイの本質である籐の外れた戦闘本能のままに楽しんでくれ、と。

第2章ダイジェスト

【毒蛇の巣穴】地下21階

数日経ち、事件はアンデッドとなったアレスタ教諭が引き起こし、凄腕の探索者達が解決したとされ4人の名は伏され、スレイに対する双刀以外にも、4人には相当な金額が支払われた。予定通りに正式なパーティ登録を解除した4人だが、臨時で短期パーティを登録し、中級者用の【毒蛇の巣穴】へと挑んでいる。スレイに加え3人も大幅にLvアップし、ルルナに至っては魔闘士へとクラスアップもしたのが理由である。尤も、物騒な称号や特性の幾つかは、実際に戦ったスレイだけが入手したのだが。

実際に邪神シェルノートと戦ったスレイは良いが、おまけで急激にLvアップした3人は力を使いこなせず危険だった。時折高Lv探索者と低Lv探索者で探索した場合に起こる事態だ。通常円形闘技場での鍛錬で力を掌握する。勿論アッシュ達も円形闘技場で修練した、その際ルルナが見せた新特性魔闘術は洗練され完成された技術体系で感心させられた、尤も扱うルルナは未熟だったが。闘士系の職業であっても習得できる者が限られている稀少な特性らしい。しかし上昇率の為か円形闘技場では賄い切れず、仕方なくスレイは短期パーティで実戦の中で鍛える事にして、今回の迷宮探索に臨んだ。試みは成功している。今もまたモンスターとの戦闘中だ。スレイは自分に向かってきたラミア達を連携して倒し終わっていた、やはり魔闘術を習得したルルナの活躍が終始目立っていた。戦闘後スレイはルルナとエミリアに気遣い、無視されたアッシュが文句を言うが。

「男は心配するまでもなく自分でどうにかして当然だろう、それに自分の女を特に心配するのの何が悪い？」

スレイの台詞に頬を赤く染め羞恥も見せる2人。そしてこのまま切り良くこの迷宮を攻略することにする。スレイはまずは今回はLv

V25を目指す事にし、そのまま4人で次の階層へと下りて行くのだった。

【毒蛇の巣穴】地下25階（最下層）“大蛇の間”最奥の広間
既にスレイはLV25に到達し、アッシュ達3人も力を掌握していたが、既に最下層の最奥の広間の手前だ。広間にはA級ボスモンスター、ジャイアント・ワームが出る。なのでボスを倒してしまおうとスレイは考えた。3人に余力を確認するも、威勢の良い返事を聞き苦笑し、万全の状態を整えると、4人で一気に最奥の広間へと突入した。

広間に入るとそこに居たジャイアント・ワームの巨大さに4人は唖然とする。直径10メートル全長は不明、地上部分だけでも20メートル。通常のジャイアント・ワームとは桁が違う。中級者用迷宮までのボスモンスターは、倒される度、毎回召喚の魔法陣で補充される。この巨大さは恐らくスレイの運勢が原因だろうと予測する。しかし気にせず、スレイは怒涛の如き攻勢で敵をズタボロにしていた、呆れた声を上げるアッシュ。しかし瞬時に再生する敵に驚く4人、こんな再生力を持つジャイアント・ワームなど聞いた事も無い。スレイは丁度良いと、炎の精霊王の加護の力を確かめるのに炎の初級魔法を使ってみる。周囲に何の影響も与えず敵のみを焼滅させる超火力。驚き喚くアッシュ、他2人も物言いたげだ。スレイはアッシュを宥め、落ち着かせ、カードを3人に見せた。非常識な単語を見てももの言いたげな3人だが、信頼している、詮索はしないでくれ、というスレイの言葉に何も言えず、そのまま4人は迷宮を脱出した。

青空の下、全長300メートルほどの巨竜と150メートルほどの巨竜が飛翔する。どちらも漆黒に輝き親子を連想させる。そして300メートルほどの竜の巨体の上には一人のアルビノらしき色合いの少女がいた。

ふと150メートルほどの竜が地上を見やり、一瞬で地上に向かって直滑降した。300メートルほどの竜は、少女を気遣い旋回しながら地上へ降りていく。

地上では野盗と護衛の探索者達が戦闘を繰り広げていた、雇い主一家は馬車の中で震えている。このままでは明らかに野盗の餌食になるのは時間の問題だった。そんな窮地に上空から突然声が降ってくる。

「そこな悪党共！待つがいい！！」

一同は何もない上空から少女が降って来るのを見て咄然とする、地に足をめり込ませながら着地した強さをそのまま美にしたような少女は、足を抜き取ると、啖呵を切って胸を張り野盗達を糾弾しポーズを取る。コケにされたと感じた野盗達は少女を弄び、奴隷商人に売り払う算段をする。と号令と共に襲い掛かる。

野盗の台詞に、少女は薄汚いゴミの様に野盗達を見て、護衛の探索者達の前に出る。止めようとする探索者。だが軽く押され倒され呆然とした。そして荒唐無稽な活劇が始まる。

少女の拳で数十メートルは吹き飛び、少女に地に叩き付けられ何十センチも地にめり込み、少女に触れただけで腕が折れる野盗達。あまりにも一方的な蹂躪。十分も経たず100人近くの野盗は全員戦闘不能となり、再起不能に見える者もいる。咄然とする一同。

と、上空からとんでもないものが降りてきた。300メートル程の漆黒の竜、背中に少女を乗せている。竜気の効果か翼はそよ風すら起こさない、一同は腰を抜かす。そのまま竜が人を巻き添えにしない位置に着陸すると、少女が軽やかに地に下りる。

途端竜は光り輝き姿を変える。通常の人サイズの、壮年の黒髪黒瞳の威厳ある男性の姿へ。服は竜人族の変化の常として亜空間を利用した着脱が行われ、当然のように纏っている。そしてそのまま男性は先に闘った少女に苦言を呈すると、一同に野盗を縛り上げる手伝いを頼む。

だが一同はそれどころではない、竜から人へと姿を変えた事、少女の名前、それらから3人の正体に気付いたのだ。全員がひれ伏し、畏怖と崇拜の視線を向ける。

竜皇とその二人の皇女と気付いた全員が言われるままに野盗達を縛り上げる、そして戦った少女を見てあれが闘竜皇女様かと呟く、そして野盗達を一瞬で回復させたアルビノの少女に癒しの竜皇女様と呟く。そして一同畏敬の念を向け、三人に畏まった。

その後、野盗達は、治安維持も果たす探索者ギルドの支部に突き出し、出る褒賞金は探索者達で山分けする様に言い残し、3人は空の旅へと戻った。

再び空の旅の中、3人は念話で会話する、スレイの成長を楽しみだと告げるイリナに、アツシュに会うのが楽しみだと言うエリナ、アツシュを馬鹿にするイリナにエリナはアツシュを馬鹿にするのは許さない、どうしてもアツシュの事を馬鹿にするなら絶交だと告げる。イリナの悲鳴が念話で響き、近くの感受性の強い存在達は暫くダメージを受けたのだった。

【毒蛇の巣穴】攻略後、職業神の神殿を訪れ、再び同じ巫女フィーナに当たった事に驚くスレイ。自分だと不満があるかと悲しげな言葉を否定し、疑問を告げるスレイ。フィーナはほっとした様子で、実際のシステムを答え、また担当になったのは偶然だが、そう低い確率でも無いと告げる。そして、以前のクラスアップの後ジュリアからスレイの話を聞いていた事を告げ、ジュリアの事で相談があると告げるフィーナ、スレイは軽く引き受ける。そして儀式が行われる。そしてスレイは苦痛の声一つ漏らす事なく儀式を終えた。呆れたような感心したような声を上げるフィーナが、どんな特性が付いたか興味があるので教えて貰って構わないかと声をかける、特性が増えてない可能性に言及するスレイに、何気に失礼な言葉でそれを否定するフィーナ。スレイは気にしない事にして早速カードを確か

める。能力値の低かったものが軒並み上がっていた、全体ではA級相当だ。だが他の探索者の能力値と比較し、運勢を除けばS級相当と呼べるだろう。壁を突破した手応えを感じる。そして確かに追加されている特性を3つ見つけ、詳細をフィーナに聞こうとする。だがその前にフィーナから勢い良く問いかけてきた、思わぬ積極性に少々驚きながらスレイは刀技上昇と二刀流と無拍子という特性が追加されている事を答える。興奮したようなフィーナはそれぞれの特性について説明してくれた。

そしてフィーナは話を続けた。ジュリアの事である。最近悩んでいるジュリアだが、自分が聞いても答えてくれないので、探索者として有名になってきたスレイなら役に立てるかもしれないので、もし可能ならジュリアの力になって欲しいと告げるフィーナ。だがスレイは少し違うところに反応した。自分が有名になっているのか尋ねるスレイ、色んな意味で活躍しているようだからかうように告げ、“黒刃”の二つ名が付いている事を教えてくれる。また付いたその二つ名に凍り付くスレイ。フィーナはジュリアの事をお願いしているのか本題に戻る。軽く了承するスレイ。フィーナは嬉しそうに微笑み、お願いすると告げた。役に立てるかどうかも分らないのだが、とスレイは溜息を吐くのだった。

職業神の神殿の入り口近くの一画にある酒場のテーブル席、ジュリアは1人物憂げな表情で溜息を吐く。ジュリアは悩んでいた、深刻な悩み事で考えを進める内に何故かスレイの事に悩みがシフトして、慌ててジュリアは元の悩み事に戻るのだった。

悩ましの美女とは言え、神殿騎士にちょっかいをかけるような馬鹿はそうそういない。ジュリアの周囲は空席で誰も近寄らない。だが周囲の注目を気にせず、スレイはジュリアへと歩み寄り声をかけた。スレイの声にジュリアは、少し驚いた表情で頬を赤く染め、弱々しげな笑みを浮かべ、用件を尋ねた。スレイは席に座るとフィ

ーナからの頼まれ事だと正直に答える。意外そうな表情を見せるジュリア、スレイがまたクラスアップしたと気付いたのだ。ジュリアは表情を真剣なものに変えると、今度は彼女からスレイに能力値をまた見せてもらえないかと頼んでくる。困惑し、スレイは少し渋い顔をする。だがそのスレイの態度にますます期待が膨らんだジュリアは、必死な様子で説得し、息を飲み表情をより鋭く真剣なものにして、秘密を守ると職業神ダンテスへの誓いを告げた。流石に職業神の神殿騎士が、最も神聖な神殿において神に身命を以て誓うとまで言うのであれば信頼するしかない。スレイはカードに念じて全力値を表示しジュリアへと見せた。そして驚愕するジュリア、周囲の席の者達も何事かと視線を向ける。これ以上はまずいとばかりにジュリアはスレイの手を取りひきずるように歩き出した。突然の事に困惑するスレイに、自らの悩み事は決して外に洩らしたくないが、愚かにも叫んで注目を集めてしまったので先の話は自分の部屋でしたい、時間はあるかと尋ねる。その声色は深刻な色を帯び、ただごとでは無いと思われたのでスレイは了承した。そして導かれるまま、神殿内の神殿騎士の宿舎、ジュリアの部屋へと連れこまれた。

ジュリアの部屋、僅かに開いた扉から慎重に辺りを見回し扉を閉め鍵をかける。窓がしまっている事も確認し、その上で風の魔法を使い部屋を防音状態へと変え、ようやく安心したようにスレイを見た。そしてスレイのカードについての驚愕を零す。色々あったんだと溜息を吐きスレイは続ける。炎の精霊王の加護は派手すぎて使えず、人に隠さねばいけない事ばかり増えて困っていると。ジュリアは炎の精霊王の加護が使えないという言葉に思わず口を挟み理由を問う。スレイは軽くジャイアント・ワームと戦ったときの顛末を話した。ジュリアは精霊達に頼めばいいのではないかと言う。スレイは考えても試してもいなかったと答えた。呆れた視線を向けたジュリアは雑巾として使っていた布を持ってきて、実際制御できるか否か試すよう促す。スレイは納得し、念のため自分の真後ろにジュリ

アを庇い、精霊達に制御を頼み、炎の下級魔法を構成し呪文を唱え発動する。燃えた事に気付かぬ程一瞬で布は焼滅していた。完全な正確無比な精度と威力。心配していたような派手さは全く存在しない。自分の悩みはなんだったのかと思い、スレイは少し項垂れた。

心配事が消えて何よりじゃないかとジュリアは早速相談を持ちかける。それは知人の娘が天魔病にかかっているという話だった、スレイは天魔病についての詳細をすらすらと諳んじてみせる。その博識に呆れるジュリア。そしてスレイは全ての得心する、孤狼の森、S級モンスターが生息しSSS級の神獣の天狼が棲む為、ギルドが禁足地指定している森。そこに治療の為の葉草は存在した。ジュリアはスレイに孤狼の森への同行を頼み、理由を告げる。SS級相当探索者にコネは無くS級相当探索者でもギルド子飼いは論外、知り合いも忙しく、何よりS級相当探索者でも力不足だろう、そこにスレイが現れた、スレイの偏った能力値なら或いはと懇願するジュリア。スレイは欠片も躊躇わずに了承した、そこには何の逡巡も感じられなかった。呆然とするジュリアにスレイは繰り返した承の返事をする。ジュリアはただかすれた声で損得勘定や恐怖心は無いのか尋ねた。お金や名声に興味は無いし、恐怖心はどこかに落として来たと答えるスレイ、今頃どこかで誰かが拾い食いでもして腹でも壊してるんじゃないかとどこかの誰かを皮肉り冗談を告げる。

【???】 “???” “???”

何処とも知れぬ場所、享楽の邪神ロドリゲーニはくしゃみをして、誰かが自分の悪口でも言っているのかと不思議そうにする。邪神の悪口を言う者など幾らでもいるだろうと呆れる絶望の邪神クライスター。そして封印の解除は大丈夫かと不安を見せる。それに自信満々に安請け合いするロドリゲーニだった。

ジュリアは笑い、再度確認する、報酬と呼べる物も利益も無いのに構わないのかと。スレイは寧ろSSS級の神獣、天狼との戦いに

興味を示してみせ、ジュリアを苦笑させた。だがただありがたいと告げ、笑うジュリア。そして突然、微かに頬を赤らめやたらと緊張を見せベッドに座り込む。ふと部屋の香料の良い香りにスレイは気付く。暫く待つとようやくジュリアは動き始めた。服を脱ぎ始めたのだ。スレイは微かに驚いた表情をする。ジュリアはリリアからスレイは相当な女好きと聞いていると語る。そして報酬は自分自身ぐらいしかないと考えたのだと。不足かも知れないが抱いてくれないかと告げるジュリア。スレイはジュリアを凄く魅力的だと告げ、心の伴わない関係は持つ気は無いと言う、そしてどうして自分が女好きなのか尋ねる。魅力的と言われ嬉しいと言うジュリア、女好きというのは色々とりリアから聞いていると答える。何故あいつは知っているかと眉間を抑えるスレイに、リリアの情報網を舐めない方が良くいと告げるジュリア。そして少なくとも自分の心は伴っていると告げた。何時からと尋ねるスレイ。さあ？と答えるジュリア。出会ってから何時の間にか良く考えるようになっていて、今理由も無いのに一緒に来てくれると聞いた時完全に自覚したと答える。まだ女性関係で躊躇うスレイの唇を塞ぐジュリア。それでえ充分だと彼女は言った。他人は関係無い、自分が抱かれないから抱かれるのだと。スレイは何時の間にか殆どの肌を晒したジュリアの肢体にくらくらとする。ジュリアは再び口付け舌を絡め、スレイの身体を弄った。胸元の柔かい感触。刺激されるスレイ自身。限界だった、スレイはジュリアをベッドに押し倒す。ジュリアは少々驚くも、そのまま目を閉じ身を任せる。その身体に重なっていくスレイ。先ほどの仕返しのように口付けし、舌を絡ませ唾液を飲み唾液を飲ませる。胸を大胆に、しかし優しく痛みを与えないよう揉みしだき、太ももの間に足を入れ、身体を開かせていく。そしてスレイは報酬であるジュリアの純潔を存分に堪能するのだった。

莊嚴なる玉座の間。幾度目になるのか、数えるのも飽きた質問が繰り返される。側近である宰相魔猿王グルスの質問に、いい加減辟

易とし、豪華な玉座に座る小柄ながらも圧倒的な覇気を纏った十台半ばに見える美少女が溜息を吐く。既に二百年以上生きる魔王サイネリアは、心底うんざりとしてしつこいと、行くと云っているのだと、何度同じ言葉を繰り返せばいいのかと答えを返した。グルスは諦めず再度同じ言葉を繰り返そうとする。しかし横合いからの第三者の言葉で、ようやくその会話の繰り返しは終わった。いつの間にかその場に現れていた美女に、見事に反応が分かれる。歓迎の意を示すサイネリアと、渋い表情のグルスとに。妖艶で無邪気な雰囲気、絶世の美女であった。縦ロールの豪華な金髪は腰に届き、赤い瞳は鮮血の如き深淵な深紅だ。美女に対しサイネリアはシャルロットと呼びかけ、愚痴を言う、そしてリュカオンとダートという二者の名を呼ぶ。期待の色が込められた言葉に、いつの間にか玉座の間に現れていた2つの影が返事を返す。ますます苦々しい顔をしたグルスは、諦めずに3人に向かってでも反対の意思を示そうとした。しかし、一言。それまでは外見相応だったサイネリアが、魔王の圧倒的な力と威厳を示す。言葉の圧力でグルスは言葉を続けることも微動だにしない事もできなくなっていた。そしてサイネリアは、グルスの、即ち闇の種族の保守派の立場に理解を示すような言葉を発する。それに縋ろうとするグルス。だが、サイネリアは、かつてとは既に変わり強大な力を手に入れた闇の種族の現状を語り、保守派が考えるかつてと現在は違うのだと告げる、そして、威厳を持ってグルスに成すべき事をなすように命じた。逆らえず玉座の間を後にするグルス。残った3人の内、シャルロットが目を瞞ってその成長を驚くような言葉を発する。茶化された事に膨れるサイネリア、シャルロットが遥かに年上でも子供扱いされる言われは無いと。そして今回集められたのは邪神復活の兆し有りという件についてかと、魔狼族の長にして最長老リュカオンが尋ねるのに肯定する魔王。続いて一族内でも特別な三つの角を持つ鬼人族の長ダートも人選について尋ねる、シャルロットは兎も角自分とリュカオンについては同等の者が何人か居るが、と。サイネリアは悪戯心だと笑う、魔狼フェンリル、

鬼刃ノブツナがやって来ると聞いて、闇の種族の誇る魔狼王と鬼王を絡ませてみたいと思ったと。呆れる二人。だが人生にはユーモアが大事だと告げ、尚且つ闇の種族の力を見せ付ける絶好のチャンスだと笑うサイネリア。そして威厳を以って3人の号令を掛けた、3人は忠誠の念を見せ、一糸乱れず了承した。

スレイが目覚るとジュリアが朝食の準備を行っていた。あの後宿に伝言を頼み、存分にジュリアと爛れた夜を過ごした。ふと宿にわざわざ伝言を頼んだ事に、宿の2人と家族になったかのような不思議な感慨を抱く、他にも関係を持った女性達に責任感や義務感を感じている。僅かな時で不思議なものだと感じる。と、ジュリアが朝食の準備が終わったと声を掛けてくると、ジャケットの穴の事を尋ねてくる、がスレイは気にせずそのまま構わないという。装備にすら無頓着なスレイに呆れるジュリア。その後スレイは朝食を摂りながら話を切り出す。痛いのは大丈夫なのか、と無神経な言葉に拳が飛ぶも軽く躲す。食後スレイはジュリアが本格的に料理ができる事に疑問を呈する。失礼な言葉を気にせず自信があると胸を張るジュリア。だが探索者なら軽いサバイバル料理ぐらいなら誰でも作れるのでは無いかと言う。スレイは自分の料理の腕を聞かれ、野営での野生的な食生活を聞かせジュリアを引かせ、ジュリアに機会があれば料理を教えてもらう約束をするのだった。

【孤狼の森】

慎重に都市を抜け出した2人は、遠回りして孤狼の森の内部に侵入していた。だが一息吐く暇も無く敵が現れる、キラー・ビー、集団行動によってS級指定される集団のモンスターである。剣で戦うのはキツイというジュリアに、スレイはそうでも無いと思うが、この機会に炎の魔法に慣れておこうと、炎の中級魔法ホーミング機能付フレイム・バレットを使った。しかしあまりに派手な発動方式にジュリアが疑問を呈する。それは師の趣味だと、どこか疲れたよう

に話すスレイ。ジュリアは呆れる。無意味ではなかったが、わざわざする必要も無い部分も多かったというジュリアに、師の魔法の癖が染み付いたと愚痴を零すスレイ、おかしそうに笑うジュリアに罰が悪そうにスレイは歩き始める。そして薬草の場所を尋ねる。ただ森の中心部だと答えるジュリア。全く当てが無い事を知り、スレイは前払いで報酬を貰った以上本気ではないが、多少懲りて貰おうと、帰る様な芝居をする。慌てるジュリア。呆れたように苦言を呈するスレイ。ジュリアは本気で困ったように、知人には世話になっていくから、と言い訳する。スレイは振り向きジュリアの横を通り過ぎると森の奥へと進む。不思議そうなジュリアに肩を竦めて、行くんだろう、と促した。礼を言うジュリア。報酬も前払いで貰ったし自分の女を放っておくというのも無いしな、と答えるスレイに、ジュリアは頬を染め恥ずかしげに言葉を漏らし、スレイに続いた。

全くの無計画というわけでもなく方位磁針を持っていたジュリア、森の西の端から進入したから東へ向かって進もうと提案する。方位磁針が機能する事にはジュリアも驚いていた、特殊な地では役に立たない事が多いからだ。ふと南北へ通う獣道らしき開けた場に出てそのまま横切ろうとすると気配が変わる。S級モンスター鬼熊が3匹程群れて現れた。と、ジュリアは驚愕する。スレイが突然消え、現れた時には鬼熊の心臓に刀を突き刺していたのだ。それでも爪で反撃する鬼熊に、次の瞬間スレイは少し離れた地面に衝撃音を立て、這うように着地していた。バックステップで鬼熊の爪を回避したのだ。無拍子の特性の効果がスレイの予想以上の物だった為、最大速度が出てしまった。スレイは無拍子への評価を改める。と、次の瞬間にはまた消え去り、心臓を突き刺した鬼熊の首を刎ね飛ばしていた。あまりの神速、ジュリアは胸を高鳴らせる、スレイの戦う姿は魅力的だった。そんなジュリアにスレイが自分一人で片付けてしまいうぞ、と声を掛ける。次の瞬間にはまた知覚すらできない神速で一匹の鬼熊の首を刎ねた。ジュリアは最後の一匹は譲ってほしいとい

うと、無数の残像を後方に生み出しながらの高速移動で鬼熊の前に出る。爪での攻撃にバックラーを叩きつける。鬼熊の腕は潰れ、弾き飛ばされた。後を追う無数の残像を残しながら鬼熊に追いつき、ジュリアは大剣を真上から振り下ろし、鬼熊を真つ二つに切り裂いた。振り返るジュリア。スレイに戦いぶりの評価を尋ねる。力技に呆れたように、ジュリアの事は怒らせないように気をつけようと言うスレイ。不満そうにジュリアはぼやく、そして続けてスレイの戦闘を賛美し、いったいどうやってあんな真似をしたのか尋ねる。無拍子という特性と元々のスピードが相まって、あれほどの疾さに至れたと告げるスレイ。鬼に金棒と言うやつかと呆れたようにぼやき、未恐ろしいと告げるジュリア。ある程度相手の戦闘能力を把握し2人はそのまま先へ進む。

前進を続ける2人にS級モンスターが次々襲い掛かる。現在は大量の猪のS級モンスター・ヴルスに四方八方から攻められていた。スレイは斬撃の衝撃波で、ジュリアはバックラーと大剣で力任せに對抗するも、切りが無い。スレイは魔法を使うので時間稼ぎをジュリアに頼む。どんな魔法なのか尋ねるジュリアに、師の使っていた雷魔法を炎魔法に応用すると答えるスレイ。ジュリアは頷き、力任せに周囲全てのヴルス達をバックラーで力任せに薙ぎ払う。一瞬の隙にジュリアは前以って用意していた防御魔法を呪文を唱え発動した。時間は稼いだと言うジュリアに、スレイは思考分割を持たないジュリアが防御魔法を用意していた事実、先程までは素の腕力だった事に驚き固まる。も、防御壁に突撃してくるヴルス達の様子に、あまり保たない事に気づき、すぐ呪文を唱え魔法を発動させる。天空に巨大な炎の魔法陣が展開し、魔法陣から無数の炎の龍が降り注いだ。炎の龍はヴルス達だけを焼滅させていく。高度に制御された魔法は、周囲の木々を燃やさず、2人に僅かな熱も感じさせない。圧倒的な火力の暴虐の後、元の静かな森と炭と化したヴルス達だけが残った。壮絶だと呟くジュリアの声が耳に痛い、わざわざ派手な

魔法の使用を楽しむ辺り師の影響を確実に感じ落ち込むスレイ。そのまま2人は更に森の奥へ踏み入る。

白亜の大広間の中心、壇上に少女が立つ。その身体は黄金のオーラで覆われているかのようだ。脇には一人の男が立つ。少女に似た顔立ちの美形の優男。その眼は油断なく辺りを睥睨し威圧している。だがその威圧も、今回はかりは無意味なものだろう。この場に集う5人もまた、青年と同等の超一流の探索者なのだから。聖王国ヴァレリアントの中心に座す神殿、その最高司祭である聖王との謁見の間に今世界に9人のみの現役SS級相当探索者の内6人も揃っていた。だが尚中心に在るのは聖王イリュア。しかしその会話は、場の神聖さを台無しにする剣呑な雰囲気のものだ。どうあってもヘル王国を攻めるのを止めろというのかと、粗野だが野卑ではない壮年の男傭兵王グラナルが聖王に直接言い放つ、数年前の大陸中央の戦争の中で活躍し、傭兵国家グラスベルを作り上げたSS級相当探索者だ。グラナルにとって停戦状態の現在、傭兵国家を維持する為の唯一の収入源が、ヘル王国への嫌がらせに中央の国家から依頼される、ヘル王国を攻める仕事なのだ。異議を唱えるのは当然だった。対し聖王の兄にして護衛たる聖剣ヴァリアスはグラナルに怒声を上げる。一触即発の二人、そこに聖王がヴァリアスに一人の壮年の男がグラナルに叱声を浴びせる。渋々元の姿勢に戻る二人。聖王は壮年の男拳聖オウルに礼の言葉を述べる。感動する壮年の男、だが彼は現在現役で最古参のSS級相当探索者だ、既にその年齢は老人と言っている。そんなオウルはグラナルの国を治める立場を斟酌してやってほしいと告げる。罰の悪そうなヴァリアスとグラナル。彼らであっても自分達とは比較にならない程経験を積んだオウル相手では分が悪い。聖王は頷き、この場の全員に今回の依頼で10年は小国家を維持できる程の莫大な報酬を出す事を約束し、グラナルにその期間で国のシステムの変革を促す。そしてもし純粋に戦いを望むというのならば、その場を用意できると告げる。そう真の敵である

邪神との戦いという場を。邪神の名に、流石の5人がビクリと身体を反応させた。SS級相当探索者という、人の最強の高みに到ったと自負する彼らをして、萎縮させる重みはその名にはある。報酬に拘りは無いが当然参戦するとその名に相応しい清廉な返答をする英雄ブレイズ。そんな彼を気に喰わなそうに見ながらも、同意するグラナル。グラナルにとって過去の戦争で何度も敵国に属し、戦況を覆したブレイズは天敵だ。続いてオウルも当然のように同意するが、智謀と魔術で上り詰めた賢者アロウンが勝算を尋ねる。彼は蛮勇を持たない。が、聖王が必勝の策があると確約した事に、世界の理として聖王が偽りを告げれない事を知る彼は、邪神への好奇心を全開に喜び依頼を受ける。最後の一人暗い雰囲気の圧倒的な美女、毒蜂或いは毒蜘蛛ミネアが残る。肌に指先一つ触れるだけで悉く死を辿ると言われる毒を宿し、暗殺技能とオリハルコンの操糸術を極めた、表と裏両方の戦いで殺しという一面においてはSS級相当探索者の中でも飛びぬけた実力者だ。自らの毒を倦むミネアは対邪神に参加する者に自分の毒に耐えられる男は居るか尋ねる。肯定する聖王。驚き参加を承諾し、相手の紹介を請うミネアに聖王は悪戯気に笑って自分で見つけるように告げる。一瞬驚いた顔をするも快活に笑うミネア。楽しいに笑い合う聖王とミネアだが、聖王の自らもクロスメリア王国を訪れるという発言に場が静まり返る、例外はただ一人妹の性格を知る兄であるヴァリアスのみだ。公式訪問するのかわとう問いにお忍びだと、そして昔から得意なのだと告げる聖王。一瞬啞然と全員が固まるが、次の瞬間には全員が面白そうに笑っていた、流石の胆力だろう。そして聖王と6人のSS級相当探索者達のお忍びでのクロスメリア王国への訪問が決まった。

先程の派手な魔法について不味かったか尋ねるスレイ、見張りのギルド員には見られただろうと答えるジュリア。謝罪するスレイ。スレイの謝罪にジュリアは苦笑し、探索者ギルドがわざわざ危険を冒してまで虎の子のお抱えのSS級相当探索者を派遣する事は無いと

告げる。SS級相当探索者についてスレイが尋ねると、皆ギルドに所属してはいても既に独立してるも同然で、個人での国家との関わりが深いので要請ぐらいしかできず、そして今回は要請する事すら無いだろうと言った。なにせわざわざ自分の実力を勘違いして決まりを破る馬鹿を助ける必要など無い、と。自らが馬鹿という言葉に笑うスレイ。今後は信用できる者以外の前では先の魔法は使わない方が良いと忠告するジュリア。ギルドも動かないとはいえ、備えの為に労力は使うだろうから、はた迷惑な探索者への罰則は結構な物になるだろうと。気をつけると答えるスレイ。とスレイの双刀がシックレットウェポンではないかと尋ねるジュリア。良く気づいたなとスレイ。それだけの力を発していれば分かるさと告げる。どうやら最下級の伝説級レジェンドのようだが、と尋ねるジュリアに、またしてもスレイは良く分かったなと驚く。特殊な能力を使う様子が無いからだと答え、それとも君がつかわず隠しているだけかな、と尋ねるが、スレイはそんな事は無いと答える。そしてアスラを差し出しスレイはジュリアに今回だけでも使うか聞く。だがジュリアは自らの剣もオリハルコン製の上質な物ではあるから必要無いと断り、スレイは納得し頷き、刀を鞘に納める。2人は会話を続けながらも森の奥へと進んでいった。

突然開けた場所に出た。泉の周辺に様々な草花が生い茂る。ジュリアは目を輝かせて間違い無いと薬草を見付けて叫ぶ。行き当たりばったりで着いた事に呆れるスレイ。ジュリアは胸を張り、運勢…Sなら方位磁針程度の備えがあり、よほど困難で稀少な対象が目的でもない限り大抵は目的の場所に辿り着けると言う。スレイは自らの運勢と迷宮での事を省み納得し、そしてこれもまた自分の運勢の賜物かな?と嘯いた。ジュリアが疑問の声を上げようとした時、突然圧倒的な圧力が襲い掛かり上空から体長10メートルの巨体が降り立つ。ふわりと軽い着地に、神獣らしく神気を使っていると予想する。2人の前に降り立ったのは純白の体毛の、巨大な狼だった。金

色の瞳が威圧感放ち2人を見つめる。天狼と思わず畏怖に呟くジュリア、対しスレイはプレッシャーは感じるが、平然と立っている。プレッシャーは物理的な圧力すら伴うが、軽く耐えて、スレイは影響を全く受けない。天狼が先程からの森での2人の行動を誰何する。心に直接響く重々しい念話、威厳ある思念に、ジュリアは畏怖し謝罪し、薬草を分け与えてくれるよう願い出る。一念の元断る天狼。疑問の声を上げるジュリア。天狼はいずれ我が子らの育成の為にある大事な薬草を無法者に分ける理由など無いと告げる。なおも請うジュリア。くどい、と、その身が無事で済む事に感謝し立ち去れと告げる天狼。尚も続けようとするジュリアの前に、つとスレイが立ちはだかり、双刀を抜き放ち、自分達が倒したモンスターは天狼の身内なのか尋ねる、自分達はただ返り討ちにしたいだけだが、と。自らの縄張りにある事は許しているが自らには関係無い存在だと答える天狼。つまり縄張りで無法を行った事が問題という訳か、と賭けを持ちかけるスレイ。自分達が天狼を倒したら薬草を分け与える、自分達が負けたら命を奪う。どの道互いに譲る気が無い以上これが最善だと。驚きの声を上げるジュリアと、面白そうな思念を発する天狼、勝てるつもりでいるのかと聞く。やってみなければ分からないいと答えるスレイ。賭けの対象に天狼の命を上げなかった事から自らを殺さずに倒すつもりかと尋ねるのに、スレイはそうだと答える。面白い余興に付き合ってやろう、ただし本当に命の保証はしないと告げる天狼。頷き呆然とするジュリアを促すスレイ。これ以外に方法は無い天狼と戦うぞ、と。どうする？自分一人で戦っても構わないが、と。冗談じゃない、とジュリアは告げる。スレイが一人で勝てると思っているなら傲慢に過ぎると、自分も戦うと言い放つ。条件を確認するスレイ、頷くジュリア。我を舐めすぎではないかと呆れたような天狼。スレイは何にせよ戦ってみれば分かると言いつつ放った。

刹那、消え去ったスレイと天狼、次の瞬間スレイの刀と天狼の爪

がぶつかり合い、ジュリアの方へと吹き飛ばされてくるスレイ、地面に叩き付けられる寸前で身体を捻り着地し、地面を数メートルにわたり削り静止する。速すぎる戦闘の推移に呆然とするジュリアだがやるべきことを理解し、スレイに回復魔法は必要か声をかける。まだ必要無いと答えるスレイ。ジュリアは速度に付いていけないので魔法での援護に回ると告げ呪文を唱え始める。スレイはまた消えた天狼と同時に刹那で消え去った。

闘気と魔力を併用したスレイと素の天狼が存在する亜光速の世界、周囲の全てが静止している。思考加速し亜光速の思考でスレイは対応を考えると同時思考分割で敵との戦力差を分析する。速度は同等、力は劣る。天狼の攻撃を受け流すのに徹する。体感時間はかなり長い、現実の時間は全く動いていないのと同様。自らと戦いながら考え事とは余裕だなどと語る天狼、会話を行おうなんてそっちこそ余裕じゃないかとスレイ。念話を使うスレイに感心し、余裕ではなくスレイと同じく思考を加速し分割しているだけ分かるだろうと告げる。意思を交わす間もスレイが一方的に傷つき、天狼有利で推移する。再度スレイが吹き飛ばされた。亜光速の世界から弾き出され、ジュリアが援護魔法と回復魔法を掛ける。ジュリアの援護魔法でスレイの能力は一時的に向上する。今の隙にスレイを倒せるだろう。天狼は余裕か、状況を見守っている。回復魔法によりダメージは回復し、スレイはまた天狼と同時に亜光速の世界へと突入する。援護魔法の効果で、戦いは互角へと推移する。天狼は感心したように告げる、思考加速と分割は使いこなし、念話も使い、闘気と魔力の併用などもやってのける、人としても年若い身だろうに、これほどの力を身に付けるとは、と。無限に近い一瞬の中、意思の交感が続く。天狼はそろそろ決めると言い放つ。不味いつ、とスレイは刹那の判断でジュリアの前方に静止した。

突然現れたスレイはジュリアに防御魔法の展開を命じる。ジュリ

アはすぐ防御魔法を呪文で展開する。スレイは不足だと双刀を携え、ジュリアの前に立つ。天狼が口を大きく開き出現した。周囲に影響を全く与えない完全な指向性の咆哮が放たれる。威力は空間を歪め、2人に襲い掛かる。スレイは全力で強化した双刀で空間ごと咆哮を切り裂く。爆音。背後の森の一面が消滅するも2人は無事だ。スレイは両腕にダメージを負っていた。慌ててジュリアが回復魔法を掛け、傷は癒えた。スレイはイリナの咆哮とは威力も制御も段違いの咆哮に驚愕の声を零す。スレイがイリナと知り合いだった事に驚き、そして逆にスレイの化物具合に言及する天狼。回復まで待ってくれたのは余裕か？過ぎた余裕は身を滅ぼすぞと言ったのけるスレイ。天狼は笑い、フェアでは無いからと、スレイに本気を出すよう告げる。自らの全てが見破られている事に苦笑するスレイ。お言葉に甘えさせてもらおうかと言うと闘気と魔力を融合し純エーテル強化を発動した。循環する純エーテルは双刀も強化し、光が眩く輝く。純エーテルの強化に驚きの思念を発する天狼、どこか楽しそうな様子だ。スレイが戦闘の再開を告げると同時に、スレイと天狼は完全に同時に消えていた。

スレイは純光速に至り、思考加速と分割を以て天狼と渡り合う。天狼も神気を以ってスレイと共に純光速へと至り、2人以外の世界は完全に静止していた。そして戦況が変化する。紅刀アスラが天狼の毛皮を切り裂いた。瞬間、紅刀アスラから流れてくる意思にスレイは驚きの思念を零す。どうしたと尋ねる天狼、その刀なら我が毛皮を切り裂くのも驚く事ではあるまい、と。戦闘は続く、と蒼刀マーナが天狼の毛皮を切り裂くと同時に、今度は蒼刀マーナから意思が流れてくる。そして完全に繋がった双刀からスレイに情報が流れ込んでくる。双刀はディラク刀の形を持つ。剣神フツによりディラクの民のみに伝えられた製法、故にディラクの刀鍛冶達にドワーフ達は対抗意識を持つ。故にこの双刀を創り上げたのもまた剣神フツだと予想はしていた。それにしてもシックレットウェポンの中では平

凡な性能に疑問を覚えてもいた、そして今疑問は解消され、双刀の特殊能力にスレイは狂喜する。レジェンド伝説級どころか究極級アルティマすら越えていると。双刀の特殊能力、それは。紅刀アスラは敵の血を啜り、蒼刀マーナは敵の精神を喰らい、無限に成長する力だった。今までは主と認められていなかったが、今は刀自身がスレイに語りかけてくる。双刀は主と認めた者と完全に繋がり主の一生が終るまで仕え続ける。もはやスレイ以外はこの双刀に触れる事すらできない。主たる者が死んだなら、双刀の成長はリセットされる。使い手が成長すれば必然敵も強くなり、敵から血を啜り精神を喰らう双刀もより成長して行く。かつて勇者王により双刀は捨て置かれ、ギルドマスターの元へと渡ったが、その判断は間違이었다、そして双刀こそが主を選別していた。純エーテル強化、天狼を傷付けた事、これだけこなしやとスレイは双刀に認められた。この先双刀とスレイは共に成長していく。最高の武器達だあいぼうとスレイは笑った。天狼に勝利宣言する。勝ち誇るのはまだ早いと反論する天狼。暫し変わらず推移する戦い、だが、天狼を何度か傷付けた後、戦況が変わる。天狼がよろめき、疑問の声を上げる。スレイは攻撃の怒号を上げる。純エーテルの強化のリミッターが外れる、スレイは超光速へと到り、まだ神気の強化に余裕を残していた天狼も同時に無意識に純光速へと到る。世界から隔離される二者。高位多次元機動で天狼を攻めるスレイ、と双刀の柄のディラク刀としては簡素な設えに、スレイに光速の数倍の思考よりなお疾い閃きが奔り、思考が追いつく間もなく身体が動く。最大威力の込められた双刀の一撃、咄嗟に爪で防御耐性を取るも、衝撃が無い事に驚愕した天狼は奇術の如く逆手に持ちかえられ寸止めされた双刀を見る。笑みを浮べるスレイ、一人時間差攻撃、刹那で隙を抉じ開けたスレイは逆手のまま怒濤の連撃を繰り出す、隙を作られ、為す術も無く倒される天狼。全ては始まりの一点へと収束し、スレイと天狼は通常の世界と時間軸へ回帰する。ジュリアは彼女にとって刹那で突然現れた光景、双刀を天狼の首筋に当て、天狼に降伏を促しているスレイを見て混乱する。スレイの言葉に敗北

を認め、薬草を譲る事を告げる天狼。スレイは天狼に勝利した。

SS級相当探索者閃光ダリウスは自らが仕える2人商王カイトとその娘アリサの行動予定に立場を分かっているのかとひたすら叫び声を上げる。やれやれとカイトは分かっているから自分で行くのだと答える。アリサもまた自分達以外が行ったら色々理由を付けられて無料で高級なアイテムを提供させられると告げる。まったくこの父娘は、とダリウスは頭を抱えた。少々強欲ではあるが正論ではある。ただ彼らのフレスベルド商業都市国家の現議長とその娘という立場を考えなければ。その上カイトは議長というだけではない。普通の商家の次男坊として生まれたカイトは自分の店を持つ為大胆な行動に出る。商品として伝説の武具やアイテムを扱う為、迷宮都市で探索者となったのだ。自らSS級相当探索者になり、その功績と迷宮で入手した商品を上げた利益で“商王”とまで呼ばれるようになり。商人としても辣腕で、そのまま商業都市国家内でのし上がる。彼の創り上げた店は商会となり、この国家内でも最大手となり、彼自身の手腕で議会の議長にまで上り詰めた。成長を続ける彼の勢力は、国家の在り方すら変えるのではと恐れられる程だ。だが周囲の評価と裏腹に、彼は腰が軽く自分で動く性格だ。彼の護衛として雇われた自分が彼の独断専行を抑える今の状況を思い、ダリウスは溜息を吐く。溜息はいけない運気が逃げて行くと告げるカイト。ダリウスは絶対カイトが行かねばならないなんて事はないと諭す。関心を見せたカイトはダリウスを促す。ダリウスはカイトの下にも使える人材が居る事と、自らの威圧があれば、事はそう悪く進まないと告げる。だがその提案をアリサが容赦無く否定した。今回の面子の中でダリウス一人頑張っても意味が無いと。驚くダリウス。アリサは今回集まる非常識な面子、SS級相当探索者全員と元々クロスメリア王国に居る勇者達の前では、ダリウスでも力不足だと告げ、止めに竜皇と魔王もやって来ると付け加える。驚愕するダリウス。追い討ちにこれで自らが行かねばならない理由が分かっただろうと

カイトが言う。更に物騒な、無法な真似をされたなら、フレスベルドの財力を用いて、流通を滞らせると脅すなどという台詞を付け加える。論外な面子に匹敵し、カイトも論外だった。そこまでの暴言を吐いてでも対抗するつもりとは。愕然とするダリウスに、アリサが近付いて励ます。今回は相手が悪いけど、決してダリウスの事を頼りにしてない訳じゃないと。更に気遣うようにいざという時に護ってくれると頼りにしていると告げる。救われた様にダリウスは感謝の言葉を告げようとする。と、いざとなれば盾にして逃げ帰れるでしょうし、と告げたアリサにダリウスは叫び声を上げた。いつも通りダリウスを弄って楽しんだ2人は、楽しげに笑っていた。

暫し経ち、天狼の子に残す為、ジュリアはほんの僅か薬草を集め袋にしまう。スレイは回復魔法で傷は全て塞がるも、純エーテル強化の副作用で倦怠感があり、座りこんでいる。天狼は既に傷が塞がり、綺麗な純白の毛並みに戻り、悠然と立つ。どちらが勝者なのか分からない有様だ。ジュリアは天狼に礼を述べる。賭けに負けた我に礼を述べられてもな、と苦笑する天狼。確かに薬草はスレイが勝ち取った正当な権利だが、天狼の子にとって貴重な事は変わらず、天狼がスレイに全力を出す時間を与えて、手心を加えてくれたのも勝利の一因なので礼を言わねばと言うジュリア。薬草については本当に僅かな量で寧ろ感謝していると、時間を与えたのはスレイの全力を見たいという好奇心からやった事で期待以上の物が見れた、寧ろ満足感すら覚えていると告げる天狼。スレイも自らの限界を天狼のおかげで超える事ができたと礼を言う。双刀について、シークレットウェポンとしても異端の物だろうと告げ、鞘について尋ねる天狼。スレイは良く知らず、ギルドマスターに聞けば分かると思うと答える。天狼はすぐ確認する事を勧める、元々の鞘で無ければ成長した切れ味に耐え切れなくなるだろうし、鞘自体に隠された能力もあるかもしれないから、と。忠告に感謝するスレイ。そんなスレイに天狼は告げる。自らに勝ったからと言え過信するなど、世にはも

つと強者が居ると。天狼に匹敵するのさえ竜皇や魔王だと思っていたジュリアは驚愕する。笑い天狼は自らと同等、そして自らより上位の者達の名を連ねていく。スレイはボソリと、闇の種族が傍観に徹していたとはいえ、それ以上の強者達が居ても邪神の打倒は叶わず封印が精々だったのだなと呟いた。それにただ1人下級ではあれども邪神の1柱を倒した人間の男が居たと答える天狼、続けて最上級のイグナートは格が違い、封印できた事すら信じられないが、と告げる。下級とはいえ邪神を倒した人間が居るという事実に驚くジュリア。美神ミューズの恋人だった男で、唯一闇神アライナの魂ごと消滅させる粛清から生き残った“天才”だった、がイグナートの前では一瞬で殺され輪廻の輪に帰ったかと答えた。天才という言葉に二者に相違が生じる。そして唯一邪神打倒の鍵だった男だが、結局イグナート前では無意味だったと天狼は溜息を吐いた。スレイは自らが会った事のある2柱の邪神について天狼に尋ね、両方上級の邪神だと知り、自らの運勢に嘆息する。2人は天狼に別れを告げると、飛翼の首飾りで森を出て、都市まで歩いて戻る。能力値を確認すると2人共レベルが上がり、特にスレイの伸びは顕著であった。そして2人は都市へと帰ったのだった。

スレイは職業神の神殿の酒場でジュリアから近況報告を受けていた。無事、知人の娘は天魔病から快復したそうだが、魔法が今までより扱えるようになり、新しい魔法を習得したがりがり大変らしい。学園での成績も魔法分野が急激に伸びているらしい。天魔病の逸話から将来はSS級相当の魔術師になるかもしれない。ギルドでは森の異変に多少騒ぎがあったらしいが、特にその後何かが起こった訳ではないので、静観の構えだ。と、ジュリアは語る。スレイもリリア経由でギルドマスターに双刀について尋ね、鞘は双刀とセットで、何らかの機能はありそうだが、調べても分からなかったと聞いた。尤もあれから双刀自体から知識が流れ込み、鞘の機能は強度が双刀に合わせて成長する物だと分かったが。そしてジュリアが何やら言

い籠る、スレイがハッキリ聞くと、フィーナとデートしてやっつけられないか、と告げるのだった。

来てくれた事に礼を言うフィーナ、待たせたと詫びるスレイ。しかし待っていないと、ちよつと前に着いた所だしまだ約束の一時間前だと答えるフィーナ。楽しみで仕方なくこんなに早く出てきてしまったのだと。少しだけ待っていた時間も楽しかったと告げ。スレイもこんなに早く来たのに驚いたと言う。スレイは頷くと、行くかと告げる、今日1日で見せたい場所が沢山あるからと。今日1日しかデートしてくれないんですか？と尋ねるフィーナに、誘いがあったら何時でも歓迎さ、ただあんたの休みは滅多に無いんだろう、それに始めてこの都市を歩き回れるんだから色々見たいだろうと思つてな、と答える。それじゃあゆつくり行こうと言うフィーナ、今度スレイとデートする時に楽しみを取っておかないと、と。そんな好かれる事をした覚えは無いんだがと困惑気味のスレイ。勝手にスレイに幻想ゆめを持ってるだけだから気にしないでくれと言うフィーナ。幻想ゆめという言葉にスレイは疑問の声を上げる。そんなスレイにフィーナは本来の職業神ダンテスの教義、人の持つ本来の無限の可能性を拓く事を告げ、現在の探索者やクラスアップというシステムは対邪神の為だけに生み出されただけの筈、と言う。物憂げな表情をするフィーナは。探索者となりクラスアップをし、安易に力を求める姿勢がダンテスの教義に沿っているか悩んでいると告げ、スレイを見つめ愛の告白をする。フィーナが見たスレイの道はとても広く大きな輝きに満ちていたと、そんなスレイなら何か答えを与えてくれるのではないかと期待する内、恋焦がれるようになっていた、と。スレイは自嘲するように、自分はそのシステムを利用し、誰よりも安易に力を求める男だと言う。だがフィーナはそれでいいと言う、自分が勝手にスレイが答えを与えてくれるという幻想ゆめを見ているだけだと、そして自らの想いも勝手な物だと、スレイはスレイらしくあればいい、そう思うと。フィーナは表情を明るく快活にし、仰々

しい言葉でデートの続きを催促した。嫁に来る訳でも無いのにその言葉は、と苦々しい顔をするスレイに、先の事は分かりませんか？と笑うフィーナ。そして、デートが始まり、スレイも色々とプランを考えていたが、フィーナが今日は自分の行きたい所にいかせてほしいと言い、そのまま服屋へ連れていかれた。店員と色々交渉しスレイ用にミスリル絹の黒い上下の服のセット8000コメルを自ら宛の請求で買おうとするフィーナ。慌てて自分で料金を支払うスレイ。躊躇うフィーナに、スレイはすぐに料金を支払い店を出た。フィーナは疑問を投げ掛ける。スレイは僅かに眉間に皺を寄せフィーナに言う。スレイの物をフィーナの金で買おうとしないでほしいと。フィーナはこれが伝え聞く男のプライドって奴なんですね、と得心したように言う。しかしジュリアから聞いたがスレイは装備をずっと変えないままでしかも一部に穴が開いた物をそのまま使ってるのか、きちんと気を使わないとだめですよ、と説教する。わかったと告げ、次に行く場所を決めようとするスレイだが、スレイの手を掴み、歩き出すフィーナ。スレイは外出は初めてだった筈では、と尋ねる。都市のガイドブックを読み漁ってたから色々な店を知っていると答えるフィーナ。次に連れて行かれた靴屋で、スレイは牛鬼の革のスニーカーを買う羽目になり、5000コメルの散財をした。装備関係は落ち着いたが、喫茶店を見やりフィーナがあれをやろうと言う。スレイはカップルが2人で1つのコップから2本のストロ―でジュースを飲む光景に頭を抱え、勘弁してくれと告げるも、勘弁はしてもらえず、羞恥に耐えながら、フィーナと同じ真似をする事になった。一日中スレイはフィーナに振り回され、散財をするも、最後までフィーナを楽しませ、現在。職業神の神殿の巫女の宿舍のフィーナの部屋。不味い事だと思っても、嬉しそうなフィーナの顔に拒否できなかった。と、今日一日の散在を思いカードを見てみる。その残高に、頭が痛くなる。明日、迷宮に潜る事を決意する、とベツドに座ったフィーナが静かな瞳で見つめてきていた。どうしたと尋ねるスレイ。無理して死ぬような事だけは止めてくれと、自分も

ジュリアも他の人も既にスレイを大事に思っていると、スレイにとっても同じだと自惚れていると告げるフィーナ。分かったと告げるスレイ。死ぬことに恐怖は無いが、大事な物や果たさねばならない責任がある、命を粗末にするつもりは無い、それでいいか？と尋ねるスレイに、フィーナは、はい、と明るい笑顔で頷き返すも、突然頬を染め、視線を彷徨わせる。昼の告白もあり、スレイは彼女の態度の理由を理解し、自ら切り出す。自らの女性関係を告げ、だが今フィーナの事を抱きたいと思っていると。あわてたように回らない口で奇声を上げるフィーナに口付けすると、押し倒すスレイ。心の準備ができてない待ってくれと言うフィーナに、待たないと言うと、スレイはフィーナの着衣に手をかける。フィーナの事が好きだから強引にでも抱くと、他の誰にも渡すつもりは無いと。こんな時間に男を部屋に誘う意味も理解してもらわないとな、と告げる。頷き、昼間と同じく仰々しい台詞を言うフィーナ、今回は本当に俺の物にするから間違い無いなと告げるスレイ。できる限り優しくするから耐えてくれ、と言うと、スレイはフィーナの上に覆いかぶさっていた。

郷里の妻と息子を心配し、ぐだぐだとする現在最も有名なSS級相当探索者鬼刃ノブツナを、娘のシズカが容赦なく叱咤する。母は鬼姫トモエと呼ばれるS級相当探索者、兄に至っては智謀では父など比較にならず、神童ノブヨリとまで呼ばれる身、刀しか能の無い父を残すよりずっと安心だと。容赦の無い娘の突っ込みに、黒髪に黒瞳で三白眼の40代ながら20代に見える男、鬼刃ノブツナが情け無い顔をする。娘に妻に似て容赦が無くなってきたなと言うノブツナ。何時も繰り返される父娘のやり取りに、厭きた灰髪と灰瞳の美女、シチリア王国宮廷騎士団長兼宮廷魔術師団長たる魔狼フェンリルがシズカ殿の仰る通り細君トモエ様の勇猛さもご子息ノブヨリ様の知者ぶりも我が国においてすら知られる事、また貴方の国は他の国と比較にならない程成長しディラク統一も間近、今更何を心配

するのか、と述べる。と、氷王アイスがノブツナに対する気遣いと共感と庇うような台詞を告げる。流石にそれには3人共驚きに凍りついた。氷王アイス。非情な厳格な治世と、常に凍り付いた表情から呼ばれるようになったシチリア王国の国王の二つ名だ。探索者でも無いのに二つ名を持つ、氷の如き主からの気遣いの言葉にフェンリルは耳を疑った。しかしノブツナは、アイスの言葉に共感し、感動した表情を見せ、理性とは別に妻と子を心配してしまうのはどうしようも無いよなあ、と同意を求める。それに答えるよう、アイスもまた慈母と慈愛の姫などと呼ばれる妻子が心配で仕方無いと相槌を打つ。家族の事で意気投合した二人は一献やり始める。アイスの言動に疑問を投げかけるシズカに、フェンリルはあのような主の姿は初めてだ、知りたく無かったと答えた。と、アイスがフェンリルに自らの子供らと同じぐらいの年齢で探索者になった有望な若者が居るという話があったなと切り出す、引退した身とは言えクリスマス爺とアース爺が1年半で戦闘なら自分を超えたと太鼓判を押したとか、名は何といったか、と。スレイだと答えるフェンリル。ノブツナは18歳で探索者になるのは別に珍しくないと思うんだが、その2人は？と聞く。5年前まで我が宮廷騎士団に勤めていた騎士と宮廷魔術士団に勤めていた魔術師で元A級相当探索者だと答えるアイス。それを僅か1年半で超えるとは武においては息子に見習わせたいところですね、とノブツナ。そんなに凄いですか？と尋ねるシズカに、実物を見た事は無いですが、才能のみなら私さえ比較にならないなどと2人は言っていましたね、と答えるフェンリル。そしてフェンリルは静かに、話に出たスレイという青年を、今回の事のついでにスカウトするかと考える、対しシズカは純粹な好奇心で私と同じ年でそんなに凄いんだったら私も会ってみたいなーと呟いた。

早朝、目を覚ますと、フィーナが疲れ果てたように掛け布団にくるまり、スレイに抱きつき眠りについていた。昨晚のことを思い出す、最初は痛がるフィーナに遠慮し優しく加減していたが、治癒魔

法で痛みが消えた後は、限界までフィーナを抱き続けた。体力が違
うのだからフィーナが疲れ果てるのは当然だ。制御できない欲望に、
少し後悔する。そしてスレイは手紙を書く、そのまま窓から飛び
降り宿舎から立ち去った。

宿に戻るとすぐにフレイヤとカウンター越しに遭遇する。フレイ
ヤは苦笑して、一つ注文してきた。サリアに謝ってやってほしいと。
安請け合いするスレイ。どうやらサリアにも心配を掛けたようだし
な、と。あら、わたしだって心配していましたよ、色々。と告げ
るフレイヤに勘弁してくれ、埋め合わせは今度すると言うスレイ。
あら？わたし高い女ですよ？と艶やかに告げるフレイヤに、本当に
勘弁してくれ、とスレイはぼやいた。

朝、サリアはスレイを見るなり、つーんとそっぽを向いた。スレ
イは優しく話しかける。

「サリア、昨日はごめん。どうやら心配をかけたみたいで」

「ふーんだ、ちゃんと帰って来ないスレイお兄ちゃんなんてスレイ
お兄ちゃんじゃないもん」「本当にごめんよ、変わりに今日の朝は
サリアと遊んであげるから機嫌を直してくれないかな？夜もなるべ
く早目に帰ってくるようにするから」

「本当？もう帰ってこなかったりしない？」

「ああ、もしかしたら用事があって帰ってこれないこともあるかも
知れないけど、その時はちゃんとサリアに教えるよ」

「うーんとね、それじゃあね、朝は色々遊んでね？それで夜は絵本
を読んでね」

「ああ、分かったよ」

朝食後、約束通りスレイは朝の間はずっとサリアと遊んだのだっ
た。

屋にスレイは、上級迷宮の段階を飛ばし、未知迷宮の【猛牛の迷宮】へと挑戦していた。今のところはミノタウロスや牛鬼など、迷宮の名に相応しく、大陸のモンスターと島国の妖怪というアンバランスな構成のA級のモンスター達だ。もはやA級のモンスターなドスレイの敵でなく、怒涛の勢いで地下25階まで来ていた。換金用の部位やアイテムを集めるのは忘れない、急な出費で懐が寒いし、何時急な出費があるか分かったものでは無い。それでも驚異的なスピードで突き進むスレイは特異な雰囲気の間へ踏み入った。

事前の情報通りかと、すぐに臨戦態勢に入り闘気を巡らせ確かめる。闘気は全く使えない。この迷宮は地下75階までは探索されている。神々の結界で地下25階には闘気が使えない間が、地下50階には魔力が使えない間があり、地下75階には闘気も魔力も使えない間がある。地下25階と50階の間の情報は、攻略したパーティから齎されたが、地下75階の間の情報は、なんとか逃げ出し脱出したパーティから齎された。その為情報はあっても地下75階を攻略したパーティは居ないという事になっている。

闘気も魔力も無しでS級のモンスターの群れと戦うなど、流石にS級相当探索者のパーティでも攻略不可能な難易度だ。SS級相当探索者達がパーティを組んだとしても難しいだろう。考えながらも闘気での強化を放棄、魔力操作のみの強化を果たしたスレイの前にミノタウロスと牛鬼の群れが現れる。スレイは魔力操作のみのトックスピードである亜光速で群れを縦横無尽に斬り裂いて行く。魔力を用いてる為、亜光速でも物理法則に縛られず存分に暴れられる。そして怒涛の刀舞と炎の魔法により敵の一掃を図るも、生き残ったモンスターの群れを見て疑問に思う。A級モンスター・ミノタウロスの一部だ。良く観察し、装備を見て納得する。完全な耐火性能の装備をしていたのだ。

ミノタウロス達がA級モンスターたる理由は様々な装備やアイテムを使いこなす知性である。耐火装備をしていたのは一部だが元々の数が多かった、かなりのミノタウロスが残っている。スレイは水

弾を生み出しミノタウロス達に当て、続いて思考分割で用意していた雷撃を高速詠唱で解き放つ。元々水弾の電解質を含んだ水で濡れていた所に、雷撃を受けたミノタウロス達はダメージを受け全滅した。スレイはそのまま探索を続ける。

【猛牛の迷宮】地下50階

時々S級モンスターのエアレーや牛頭鬼も出るようになってきた。だが闘気と魔力の併用の純光速で鎧袖一触に敵を葬り去り、思考加速と思考分割でその速度を完全に制御し迷宮を突き進むスレイは、あっさり地下50階の広間に辿りつくと、魔力が阻害され闘気術のみになるのを感じ、敵の出現を待ちながら考える。自分の宝への縁の無さを。適当に道を選んだというのに、自然と最短ルートを突き進み、結局宝の類には出会えていない。しかも探索者になってから常にそれだ。運勢…Gの業の深さを知る。

と、大量のモンスター達が出現する。分類はA級のミノタウロスと牛鬼、S級のエアレーや牛頭鬼が半々だ。スレイは闘気術のみのトップスピードの亜光速で敵の只中を通り抜けてる。物理法則に縛られた亜光速の動きは、空間を歪める程の衝撃波を発生させ、モンスター達をズタボロにする。S級モンスターは何体か生き残っているも、遠距離より刀を振るい発生させた衝撃波で追撃し、一気に敵を全滅させた。しかし闘気術のみで物理法則に縛られ亜光速を出した反動はスレイの肉体に返ってくる。内側も外側もボロボロで、特殊な素材の装備だけが無事な状態だ。スレイは広間から出て治癒魔法を掛けるため、次の階へと下りていった。

【猛牛の迷宮】地下75階

治癒魔法で回復したスレイは、再び純光速で敵を倒しながら、アイテムの回収のみは忘れず迷宮を突き進んだ。出現モンスターは全部S級となり、エアレーや牛頭鬼の他モレクという新しいモンスターも出現したが、関係無く突き進む。そして問題の地下75階に辿

り着く。広間に入った瞬間、闘気も魔力も全く使えなくなったのを理解する。そして登場したS級モンスター達が、大集団でスレイに襲いかかる。強化が無しでもスレイの敏捷はSSSだ、雷速の動作は可能である。小手調べに刀を振るった衝撃波で攻撃を仕掛けてみる。しかし流石にS級モンスター、大してダメージを与えられない。スレイは覚悟を決める。

双刀は敵の血を啜り精神を喰らいたそうに妖い惹かれる輝きを強め鼓動のように瞬いている。愛刀の輝きに後押しされ、敵の只中に雷速で飛び込む。スレイが飛び込み生じた衝撃波に耐えた敵モンスターを、双刀を振る的確に仕留めていく。敵の攻撃を受け流しスレイは死の舞踏を舞う。敵を斬れば斬る程双刀の妖しい輝きは増し、スレイの動きも洗練される。刀術に関わる特性が実戦の中で噛み合い洗練昇華され、スレイ独自の刀術が生まれる。

力は敵の方が強いため、攻撃のベクトルをずらし受け流す。スレイは敵の力を受け流すのみならず、力を操作し自らの攻撃へと活かせるようになっていた。敵モンスターは全てスレイの戦闘力を高める為の糧となり血の海に沈んだ。そして換金用の部位やアイテムを回収する。すぐに階段を下り、広間を脱出した。そして魔法で身を清める。最後に感じた違和感と能力値の確認の為、スレイはカードを取り出した。そして新しい特性を見つけ、違和感に納得する。敵の力全てを利用できる特性。化勁について認識すると情報が脳内へ刻まれる。他にもそれら特性を全て噛み合わせる事で、スレイは自分が全く新しい刀術を編み出している事に気付く、剣士として成長を実感する。喜びを感じながら治癒魔法掛け、魔力回復薬で魔力を回復させ、今度は強化を使わず迷宮を進んでいった。

【猛牛の迷宮】地下100階“軍神の間” 最奥の広間

最下層の最奥の広間の手前で立ち止まりスレイは眉を顰める。EX級の敵のプレッシャーを感じたのだ。更に地下75階と同じ違和感も漂っている。このままなら闘気も魔力も無しでEX級の敵と戦

う所だった。無茶な難易度設定に、神々の正気を疑う。が気付いて良かった。スレイには純エーテル強化という切り札がある。そのまま闘気と魔力を融合し純エーテルを纏うスレイ、静かに双刀を抜き放つ。双刀はますます妖しい輝きを強めていた。そしてスレイは広間へと突入していった。

違和感が襲うも純エーテル強化は解かれず、スレイはその場に立つ。奥へと視線を移す。奥には四目六臂で人の身体に牛の頭と蹄を持つ、巨大な化物が佇んでいた。EX級、神々に召喚された異界の神たる蚩尤。蚩尤はスレイに目を向けゆっくりと口を開く。

『また小うるさい探索者か、ここを探索者が訪れるのはいったい何百年ぶりであろうな？ しかも今回は尻の青い小僧っ子が1人だけか。群れるのがお得な探索者のくせに1人でここを訪れるとはな、ここを訪れた者は群れていても例外なくあの世を送ってやったというのに、よほど命が惜しくないと見える。まあ良い、お主も先達達の後を追わせてやろう』

脳裏に意味が自然と叩き込まれる。どうやら数百年前にはここに辿り着いた者達が居るらしい。そして皆、蚩尤にその命を奪われたようだ。尤もだ、蚩尤から漏れる神気に邪気は強力で人が敵うとは思えない。だがスレイは負ける気がしない。自らの刀術と純エーテル強化そして成長した双刀が勝利への確信となる。躊躇いも無い、蚩尤の邪悪さは感じられ、蚩尤の台詞からもここを訪れた探索者達を殺している。刹那、光速の数倍の速度域に突入、無拍子と特殊な歩法で時系列を超越、敵の懐に入り込む。スレイは構えも溜めも無く全開の威力で攻撃を連続で放つ。EX級だけあり、スレイと完全に同時に蚩尤も神気で光速の数倍の速度域に突入している。2人は同時、ヴェスタの防衛本能で世界から隔離されていた。蚩尤が無数の楯でスレイの連撃を防ぐ。だが僅かにスレイの速度が上回る。押し込まれ、ついには肩を斬り落とされる蚩尤。罵声を吐くと同時蚩尤は無数の戦斧で反撃する、だがスレイは全てを防ぎ逆にカウンタ

ーで大きなダメージを与える。悲鳴を上げる蚩尤は無数の弓矢でスレイを射て来る。それもまた全て防ぐと同時、全く動作の入りを見せずスレイは蚩尤の背後に回った。防ぐ暇など無かった。蚩尤の頭が容易く刎ね飛ばされる。そして静止し、両者は始まりの一点、通常の時系列へと回帰する。一方的な戦い。EX級の異界の神たる蚩尤を、スレイは完全に圧倒して勝利した。自らの成長を実感するも不足も自覚する。下級の邪神ですらEX+級、まして最上級の邪神憤怒のイグナート。頭抜けて強力な邪神。その力は何ほどのものか。スレイは気を引き締め、アイテムと換金部位を回収、そしてカードを取り出し能力値を確認した。Lvが上がるのみでなく、なぜか魔術師系の無詠唱の特性がある事に疑問を覚えるが、成長を確認したスレイは迷宮を脱出した。

クロスメリア王国、王城内、練兵場。

1人の青年が壮年の男にいなされ続ける、疲れ果てた青年は悔しげに叫び声を上げる。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょうッ!!なんでだよッ!!俺は生まれついで勇者だぞッ!!なんで勇者に成り上がった紛い物なんかにこんなッ!!俺が負けるはずなんて無いんだッ!!」

禁止されている闘気術を用いて、壮年の男に斬り掛かる青年。しかしまたあっさりと壮年の男はあしらうと、青年は今度は気絶し動かなくなっていた。介抱し救護所へ運び込むよう指示し、次の者を呼ぶ。進み出た少女もまた先程の青年と同じく傲慢な表情を浮かべている。壮年の男は内心溜息を吐き、どこか疲れた表情で、再び同じ作業に戻るのだった。

「それで、どうかな?我が王国が誇る生まれつきの生粋の勇者たる3人の問題児達は?少しは教育の成果はあったかな?」

クロスメリア王国、王城内、玉座の間。玉座に座る勇者王アルスが問うた。50代ながら20代の青年に見える。アルスに質問され

た壮年の男、近衛隊副隊長狂風ジルドレイは、呆れたように答えた。
「どうもこうもありませんや。相変わらず3人共やんちゃが過ぎる上、生まれつきの勇者なんてプライドに縋り付いてちっとも変わりやしません。あれじゃあ使い物になりませんぜ」

「使い物にならない、か。それでは困るのだから？ なんとかしてでも使い物になるようにして貰わなければ。なにせあの3人は我が国の象徴となって貰わねばならない生粋の勇者であり、ましてや邪神復活の兆し有りなどという報告を受けた今では、唯一邪神封印の術式を使える、実質的にこの世界の切り札と呼べる存在なのだから」

「そいつが困ったところなんですよねえ。なんで神さん達も、俺たちみたいな努力で得た実力で以て勇者の称号を得た者に封印の術を与えるんじゃない、生まれつきの職業が勇者なんて存在を創って、そいつらに封印の術を与えたりしたんだか」

そして目の前の主君勇者王アルスト、闘仙と火炎姫の二つ名を持つ部下2人の称号・勇者3人の能力値を思い出す。明らかに職業・勇者の3人よりも邪神を封印する役割に相応しい能力を持っている。「そんな生まれや環境でまともに成長するなんて、それこそ奇跡でも起こらにやならんでしょうに。現にほら、あいつらは3人とも度が過ぎるプライドなんてもんのせいで、どうしようもありやしない」

「まあ、古い文献を遡れば我等が神々も大概だしな、何か下らない理由があるのかもしれない。それはともかく、やはり難しいか」

「ええ、いくらズバ抜けた素質を持って生まれたと言っても、言っちゃあ何ですが、陛下やカタリナ王女、それに俺どころかマグナスにマリアの二人にさえ戦士としちゃあ及びませんよ。実質今のこの宮殿での最高戦力は、今挙げた称号・勇者の5人であって、生まれつきの職業・勇者の3人どもは下手するとS級相当探索者にさえ劣っている可能性も高いですね」

そう言ってジルドレイは更にレベルが99まで上がるのだって確定しているっていうのに未だにあのレベルの低さ、それもこれも生まれた時に職業・勇者と判明した事に狂喜した親の教育の所為だと

愚痴を零す。アルス王は溜息を吐く。

「逆にカタリナ王女、なんですかあの化物は。女の身で18才で出奔して、たった5年で勇者としての称号を得て帰って来るわ、能力値だけなら陛下すら超えてるわ。経験の差でまだ何とか俺の方が戦いでは上手ですが、そう遠くない内に俺でさえ勝てなくなりそうな勢いなんです、いったいどんな育て方をしたんですか？」

「それは喜ばいいところなのか、それとも怒るべきところなのか？」

「まあ、喜んでいてくださいよ。間違いなくカタリナ王女は本物だ、あの3人とは格が違う」

「これはもう、今回の会合で集まる面子に刺激を受けて、急に目を覚ましてくれることにでも期待するしかないか？」

「そのぐらいじゃないんですかねえ。ヤンもエミリーもライバンも、一度外の奴等に手痛くやられて世間というものを知らなきゃどうしようもないんじゃないかと。……ただ手痛くやられすぎて再起不能になってもらうのも困りますが」

2人はなんとか3人の職業・勇者の扱いについて話し合う、邪神復活の兆しがある今彼ら3人が切り札である事は間違い無いのだから。そう世界は未だ邪神を殺した男の転生を、“前期・対邪神殲滅兵器”“特性・天才”という存在を知らずにいた。

その日スレイは日頃の礼代わりにリリアと共に都市をデートしていた。デートコースの選択はリリアに委ね、スレイは財布役に終始する。都市を回り楽しみ、そして現在とある装飾店。展示された装飾品の数々に紛れ魔法のアイテムが混ざっていた。値段もかなり安い。スレイはリリアに尋ねる。

「リリア、ここはどういう店なんだ？」

「あ、気がついた？この店主のおじさんんだけど、少し前までは探索者をやってたね。でも夢は自分の店を持って自分の作った装飾品を売るっていう、職人希望の探索者さんだったのよ。そうして

少し前の探索で、資金も溜まったのでお店を始めたらしいんだけど。自分の作った装飾品を売るついでに、探索者時代に集めたもう必要の無いアイテムも処分目的に一緒に売りに出して、かなり安くても得なのよね。店を開いたばかりでまだお客さんも少ないから、結構な穴場なのよ、このお店」

納得しつつ、リリアの情報通っぷりに、そういえば自前の情報網を持っているなどとも言っていたな、と案外情報屋が天職なのではないかと考える。と、突然奇声が上がった。

「あゝゝゝ!! 貴様!! あの時、何故またリリアさんと一緒に前がいる!？」

そこにはあのダグという男がいた。取り巻き5人も引き連れている。頭を押さえるスレイにどうでも良さそうなリリア。

「何故と言われれば、デートしていたからだが？」

「リリアさん、貴女ともあろう人が、何故このような者とデートなど!？」

「別に、私が誰と一緒に何をしてようと私の勝手でしょ? あなたには全く関係の無いことよ」

「何をおっしゃるのですか? 貴女はいずれ私の妻となる方だ、その貴女が他の男とデートだなどと、黙っていられる筈が無いでしょう」

「あら? 私が何時貴方の妻になるなんて決まったのかしら? 以前貴方の父親の公爵様を通してされた求婚には、丁重にお断りの返事をお父様がしていたはずですけど」

「ハハハッ、面白い冗談を仰る。建国以来の伝統ある我が公爵家に断りの返事など、いくら照れ隠しとはいえ、笑えませんよりリリアさん」

「現に以前騒ぎを起こした時、あなたのお父様である公爵様は、あなたの馬鹿な行いにお怒りになられて、暫く部屋に軟禁されたと聞いているけれど」

「何故ですか!?! 何故私が駄目で、その冴えない男ならいいと言うのですか!?!? その男が最近“黒刃”などと呼ばれて調子に乗

っている探索者だからですか！？それならほら、私も最近探索者になりましたよ！Lvだって着実に上がっているし初級職としては最高位の騎士になりました！その男は剣士職なのでしょう！？私ならいずれはその男だって超えてみせます！！」

探索者カードには確かにダグの名前が記され、Lv16、職業…騎士と書かれている。

「ふう、馬鹿ねえ。そんな物見せられても、どうせ貴方がそれだけのLvになったのは、後ろの人達とパーティを組んで経験値を分けてもらっていたのでしょうか？」

言葉に詰まるダグにひたすら冷たい表情で探索者なんて関係無いと言い放つリリア。

「私はね、あなたの事別に嫌いではないわよ？」

「そ、それでは私とッ……」

「でもね好きでもないの、言ってしまうえば無関心、貴方のことなんてどうでもいいのよ。貴方は何か勘違いしているみたいだけれど、想いの価値は互いに等価ではないのよ？想いを寄せたから相手が当然答えてくれるなんて、そんな事はないのよ」

永久凍土の如く冷たく硬い言葉に凍りつくダグに追い討ちを掛けるよう、リリアはスレイが好きだと、多分始めてみた時から一目惚れだと、貴方のおかげで気付けたと言い放つ。

「何故、何故その男なのですか？せめて理由だけでも」

「一目惚れに理由なんか無いわ」

「も、もういいッ、貴女のこととはどのような手段を使ってもいずれ必ず手に入れて見せる！！それより今は邪魔なその男を排除しなければッ！お前達、やってしまえ」

自らを取囲む男達にスレイは忠告する。

「どうしてお前達がそこまであの男に従うのかは分からないが、もう止めにしないか？実力差が分からない訳じゃあるまい」

黙って近づいて来る男達に大した忠誠心だ、仕える相手を間違えたなと告げる。と、何の予備動作無しにスウッと輪から抜け出す。

全員スレイを見失う。そのまま5人はあっさりとスレイに気絶させられていた。

「ひ、ひいっ?!」

ダグが怯えて逃げていくと同時に、店の奥から店主が現れ、店内に倒れた男達を外へと放り出し、水を浴びせて追い払った。リリアが謝罪する。

「店内で騒がしくしてしまい申し訳ありません」

「お客様は神様だ。お前達は確かに客であちらは違った、ただそれだけの事だ。何も気にすることは無い」

そして店主はポンとリリアの頭に手を置いて、まあ頑張れ、と激励した。リリアの頬は赤く染まる。店主は、店の奥へと戻って行った。リリアはスレイに告げる。

「スレイくん、後で話があるの。この後スレイくんの部屋に行ってもいいかしら？」

「わかった。先程の話だな？」

「ええ。それじゃあ、この話は後にしましょうか？」

「そうだな、丁度良い品物も見つけた事だしな」

「指輪？それがどうかしたの？」

「いやなに、リリアにはこの都市に来てから色々世話になっているからな、そのお礼にプレゼントをしようと思ってな。この指輪にかかっている魔法は護身用の物で、自動で発動してかなりの長時間に亘って結界でリリアのことを守ってくれるはずだ、それともう一つ」

今度は目の前に二つの、これもまた明らかに魔法の品と分かる首飾りを掲げるスレイ。

「これは通信用の2個セットの首飾りだ、互いに首飾りをかけた者同士なら、念じるだけでかなりの遠距離まで念話が通じるようになっている。リリアが何か危険な目に遭った時、指輪の結界の中から俺に念話で助けを求めてくれればいつでも俺が助けに行こう」

「えっ？」

「会計を頼む」

「よくこれらのアクセサリの効果が分かったな」

「まあ、昔から色々な本を読み漁っていたからな」

「しかも、女の子へのプレゼントでこれらの品物を選ぶセンスには脱帽だ、かなりのポイントが稼げるだろう。お前、その歳でよくもまあそこまで気が利くな、よほど女慣れしてるのか？」

「まあ、散々幼馴染達に教育されたからな」

「ふむ、そうか」

「それじゃあ店主、首飾りの一つは俺がこの場で身につけるからそのまま、他二つの商品を包装してくれないか？」

そのまま渡された首飾りを身につけ、包装された品を受け取ったスレイは料金を支払う、安いとは言え魔法の品、所持金は一気に減っていた。そのままリリアの元へ戻ると包みを渡すスレイ、リリアは満面の笑みで礼を言う。

「ありがとう、スレイくん。今日からすぐに身につけるから、何かあったら助けに来てね」

「ああ、わかった」

リリアの笑みに、やはり女の笑みには勝てないかと、スレイは笑った。

宿のスレイの部屋で2人きりになるとリリアが落ち着き無く辺りを見回す。

「お、男の子の生活してる部屋の割には綺麗に整理されてるわね」

「まあ、物が少ないからな」

「何を笑ってるのよ」

「まあ、リリアが俺に話を切り出せないで緊張しているところにな？」

「し、仕方無いでしょう。こういうの全く慣れてないんだもの」

「すまない、先程の話だが、その話の前に言っておきたいことがある」

そして真剣な表情のまま自らの女性関係について話すスレイ、が

リリアは拍子抜けしたような表情だ。

「なんだ、それだけ？」

「それだけ、とは？かなり重大なことだと思うんだが」

「そのぐらいのことならもうとくに気付いてるわよ。全員じゃないと思うけど、貴方と相手の態度を見れば何となくね」

「リリアはそれで構わないのか？」

「その話は、まず私の話をすませてからよね？それじゃあ言います、私ことリリア・アルメリアはスレイくんの事が好きです、始めて見た時から一目惚れでした、私と付き合ってください」

言った後、脱力し倒れそうになるリリア。

「おい、大丈夫か？」

「っはあーっ、緊張したー」

そしてリリアは答えを求める。

「それでスレイくん返事は？」

「俺は複数人の女性を好きだと言って、しかも関係まで持っている。いや、それだけじゃない。この都市に来る前の過去にまで遡れば、俺が関係を持って責任を取らなければいけないような女性はかなり多数存在する。リリアは本当にそんな俺でいいのか？」

「ああ、そのことね、すっかり忘れてた。それじゃあ言うね、全然構わないわそんな事。だって私、自分の相手としてスレイくんしか考えられないし、スレイくんが私とも真剣に付き合ってくれるならそれで構わない」

「どうしてそこまで？」

「それだけ、スレイ君が魅力的ってことよ。私のお父様だって、あれで妾を5人くらい持つてるのよ？たまたま私の母親は正妻だったけど、お父様は全員を平等に愛しているわ。それでね、あのね、私が聞きたい答えは私と真剣に付き合ってくれるか、私のことが好きかどうかだけなのよね。どうなのスレイくん？」

「それはリリアのことは好きだ、真剣に付き合いたいとも思ってる、だが……」

「はい、そこでストップ！私の聞きたい言葉はもう聞けたわ。それ以上の言い訳は必要無い、私を含めて全員を平等に真剣に愛してくれるならそれで構わない。だから、ね」

「絶対に死なないで、それだけが私が貴方に願うことよ」

口付け、リリアを押し倒すスレイ。

「リリア、悪いがもう止まらない、お前が欲しい。その気持ちが強くてもう限界だ、いいか？」

「いいか？って言ったってもう止まらないんでしょう？聞く意味が無いんじゃない？ただ、私はそこまで覚悟してここに来たつもりだから構わないわ。ただ、なるべく優しくしてね？」

そのリリアの言葉に、スレイはリリアの初めてを存分に味わい尽くすのだった。

「こりゃ、何をへばつとるか、情けない」

十代の少年が、倒れるケリーに水を掛け上から覗き込んでいた。しかし彼は既に齢84だ。老人、クロウは何度もケリーを気絶させてはこうやって叩き起こすと繰り返していた。弟子入りしたといえこんなスパルタ教育は予想外だ。なんとか治癒魔法で回復する、おかげで治癒魔法の腕も飛躍的に上がっていた。クロウ“刀神”の名を冠された元SS級相当探索者の扱きはまだ終らない。

「それじゃあ気絶前は、1000本勝負の内まだ794本しか終わっていなかったから、あと206本、続きをするぞい」

容赦無い無茶苦茶な内容、ただひたすらに打ち合いを続けるそんな鍛錬、クロウから一本取れれば免許皆伝だという無理な条件。クロウは手加減し、助言もしてくれる、がそれを実践してみせろとは無理がある。だいたいステータス差がありすぎる。クロウのステータスは規格外だ。クロウの息子で現在最も有名なSS級相当探索者鬼刃ノブツナのステータスも資料で見た事があるが同じく規格外な代物だった。化物親子め、と悪態を吐く。ケリー自身はS級相当探索者では上位だと自負があるが、目の前の化け物からハンデ付きで

も一本取れるとは思えない。しかも慣れない二刀流を扱わされている。絶対二刀を使わねばならない訳ではない、両手で同じだけ剣を使える事が目的だ、その上で武器があり片手が空いているなら勿体無いから両手で武器を使えと言う。以前片手の剣を放り投げ、一本の剣を両手で握り全力の一撃を放った際は褒められた、がそんな邪道を用いても掠る事すらできないのに悔しさは倍増だ。速成の為、日常でもケリーは全て左手を使わされている。治癒魔法の使用は上達を速めるのに役立つから推奨されていた。そして夜は型稽古だ。型とその意味を徹底的に叩き込まれ毎晩徹底的に繰り返す。意味を理解して型を極めれば応用などいくらでも利くらしい。このような日々が始まりおよそ1ヶ月。切っ掛けは姉マリーニアの占術での始まりの迷宮の事件の現場検証だ。最初はそのような事件に姉を使う理由が分らなかった。邪神が関係すると聞いたが眉唾だと思っていた。しかし姉は確かに邪神の力を感じ衝撃で気絶した。目を覚ました姉の顔は蒼白だった。そんな姉とケリーにギルドマスターは世間的には死亡している元SS級相当探索者刀神クロウと白姫サクヤ夫妻への弟子入りと表舞台への再びの誘いという任務を与えられたのである。明日で弟子入り期間は終わる。再びの現役復帰の回答を聞かされるのも明日だ。そしてケリーは再びクロウへと打ちかかっていくのだった。

マリーニアは魔法理論をサクヤに習っていた。20歳程の美女であるマリーニアに対しサクヤは十代の美少女に見え、教える者と教わる者が逆に見える。だがサクヤの教える内容は今まで彼女が学んできた魔法理論とは圧倒的にレベルが違った、そしてあらゆる方法を用いて強引に短期間でその内容を詰め込まれている。クロウとは別の意味でスパルタであった。だがマリーニアとサクヤではあまりに能力に差があり、正直心が折れそうになる。唯一サクヤに勝るのは固有の能力である占術ぐらいだろう。しかしサクヤは小剣も扱えばそこらの達人程度のレベルでは無いというのだからデタラメだっ

た。しかし明日までに出来る限りの事は学ばなければならない、また機会があるとは限らないのだから。

「ふふっ」

「あ、あの何か可笑しかったでしょうか？」

「いいえ、そうじゃないわ。ただ家は息子が1人だけで、その息子は刀一筋。そしてお嫁さんも薙刀の扱いが得意の武闘派で、それに孫達が成長する前に私と夫は世間一般には死んだという事にしてこうして隠居しちゃったから、夫と違って誰かに物を教えるというのが始めてなので、ちょっとそれが面白くて」

「え、そうなんですか？サクヤ様ぐらいの方になればそれこそその薫陶を受けたいという人は後を絶たなかったんじゃないんですか？」

「ええ、それはまあそういう人も多かったですけど、若い時分は私も自分の研鑽や魔法の研究に没頭してて断ってばかりだったのでね。なので、貴女が私の始めての、そして唯一の弟子という事になるでしょうね」

緊張を覚えるマリーニアにサクヤは宥めるように寧ろ自分の方が嫉妬していると言う。

「え？サクヤ様が私に嫉妬？」

「そう、あなたの持っている占師の能力はとても得難いものだわ。それに、もう既に“星詠”なんて二つ名を持っているのでしょうか？その方向性を極めれば、その分野では私が遠く及ばないような存在になるでしょうね」

「そ、そんな」

「それに貴女はまだ若いわ、これから色々と経験を積みめば、能力値では測れないような人の力も理解できるようになる筈よ？能力値で勝る相手に勝つ方法だってこの世には色々あるわ、私の初めての愛弟子だもの、貴女の成長には期待しているのよ？」

「は、はい！！期待に応えられるように精一杯頑張ります！！」
そうしてマリーニアはサクヤの教えに没頭するのだった。

結局ケリーはクロウから一本も取れずマリーニアは学ぶべき事を残したまま期限を迎えた。人里離れた山の中、木製の大きな家の中、食卓で2人は同じく席に着く師2人の返事を待つ。と、クロウが細長い布に包まれた物体をケリーに投げ渡す。

「これは？」

「まずは開けてみい」

ケリーが包みを開けると、二振りのディラク刀が入っていた。

「まけにまけて、お主は免許皆伝じゃ。免許皆伝の証にそのヒヒイロカネ製のディラク刀“桜花”と“散葉”をくれてやる」

「し、しかし結局俺はクロウ様から一本も取る事ができませんでした、このような物を貰う資格は……」

「まあ、そう言わずに受け取ってあげてください。こう見えてこの人貴方の事を気に入って認めていますのよ、最近の若い者にしては骨があるって。それに結局息子は自分独自の刀術を編み出して、武器も自分自身の為のシークレットウェポンを自分で入手してしまったので、ある意味クロウの刀術を純粋な意味で継ぐのは貴方という事になりますわ、だから自信を持ってくださいな」

「は、はい！！」

「ふんっ」

今度はサクヤが空中から一冊の書物を取り出しマリーニアに差し出した。

「これは？」

「その書物は、特殊な魔法を使って私の知る限りの魔法理論を全て詰め込んだ物です。空間魔法と文字の圧縮を行い、何時でも私の及ぶ限りの知りたい知識を読む事ができるようになっています。結局全てを伝えきる事はできませんでしたが、貴女は私の唯一の弟子ですわ。その書物を私と思って、これからも精進してくださいな」

「あ、ありがとうございます！」

「それじゃあ、行くぞい」

「え？」

「え？ じゃないじゃろう、え？ じゃ。御主等、当初の目的を忘れてるんじゃないじゃろうな？」

「あ！」

「ようやく思い出しおったか、御主等はゲツシュの坊主に頼まれて、わし等連れ出す為に来たんじゃないじゃろうが」

「そうでした、すみません、あまりの喜びに我を忘れていました」

「それじゃあ、お二人共、探索者ギルドに来てくださるのですか？」

「ええ、昨日の夜にクロウと話し合ってそう決めたわ」

「邪神が出てくる可能性があるとなってはのう、ここで何時までも隠棲決め込んでる訳にもいかないじゃろう。それにまあ、良い機会じゃ。息子の成長も確かめたいし、邪神をただの一部だけとはいえ退けたという小僧の事も気になるしのう」

「それに、久しぶりに孫達にも会いたいですしね。再び表に出る良い機会だと思ったのですよ」

伝説に謳われる“刀神”が、再び歴史の表舞台に立った、それが顛末である。

次の日の早朝、リリアは血の付いたシーツを恥ずかしそうに洗いそのまま帰って行った。フレイヤは全て分かっているような笑みを見せていたが。スレイはふと関係を持った女性達の事を考える。目的を果たして、責任がある状態で都市を離れる事ができるのか自問する。またこの都市以外にも責任ある女性は居る。不誠実さに苦笑いしながら、魅力的な女性に好かれる事は喜んでいた。ろくでもない男だと自覚する。ただ全ての女性に対し本気だというのだけは言い切れた。

スレイは都市を一人で歩いていた。たまには一人になりたい時もある。贅沢な話だが、そんな気分で、その状況を満喫していた。と、都市の真っ只中に怒声が響きわたる。

「いたか！？」

「いや、こっちの道にはいなかった、市民への聞き込みはどうなってる!？」

「何件か怪しいローブを着てフードを被った人物の目撃情報はありますが、流石にそんな相手には誰も関わりたいとは思わないように、せいぜいそのぐらいしか」

「くそっ、早く見つけないと、あの人の性格上どんな騒動を起こすか分からないぞ、早く見つけ出すんだ!」

クロスメリア王国騎士団である、これは珍しい事だ、独立志向が強いこの都市に王国の騎士が入ってくる事は滅多に無い、探索者ギルドとの交渉が面倒だからだ。これだけ入り込んできているとなると、余程の大事なのだろう。が、気にせずスレイは通り過ぎる、と。

「そこの方、危ないですからどきなさい!」

頭上から女性が一人落ちてくる、近くの建物から飛び降りて来たのだろう。よほど自分の身体能力に自信があるらしい。が、身体は自然と動いていた。着地しようとした女性の足を払う。

「え?」

女性を強引にお姫様抱っこの形で受け止めた。呆然とした女性の顔が覗く。豪華さをくり抜いたらこうなるだろうという絶世の美女だった。と美女はすさまじい勢いで顔を赤く染める。

「な、何をなさるんですの!!!」

「いや、美女が上から降ってきたもので受け止めてみた」

「うふふふふっ、貴方面白い子ですわね」

上機嫌な様子になった美女は、自らをエスコートするように言い放つのだった。

「それで、あんたの名前は?」

「そうねえ、リナと呼ぶことを許してあげるわ。それじゃあ貴方のお名前は?」

「スレイだ」

「そう、スレイって言うのね。でもさっきの、それだけ若いのに相

当でできるのね。わたくしをあのようにしたのは貴方が初めてよ」

意味ありげな意味深な言葉、やたらと親しげな態度、腕を組み胸もわざと押し付けている。周囲から嫉妬の視線が集まるがそれは気にならず、ただ親しげな態度に困惑する。

「うふふ、貴方誇っても良くってよ。わたくしをあのように驚かせたのなんて、お父様やジル以外じゃ貴方が始めてだもの」

「それで、どんな場所の案内がご所望なんだ？」

「そうですね。なるべくならここ最近、半年ぐらいの間にできたような新しいお店がいいですわ。わたくしも半年前まではここに居ましたのよ？」

「そうだな、俺も約1ヵ月前に来たばかりなので、この都市のことはまだ良く分かっていないんだが」

「あら？そんなんですの？てつきりその年齢では珍しい、熟練した探索者なのかと思ってましたわ」

「なぜそう思ったんだ？」

「そうですね。なんと言いますか、風格というかプレッシャーとというか、そういう物が一般の人と全然違ってて、大きな力を感じるんですわ。結構正確ですよ、わたくしのこの勘。そうですね、貴方のその風体からして探索者なのは間違ってますんわよね？カードを見せて頂いてよろしいかしら？」

「悪いが、結構秘匿したい部分などもあってな。名前、L V、年齢、職業だけならかまわないが」。

「わかりましたわ。確かに出会ったばかりの相手に、そこまで見せたりできませんわよね。それでは見せて頂けますかしら？」

スレイはカードを取り出して見せた。

「えっ!？」

驚愕の表情を浮かべるリナ。

「あ、貴方！たった約1ヵ月で43までL Vを上げましたの!?! いったいどれだけの無茶をしてきたの!?!」

「確かに相当な無茶はしてきたと思うが、そんなに珍しい事か？俺

の友人達はエルシア学園の卒業生だが、もともとのLvが15くらいだったのが、この約1ヵ月で40ぐらいになっているぞ」

「それはそれで確かに早い成長ですけど、まだLv40くらいまでなら納得できますわ。けれど、そのLv40を越えているということが問題ですよ。通常Lv40を越えた辺りからLvを上げるのは難しくなってきたて、10上げるのに年単位という事も珍しくありませんのに。わたくしでさえ……」

「あんたでさえ、なんなんだ？」

「いいえ、なんでもありませんわ。とにかくそれだけあなたの成長速度は異常だと言うことですわ。年齢だって18だなんて、物腰が落ち着いているのでつきりもっと上、わたくしと同じくらいだと思っていましたわ。だいたい年上の人間に対する口の利き方がなっていないよ」

「あいにく、相手が誰であっても、基本的に態度は変えないことにしている。不愉快だったらすまないが、無理に俺と関わらない方がいいんじゃないか？」

「本当に、口が減りませんわね。ですがまあ、無理に取り繕った言葉よりはずっとマシですわ。それじゃあ話を戻しますけれど、この都市の最近の人気スポットや新しくできたお店なんかはわかりませんか？」

「新しくできた店舗やらは把握できていないが、最近の人気スポットなら、だいたい把握しているぞ。友人達や知り合いと一緒にいくことは多いからな」

「わたくしを案内して楽しませてくださいな、ちょっと変わった探索者さん」

「わかりました、それではご案内致しましょう、お姫様？」

一瞬、リナがビクリと反応するも、すぐに元に戻る、そして2人の都市巡りが始まった。

知る限りの流行・人気スポットを見て回った後、リナは鋭くスレ

イを睨んでいた。

「なんだ？さっきから。言いたいことがあるならさっさと行ってくれないか？」

「いえ、良くこんなデート向きな人気スポットばかり知っていたものだと思ひまして、貴方、実は相当な女つたらしなんじゃないかって？」

「いや、そんなことは無いと思うが」

「やっと見つけましたよ姫さん。全くあんたってやつぁ、いつもいつも人に苦労させてくれる。さぁ、とっとと帰りますよ」

と現れる40代程の壮年の男、男はリナに向い手を伸ばすもスレイが横から掴み止めた。

「なんですか姫様、この小僧は？ヤンチャをするのはいいですが、あんまり他人を巻き込まないようにして下さいよ。おい、小僧、邪魔をするな。俺はこれからこのお転婆姫様を連れて帰らなきゃいけないんだからな」

「あんた達がどういう関係かは知らないが、ちょっと過保護すぎるんじゃないか？こいつだってちゃんと帰るべき時には自分で帰るだろう。保護者が必要な少女と呼ぶにはちょっとばかり臺が立ってる気がするんだが」

「なんですって！？」

「あははははっ、こりゃあいい、最高だ！！」

リナが怒りの表情を浮かべ、男が大笑いする。だが、と続ける。

「悪いがお姫様の我侂と、ヤンチャな坊主の相手をしている暇は無くてな、少し眠ってろ」

「ちよっと、ジル、お止めなさい！」

ジルの放った一撃を逆に捻りジルの体勢を崩すスレイ、慌ててジルは体勢を立て直す。

「小僧、お前何もんだ？」

「ちよっと待ちなさいジル、その子はわたくしが都市を案内させただけの子よ、何を警戒しているのか知らないけどお止めなさい！」

「スレイという者だ、今は一介の探索者をやっている」

ジルが剣を抜き、合わせスレイもアスラを抜く。

「シークレットウェポンのディラク刀だど？ しかもその禍々しい妖気、本気で何もんだお前さん」

「だから、ただの一介の探索者だと言っているだろう」

そうして一瞬、2人は交差した。

「ちっ、浅いか」

「くっ」

一方的に傷ついたジルが切り札の狂化を発動しようとしたその時。

「っ！？」

「！？」

巨大なハルバードが振り下ろされ慌てて飛びのく二人。ハルバードは十字の巨大なクレーターを作り、二人の動きを止めていた。

「お止めなさいと言っているでしょう」

リナはハルバードを肩にかつぐ、恐らくは魔法の袋を使ったのだろう、普段使う道具の思わぬその利便性にスレイは驚きを感じる。

「もう、わかったわ。ジル、わたくしは今日はこれで帰りますから剣を収めなさいな。それとスレイ、無謀なのはあまり感心しませんわよ？」

「スレイって言ったなお前さん、決着はまた会った時に付けるとしようや」

「ああわかった、それで構わない」

スレイはあくまで静かに言葉を返すと、リナに向き直る。

「あまりお転婆なのは止めておくんだなお姫様？ それではな、今日はそれなりに楽しかった」

その場から立ち去ると、スレイは言葉とは裏腹に意識せず愉しげに笑いながら呟いた。

「あれが、近衛隊隊長・姫勇者カタリナとそのシークレットウェポン、究極級、アルデマ聖十字斧槍ストライク。ホーリー・クロスそれに近衛隊副隊長・狂風ジルドレイとそのシークレットウェポン、究極級、アルデマ風剣ミストラル、

か。まったく、今日はとんだ厄日だったな」

「ねえ、ジル。貴方が一方的に怪我をするなんて手加減したのかしら？」

「いや、とんでもねえ、本気も本気でしたさ。思わず切り札の一つ狂化を使いそうになったぐらいでさあ。流石にミストラルの能力までは使う気はありませんでしたが、あいつぁ間違いない本物だ。あの年頃であれば、本気でいったい何者なんで？」

「ただの一介の探索者だそうですわ、この都市に来てから約1ヵ月だっていう、ね。ちなみにLvは43で中級職の剣鬼でしたわ、能力値までは見せてもらえませんでしたけど。でも、そう、ジルが本気でやって、ジルに傷を付けたんですの」

「い、1ヵ月でLv43ってのあどんなでたらめな奴ですか！しかもLv43でLv99の俺に傷をつけるたあ……。うちの職業…勇者どもにもちったあ見習わせたいですな」

そう言って、ジルドレイは明らかに先程の青年よりレベルは上でありながら、自らに傷一つ付けられない問題児3人を思い出し溜息を吐く。

「しかし俺は姫様以上に化物らしい人間を初めて見ましたよ。しかも今の姫様の態度、どうやらついに遅い春がやってきたみたいですな」

にやにやと笑うジルドレイ。

「まあ、それも当然ですか。切り札を使えば今はまだ負ける気はしません、あれがそのまま成長したらどんな化物になるやら、楽しみのような恐いような。年齢は少々若すぎる気はしますが、とかむしろ姫様が行き遅れなんです、それなりに年齢が近くて姫様に釣り合いが取れる相手なんて始めてですからねえ」

「遅い春？化物？行き遅れ？そう、あなたはわたくしのことそんな目で見ていたんですのね？覚悟はいいかしら」

「ち、ちよっと待っ」

そうして、人気の無い公園に男の悲鳴が響き渡るのだった。

中央の国家群のとある街道に3人の少女が佇み傍には小さな白い竜が浮かび周囲には野盗の群れが倒れ付していた。3人と一匹は言い争う。話の中身は3人の少女真紀・セリカ・出雲は日本からアラストリアという異世界に勇者として呼ばれ、魔王を倒し、一人の我侖でその魔王より強敵が居る世界を望み、二人がそれに巻き込まれ、互いに文句を言い合っている様だ。下級邪神にも匹敵する自らの力をこの世界ならと誇示しようとする白い小竜フルールだが、この世界に渡るのに力を使い果たし、結局それは果たされない。しょんぼりしながらも、野盗の一人が持つ探索者カードを見せ、この世界の探索者システムについて説明する。手抜きของเกมというセリカの言葉に賛成しつつ、邪神と戦う為作られた急造の成長システムだから仕方無い事を説明し、探索者と呼ばれるのは神々が作り上げた効率良い成長の為の迷宮群である事も説明。またランクの不自然さについてでも神々が自らを至高のEX級に最初に定めた結果、その枠を超えた者が出てきてしまった所為でEX+や規定不能などが生まれた事。そして神々と邪神についての説明をする。また職業システムについてもセリカは手抜きと感じるが、これで圧倒的な個に対抗する為には効率的なシステムなのだと諭す。そして自らが総合的にSS級相当という事で、EX級の存在について知ろうとする真紀に、フルールはSS級相当の人間でも一芸に秀で、3人以上の者も居るし、とりあえずは迷宮都市に行こうと告げる。ただ、最後に一つ、徹底的なまでのその脅威を説明し、邪神にだけは手を出さないように告げる。流石に息を呑み頷く3人。そして異分子がこの世界ヴェスタに紛れ込んだのだった。

【???】 “???” ???

異分子の混入に気付くも気にしない邪神達、クライスターの解放は終わり中級邪神の解放に向かうロドリゲスは一番最初に欲望の

邪神ディザスターを解放していた事を告げる、スレイの前世であるオメガに仕えた裏切りの邪神の解放に疑問を呈するクライスターに、ロドリゲスは舞台を整えているのだと告げる。また他2柱の上級邪神は自ら封印の解放を試みているようだし、最上級邪神イグナートに到っては、自らに相応しい敵の到来を待ち、大人しく何時でも破れる封印の中に居るだけだし、これで楽しい遊戯が始まる、楽しみで仕方無いと告げ、去る。クライスターは思惑に乗るのは気に入らないが仕方無い、精々派手に踊ってやるかと告げるのだった。

第3章ダイジェスト

【欲望の迷宮】地下49階

未知迷宮であるこの迷宮をとある探索者のパーティが探索していた。現在宝箱を前にリーダーであるホークという男が待ちきれずに宝箱の罫の解除をする仲間を急かしている。そのリーダーらしからぬ男のせっかちさに苦笑するパーティメンバー達。そして、宝箱が開かれる、そこにはこの迷宮の欲望の名に相応しい莫大な量の金銀財宝が眠っていた。彼ら程のパーティにしてみても今回の探索は当たり前と言っているだろう。ここ最近の探索では間違いなく一番の成果である。そしてホークの合図の下、メンバーは財宝を魔法の袋へと仕舞っていくのだった。

探索の続きをどうするか尋ねる小妖精のリリィ、それにホークは地下49階まで来たのだから地下50階までは探索し切ろうと告げる。ボスモンスターの出現に懸念を示すサブリーダーの獅子のライカンスロープであるオグマ、それにだからこそ居るのなら倒してしまおうとホークは答えた。そしてじゃれ合う仲間達、オグマはあくまで冷静に未知迷宮であるこの迷宮で油断すれば足下を掬われる可能性を示唆する。だがホークはパーティのメンバーを見渡して、俺達6人全員がS級相当探索者のパーティ鷹の目団にどんな方が一があると言うんだ、とパーティに対する信頼と自信を以って笑い告げる。そして笑いながらパーティのメンバーを敢えて自慢するように示していく。サブリーダーである獅子王オグマ、パーティ内の最大戦力でSS級相当探索者になるのも近いと言われ、狂化と獣化の併用狂獣化を使いこなし、その状態の身体能力だけなら並のSS級相当探索者を軽く越えろとさえ言われる覇戦士である獅子のライカンスロープ。次にムードメーカーにして魔法要員である風の妖精リリィ、そのサイズとすれば異常な程に筋力と体力もあり、妖精に付き

まとう幸運を呼ぶなどという噂に相応しくSSS級の運勢を持ったまさに幸運の妖精と言える魔賢師たる小妖精、パーティ唯一の魔術師という事を考えればパーティに必須の人材と言えるだろう。次のドワーフの聖戦士ダイン、気は優しくて器用で力持ち、魔法の関係無い罫の解除は全て彼の手に委ねられ、彼ら鷹の目団は一度も罫に引っ掛かった事は無い、パーティの装備の整備も全て行うまさに縁の下の力持ちの好青年だ。そしてお色気担当剣聖レイナと言われた人間の女性は、誰がお色気担当かと突っ込みを入れつつも、確かに軽装気味で肌の露出が多かった。次にパーティの弟役で皆に可愛がられる最年少の聖闘士クルトと言われた人間の青年も、誰が弟役で誰が可愛がられてる、と、文句を言うが、確かにそういうポジションであり、特にエルシア学園の卒業生として後輩と言うことで、レイナとは腐れ縁で、レイナにからかわれる事が多かった。最後にホークは大仰に真打登場と、告げる、この鷹の目団のリーダーにしていずれは大陸史に名を残す男、この俺ホーク、と。パーティメンバーは苦笑いだ。大仰な言い草に対しS級相当探索者として標準的な能力値の、人間の神騎士だった。だがこれだけのメンバーを纏め上げている男だ。実際に人望もあり、能力値では図れない何かを持っているのだろう。これが迷宮都市でも相当に名の売れたパーティ鷹の目団であった。

【欲望の迷宮】地下50階

迷宮を行く一行、途中レイスが襲い掛かって来るが、やはり圧倒的なオグマが霊体を“物理的”に切り裂いて、リリィが浄化の風の魔法で昇天させ、一気に片付けていく。他の4人は手持ち無沙汰だ。先程まではパーティの連携を重視してたが、ボス戦への体力温存の為、オグマは一人敵を蹴散らしていた。リーダーのホークや他のメンバーも了承済だ。そして最奥の広間へと辿り着くのだった。

広間には異界の女神である美女EX級ヴァナディースが待ち構え

ていた。鷹の目団の団員はすぐさま身構える、EX級、しかも異界の神と対峙する事など初めての事だ。ヴァナディースは蔑んだ目で鷹の目団を見た。そして蔑みの言葉を綴る。そしてあっさり誘惑の魔法に引っ掛かりホークとクルトとダインが突っ込んでいく。リリィが魔法の水を浴びせ正気に返す。そして心胆寒からしめるヴァナディースの言葉に正気に返った3人は青ざめる。そしてパーティを分断するかのように軽く強大な威力の光球を投げつけるヴァナディースだが意図を察したオグマがレイナとリリィを運び合流を果たした。あまりにも圧倒的な力にオグマは理性を失う狂獣化を決意し、他5人を引かせる。ただ一人で自分と戦おうとするオグマに面白そうに嗤うヴァナディース。そしてオグマは狂獣化を使った。完全なる獅子の姿となり世界の法則すら狂わせるオグマ。そして光速の数倍の速度域へと突入し時系列の束縛から外れ世界から隔離される。まったくの同時に神気で同等の速度域へと突入し世界から隔離されるヴァナディース。オグマの攻撃をあっさりといなし、軽く突き出した手でその胴体を貫いていた。そして通常の世界へと回帰する。鷹の目団のメンバーは目の前に重傷で倒れ付すオグマに駆け寄り、慌てて回復魔法を掛け、ヴァナディースを睨み付ける。逃げるよう告げるオグマ。だがホークはオグマを傷つけられた事に怒りを感じ、戦闘の継続を選択した。そしてリーダーらしい決断力であっさりと桁外れに高い最上級の加速薬の使用をパーティメンバーに命じる。そしてオグマ以外の全員が加速薬を飲み、光速の数倍の速度域へと突入し、合わせてヴァナディースも自然と神気で同等の速度域へと加速し、時系列から外れ、世界から隔離された。が、ヴァナディースはもはや飽きていた、先程のオグマと変わらない速度域、目新しさが無い。パーティの連携でどうかしようとしているらしい鷹の目団だが、ヴァナディースはもう付き合う気は無かった。そして神気を以ってもう一段階速度域を引き上げる。光速の数十倍の速度域。静止した鷹の目団を冷たい目で眺めると、そのまま腕を振った衝撃波で吹き飛ばした。そして通常の世界へと回帰する。鷹の目団の

メンバーは全員が倒れ付し、その現状を理解できないでいるようだった。そしてそのまま冷たい言葉と共に、無数の光球を浮かべ鷹の目団を葬り去ろうとするヴァナディース。と、その首の半分が無くなっていた。全員がただ驚愕する中、広間の中央に蒼く峻烈な美麗な狼が出現していた。

『き、貴様。なぜ!?!』

ヴァナディースの驚愕を意にも介さず大きく口を開く。周囲に何も漏れる事のない完全な指向性の咆哮、しかも空気では無くもっとう何かを振動させる。そして一瞬でヴァナディースは消滅していた。呆然とする鷹の目団を興味無さげに見やると、入り口を見やり、そのまま蒼い狼は姿を消していた。何も理解できぬままに鷹の目団は命を拾っていた。

迷宮都市の郊外、真夜中、拓けた草原。スレイは無数の全てが違う属性の魔法の光球を浮かべ、ゆったりと双刀を振るっていた。と、突然スレイは虚空に声を掛ける、そして姿を現す蒼い美しい毛並みの狼。気付いていたか、そしてその魂の波動間違い無いようだ。という狼の言葉に苦笑して言い返すスレイ。そもそも自分達レベルになれば認識外だろうと自らに危害を加え得る物があれば反応し、そしてその対象に合わせた速度に自動的に加速してしまうだろうと。そう、既にスレイと蒼い狼は光速の数十倍の速度域に突入し時系列の束縛から外れ世界から隔離されていた。その中での先程の鍛錬、おかげでこの有様だと足下の汗で出来た水溜りを示す。しかし態々今の俺の限界の速度域に合わせてくれるとは親切な事だなディザスター、と苦々しい表情で言うスレイに、蒼い狼、欲望の邪神ディザスターは覚えているのか?!?と反応を示す。それに“識ってしまった”のか“思い出した”のか区別が付かないと答えるスレイ。そうかと告げ、ケジメの為に試させてもらうぞと告げたディザスター、そして戦いが始まる。圧倒的で超絶的な戦闘。常識を超えたその中で、スレイは最近自覚した自らの野望を、強大な欲望を曝け出す。

圧倒的な欲望が流れ込み、力が増幅するのを感じ驚くディザスター。そして、負けを認め服従を誓うディザスター。スレイは手加減して何と言うと、相手が自分より強かろうが勝たなきゃ納得がいかないと告げる。そんなスレイを笑い、もう主とは戦えないから勘弁してくれと告げるディザスターに、渋々と矛先を収めるスレイ。そんなスレイに曝け出した欲望の内、最強への野望は昔からの物だが、女に対する野望は、前世のスレイはミューズに一途だった筈だがと疑問を投げかけるディザスター。それは魂に混ざったミューズの魂の影響だと、ミューズの魂の波動でモテモテでミューズ万歳だな、と告げるスレイに。ミューズの魂の影響と言ってもミューズは純潔を主に捧げ、主一筋の女だったが、と言うディザスター。スレイは自らの魂も特別製だし、転生の際に完全に混ざって化学反応して突然変異したと告げる。疑問の視線を向けるディザスターにスレイはそっぽを向いた。まあ良いかとディザスターはスレイに座るように告げる。そしてスレイの脚の上に乗るディザスター。撫でるように告げられ、そのまま撫でるスレイ。そしてフレイヤの宿はペットの宿泊は有りだったかと考える。そうして会話を交わし他の邪神の事について考える内に夜は明けた。

結論から言うと問題は無かった、元々探索者には魔物使いも居るからだ。だがディザスターが酷く目立つ事には変わり無かったが。ともあれ、いずれギルドマスターにはタイミングを図って邪神の事について話し相談しなければならないと思うのだった。

刀神クロウ一行は迷宮都市を目指していた。と街道の先に5人の男に囲まれる3人の美少女が居る。傍に白い小竜が浮かんでいる。あの中に魔物使いが居るのだろう。竜種を従えるなら相当な上級探索者と予想する。と近づく間に男達が怒り出し少女達に食って掛る。剣呑な雰囲気男らしい正義感と自己顕示欲を發揮したケリーが走り出す。

「あ、こりゃっ」

クロウが注意の声を上げるが気にせずケリーは集団の只中に割って入った。

真紀は面倒だと溜息を吐いていた。フルールの案内で迷宮都市を目指していた所、5人の男達に呼び止められた。真紀達の美貌に釣られたナンパらしい。自分達はA級相当探索者のパーティで“暁の光”というグループに属していて、と自慢し出し、フルールに目を付け魔物使いが居るのか、とグループに勧誘までしてくる。どこの世界でも人はつるむものらしい。探索者もパーティを作りパーティが集まってグループを作るようだ。グループ内で協力し迷宮探索を進める、グループ同士いがみ合うなど、実に分かり易い。尤もグループに属さないパーティそれどころかソロで潜るような探索者も相居るらしい、ソロは流石に珍しいようだが。興味が無い真紀はどうやって男達をぶちのめすか考える。短気なのでぶち切れる寸前だ。出雲は我関せずだし、セリカは真紀と同じく実力行使に出る寸前だった。いや既に罵詈雑言を真紀とセリカで吐いている為男達は怒り心頭だ。出雲が呟いた無関心で辛辣な台詞も怒りを助長させる。言葉自体が通じるのは異界の勇者の力の一端だ、文字の読み書きも可能である。ついに男達の1人が真紀に掴みかかろうとする。と威勢の良い台詞でケリーが割り込んだ。ナイト気取りらしいと真紀は冷たく考えるも、確かに男達に比べれば力は上だ、自分達よりは見劣りするが。思わず失笑する。だがまあ男達よりマシかと考えた真紀は、一応警告だけはしてケリーに斬りかかった。驚愕して動けないケリー。それでは楽しめないのとおりあえずは剣を突きつけるだけのつもりだ。その後青年も加え、5人の男達も同時に相手取るのも面白そうだ、と考える。と新たな人物が現れた。ケリーに苦言を呈しながら真紀の剣を容易く受け止めて見せるクロウ。そして真紀にも忠告をする。そして容易く真紀の剣を弾き返した。力ではなくひたすら上手い。解放された少年に見えるクロウの力の気配は真紀を

すら心胆寒からしめるものだった。

理解できない事態に呆然とするケリー。男達も同様だ。真紀はクロウに対し面白そうに強いわねと言う。嬢ちゃんものと返すクロウ。そして二人が交差する。次の瞬間クロウの二刀が真紀の首筋と心臓に突きつけられ、真紀の刀は後方に突き刺さり、静止していた。ケリー達は理解できずただ硬直する。セリカと出雲は驚きの表情を見せていた。悔しげに負けを認める真紀。総合力なら嬢ちゃんの方が上じやろう、年の功じゃよと告げるクロウ。悔しさと闘争心で真紀は目をぎらつかせる。と、男達はそそくさと立ち去る。2人の戦いを見て、自分達には手に負えないと理解したらしい。ケリーは少女の強さに悔しさを感じる。セリカと出雲は十代半ばの少年が真紀より強い事に驚きの声を漏らす。クロウはそれを聞き、84歳だと言いい放つ。驚きを見せるが疑いはしない3人、経験上見た目と実際の年齢が違う相手というのも慣れてはいる。遅れてやってくるサクヤとマリーニア。サクヤに注意され慌てて刀を引くクロウ。妻には弱いらしい。謝罪するサクヤにふと呆然とフルールがクロウとサクヤの二つ名を呟く、疑問を投げかける真紀に知識を披露するフルール、隠棲している筈なのにと驚きを隠さない。そして真紀に対し望んでいた強敵だと告げる、刀術と速度だけなら神にすら匹敵するかもしれないと。嬉しいかと尋ねるフルールに笑い頷きどう勝つか考えると意欲が湧くと好戦的な表情の真紀。セリカはやれやれといった顔で、出雲は無表情だ。クロウとの再戦を望む真紀はクロウ達に付いて行くと言い張り、クロウ達に真紀達も同行する事になるのだった。

ギルド本部ギルドマスターの個室で、ゲッシュに呼び出されたスレイは部屋の中の見慣れぬ面子に疑問を感じるも、自らもディザスターを連れて来ている為特に何も言う事は無い。ゲッシュは頼みがあり、紹介したい相手が居ると告げる。そしてまずクロウを紹介す

る。スレイとクロウは互いに何か感じる物があるように握手を交わす。次にサクヤを紹介する。軽く握手を交わす2人。次にスレイを険しい表情で睨んでいるケリーを紹介した。挑発的で含むところのありそうなケリーを気にせず握手を交わすスレイ。次にマリーニアが紹介される。マリーニアはディザスターに恐怖の目を向けながらスレイと握手を交わし、すぐに離れた。続いてゲッシュは困惑したように真紀を異世界の勇者らしいと紹介した、その紹介に同じく困惑するスレイ。挑戦的な表情の真紀と握手を交わすスレイ。困惑のままに次は出雲を紹介するゲッシュ、同じく困惑したまま握手を交わすスレイ。そしてまだ困惑のままセリカを紹介するゲッシュ、困惑が重なるもセリカと握手を交わすスレイ。ヤケになったようにゲッシュは白い小竜を時空竜だと紹介する、翼をパタパタさせ挨拶するフルールに挨拶を返すスレイ。そして異世界の勇者と時空竜とはと尋ねると、間違いなくそういう存在らしい、マリーニアの占術で確認して貰ったので確かだと返すゲッシュ。まだ不完全だが識る知識の中に僅かに引っ掛かる物もあるし、そういう物もあるのだらうと納得するスレイ。今度はゲッシュがスレイの足下のディザスターについて尋ねてくる。それにあっさり答えるスレイ。ゲッシュは思わずマリーニアを見やり、マリーニアは肯定するよう頷く。そしてその場の全員が硬直し身構える。それに呑気に挨拶するディザスター。意表を付かれ全員が呆然とする。と、フルールがどこか挑発的にディザスターを裏切りの邪神と呼ぶ、それに時空の歪曲者と返すディザスター。互いに挑発的に不気味に笑い合う。衝撃から回復し、邪神っ!？と叫ぶも、フルールの様子に引く真紀、セリカと出雲も邪神とフルールの様子に引いている。それをスレイがあっさりと流す。そしてスレイは丁度良いとゲッシュにロドリゲーニの事を切り出す。またもあまりの内容に一行は呆然とするも、ゲッシュはマリーニアに確認を取り、スレイに問いかけた。何故ただの村の少年だった君が自分で始末を付けようなどと考えたのか、と。説明したとはいえ細かい事までは説明していない、なので自分の罪悪感と贖罪

の意識について説明できるとは思えない。それに不幸自慢などしても仕方ない。なので気まぐれとスレイは答える。ゲッシュが追求してもスレイはのりくらりと躲す為、諦めるしか無かった。ただディザスターに問う。本当に人間に敵対しないのかと。当然と答えるディザスター、過去も主の下で他の邪神と戦ったと。スレイ以前に主が居たのかと尋ねるゲッシュに主は主しか居ないと答えるディザスター。測りかねたゲッシュはその追求も諦め、本題に入る事にした。対邪神の会談にこの場の一同と共に同行してもらいたいというものだ。了承するスレイにケリーが物言いをつける。邪神を従えるとは驚嘆するしかないが、中級職の探索者を各国首脳の集まる場に連れて行くのは不足だと。主にケチをつけられ威圧するディザスターに震えるケリー。そこにクロウが割って入りスレイに馬鹿弟子を納得させる為にと自らとの手合わせを願った。確かに力の証明は必要だろうと、何よりクロウと手合わせできるのは願っても無いとスレイは了承した。

円形闘技場、貸切の今たった9人と2匹が居るのみのこの場の中心でスレイとクロウが向かい合い、他は観客席の前列に座っている。真紀はフルールにスレイは強いのかと尋ねる。フルールは間違いないと強くと答え、あらゆる世界に唯一の“天才”の戦いを見れるなんて運が良いと告げる。天才と呼ばれる人間は数多く居ると異論を唱える真紀に、意味が違うとフルールは首を振る。とにかくちゃんと見ておくんだ、というフルールの態度に真紀はやや腹を立て黙り込む。と出雲がディザスターに視線を向け強いのかと聞く。ディザスターは知らん顔だ。フルールは僕と同等で無数の世界を創造し破壊する力を持っていると告げる。フルールの強さを見た事が無いと茶化すセリカにフルールは構わず、冷静に真紀達とこの世界の存在の力の比較をする。“天才”を除けばこの世界の人間の誰より真紀達が強いという言葉に、クロウに負けたと不満げに頬を膨らませる真紀。相性と経験の問題だと返すとフルールは自らの力を説明する。

スケールの大きさがうそ臭いと告げる真紀に、魔王との最終決戦では真紀達も星の一つや二つ破壊してただろうと、ただこの世界ではそれだけの力でも抑制されて大陸を吹き飛ばすぐらいがせいぜいだろうけど、と物騒な事を言うフルール。尤も勇者の力には魔王戦以外ではリミッターが掛けられてるから今はそれも難しいだろうけどね、と付け加える。そしてディザスターは自らと同等のみならず、世界を創造するも破壊するも自由自在な真の神、強い弱いの次元じゃないと締めた。3人はディザスターを見るが、ディザスターはスレイを見たままだ。その様子に邪神をペットにしてるスレイは邪神より強いのかと聞く真紀。“現在”^{いま}はまだ、と答えるフルール。そして再び戦いを良く見るようにと繰り返された言葉に、3人は真剣な様子で闘技場の中心を見据えた。

憤慨するケリー、スレイをわざわざクロウが相手する事に不満を吐き出す。ゲッシュは様々な理由で論し、サクヤもスレイの動作からその強さを測る。マリニアがカードの開示も拒否されたし納得できないのも仕方無いと弟に助け舟を出す。占師としてはどう感じたと尋ねるゲッシュに、弟を気遣いながらもクロウと同等と評するマリニア。ケリーは衝撃を植える。自らより年下の青年がそれだけの高みにある。ケリーの衝撃は深かった。サクヤが成長の余地があり成長を導く者としてクロウが居るという恵まれた環境にあるとケリーを慰める。そして自分も含め全員に戦いを観戦出来る様時間系魔法を掛ける。そして4人は闘技場の中心に視線を移した。

ディザスターは加速は抑えながら、既に純エーテルを全開で循環させていた。スレイを主として初めて客観的に見る戦い、僅か足りると見逃すつもりは無い。何よりまだ早い段階で出会えたのは幸いだ。スレイは未だ探索者システムに深く染まっていない、今は探索者としての成長は抑え、“真”の“強さ”を磨き上げる。そしてイグナートすら越える“高み”に到ってもらわねばならない。ディザ

スターは二度と主を失うつもりは無かった。そして相手のクロウも自分達邪神とやり合い敗走しながらも曲りなりにも生き延びて見せた剣神フツ、あの男に近い匂いがする。試金石には丁度良い。ただディザスターはスレイを視線に留め続け、戦いの始まりを待つのだった。

円形闘技場の中心、クロウはスレイに謝罪の言葉をかける。スレイは寧ろこの状況に感謝していると返す。期待に応えられるといいが、と両腰のディラク刀を抜くクロウ。続いてスレイも双刀を抜く。軽口の応酬をしながらも真剣で、互いに油断は無い。ただ強敵との戦いに両者共に僅かに口元が緩む。と、合図も構えも予備動作も無く、同時に光速の数十倍の速度域へと突入する、同時に観客達もその速度域を知覚できる程に思考を加速させ、そして全員が時系列から外れ世界から隔離されていた。そして圧倒的な技巧の類を尽くし、互いに己が刀術の極限まで駆使し戦い合う二人、戦いの中スレイはまず序盤に1つ終盤に2つの特性を得る、そのまま最終局面へと戦いは進み、両者は制止し、両者と観客達は通常の世界へと回歸する。カウンターの一撃、アスラの刃がクロウの首筋に食い込んでいた。

「俺の勝ちだな」

「ああ、儂の負けじゃ」

視線を交わし、勝敗を確認し合う二人。互いに刀を引き、クロウは素直に負けを認めていた。

フルールの首を絞めて意味不明だったと告げる真紀、その蛮行を誰も止めない、実際本当に見ていて理解不能だったからだ。フルールは技巧の限りを尽くした上あらゆる要素を使った超高位多次元機動戦闘を行っていたので、同等の速度域にあっても捉え切れなかったのは仕方無いと告げる。呆れる全員。何よりゲッシュは本来神々の結界で傷つかない筈の闘技場のボロボロの惨状に目を覆う。自然修復されるとはいえ数日は閉鎖せねばならない。仕事が増えて胃が

重くなる。そして目を光らせ勝者であるスレイをライバル認定する真紀にフルールは力の差を指摘しようとしてまた首を絞められる。ディザスターは1匹沈黙を保ち満足げに頷き、この戦いでまた強くなった事を賞賛し、だがまだ、それこそかつてのヴェスタすら越える程に強くなって貰わねばと一人呟く。

観客席に向かいながらスレイはカードを確認し、「心眼」「明鏡止水」「無念無想」と確かに3つどれもが剣士にとって得難き特性を獲得している事を確認する。しかしその喜びよりもクロウとの戦いの喜びの方が大きかった。自分と対等以上の相手と仕合う、これ以上の楽しみと喜びが他にあるだろうか？ 闘争心が消えずスレイは珍しく浮かれていた。

【始まりの迷宮】地下1階

ケリーは渋々スレイの対邪神の会談への参加を認めた。師であるクロウに勝ったとあっては認めざるを得まい。悔しげな羨望をスレイに向けていた。真っ直ぐな気性で若く師に恵まれているのだから伸びるだろうなと予想する。果たしてここに居る何人が彼のように成長の可能性を秘めているかと、後方のエルシア学園の生徒を見やり考える。今スレイはエルシア学園の臨時講師としてのフレイヤの助手としてこの場へ来ていた。2度も大きな事件があり、【始まりの迷宮】といえど安全では無いと、元S級探索者とはいえ引退したフレイヤ1人だけの実習に保護者達が難色を示したので、現役で“黒刃”の二つ名も持つスレイを助手として付け保護者達に配慮した形だ。名門だけあり貴族の子女も珍しくない、学園も気を遣う。が、人選は完全にフレイヤの私情だ。現に今もスレイと腕を組み見せ付けるようにしている。男子生徒は嫉妬の視線をスレイに送り、女子生徒は楽しそうにしていた。見世物だ。男避けだなどフレイヤに問うスレイ、肯定しつつ事実だから問題無いわよね、と告げるスレイ。反論の余地は無かった。ただ、たまにこういう事もあったから

良い機会だったと告げるフレイヤ。現在宿は学園が用意した人材が留守を預かっている、他にサリアの面倒を見る人材もだ。どちらも学園の教師だが教師になるのは高くても元C級相当探索者程度が精々。だが現役の高ランク探索者を雇うのは高い。若くして引退した元S級相当探索者というフレイヤは稀少な人材なのだ。故にフォロ―は万全。しかも今回はフレイヤの伝手でスレイも格安で雇えた。フレイヤが公私混同しても文句は出ない。なので心置きなくイチヤついていた。ディザスターもお留守番だが、置いていかれると知った時のしょぼくれた様子は哀れを誘う程だった。とまれ今までの分を取り戻すように存分にスレイに甘えるフレイヤ。だが仕事も忘れてはいない。モンスターの気配を感じ生徒を制止する。そして三人の生徒を呼んだ。三年騎士科主席ライオット・グレイブ、三年魔術師科次席ルーシー、三年闘士科主席ジーク・グランド。ライオットと呼ばれた青年は騎士科とは言え学生では珍しく既に騎士職に付いているようだった、その事を尋ねると由緒正しい武断派の公爵家の息子で幼少期から教育を受けているらしいとフレイヤが答える。と、ライオットの嫉妬の視線にどうやらフレイヤに懸想してたらしいと苦笑するスレイ。ルーシーと呼ばれた少女は次席という言葉に不満そうに今の自分なら生徒会長にだって勝てると告げる、フレイヤは困惑しつつも勝ってからいいなさいと返す、黙り込むルーシー。ジークという青年はただスレイさえ感心する程の自然体でただ静かに立っていた。手本を見せろという言葉にスレイの実力を知りたいと叫ぶライオットとルーシー、とルーシーとライオットとの間でも諍いが生じるが、ルーシーの言葉にライオットの方が怯えを見せる。どうやら手酷い目に合わされた事があるようだ。2人に困惑するフレイヤに、ルーシーはライオットの気持ちを暴露し、その上で自分はフレイヤやスレイより強いと言い放つ。ルーシーの様子が以前とあまりに違う事に困惑するフレイヤ。これも恋人の為かと、スレイは軽く2人を言葉であしらう、いきりたつ2人をスレイは無視すると、臨時講師助手命令としてジークに、迷惑だろうが力を見せて馬

鹿2人に分相応つてのを教えてやってくれ、と言う。ジークはスレイを暫し見ると畏敬の念を宿し、肯定の返事をした。そして雑魚モンスター相手とはいえ、洗練された動作で圧倒的な实力を見せ短時間で戦闘は終わる。学生達は歓声を上げ、フレイヤは驚き、ライオットとルーシーは愕然としていた。そんな愕然とした2人を挑発するスレイ。1人で戦おうとしたライオットだが、いくぞと宣言したその瞬間にスレイの刀が首筋にあった。混乱するライオットを捨て置きルーシーに再度戦うか確認する。警戒し自分に一方的に有利なルールを提示するルーシー。だがスレイは軽く頷き、ただ知り合いにジュリアが居るかを確認し肯定され因果を感じて項垂れる。だがそのままスレイはルーシーを促した、あまりに舐めた態度に激昂するルーシー。1ヶ月前病が快復してから劇的に上がった魔力、騎士科史上最強と呼ばれたライオットにも勝った。先程は驚いたがジークにだって勝てる、挑発にノってすら来ない臆病者だ。それに“剣女神”にだって、長年の目の上の瘤“女帝”にだって勝てる。怯える自分に気付かぬ振りをしそう思い込む。目の前のスレイという男だって先程の速度には驚いたが、自分の戦いのルールにノって来た。自業自得だ。私の魔法の威力を存分に味わってもらおう。そして全力で魔法を解き放つルーシー。勝利を確信したその瞬間、無傷のスレイが現れ、そして拳骨でルーシーを殴った。そして良い事を思いつく、スレイの幼いころの夢は教師だった、この3人相手に教師役をやればどうだろう？それはとてもスレイの欲望に沿っていて、尚且つ欲望に忠実に生きると決めた今のスレイの決断に叶っていた。ジークに関しては逆にこちらが教わりたい事がある。そしてジークとルーシーとライオットにフレイヤが臨時講師の際は3人だけスレイが別メニューで鍛えなおしてやると告げる。ジークは僅かに瞳を輝かせ、他の2人は呆然とするのだった。

朝。心地良く目覚める。枕にしていたディザスターが声を掛けて

くる。遅い目覚めであった。日課のディザスターとの早朝鍛錬もこなししていない。最近は迷宮探索は休み気味だ。ディザスターからの進言故だ。何はともあれ本当に心地良い目覚めだった。昨日が充実していたからだろう。教師の真似事は楽しかったし、フレイヤへの埋め合わせに多少過激だった行為にも満足していた。スレイの欲望はディザスターの糧にもなるので一石二鳥だ、スレイはあの子の事を回想した。主席だけあり3人共学生としては優秀だ。ライオットは英才教育の賜物だろうLvが高く総合力が高い。ルーシーは桁外れな魔力を持つ。だが一番の注目やはりジークだ、Lvは低いがスレイが最も重視する速度は中々だし、バランスも良い、スレイが知らない“寸勁”と“浸透勁”という特性まで備えている、それに何より先程の戦いからもジークには能力値では計れない何かを感じていた、それを今まで完全に隠して来たのは流石だろう、一番期待が持てる。とりあえず3人に自分を先生と呼ぶように告げる。素直に同意したのはジークのみ、他2人は反論の声を上げる。が、軽く振るわれた刀が2人の間に深い溝を作る。2人は蒼白になり、ジークはスレイへの視線の敬意を深める。再度繰り返すスレイ。今度は3人から同意の声が返ってきた。そしてスレイはまず実力の理解の為に3人全員で掛かって来いと告げる。数秒後3人は地に倒れ伏せていた。賞賛の声を上げるジークと何も言えず地に伏せる2人。そして2人に説教などかますと、ジークと世間話をするスレイ。その中で学園史上最強と呼ばれる三年魔術師科主席生徒会長“女帝”エンプレスエカティーナと、三年剣士科主席風紀委員長“剣女神”ソードゴッデスセリアーナの存在を知る。学園内での物とは言え随分と大仰な二つ名だ。興味を抱く。そして暫し、2人が回復すると3人を解散させた。次からもフレイヤの臨時講師の際には3人だけ特別授業を行う旨を告げて。帰ると同時フレイヤに連行されたスレイ。どうやら色々と不満な様子だ。充分に埋め合わせをし、部屋に戻るとはしゃぐディザスターに迎えられ、眠りに付く。

回想を終え、スレイは昨日はひたすら充実していたと満足を感じる。欲望に忠実に生きると決めた自分に相応しい日常だった。人に物を教えるのが3番目に好きだと確信するスレイ。ただ後は圧倒的な強者との戦いがあれば最高だったのだと思う。早朝の鍛錬をサボったのは取り戻さねばなるまいと、ディザスターに声を掛け起き上がるのだった。

クロスメリア王国西端、エルフ自治領、世界樹の森。スレイは祖父に恋人を連れての帰郷を命じられたエミリアに同行していた。今回は置いて行かれるのに耐えられなかったらしいディザスターも同行させている。スレイとディザスターの速度で以って一瞬の時も掛からず世界樹の森の手前に辿り着きエミリアはポカンとしていた。日帰りも可能だろうと考えながら、スレイ達は森の中心部を目指す。世界樹の直近には高位種族たるハイエルフが住み、その周囲に通常のエルフの各氏族が分かれて集落を作っているらしい。ダークエルフは森の中心から離れた場所に住んでいるとの事だ。森の中を腕など組みながら呑気に歩くスレイとエミリア。ディザスターの圧倒的な気配に竦んだモンスターは殆ど出てこないが、それすら分からない雑魚が時折出現する。それを片腕の刀で瞬殺し、ディザスターがあっさりと片付け、歩み続けた。と違和感を感じ結界かと告げるスレイ。その鋭さに驚くエミリア。既にエルフの領域なのかと尋ねるスレイに肯定するも集落はまだ先だと答えるエミリア。だがエルフは居るようだ、スレイは言う、右手を上げた。次の瞬間矢がその右手に握られている。礼儀知らずと罵るスレイに数人のエルフが現れる。鼻で笑うエルフ達だが、エミリアの名乗りをやや取り乱す。今すぐこの場を去るなら今の事は忘れてやると交換条件を突き付けるスレイ。憎々しげに見ながらも悩むエルフ達。後押しする為にスレイはディザスターに完全に力の気配を解放させた。圧倒的なプレッシャーに恐怖のみを抱くエルフ達。スレイの合図に気配を弱め、スレイはもう一度去れとエルフ達に告げる。エルフ達は脱兎の如く

逃げ出した。エミリアが何か言おうとするも、気にするなと告げ、ディザスターを褒めてやるスレイ。そして再び腕を組み歩き出す2人。黙って付いていく気配りの出来る邪神ディザスター。程なく一同はグラナダ氏族の集落に辿り着いた。

「そういえば」

集落の中、エミリアの家、エルフなのだから当然だが若々しい両親に歓迎されたスレイは、歓談の時を過ごし、エミリアの祖父を待っている。そして空いた時間、スレイは“女帝”^{エンプレス}の事を尋ねる。睨むように何処で知ったか聞いて来るエミリアに疑問を覚えつつ、経緯を話すスレイ。強さに興味があるという言葉にやや陰の薄れるエミリア。また新しい女性に目を付けたと思ったというエミリアに不本意そうにするも、反論はできず黙り込むスレイ。だがエミリアはくすつと笑うとそういう男だと分かっているという恋人になったし仕方無いと言い、やり込められた事に気付きスレイは慚然とする。そして質問に答えるエミリア。今度学園に行ってみるのも一興かと考えるスレイに、じと目のエミリア。暫しそんな雰囲気が続いた。と、玄関が開き誰かが走ってくる、突然伸びた腕を咄嗟に止めるスレイ。手はエミリアの胸の寸前で止まり、その腕の持ち主はやはり若いエルフの男だった。孫の成長を確かめる邪魔をするとは何のつもりじゃ、と言う男に、エミリアの胸を揉みしだきこれは俺の物だと宣言するスレイ。ほう、と目を丸くすると。良く来たなエミリアの恋人よ、儂がエミリアの祖父、グラナダ氏族長老衆が1人ジンじゃ、と名乗る男。探索者か、とスレイの誰何に驚き元探索者じゃ、と言う男。良くわかったのう、という言葉に動きや気配でそのくらい分かれるとスレイは答える。エミリアに極上の男を連れて来たようじゃな、と褒めるジン。これで厄介な客人を客人を追い払えるなどと気になる事を言っているが、スレイは一番気になる事を尋ねる。探索者として何級相当だったのか、と。元SS級相当という答えに、挑戦的な視線を向けるスレイ。が、疑問を片付けようと、現役と元の差を

尋ねるスレイ。呆れたように5年に1度の更新手続きをしなければ現役で無くなると答えるジン。疑問が解決し、尚挑戦的な視線を向けるスレイに、意図を察し、ジンはやれやれといいつつ相手になるうと告げる。そしてまずは互いにカードを見せ合う事を提案する、領きスレイはカードを差し出す。驚き探索者になってからの期間を尋ね更に驚くジン。次にジンがカードを差し出す。その能力値の高さに流石元SS級探索者、と歓喜するスレイ。そして外に出る2人、おいてけぼりの一同も慌てて後を追う。

空き地にて、対峙する2人の周囲には野次馬が集まる、様々な種族が散見されるのに流石グラナダ氏族と感心するスレイ。そしてジンの加速系の魔法から始まる戦い。光速の数十倍の速度域、いつもの如く時系列と世界から隔離される。と、突然出現した無数の丸太、しかも先端が尖り杭のようで、更に溝が掘られたドリル型の代物にキョトンとするスレイ。そんなスレイにこの世界全ての生命の情報を含む系統樹の概念を擬似的に具現化しドリル化した物だと、この世界の生命全てに対する絶対殺戮権を持つから掠りもするなよ、と告げるジン。恐怖が無いため、危うく自分がこの世界の生命の範疇に入るのか確かめる為当たりたい衝動に駆られるも、生きるべき理由を思い出し自制するスレイ。と一気に丸太のドリルが襲い掛かってくる。躲すスレイ、地面に突きたつドリル型の丸太、とその側面から枝が生え、圧倒的な物量でスレイに迫る。スレイは炎の精霊王の加護を受けた魔法で応戦するも容易く四散する炎の魔法。流石に驚くスレイ。咄嗟に双刀の居合いで？字型の軌跡の斬撃波を放ち、一気にジンまでの突破口を開く。そして無数のドリル型の丸太が超光速回転しながらスレイに迫るのを双刀を振るい退けるスレイ。分割した思考でスレイは考える、これは系統樹を具現化した物、無限大熱量を以ってしても焼く事は不可能、ならばとスレイは無数に分割した思考を全て使い魔法陣を展開し、黄金真火を以って系統樹を焼き、ジンを真火で覆い尽くした。通常の世界

へと回帰する。野次馬が騒ぐ中、スレイは告げる。

「俺の勝ちでいいな」

「ああ、良からう。儂の負けじゃ」

悔しげながらも負けを認めるジン。そして双刀を鞘に納めるスレイと、残った丸太を地面へ突き刺すジン。見物人達が湧く。ジンに勝ったスレイに対する賛辞だ、流石グラナダ氏族だろう、他のエルフ族なら人間に賛辞を送る事などありえない。と、ジンに対し嫌味な声がかかる。現れるハイエルフの男女。スレイとジンの居る中心に歩み寄って来る。ハイエルフ至上主義たるハイエルフ族はグラナダ氏族にとっては招かれざる客人だ、観客達も嫌な表情をしている。中心に辿り着いた2人の内男が、ジンのみを見てエミリアを花嫁と呼ぶ、嫌な顔をするジンと険しい表情を浮かべるスレイ。女は興味無さげに佇むのみ。エミリアを見付けた男は美しさに感嘆し流石我が花嫁と言う。怒るジン。そして一同を家へと招くのだった。

ジンの家。席にかける一同。求婚の話じゃったのと確認するジンに、グレナルという男が以前既に婚約した筈と告げる。嫌な顔をするエミリア一家。スレイはグレナルを睨む。無視するグレナルだがそのあまりに鋭い物理的な圧力すら伴う視線に冷や汗を流す。

断ったというジンに、エミリアが居る事を都合良く受け取るグレナル、阿呆と斬って捨ててるジン。グレナルは驚く。ジンはエミリアの恋人を見せる為呼んだと言う。恋人とは何処にとグレナル。スレイを指すジン。人ではないかと怒るグレナル。意に介さぬジンに、グレナルはハイエルフ族の力で脅しを掛ける。逆に個人の力で脅し返すジン。グレナルは肝を冷やす。他のエルフを見下してはいても、元SS級相当探索者の力は知っている。ただここまで本気で拒まれるとは予想していなかっただけだ。とハイエルフの女、妹のティーガが引くよう告げる。名残惜しげなグレナルに、スレイがわざとエミリアを抱き寄せ見せ付ける。文句があるなら相手になると言うス

レイに、人間にと齒噛みしながら、実はジンに勝った場面を見ていた為理性が働くグレナル。ティータは興味深げだった。ジンの最後通牒に促すティータ、グレナルは捨て台詞を吐き去る。スレイは軽く返し、ディザスターが軽く唸った。驚愕し、そのまま立ち去るグレナル。また、と告げ去るティータ。不思議そうなスレイにハイエルフに目を付けられたとジンが謝罪する。ジンと戦えたしエミリアは自分の恋人だから問題無いと言い放つスレイ。豪気じゃなど大笑するジン。そして晚餐でもてなされた後1泊し、次の日、都市へと2人と1匹は都市へと帰還した。

広場、リリアと合流し腕を組み歩く2人。どこか不機嫌そうなりリアに、その原因である用件“女帝（エンプレス）と“剣女神（ソードゴッデス）の2人の情報を尋ねるスレイ。デリカシーの無さを責めるリリアだが、それすら可愛く思える自分の色ボケを寧ろ悩むスレイ。リリアは仕方が無さそうに話し出す、自らの動向をあつさり把握する手際に流石と感心するスレイ。そしてライオットの親の公爵は寧ろ感謝していて、ルーシーの両親も変貌した娘の教育に感謝してるみたいだが、ジークに関しては面倒に巻き込まれるかも、と告げるリリア。興味を示すスレイに、ブランド家が闘術の大家で様々な国に影響力があり、その意味では公爵家以上の権威を持つ事を告げ、全く学園関係者にそれを悟らせなかった事に感心し、本家の息子に教授したりすればブランド家は気に入らないだろうと言う。面白く思うスレイとそれを見抜くリリア。次に肝心の2人の事を聞くと、生まれはごく普通、小さな頃から知り合いで、学園への入学前から探索者になり既に迷宮探索をしていたと言う。親をどうやって説得したのか疑問に思うスレイ。そして既に探索者だったなら何故学園に入ったのか聞くが、スレイには分からないだろうが肩書きや学べる知識や技能は探索者をやっていく上で役に立つのだと答えるリリア。と少し話が脱線し、迷宮都市の子供の現状などの話になりしんみりするも、2人のやりとりでどこかコミカルな空気に変わ

る。結局現状を変えるのは自身であり上に立つ者だ。尤も自らが最強の頂に立った際にはそんな下らん因果力尽くで断ち切ってやっても構わないが、などと物騒な思考を展開するスレイ。と、リリアは話を元に戻す、2人の能力値は調べられなかったと。まあ人に見せる物じゃないしな、尤も今まで会った相手はあっさり見せてきたがと答えるスレイ。特殊な相手ばかりだと呆れるリリア。次いで2人が魔術師系、剣士系で中級職だと言うリリアに感心するスレイ。Lv30からLv50の間と考えると俺と同じ位の可能性が高いかと予想するスレイに、スレイの現在のLvを思い出しやった事から忘れてたとリリア。いったい自分の行動をどこまで調べてるのかと聞くスレイに秘密だと答える。そしてここからはデートだと告げるリリア。2人は再び腕を組み歩く。そして恋人らしい一時を過ごし、部屋に戻ったスレイはディザスターに席を外して貰うよう頼む。空気の読める邪神ディザスターはそのまま外に出掛け、そして2人は甘い一時を過ごした。

迷宮都市、探索者として一代貴族となった者の多くが邸宅を構える高級住宅街、グラナリア邸もまたそこに在った。現在スレイはグラナリア邸へ訪れていた。リビングの中ルルナと共にルルナの両親を待つ。2人の後ろには完璧な所作のメイドが1人。特別な立場と思われる。スレイの鋭敏な聴覚は扉の外の使用人達の会話を拾い、厳しい審美眼を持った彼女等の自分への厳しい評価にへこむ。まあミューズの魂の波動は魅了するような物でなくあくまで好感度を稼ぐのにボーナスがあるような物だ。初見で貴族のレベルでの評価ではそこそこに落ち着くだろう。野望の達成は遠そうだと肩を竦める。と今度はアッシュとの比較が始まる。主の子に対してもシビアな意見が飛び交う。ルルナもまた鋭敏な聴覚を持つ為申し訳無さそうに謝り注意すると言うが、スレイは大目に見てやれと言う。女性に甘いと溜息のルルナ。尤も室内のメイドも気付いて眉間に青筋が浮か

んでいる。恐らくは彼女が叱り飛ばすだろうと思った。と使用人達が慌てて立ち去る。そして扉がノックされ、ルルナの返事と共に扉が開く。三人の男女が入ってくる。1人は扉を開けて佇むメイド、そして2人の上質な衣服の男女。三人共探索者だとスレイは看破する。スレイの会釈に男女は答え、席に座りその後ろのメイドが静かに佇んだ。そして男女がアッシュとルルナの両親のガルドとリリーナと名乗る。A級相当探索者の夫は元S級探索者の妻に肩身が狭そうだった。スレイは同情の視線を送り、気付いたガルドと共感を交わすも、リリーナが咳払いで断ち切る。そしてズバリとスレイの女性関係に踏み込むリリーナ。ルルナが叫ぶが、リリーナは責めてはいないという。ただルルナの事は真剣に考えているかという問いに、スレイは肯定する。それで納得するリリーナ。疑問に思うスレイに別の話を切り出す。イリナと親しいかという問いに、どうしたのか尋ねるスレイ。リリーナはアッシュとエリナの事を尋ねる。これが本題かと納得するスレイ。自分が知る限りの両思いだが文通だけの関係、イリナだけは反対しているが両親は認めているという情報を伝える。安心したようなリリーナ。そしてスレイに邸宅のルルナの部屋に泊まっていくよう、明らかにそういう行為を示唆して告げる。流石に驚くも了承し、宿への伝言を頼むスレイ。初孫を見たいと言いつつ、去って行くリリーナと続くガルド。それに従うメイドが室内のメイドティナに後を頼むと言いつつ、それにはいいメイド長と答えるティナ。ティナがメイド長かと思っていたスレイが疑問に思い尋ねると、メイド長ヒルダは殆ど両親の仕事に付添うので、副メイド長のティナが家を仕切る事が多く、実質そのような物だという答え。凄い女性だったが仕事とは？と尋ねるスレイに、母は“元”だけど今でも父と一緒に迷宮探索していると答えるルルナ。返事を返しつつ念話でディザスターに泊まりを伝え、2人はティナに案内されルルナの部屋に通される。そしてスレイは初孫作りに励んでみるかなと言いつつ、ルルナを押し倒すのだった。

職業神の神殿騎士の宿舎、ジュリアの元を訪れたスレイは2人で外へと繰り出す。今日はディザスターもお付だ。神殿に入る時は神殿の神気が恐怖してたが、神々も顕現できずとも様子は見えているという事だろう。2人はルーシーの話をする。スレイはルーシーの能力値を明かし手加減せずに叩きのめす様忠告する。物騒など呆れるジュリア。素直な良い娘だったというジュリアの言葉にスレイは全く面影は無いと言い放つ。そしてルーシーの家。ルーシーの母のルミアが出て、スレイを見てジュリアを茶化す。ルーシーの話だと切り出したジュリアはスレイの紹介をする、するとルーシーがスレイに報復すると言っているという情報が齎された。複雑な気分のスレイ。何故相談してくれなかったかルミアに詰め寄るジュリアをルミアはいなす。スレイのどういう知り合いかという質問に、可愛い恋人と茶化すルミア、照れるのはジュリアだ。そして隣同士の家に住んで面倒を見ていたという言葉にジュリアの過去を聞けるかと思う。察したジュリアが止める様牽制するが、男っ気なんて全く無い過去を恋人に知られて困るのかと茶化すルミア。落ち込むジュリア。2人の関係を何となく理解するスレイ。とりあえず肝心のルーシーは学園の図書館に入り浸りだが、ジュリアが言っても無駄だろうという言葉に項垂れるジュリア。と、ルミアはスレイにルーシーの事を頼んでくる。あっさりと倒した事での抜擢のようだ。ジュリアからも頼みこまれ、恋人からの頼みなら張り切らなければなと返すスレイ。その後家に上がり歓談し、暫し後辞す。ディザスターに先に宿に戻るよう頼むと、どこか不満げなディザスター、スレイは甘い物で釣る。そしてジュリアの個室にやってくると後ろからジュリアを抱すくめるスレイ、驚いたようなジュリアと会話を交わし、そのままベッドに横たえると、秘め事に溺れるのだった。

カードを見て既に剣皇になれる条件を満たしているというフィーナに、守秘義務もあるだろうにすまんと謝るスレイ、惚れた弱みと頬を膨らませるフィーナ。今日もまた職業神の神殿を訪れた、ディザ

スターも一緒だ、連日のお出かけにご満悦なディザスターに対し、勘弁してくれとばかりの神殿の神気。ともあれフィーナを呼び出しデートに誘ったスレイは、ついでに少し自分の能力値を見て貰っていた。能力値の異常さの自覚から見せる相手は選んでいる、当然フィーナは見せていい相手だ。能力値を上げるのはまだ早いとディザスターに言われてるが、分析して貰うぐらいいは構わないだろう。なにげなく聞いた隠し職業の情報をあっさりと明かしてくれたのは棚ぼただったが。恋人としての破格の対応だろう。ちなみにスレイは自分の選んだデートコース、装備品を扱う店に近付かないルートを歩きつつ他も色々尋ねる。と、フィーナはカードの内容に驚いていた。どこが驚くべき要素なのかを尋ねるスレイ。神殺し（ゴッド・スレイヤー）がありえないと言われたのは想定内。双刀の主は珍しいが隠す程では無い。と双刀に対抗するディザスターに苦笑する。天才は謎としか言えないので隠す方が無難。闘気術と魔力操作は流され、闘気と魔力の融合は聞いたことも無いと逆に尋ねられる、純エーテル強化という内容に隠すべきと結論するフィーナ。思考加速、思考分割、剣技上昇は一般的。刀技上昇はディラクではありふれている、二刀流は多少珍しい、無拍子はかなり珍しいが隠す程ではない。化勁についてはある武術の大家では習得方法を確立してるがスレイは独力で身に付けた為難しいというフィーナに武術の大家とはグラント家かと尋ねるスレイ。知ってるのかと聞かれ、その家の息子と縁があると答える。結局隠す程ではないが、グラント家には睨まれない方がいいと言われ、手遅れだと呟くも、フィーナには何でもないと答えておく。続けて明鏡止水に無念無想は隠した方が良い。心眼も無拍子より遥かに珍しい特性なので隠した方が良い。高速詠唱と無詠唱は一般的だが剣士職だから隠した方が良い。炎の精霊王の加護にはいったい何処で会ったのかと尋ねられる、迷宮でと答えるスレイに、未知迷宮と勘違いするフィーナは、絶対に隠すべきと言う。そして耐性は本来一般的な物なのだが邪耐性に神耐性なんて、邪神と戦った事でもあるのか、と言うフィーナに、心の中で正解と

咄くスレイ。何はともあれ隠すべきと言われる。総括として絶対に能力値は人に見せるべきでは無いという当然の結論になった。分かっていた事はいえ項垂れるスレイ。もっとカードが便利になればいいのになどと考える。と、ふとセリアーナの話をフィーナに持ち出すと、二回ともクラスアップを担当したと聞き、フィーナには偶然が多いな、と驚くスレイ。と脇腹を抓られ、恋人と一緒に他の女性の話題を出すのはどうかと思うと言われる。反省したスレイはフィーナに手を差し出し、デートの続きを楽しんだ。そしてまたディザスターには先に帰ってもらう。先にフィーナに部屋に戻ってもらうと、スレイは宿舎に忍び込みフィーナの部屋に入る。そしていきなり押し倒した。最初暴れるフィーナだがスレイと気付き大人しくなる。その後涙を目に浮かべながら抗議するフィーナに謝るスレイ。そしてフィーナに言われるまま、優しく解きほぐすよう交わっていくのだった。

迷宮都市からクロスメリア王国王都サザンクロスへの街道、巨大な幌馬車が聖獣ユニコーンに引かれ高速で進んでいた。ユニコーンは生娘が存在しなければともに働いてくれないが、幸い乗客の中には4人も生娘が居た。幌馬車の中に居るのはゲッシュ・クロウ・サクヤ・ケリー・マリーニア・真紀・出雲・セリカ・フルール・スレイ・ディザスターの計9人と2匹だ。馬車の構造が特別な為揺れを感じる事は無い。御者は居ない。知性持つユニコーンには必要無いからだ。異世界組の3人は自動車より速いその速度に驚く。これでも速度を抑えてると、そしてこのペースなら3日かなと自慢げに説明するフルール。その得意気な顔がムカつくと理不尽に首を絞める真紀に、フルールはスレイの元にやってきた。何故自分の所に来たか尋ねると安全地帯呼ばわりされる。少々腹を立てつつも、億劫げに自分とディザスターなら一瞬なのにと咄くスレイ。流石にスレイ達だけ先に行っても意味が無いし、そもそもギルドの決まりで探索者の超高速での長距離移動は禁止されてるし、スレイの場合迷宮

都市への旅は徒歩だったんだろうと尋ねるゲッシュ。既に決まりを破ってる事を思い出すもどうでも良いと切り捨て、旅の際の移動速度はこの速度よりずっと速かったから、掛かった時間の殆どは途中で巻き込まれた騒動が原因と答える。トラブル体質だねと苦笑するゲッシュ。そしてスレイはクロウとケリーとの刀談義に戻る。サクヤやマリニアは呆れ顔だ。3人共まるで玩具を前にした子供のようだ。一通り刀について語り尽くすと、次は刀を使った戦闘談義に入ろうとする。それぞれに刀術について一番重要な要素に違う意見を持っている為議論も白熱するだろう。スレイが今推しているのは速度だ。と横合いから声が掛けられた、異世界の勇者3人が何時の間にか席を移動している。とフルールは慌ててスレイの後ろに隠れた。真紀はスレイ達の得物を見て目に好奇心を浮かべながら、自らの得物を差し出し抜き放った。ディラク刀と同じ形状に見えるもスレイは違和感を覚え尋ねる。造りが同じに見えながらどこか違う、不思議な刀だ。真紀は日本刀だと言った。聞き覚え無い名に聞き返す。そして真紀はディラク刀がディラクという国で作られた刀だからディラク刀というように、自分の世界の日本という国で作られた刀だから日本刀だと、しかも幻とされる正宗の銘が入った長物だと告げる。銘と言われ不思議そうな3人に、刀匠の名を刻む習慣は無いのか尋ねると。フツ神から技術を賜った刀鍛冶は全て名工、故に優れた傑作自体に名が与えられる事はあっても、刀匠の名を刻む習慣は無く、それは寧ろ大陸の刀剣の文化だと答えるクロウ。文化の違いに面白そうな真紀。とフルールが顔を出し、いくら名刀でも鋼の刀じゃ無理があるから、アラストリアの最高の付与魔術で強化されてて正宗（＋9）って感じかな、と告げる。そして両者の相似に言及するスレイに、フルールはこの世界の剣神フツと真紀達の世界の日本の経津主神の関係を語った。そして再び人の手のみで作られたという正宗を見て、人の技術の可能性に感じ入る3人。そこへセリカが銃は無いのかと尋ねるも、この世界に銃は無く、つまらなそうに口を尖らせたセリカは銃を取り出す。その際のガンチラに男性

陣は目を奪われるが、クロウのみサクヤの火の魔法で焼かれていた。ともかくセリカが取り出したのは実に無骨な鉄の塊であった。それが銃かと尋ねるスレイに、一応と肯定しつつも、私の世界の物じゃないし撃ち出すのは魔力だと返すセリカ。またフルールが顔を出す。スレイの後ろが安全地帯として気に入ったらしい。そしてアラストリアの魔導銃で魔力そのものを弾丸として、セリカの意志を込める事で魔法を越えた威力を生み出し、速射連射も可能な優れたものと説明する。得意気に胸を張るセリカ。また視線を奪われる男達。またクロウのみサクヤの魔法でダメージを受けた。そんな中話に交じれないのと、魔導銃が魔法を超えと言われる事に不機嫌な出雲。経験からの悲しい習性かフルールがフォローに走る。出雲はアラストリアの魔法体系の全てを極めた大魔導師だと。ヴェスタの魔法体系を全て極めた魔術師なんて聞いたことも無いだろうと。確かにと頷くのには胸を張る出雲。胸の起伏が無い為クロウがダメージを負う事は無く、気付いた出雲が不機嫌になる。真紀がスレイ達に議論の内容を聞く。刀術に重要な要素で自分は速度を推していると答えるスレイに、スレイの速度ならそうかもしれないが一般的じゃないと否定する真紀。やや不機嫌になるスレイ。他2人が何を推していたのか尋ねる真紀にケリーは技と答え、クロウは精神力と答える。極端だと呆れる真紀は、自分は総合力と言いたいが、総合力で勝ってるクロウ相手には負けたし、全部重要な要素だけど、結局は根本的な強さの格、同格なら相性次第だろうと言う真紀に、スレイが全て重要な要素と分かった上で、中でも最も重要な要素はという議論だと答える。答えの出ない議論だと呆れる真紀。敢えてそれを楽しんでいた3人は罰の悪い顔をする。呆れた真紀は、次にスレイに夜に相手をしてくれと言う。黄色い悲鳴を上げるセリカと出雲、クロウとケリーまでが茶々を入れる。真紀は赤くなりセリカと出雲に刀の相手だと言いつ返す、スレイはどちらの相手でも構わないかと飄然としたままだ。クロウとケリーが真紀に同情する。と腹を立て真紀はスレイに仕合ってもらおうと怒鳴る。軽く受けるスレイ。席に戻ってい

く真紀達の後ろにもう一つの夜の相手はいいのか、と惚けた様子で声を掛けるスレイに真紀は鞆に入っただまの正宗（＋９）を振り下ろすも軽くスレイに受け止められる。夜覚悟しておけという真紀に、どっちの意味だ、と返すスレイに、真紀は疲れて溜息を吐き戻っていた。出雲とセリカは感心したようにスレイを見ている。2人の内心を代弁するようフルールが真紀を翻弄するなんてと言うが、慣れだの一言ですませるスレイ。そしてクロウとケリーとの会話に戻るのだった。

夕方、馬車を止め、野営の準備をする一同。そして夜、諸々一段落し、ゆったりと過ごす一同。ディザスターを枕に夜空の星を眺めるスレイの元に真紀がやってくる。夜の相手なら喜んで受けるがとからかうように告げるスレイに、是非お相手願えるかしら、コレでと刀を示し、落ち着いて返す真紀。やれやれと起き上がったスレイは強化は無しでと提案する、どうしてかと尋ねる真紀に、真剣な表情で真紀を見つめ興味がある、と告げる。思わず顔を赤く染める真紀に、異世界の刀術にな、と続けるスレイ。からかられた事に気付き怒る真紀に、謝りながらも、あんた相手だとどうしてもな、と言うスレイ。言葉の意味を読み取り、改めるつもりは無いという事かと尋ねると、ご名答と返される。頭を抑えて真紀は手合わせの相手とこれ以上からかうなと頼んできた。わかったわかった、と立ち上がりスレイは歩き出す、付いていく真紀。他全員が2人を囲み見物人と化する。そして自然体のまま立ち尽くし始めようと告げるスレイに真紀が視線を陰しくするが、これが俺の臨戦体勢だと誤解を解くスレイ。そして2人の手合わせは始まった。強化無しの速度では真紀が亜光速、スレイは雷速と不利であるにも関わらず、スレイは圧倒的な“閃き”でその速度差を埋め、更に戦いの中でさえ成長していく。対等な戦い、2人で踊る刀の舞踏。真紀の頬は紅潮し瞳は潤む。スレイもまた同じであった。通じ合う2人。同じ剣士としてクロウとケリーが感嘆する。そして最後の一瞬、スレイのマーナが真

紀の首筋に当てられ決着は付いた、寸止めしたとはいえマーナのオーラで真紀の首筋には僅かに傷が付く。慌てて治癒魔法で傷を塞ぐスレイ。真紀の札に視線を逸らすスレイ。見物人達は拍手し2人を称えた。そしてそれぞれ元の位置に戻っていく2人。

ほめながらも尚精進しろと告げるディザスターに頷くスレイ。賞賛の言葉を掛けるフルールに何故こっちに居ると尋ねるも、気に入ったの一言で済まされ、溜息を吐く。

セリカと出雲の2人は今の真紀の表情を色っぽいと評するが素直に認める真紀に驚く、そして獣のような目でスレイを見つめる真紀。

夜中、ディザスターとフルールが何時の間にかテントを出て行く、そして真紀が夜這ってきた。いきなりスレイを押し倒す真紀に落ち着いて問い質すスレイ。真紀は先刻の戦いで惚れたらしいと、散々からかわれたが、本当にお相手願えないかと告げる。まるで獣だなというスレイに真紀はあっさり認め、スレイがゾクリと来るような瞳で見ってくる。そこでスレイは既に関き直っているため現在の女性関係に加え、野望までも宣言する。と、既に俺の女になった者達にも宣言しないと、これから毎回宣言するの面倒臭いな、などといった加減な事を考える。と、ポカンとして面白そうに笑い出し、いいわ、そんな馬鹿げた野望本当に叶えられるか確かめて上げると言う真紀。と責められるのは主義じゃないと、逆に真紀を押し倒すスレイ。そして2人は獣の如く交わった。

早朝。初めてであっても流石は異世界の勇者、真紀はスレイの全力を受け止めてみせた。眠りは僅か。目覚めると真紀はスレイの寝顔を見ている。どうしたとぼんやり尋ねるスレイに、真紀はスレイも寝顔は可愛いものだと言う。と穏やかな空気が流れる中、テントの入り口からセリカが現れ、真紀の行方を尋ねようとして、硬直し、

その後、セリカの口から迸ったのは、真紀がスレイを襲ったという叫びだった。真紀は硬直し目が点になる。外では他の者達が起き出し集まってくる音が聞こえる。間違っていないというスレイに、間違ってるわよと裏拳を繰り出すもスレイに受け止められる真紀。旅路の2日目が始まった。

流石の手の早さに呆れる3人の男達だが、ケリーとゲッシュも複数の女が居る宣言に、サクヤ一人だけのクロウが呆れた顔で同じ穴の貉と言う。聞き流すスレイの膝の上にはディザスターが、右肩にはフルールが居る。フルールに何故そこに居ると聞くと、気に入ったと返され、気にしない事にした。視線を女性人に移すと、ただ一人マリーニアが険しい視線でスレイを睨み、サクヤは子供を見るような目だ。ユニコーンもスレイを睨んでいたが睨み返すと怯えたようにうつ伏せた。他3人は黄色い声を上げ騒いでいる。真紀を他の2人がからかって楽しんでるようだ。と真紀とスレイの視線が合い、真紀が顔を赤くする。途端更にからかう2人。諦め溜息を吐く真紀。と、スレイは右手を前にゲッシュの前に突き出す。不思議そうなゲッシュ、と、スレイの手には何時の間にか矢が握られていた。と、痛みにスレイは手を離す。落ちた矢は鋼鉄製で放電していた。手を癒し、再び雷速で迫り来る数本の矢をクロウと共に左手のみで斬り落とす。矢が止み、声が聞こえてくる。そして現れる男とその部下達。男を見たゲッシュは雷弓のライナと呻く。元S級相当探索者で、SS級相当探索者昇格寸前に盗賊に身を落とした、50000000コメルの賞金首と言うと、スレイは破格な賞金だと感心する。それでもSS級相当探索者には放置されてたと自嘲するゲッシュ。とはいえ今の我々の前に現れたのは彼の不幸という言葉に、言ってくれと返すライナ。と、セリカが前に出て射撃勝負を持ち掛けた。魔導銃に疑問の視線を向けるライナ。とセリカが引き金を引き閃光が奔った。地に巨大なクレーターが穿たれる。呆然とするライナ達に笑い声を上げるセリカ。真紀と出雲は緊迫した表情だ。そして笑

いながら魔導銃を乱射するセリカ。ライナは逃げ出し部下達は倒される。どうしたのかと尋ねるスレイには真紀はセリカはトリガー・ハッピーだと答えた。スレイには意味が良く分からない。辺り一帯を荒野に変えるまで止まらないという言葉にどうすれば止められると尋ね、シヨックを与えればという答えに、スレイが進み出る。そしてセリカの胸を鷲掴みした。悲鳴を上げ屈みこむセリカ。一仕事やり終えたようなスレイ。とスレイに女性陣からの攻撃が一斉に襲い掛かった。納得いかなさげなスレイを責める男性陣と、睨む女性陣。面白くないスレイはそのまま馬車に引込もうとする、と同時に“閃き”が奔った。

セリカの猛攻から逃走に成功したライナだったが、セリカに部下達を倒されたのは予想外として、あくまで部下達は足止めの為の捨て駒で、全てはライナの罠だった。罠の只中に馬車を止める、元々あの襲撃が成功するなんて思っていない、なにせ刀神クロウがいるのだ。ただあの場に足を止め、しかも暫く時間を稼ぐ必要があった。なにせ己が切り札を以ってしてもクロウが相手では不足かもしれない、だから罠を発動させる準備の時間が必要だった。そしてあの場でじゃれ合っていてくれたおかげで時間も稼げ、準備はできた。手間も金も掛け、稀少なアイテムも使い捨て、部下達も捨て駒に、運の要素にも頼り、自らも危険に晒し、機を作り上げた。これもすべて探索者ギルドマスター、ゲッシュ・アルメリアを拉致する為。成功すれば全てを補って余りある。そしてライナは稀少なレアアイテムである最上級の加速薬を飲んでいた。

軽く手で制し前に出るスレイ、その一瞬後ライナが加速薬を飲み、同時にスレイと他の同様に加速できる者達が、光速の数十倍の速度域に加速し、世界から隔離される。ゲッシュ、ケリー、マリーニアの3人は通常の世界に取り残され静止したままだ。そしてライナは多次元の無数の座標に設置してあったアイテム加速薬で加速した自

動弓を発動させ、自らは最速最強の一矢を放った。と、分身し、全ての矢を叩き落とすスレイ。驚愕するもライナは停滞する事無くアイテム加速薬を飛翼の首飾りに掛け、転移し逃走していた。感心するスレイに、分身を見たクロウが不機嫌そうに自分との戦いで手加減していたのか、と聞く。ただ純粹に刀術で勝ちただけだと告げるスレイに、どこまで高みを望むと問うクロウ。スレイはありとあらゆる世界とその外の果てに至るまで全てを敵に回しても勝つ唯一絶対の最強、と答え周囲を啞然とさせる。と、通常の世界へ回歸し、3人が動き出す、も何が起こったか分からず茫然としている。馬車に向かうスレイに従うディザスターと右肩に止まるフルール。フルールに自分達を元の世界に戻すのはどうしたと尋ねる真紀に、その時になったらちゃんと還す、でもスレイのペットになる事にしたとフルールは告げる。流石に複雑な視線の3人。特にセリカは呆っとスレイを見ていた。

夜、夕食を終えた一同、現在スレイはセリカへの行動で男性陣に駄目出しされ拗ねていた。先程からセリカはスレイの方を見て顔を真っ赤にして視線を逸らすと繰り返している。マリーニアは女の敵を見る目を昼より強め、サクヤは何か生暖かい目をして、真紀はセリカに何か囁きつつ呆れたような感心したような目をして、出雲は表情が読めない。面白くないスレイは寝ると告げテントに入っていた。

深夜、ペット達が今日も何故か居ず、一人眠るスレイ。と気配に目を覚ますと正座したセリカが居た。何やら結婚を申し込むような台詞を告げるセリカに疑問の声を上げるセリカ。責任を取れという言葉に胸を揉んだけなんだが、と告げると、ここで襲われたと言うと言われ、流石に先程までの周囲の反応から洒落にならないのでスレイは止める。と、昨日真紀を抱いた事を知ってるだろうが、と据え膳は歓迎なのだが、警戒と疑問が先走るスレイ。と、世界中の

美女・美少女の範疇に私は入らないのか、と言われ、先程真紀が囁いていたのはこれか、と理解する。野望の規模が小さくされてるが今はそこはいい。だがそういうことならと欲情を覚えセリカを寢床に引きずり込む。そしてセリカの何時もと違うしおらしい様子にプツンと切れるスレイ。そのまま強引に肉食動物が草食動物を食うように、セリカを貪り尽くしていくのだった。

早朝、スレイはセリカに目をやる。セリカは夜は実に従順だった。初めてながらどんな要求にも応えてくれた。そんなセリカの髪を梳き撫でる。テントの外に出るスレイ。と入り口前に真紀が立っていた。と、セリカを知らない、と尋ねてくる真紀。喉けて何をすっ呆けてると返すスレイに、苦笑いする真紀。そしてスレイは自分の野望について熱弁する。とセリカが出てきて慌てるが、真紀は落ち着くように手を振る。と、そこにマリーニアが現れ、セリカの格好を見て叫び声を上げた。顔を覆う真紀とセリカ、とセリカは流石に格好を気にしてテントの中に戻っていく。騒ぎに他の者達も起き出し、三日目の朝が始まる。

男達の苦言を受け流すスレイ。朝食後の休息、クロウは呆れているだけだが、ケリーは特に姉に手を出されないかと心配し、ゲッシュは胃薬を飲んでいる。ペット達は特に何の文句も無い様だ。肝心の女性陣はマリーニアはやはり昨日より遥かに険しい視線でスレイを睨んでいる。サクヤはどうしようもないと呆れていた。それらの視線にも慣れた為特に何も感じない。ちなみにユニコーンは昨日の恐怖を覚えているのか始めから俯いていた。ちなみに真紀とセリカは何故かスレイの悪口で盛り上がっていた。いやどちらも恋人の筈なのだが。と、出雲がスレイをぼんやりと見ている。視線を返すとそっぽを向く出雲。そして一同は馬車に乗り、出発する。

馬車の中、スレイは何故か異世界の勇者陣に周囲を固められてい

た。ペット達は定位置にいるが、他の者達は距離を置いている。真紀とセリカは甘えるように擦り寄って来て、出雲は興味深げに見つめてくる。他の者達の視線が痛い。恐怖を感じなくとも居心地の悪さは針のむしろだ。野盗の襲来を期待するが、順調に旅は進み、そのまま夜になった。

夜、真紀とセリカは一緒にとまではまだ行かないのだろう、多少牽制していたので今日は来ないと思われる。だが何故かペット達は今日も居ない。暫し経ち理由が分かる、出雲が現れたのだ。自分を抱くように言う出雲に、何と言うか意味が分かってないように思えて、流石に今は止めるスレイ。が出雲はとんでもなかった、夕食に仕掛けていたという媚薬が、スレイの能力を越え効果を発揮する。いくらヴェスタ内で力が抑制されているとはいえスレイをして効果を消せない媚薬とは何なのか？疑問に思いつつも出雲の身体じゃスレイの本気に耐えられると思えないから逃げろと告げるが、魔法で肉体強化と自動回復を掛けてるから問題無いと返される。3人の中で一番トンでもないのは出雲ではなからうかと思うのを最後、意識が消える。そして獣と少女の交わりが始まった。

早朝、スレイはテント内の惨状に唾然とする。その中で平然とする出雲に初めてで本気で自分の全力を受けきったのだと得体の知れなさすら感じながらも、寝顔は可愛いものだと思う。こんな目に合わされてそんな思考をする自分の脳に疑問を抱くも、テントから出た。と顔色の悪い真紀とセリカが居て、スレイの様子を見て納得し、心配して謝ってくる。そして魔法の解呪に出雲を借りてくという、テントの惨状にやはり驚きながら去っていった。残されたスレイは途方にくれながら、テントを片付け始めた。

超食時、沈黙のクロウ。姉を心配するケリー、が肝心のマリーニアの瞳は絶対零度の如くだ。それを指して何を心配すると言うも、

ケリーだって複数恋人が居るのに何故自分は睨まれると聞く。言葉を濁すケリー。再度尋ね、それに叫び答えようとするケリーだが、瞬間ナイフがケリーの脚の手前に突き刺さり、ケリーは顔を青くする。そして続きを語る事は無かった。胃薬を飲みリリアに詰め寄られると怖がるゲッシュ。リリアには自分から言っておくが、他の女性に手を出しても容認してくれる筈なんだがと返すスレイ。それになんとか機嫌を取ってくれと返すゲッシュ。スレイに対して寛容でも、ゲッシュにとぼちりが来る可能性が、と言うと、顔を蒼褪め震えるゲッシュ。何を思い出したか興味が湧くが、流石に気を遣い口を噤むスレイ。サクヤは生暖かい視線をスレイに向けている。出雲は真紀とセリカの説教を聞き流している。ペット達を撫でながら、やれやれとスレイは空を仰いだ。

馬車の中、恋人が複数居るのは認めてはいても、それとは別なのだろう。真紀、セリカ、出雲がスレイの隣を牽制し合っている隙に、スレイはクロウとケリーの間に座る。スレイを睨みながら3人は一緒に座った。逃げてくるのはどうなんだ？と言うケリーに、じゃあお前の恋人達で想像してみろと返す。口を噤むケリー。儂には理解できんと悠々とするクロウに、サクヤが怖いだけだろうと言うと冷汗を一筋垂らす。サクヤがニコニコと笑う。スレイには分からなかったが恐怖を誘う笑いらしくケリーとクロウは顔を蒼褪めさせていた。そしてそのまま王都に到着する。ゲッシュの顔パスでそのまま馬車は都市に入る。スレイとディザスターは感嘆した。何せスレイは田舎生まれ、ディザスターは封印されてた身、半ば見惚れる。異世界の勇者3人ももっと大きく栄えた都市は幾つも見たが、ここまですばらしい都市は始めてだと言い。フルールでさえ久しぶりだと言う。他の者達は何度も訪れた事があるらしく反応は見せない。ゲッシュが何代つも前の暗愚な王が国財を注ぎ込んで造った芸術品と言っている都市だと説明してくれる。スレイも本で読んで知識としては知っていたが実際に見て聞くのは感動が違う。そして暫く。王城もゲ

ツシユの顔パスで通り、案内されるまま王城内の馬車置き場に馬車を置き、ユニコーンは世話係に任される。そのまま警備兵に付添われ王城に入り、次は侍女の案内に従う。そして広間に辿り着く。侍女は既に他の参加者は全て城に着いて客室に滞在しているので、スレイ達が着いた事を知らせればここに集まるから、お待ちくださいと言いついていった。広間の中央には大きな円卓がある、序列の無い円卓、つまり他国の要人との会談に使われるのだろう。そこには既に先客が居た。その内の一人がクロウを見て親父と呼びいきり立ったように向かってこようとする。クロウとどこか似通った容姿になるほど鬼刃ノブツナか、と納得する。そんなノブツナを父上と呼ぶ少女が抱きつき止めている。諭され落ち着くノブツナ。クロウは呆れて全く変わつとらんと零す。再度いきりたつもあつさり娘に止められるノブツナ。娘がクロウとサクヤに何げに容赦の無い挨拶をする。シズカと呼びトモエ殿に似て容赦が無くなったとぼやくクロウ。母に憧れてるから光栄だと、こんな父の傍に居れば容赦が無くなるかと告げるシズカに、落ち込むノブツナ。クロウも顔を引き攣らせる。喜び諭すサクヤに素直に頷くシズカを見て、クロウとノブツナは諦めたように項垂れた。他はすっかり取り残される。スレイがクロウに紹介を促す。席に掛け、二度手間じゃから全員集まってからで良いじゃろと言うクロウに、スレイは納得して、他の者達と共に席に掛ける。一同を興味深げに観察するノブツナ達と同席していた男女、男を見てスレイは驚く。流石に出身国の王の顔ぐらい絵で見た事はある。氷王アイス。シチリア王国は大陸で唯一ディラク島と交流ある国だから同席してたのも不思議ではない。ならばあの女が魔狼フェンリルかと得心する。と何故かフェンリルはスレイを見て笑みを浮かべる。そういえば、師経由で自分の顔が知られてる可能性があると思ひ至る。席に着くとすぐに侍女がティーカップに茶を注ぐ。スレイは面倒が増えなければいいがと、ティーカップを傾けるのだった。

暫し経ち、円卓は埋まった。最初に現れたのは黒髪黒瞳の壮年の威厳ある男と二人の美少女だ。一人の少女がスレイに呼びかける。真紀に知り合いかと聞かれ肯定するスレイ。闘竜皇女イリナだ、となれば男は竜皇ドラグゼス、もう一人の少女は癒しの竜皇女エリナだろう。アッシュの恋人という事でまじまじ見るが、釣り合いが取れてないと思ってしまった。イリナはスレイにつっかかってきそうだったが竜皇に止められスレイ達とは反対の席に着かされる。竜皇の配慮だろう。現に手紙についてと怒鳴ってくるイリナ。その後すぐに竜皇に拳を落とされていた。不調法ですまないと謝罪する竜皇。恨めしげな視線をスレイに向けるイリナ。アッシュに対し前途多難だが頑張れと心で無責任なエールを送る。続いて赤髪に茶瞳の壮年の明るい男と娘らしき赤髪のポニーテールと茶瞳の明るい美少女、続いて人生に疲れたような黒髪茶瞳の男が現れた。最初の男と娘はデイズスターとフルールを見て目にお金のマークが見えそうな雰囲気になる。それにますます疲れたように黒髪茶瞳の男は溜息を吐く。そして三人も席に着く。次は眩い黄金の美少女と続く五人の男と暗い雰囲気的美女が現れた。黄金の美少女がまず席に着き、後に続くように席に着く一同。と僅かに黄金の美少女がスレイに視線を送ってくる。それに気付いた金髪碧眼の男がスレイに険しい視線を向ける。と何故か真紀やセリカに出雲、マリーニアまでスレイに険しい視線を向けた。謂れの無い事態に溜息を吐くスレイ。続いて蒼い美少女と付き従うように金髪縦ロールに鮮血のような瞳の美女、そして十メートル近い黒い狼と三つの角を持つ大男が続いた。その闇の波動に身構える一同。がスレイは広間が大きくて良かったな、などと呑気に考えつつ、変わらずティーカップを傾ける。そんなスレイに蒼の美少女と金髪と血の瞳の美女が面白げな視線を向ける。そのまま美少女、美女、大男は席に着き、狼はその後ろに巨体を横たえた。最後に“王”の“威”を纏った男女が現れる、金髪碧眼の男と、金髪縦ロールに赤い瞳の美女、そして六人の男女が二人に従った。“王者”の“威”を纏った美女と、従う壮年の男の一人がスレイに

目配せしてくる。軽く受け流すスレイ。やはり真紀、セリカ、出雲、マリーニアがスレイに冷たい視線を向ける。動じないスレイ。席に着く一同。一人“王者”の“威”を纏った男は立ったまま全員集まったようだと告げる。そして勇者王アルスの名を名乗り会談の始まりを告げるが、一人が異議を唱えた。黄金の美少女の隣に座っていた金髪碧眼の男だ。彼は自らの主たる聖王イリュアこそこの会議の議長に相応しいと述べる。が当の聖王本人がヴァリアスと男を呼びその言葉を否定する。対を成す魔王も居るこの会議で聖王である自分が議長を務めるのは不適切だと。主の言葉に惑うヴァリアス。聖王は一国の国王であるアルスが議長を務めるのも不適切だと続けた。アルスはならば誰が適任かと尋ねる。それにこの国にありながら独立した都市、迷宮都市の探索者ギルドのギルドマスター、ゲッシュを推すと告げるイリュアに、ほうと頷くアルス。一同の視線がゲッシュに集まる。流石にこの面子の視線が集まり冷汗を流すゲッシュ。だが断れる雰囲気では無い。胃の痛みにまた胃薬が必要かと考える。アルスがゲッシュに議長を要請する。謹んで受けるゲッシュ。そしてゲッシュが会議の始まりを告げる。こうしてセレディア大陸とデイラク島の最高権力者達と最強の実力者達のほぼ全員が集まった会議の幕が上がった。

【????】???? “????”????

ヴェスタ世界の歪の中三位一体トリニティと享楽ロドリゲーニは会話を交わす、外の様子を語るロドリゲーニに、人の身になり入手したその特殊能力に驚くトリニティ。だがロドリゲーニはトリニティの三者が混ざった話し方に文句を付ける、ともあれ封印解除はまだ時間が掛かるという言葉に、職業・勇者への復讐を夢見つづ眠りの中に居ようと意識を閉ざすトリニティ。そしてロドリゲーニは封印解除に励むのだった。

1話

会議の開催を宣言すると同時に今までより強く寄せられる視線に、ゲッシュは中指で眼鏡を押し上げ冷静を装いつつもドツと冷や汗を流す。

何せ会議の参加者は大陸中の主要な国家のトップ達に、大陸でも指折りの実力者達、そのような者達ばかりなのだ。

ゲッシュは会議に参加している面々の顔を全て知っていた。

大陸でも有数の影響力を持ち、大陸中どころかデイラク島までもその影響力を発揮する探索者ギルドのギルドマスターなのだから当然の事である。

だが今回はそれが災いした。

ゲッシュとて、探索者ギルドのギルドマスターの地位にある身。

器も大きく、責任感も強く、見識も広く、公平な目で人を見る事も出来る。

更に人の上に立つ気概も有り、それに見合った判断力・決断力・実行力と言った能力も備えている。

権威とてこの場の面々に負けてはいない。

それでもなお、ここに集う面々はあまりに規格外に過ぎた。

既に伝説の領域に足を踏み入れている者達、各地で英雄とされる者達、辺境の民の間では信仰の対象にすらなっている者達、人にとっては未知であり敵対してきたと言ってもいい力在る者達、自分より老獪で狡猾だろう油断のならない者、何より自らをこの立場に任じたその人本人。

確かに全員自らが声を掛けこの場に集めた者達だ。

しかし自らがその者達を中心に立ち、舵取りをするなど流石に予想外に過ぎる。

あまりのプレッシャーに胃がキリキリと痛む。

確かに胃が痛む事は今までもあったが、それは日常生活、特に娘

に関する事が中心だった筈なのだが。

ふと、最近になってから、今回の馬車の旅の最中も胃薬の世話になりっ放しになっていたゲッシュは、その原因である、娘の恋人のスレイを見やる。

そして思わず脱力する。

この面子、この状況、そして確かに実力は折紙付きとはいえ、立場的には、この場で最も場違いな筈のスレイ。

だが彼は、呑気に、軽く王城の侍女など口説きつつ、優雅にお茶を嗜んでいた。

相手は王城の優秀な侍女だけあり、軽くあしらわれているようだが、めげる様子は無い。

むしろやる気に火が着いた様な楽しそうな風情だ。

流石に場の空気を弁えないあまりの行動に、一部の者達が咂然としてこいつは何者だ、という表情をしている。

同道してきた一同は、女性陣の大部分はキツイ表情、男達やサクヤなどは苦笑しているが。

いったいどれだけ彼は大物なのか。

思わず苦笑が浮かぶ。

多少は緊張が薄れたが、それでも尚、場の面子に目を向けると、強烈な緊張感がその身を襲う。

それでもゲッシュは、なんとか大陸とディラク島にその権勢を誇る、探索者ギルドのギルドマスターとして、その胆力を発揮し、まづは、と続ける。

「始めに、この場が集った方々は、世界中に名が知れ渡っているような有名な方々が殆どですが、そうでない方もおりますし、また有名ではあってもそれぞれ見知らぬ方々も多い事でしょう。ですので、まずはお互いの自己紹介から始めて頂きたいと思いますが、如何でしょうか？」

場の一同の反応は迂遠とも思うが、まずは妥当な判断だろう、と言ったところか。

微かに頷き同意の意思を示す面々と、反応を見せない一部の者達。やはり場の面子が面子だけに、そのような反応も敏感に察知し、僅かに萎縮してしまうゲッシュ。

ふと視線をゲッシュに向けるスレイ。

スレイが見ても、そんなゲッシュの姿は、少々哀れに思える程だった。

だが決して場から視線を逸らす事無く、立ち姿は崩さない。

流石に探索者ギルドのギルドマスターを務めるだけはあるな、などと感心しつつ。

だがスレイとしてはもっと重要な事を考える。

この場の面子が、世界でも紛れもなく最高の重要人物達なのは間違いないだろう。

ならば、じっくりと見定めさせてもらおう、と口元を吊り上げ、僅かに笑みを浮かべる。

まずは1人1人の紹介を聞いた後、次の者の紹介に移る前に思考を加速し、各人を見て、色々と独断と偏見で判断させてもらう事にする。

どうせただの自分の中での評価だ、文句も批判も受け付けない、というか出来る者自体いる訳がないが。

重要なのは思考の加速を誰にも悟らせないことだ。

少しでも相手を害し得る要素があれば、この場に在る超一流の探索者達は、無意識にでも反応してしまうかも知れない。

念には念を入れるに越した事は無い。

だから思考を加速する時は、相手を害し得る可能性を己が内から完全に排除する。

正直、なんら力を持たないただの一般人でさえ、誰かを害する可能性を全て排除するなど、意識・無意識に関わらず難しい真似だ、いや不可能と言っても過言では無い。

だが自分なら出来るとスレイは確信する。

そして害する可能性が皆無なままに、容易く誰かを、それこそ超

一流の探索者であろうと、自然と息をするように殺す事も可能であろう。

我ながら、超一流すら遥かに超えた暗殺者にもなれそうだな、と自画自賛だ。

いや、自慢になるのかどうか、微妙だが。

大体、スレイの価値観としては暗殺というのはありえない行為だ。自らの敵を殺すのは躊躇わない。

何故なら彼らはスレイに敵対するという道を選んだ事で、既に自らの命の使い道を、スレイに敵対する事で失うという選択をしたと見なせるからだ。

スレイとしては、ともかく自分の命の使い道は自分で決めろ、というのが己の主義であった。

故にスレイは人の上に立つ事を好まない。

人の命の使い道を自分が決めるなど御免だからだ。

これでスレイは幼少期より書物に埋もれた日々を過ごし知識は豊富、それだけに留まらず、最近は実践的な経験の断片すら時折“識る”事すらあるのだ。

戦術・戦略に留まらず、政治から謀略なんでもござれ、と人の上に立ち、人を使うだけの能力も持つてはいる。

だが使う気にはならない。

もし自らが人の上に立ちその能力を使うとすれば、むしろ味方を怪我一つさせず無力化し、戦闘だろうが謀略だろうが、わざと自分1人と敵全てが戦う場面を作り上げるだろうな、と思う。

そんな奴が上に立つなど成り立たないだろう。

いや、もしそんなの下に付きたいなどという物好きがいれば考えてもいいのだが。

戯れのような思考をするも、すぐに気持ちを切り替える。

先程、全員の容姿の細かい部分は観察させて貰ったので、今度は細かい部分は観察せず、まず単純に楽しみとして女性の容姿を純粋に楽しんで美人度を。

そして敵足^{あそびあいて}り得る者を探るのに、静止した中での動きや気配などから探索者や人外の種族の者達の実力を測る事にする。

ついでに、戦闘能力の無い者達については、人としての器でも測らせてもらおうか、などと考える。

今のスレイならば“識ろう”と思えばかなり深く正確な情報を“視て”“識る”事ができるが、種の割れたマジックなど面白くない。あくまで自分の“目”と“眼”で“見”て“測る”程度に留める。特に探索者達や人外の種族の者達の実力について、重要なのは技量と経験。

基礎能力に過ぎず、駆け引き次第で覆せるステータスなどは気にも留めない。

「それでは最初に、我が探索者ギルドの代表として私と共に参加しているメンバーの紹介をさせて頂きたいと思います。まずは私、先程聖王猊下のご紹介に預かりましたので皆様既にご存じでしょうが、探索者ギルド・ギルドマスター、ゲツシュ・アルメリア」

悠然と礼をするも、視線が更に強くなり胃がキリキリと痛むのを我慢するゲツシュ。

その場で一時思考を加速し、スレイはゲツシュを観察する。

正直既に良く知っている相手なのだが、こういう姿を見るのは始めてなので中々面白い。

将来の義父^{ちち}……と言っても義父と呼ぶ存在がどれだけ増えるかは自分でも不明だが……ともかくいずれの身内ながら、ストレスに耐えている姿も中々に様に成るナイスミドルというのは見事な物だ……いや正直男の容姿などどうでも良いのだが。

この場に集う者達の代表をやらされているという状況を考えれば、それでもこれだけ自らを保っているのは、それだけの器の持ち主だという証だろう。

偏見や差別などとは無縁の人格も知っている。

正直申し分の無い人間だとは思うが、あくまでただの人間、そして逆に言えばあくが無い、つまり強烈な個性が無いのが、この場の

様な領域まで来るとやや不足な部分か。

そうゲツシュの器を測り終え、スレイは再び思考を常態に戻した。スレイの見ている前で再び動き出したゲツシュが、紹介を続ける。「続いて、死亡したと思われるのが、つい最近、現役の探索者として復帰を果たし、皆様を驚かせた事と思います。あの“刀神”

クロウ・シュテンと、その奥方“白姫”サクヤ・シュテン夫妻」

クロウとサクヤが悠然と立ち上がり、優雅に礼をして、やはり悠然と再び席にかける。

二人に強い視線が集まるが、ゲツシュに対しても、知っているぞ、お前達が死亡した事にして情報を秘匿していたんだろう？と言わんばかりの意味ありげな視線が幾つも向けられ、更に胃がキリキリと軋む。

そこで再びスレイは思考を加速する。

クロウに関しては実際に刀まで交えた仲だ。

自分達にとってはそれが言葉よりも雄弁な会話となる。

年月は短くとも互いの性格など、かなり深く知り合っているといっ
って良い。

刀術の技量のみならず、その圧倒的な経験量、やはりそこが若い者達との格の差を生んでいると思う。

だが、確かにクロウはこの場でも間違い無くトップ候補の実力者だ。

そして今でもクロウの刀術の全てを見たとも盗み切ったとも思わないし、戦えば楽しいと思う。

しかし、闘技場で刀を交える前までの燃え立つ程の闘志は湧きあがってこなかった。

理由は何となく分かる。

戦えば必ず勝つ、その確信を既に得てしまったからだ。

いや、例えば己より強い相手と戦おうと、常に勝利の栄冠はスレイの頭上のみに輝くものだ。

そこを譲るつもりは無い。

だがそういうレベルではなく、あの戦いの最後のカウンター、あの一撃で、完全にクロウという剣士を超えた、絶対的な真実としてそれが既に自らの中に刻まれてしまったのだ。

あの時、紛れも無くクロウは神刀アマノムラクモと神刀アメノハバキリで以って、クロウにとっても最高の刀閃を繰り出していた。

そんな中、自らはアメノハバキリの光速の数十倍の速度域でさえ全くの同時に襲い来る八つの斬撃を無視し、ただ左手のマーナで以ってアマノムラクモの斬撃を受け流した。

明らかに乱れたその力のベクトル、だがスレイは化勁を以って、そのベクトルを完全に操作し、束ねてみせた。

更には自らの肉体を、体幹を固定しながらも回転により力を返す緩みを残し、足の爪先から頭頂、手の指先に到るまで、探索者として普通の人間とは本数も繊細さも桁が幾つも違うあらゆる神経の感覚を利用さえした。

そして探索者としてのやはり本数や強度・密度が普通の人間とは桁が幾つも違う筋繊維の一本一本に到るまで操作し、普通の人間とは数も稼動域も桁が幾つも違う間接の全ても操作し切ってみせた。

それら全てを利用して力のベクトルを操作し増幅し練りこみ、どこまでも高めた力により右手で振るったアスラのカウンターの斬撃は、あの時の自らの光速の数十倍の速度域の思考にすら認識できない速度、紛れも無く光速の数百倍の速度域まで到り、威力も極限まで肥大し、時空間と次元と位相すら切り裂き、裂け目を作り、クロウの首を僅かに切り裂いた。

正直、クロウを殺さずに、あの斬撃の威力と衝撃の全てを抑え込めたのが奇跡とさえ思えた程だ。

当然、アメノハバキリの八つの斬撃などは途中で止めざるを得ない事になり、中空で途中で止めざるを得なかったアメノハバキリを、クロウは空しくただよわせる羽目になっていた。

あの時、紛れも無く自らは一段階、しかもとてつもなく大きな一段階を昇り成長したと理解した。

“閃き”のままに放ったあのカウンターの一撃は、自らをそれほどに高める物だったのだ。

故に確かにクロウとの戦いは楽しいだろうし、クロウから自らも知らぬ技法や経験など学べる物は多いだろうが、熱く滾る物が無いのだろう。

あそびあいて 故に好敵手として超一流でももうあの時の興奮は味わえまい。

僅かばかり寂しさを感じる。

気を取り直しサクヤを見る。

ふむ、相変わらず胸が無いな。

いの一番の感想がそれであった。

探索者ギルド本部のゲッシュの個室において、堂々とまな板、ペツタンなどと告げて、無数の魔法で攻撃されたのに全く懲りていない。

尤も、相手も一応被害を出すつもりは無かった上、それを分かった上で敢えて魔法の構成に強制介入し刹那に分解して魔力を吸収するなんて真似までして挑発してみせたのだ、懲りる訳も無いのだが、クロウと違い、戦った訳では無いので性格は良く分からないが、あの一件や、クロウやケリーにマリーニアの反応を見るに、怒らせると怖い性格らしい。

尤もスレイは全く怖いと思った事は無い……まあ、当然なのだが。相当な美少女ではある、所詮は若作りのババアだが、などと辛辣な評価を下すスレイ。

どの道クロウの女だし、という理由でそもそもにして興味が湧かない。

まあ魔術師として超一流なのは間違い無いだろう、だが相性などの問題はあるかも知れないが、絶対的な評価で見ればクロウよりは下だろうと判断する。

あそびあいて 女性としては全く興味が湧かない、敵としては、クロウより下ではあっても戦った事が無い相手なので興味はかなりある、と言ったところだろうか？

2人については測り終えたので、スレイは思考加速を解除する。

「次に、そのクロウの弟子であり我がギルドの特別作業員、S級相当探索者ケリー」

ケリーが汗を掻いて緊張しつつ、きっちりとした姿勢で立ち上がり、形式ばって礼をして再び席に着く。

刀神の弟子という言葉に多少の注目が集まるがそれだけであった。再びスレイは思考を加速する。

正直、ケリーに関しては将来性には期待しているが、現時点では敵として^{あそびあいて}は不足に過ぎる。

クロウの下でひたすら研鑽を積んで欲しいところだ。

それよりもスレイとしては、同年代の探索者であるケリーには友人になって欲しいと思っていた。

何せ、幼少期からの“ぼっち”生活、いや美人な幼馴染達や年下の妹の様な美少女の居た生活に不満があった訳ではないのだが、同年代の男の友人が1人も居ないという生活、あれは寂しいものがあった。

今はアッシュという友人が出来たが、男の友人がたった1人ではやはり寂しい物がある。

今回の馬車での道中で大分打ち解けはしたが、まだ友人と呼べるまでには到っていない。

なんとか友人と呼べる仲にまでなりたいたいものだが。

特にケリーとは刀術やディラク刀について話せるのが良い。

ケリーの持つ“桜花”と“散葉”の刀身の輝きを思い出す。

あの二刀に限らず、ヒヒイロカネのディラク刀には格別の思いがあった。

採取したヒヒイロカネの中から、特に純度が高く、神素の含有率が絶妙な物を選び出し、様々な工程で質の高いヒヒイロカネを作成する。

神素含有量が異なる四種のヒヒイロカネに作り分け、様々な工程を経た後、ヒヒイロカネ製のディラク刀独自の一工夫が入る作業に

なる。

土置きや焼き入れなど、通常の鋼のディラク刀であれば、刀の表面に炭素を強引に狭い空間に閉じ込めた強固な組織を作り上げる訳だが……。

ヒヒロカネとなるとそこが一味違う、土も霊地で採れた神素を含んだ特殊な土、水も霊地で採れた神素を含んだ特殊な水を使い、鉄とは違う、特殊な反応を起こさせるのだ。

神素を神化させた神化組織、それこそがヒヒロカネのディラク刀の真骨頂だ。

後の仕上げは通常のディラク刀と一緒にだが、神化組織を持つヒヒロカネのディラク刀は、美しさもそしてその通常の物質ではありえない能力も圧倒的な物がある。

この大陸でのヒヒロカネのディラク刀の取引価格と来たら、と思っただけで青くなるような価値を持つ程だ。

それはともかく、アッシュの事を思い出したついでに、そういえばあのジークとライオットも同年代だったな、と連鎖して思い出した。

学生の身ではあるが、アッシュとて友人になった時点では卒業したばかり、いや今でもそれから大して経ってはいない、それに友人になった時点では下級探索者であった。

ならばあの2人も友人候補になるか、と思いつつ、ライオットのフレイヤに向けた視線を思い出し、独占欲の強いスレイとしては、アイツは無いなと心中断定する。

ライオットのフレイヤに対する視線からさらに連鎖し、今度はリアに執着する男ダグ・ザザーニアを思い出す。

彼もまた自分と同年代で、しかもお供を利用しての速成とはいえ探索者だったなと考える。

自分の女に惚れているという面では同じなのだが、何故かダグという男は憎めない気がした。

明らかにライオットより出来も悪く、性格も悪そうなのだが……

何故だろう？あの懲りない性格がなんとなく気に入っている。

自分の趣味は少しおかしいな、などと思いつつ、とりあえずアイツも力尽くで更生させて友人にしようなどと考え、そんな自分勝手に傲慢な考えに、どこまでも自分らしいと心中密かに楽しげに哄笑する。

とりあえずケリーとジークとダグ辺りと友人になれるよう色々と努力してみようなどと思いつつ、思考の加速を解いた。

「その姉であり、白姫サクヤの弟子でもある、やはり我がギルドの特別作業員、S級相当探索者“星詠”マリーニア」

途端、場がざわっと湧いた。

皆“星詠”の名に反応したのだ。

その中で、どこか居心地悪そうにしながらもマリーニアはしとやかな動作で立ち上がり優雅に礼をして、再び席に着く。

だが、まだ話し声は続いていた。

当然かも知れない。

“星詠”という二つ名にはそれだけ大きな意味がある。

数年前、まだ中央の中小国家群で戦争が頻繁に起きていた時。

彼らは聖王の和平の言葉にすら耳を貸さなかった。

その裏には死の商人と呼ばれる戦争を金儲けの種とする下種な連中の暗躍があったと言われている。

今でもまだ彼らの残党は裏の世界に潜り込み、相当数の大きな裏の組織などと繋がりを持っているらしい、それほどの大陸の巨大な闇の部分だ。

尤も、そのような物を闇などと呼べば、闇の種族は不本意と抗議するだろうが。

それはともかく、戦争に次ぐ戦争で、中央の中小国家群はもはや財政は破綻しかけ、そのまま全ての国が共倒れするしか無いかと思われた。

それでもなお彼らは、無い物を引きずり出してでも戦争を続けさせただろうなどと予想する識者が多いが。

そんな時、聖王からの要請により探索者ギルドが動いた。

とはいえ、肝心のSS級相当探索者達でさえ殆どがその戦争に加担し、あるいは自国に籠り、探索者ギルドが子飼いにしていたのはS級相当探索者がせいぜい。

探索者ギルドの介入でいったい何ができるのか、と全ての国は懐疑的であった。

だがその後、僅か一年ほどで中小国家群の戦争は治まった。

その時に活躍したのが当時十代半ばかその少女だった“星詠”だと言われている。

あらゆる戦争の火種を先読みして燃え上がる前に叩き潰し、暗躍する死の商人達の所在を突き止め彼らを捕縛し、中小国家の首脳陣の不祥事すら利用して、起きる寸前の戦争すらも悉く叩き潰した。

そんな“星詠”の力による探索者ギルドの介入があって、今では中央の中小国家間での表立った戦争は無くなり、せいぜい裏での抗争や、闇の種族の国であるヘル王国へのちょっかいである小競り合いが残るのみになったとされる。

故に、“星詠”の二つ名は、ここに居る者達にとってさえ特別な意味を持っているのだ。

向けられる興味深げな視線に萎縮するマリーニア。

ゲッシュは自分に向けられる視線の量が減った事で、僅かに胃の痛みが治まっていた。

心の中でマリーニアに謝罪する。

だが、この後もゲッシュには、さらにこの胃が痛い状況が長く続くのだ。

一時の休息ぐらいは許してほしいと思う。

ここで再びスレイは思考を加速させていた。

やはり神秘的でいながら色香を漂わせるイイ女だと思う。

紫の色合いの服装がその色香をグッと引き立てている。

どうも感覚的に嫌われてるとは思えないのだが、態度の冷たさから言うとはやはり嫌われているのだろう。

まあ、潔癖症気味に見えて、男の影も無い事だし、いずれ必ず口説き落としてやろうと思うが。

あそびあいて
敵としてはやはり不足に過ぎる。

だが、占術という特性。

自らが今身の内に持つものと近い物を感じる。

全知の欠片、か。

人の可能性、その一端の発現といったところだろうか。

やはり女としても、探索者としても興味深い相手だ。

ここで思考の加速を切断する。

動き出したゲッシュが続ける。

「続けて、異世界より来訪したという異世界の勇者、更科真紀、神代出雲、セリカ・J・スミス、それに世界を渡る力を持つという汎次元存在、時空竜フルール」

真紀、出雲、セリカが周囲を全く気にせず、堂々と立ち上がり、スレイの右肩に鎮座していたフルールがパタパタと羽ばたき浮き上がる。

そして楽しそうに周囲を見回し礼をして、3人は席に着き、フルールはスレイの右肩の上に戻った。

スレイはやはりここで一度思考を加速する。

フルールが悪戯げに視線をスレイに向けてくる。

やはりこいつとディザスターには通用しないか、と足下に目を向け、見上げてくるディザスターを見て、嘆息する。

まずは真紀を見る。

どこか浮き立った雰囲気を感じるが、上品でお嬢様然として、清楚な感じでいながら色気もあるイイ女だと思う。

何よりその風貌に似合わぬ野獣のようなその内面。

あの激しい情熱的な一面も彼女の魅力を引き立てているように感じた。

あそびあいて
敵としてはどうだろう？刀術では、積み上げられた歴史は感じるが、真紀個人の技量はやはりスレイにすれば不足だし、その積み重

ねられた刀術さえも既に底が見えた気がしている。

総合力的にはクロウより勝っているだろうが、経験不足な面が否めない。

そこはわざと小細工無しで、むしろ相手に合わせてやれば面白いかもしれないが。

ただ、何だろう？

何か、引っ掛かる物を感じる。

力の全てが引き出されていないような、そう封印されて鍵を掛けられているような感じだ。

女としては文句無し、しかも既に自分の女だ。

あそびあいて
敵としては色々な意味で興味が湧く。

そんなところか。

次に出雲を見やる。

やはり浮いた雰囲気を感じるが、全体的に小柄で、可愛い美少女だ、これはこれでアリだと思う。

ただ性格が読めない、ともかく読めない、ひたすら読めない。何をやってくるか分からない。

今のスレイを以ってしても予想の斜め上を行ってくれる辺り、あまりに掴み難い。

あそびあいて
敵としては、一度もその力を見てはいないが、一つの世界の魔法体系を全て極めた大魔導師だという。

この若さ、しかも経歴を聞くに相当な短期間でだ。

さて、だが肝心のその世界の魔法のレベルはどれほどの物か。読めないのが楽しいと思う。

そして出雲もまた真紀と同じ様に何やら封印のような物の存在を感じた。

あそびあいて
女としても敵としても、読めないというの莫名其妙な魅力的だ、しかも既に自分の女でありながら読めないというのだから堪らないと思う。

こんなところだろうか。

最後にセリカ。

やはり浮いた雰囲気はある、だがその奇妙ではあるが上品で清楚でありながら可愛らしく色気もある真紀や出雲と同じ服装に納まりきらない、爆発的で健康的な色香を持った肢体はあまりに魅力的だ。性格も、普段は底抜けに明るいの、色事となると、普段の明るさやその色香の漂う肢体とは正反対に純情なところが最高だ。

あそびあいて
敵としては、とセリカの武器を思い浮かべようとして、セリカが銃を取り出す瞬間の眩い太腿を思い出し、やはり色気に脳が行ってしまいそうになる。

慌てて思考を切り替え、彼女が乱射した、魔導銃なるものの威力を思い出す。

だが、敵が敵だけに、全く力など出していなかっただろうから、参考にならないかと思う。

やはり読めないなと思う。

またセリカにも真紀や出雲と同じく封印のような存在を感じる。

結局これは何なのだろうか？

結論が出ないと、とりあえずは無視する。

女としては、その色気も、ギャップも堪らない、あの肢体が全て自分の物だと思うと最高だ。

あそびあいて
敵としても、やはり読めないというのは面白い。

それが結論だった。

最後にフルールを見る。

ふむ、やはり可愛い小竜だな、と思う。

実に愛らしい姿だ。

まあ、これが真の姿という訳でも無かろうが。

力に関しては論外だ、下級邪神と同等というだけで規格が違うと分かり切っている。

まあそれでも戦えば勝つが、と思いつつ、戦う事は無いだろうと確信する。

これだけ懷かれてればな。

苦笑が漏れるスレイ。

そして思考の加速を切った。

世界が動き出した途端、周囲からはゲッシュに対し、何を言っているんだこいつは正気か？という視線が強く向けられ、ゲッシュの胃がやはりキリキリと痛んでいるようだった。

だがゲッシュはそれでもなお強靱な精神力を以って続ける。

「皆様がお疑いになるのも無理は無いと思います。しかし彼女達が異世界から来訪したというのは“星詠”がその占術の力を以って確認し、事実だと判明したことです。そして彼女達は紛れも無くここに居る他の方々に勝るとも劣らない強大な力を持ち、戦力となると判断し、この場に同席させています」

マリーニアをケリーとは分け、1人だけで、3人と一匹の直前に紹介したのはこの為である。

まだ懐疑的な視線を残しながらも、“星詠”の占術が事実と判断したのであれば、そういうこともあるのかも知れない、と場の空気が変わる。

これで第一関門はクリアした、とゲッシュはとりあえず汗を拭う。だが、まだ問題は残っている。

ここからが勝負だ。

そしてゲッシュは続ける。

「続いて市井のS級相当探索者、“黒刃”スレイ」

スレイは自然体で立ち上がると礼をし、無造作に席に座り直す。礼をした瞬間にはフルールが右肩にしっかりとしがみつきどこかコミカルな印象が漂った。

市井のS級相当探索者という事で、どこか場違いな者を見る視線が大半だが、一部の者達はひどく意味ありげにスレイに視線を向けていた。

先ほど異世界から来訪した汎次元存在などと紹介された小竜が肩にしがみついているのも、また興味の対象となる。

そんな視線をものともせず悠然とお茶のおかわりを侍女に頼みつ

つ、まだ口説き続けるスレイ。

周囲の女性の痛烈な視線は先程から常に無視状態だ。

その実に泰然とした様子に、周囲の視線も、こいつは場の空気も読めない大馬鹿なのか、場の空気すら気にする必要さえない大物なのか、判断に困るといった物に変化する。

ゲッシュはそんな周囲を物ともしないスレイを羨むように見ながら続ける。

「何故二つ名持ちとはいえ、市井の一S級相当探索者をこのような場に連れてきたか、と皆さん疑問に思われている事でしょう。当然です。私とてとある事実ととある要素が無ければ彼をこの場に連れて来る事は無かったでしょう。まずとある事実を話させて頂きます。今回この会議の場が設けられる事になった理由、それは邪神がそのごく一部とはいえ復活し、封印が解けかけている事が判明したからなのは皆さんご存じの通りです。その邪神の一部たる分体、それを葬り去った探索者が彼なのです」

途端、どっと場が湧く。

様々な会話が交わされ、スレイに対し懷疑の視線が向けられる。

落ち着いているのは極一部の者だけだ。

そんな中でも悠然とティーカップを傾けるスレイ。

ゲッシュは大声を張り上げ告げる。

「皆様！静粛に！！これは彼女“星詠”マリーニアも確認した紛れも無い事実です。間違いなく彼が邪神の分体を倒しました。ですが、それだけではありません！！」

ゲッシュの“星詠”が確認したという宣言に、疑惑の視線はやや薄れるが、やはり場は騒然としたままである。

ここで、まだ嘘臭い事実を話さなければならぬ事に、ゲッシュはやはり胃が痛むのを感じた。

「続いて、始めに、これもまた“星詠”マリーニアが確認し、事実と判明している事だと前置きさせて頂きます。今より二年以上も前に、実は別の邪神が既に復活しています。人の輪廻転生の輪に入る

事で勇者達の封印から逃れた邪神が居るのです。彼、スレイはその邪神、ロドリゲーニの覚醒する前の人間時代の幼馴染だったそうです、そして彼はロドリゲーニを倒す為に探索者に成ったそうです」

また場が騒然とする。

今度は先程落ち着いていた一部の者達も驚いたようにスレイを見つめていた。

「ちなみに、S級相当探索者という事で、彼の実力を軽く見たり、彼に倒されたという邪神の分体の力も軽く見る方もいらっしやるかもしれませんので予め言わせて頂きます。彼、スレイは、私達の目の前で、その刀神クロウと戦い、勝利しています」

「うむ、儂とそのスレイが戦い、儂が負けたのは事実じゃ。先に言っておくが手加減など欠片もせんかったぞ？単純にスレイは圧倒的に強かった」

ゲッシュが話し、クロウが肯定した事実にもはや抑えきれない程に場の喧騒は高まった。

スレイに向けられる視線は様々だ。

だがスレイはやはり悠然とお茶菓子を摘んだり、侍女を口説いたりなどしている。

ゲッシュはやっとここまで来たかと、汗を拭い、胃を抑える。

あと残る紹介は一匹だけ。

だがその一匹が問題であった。

正直、このことだけは話さずに済ませたいとすら思ってしまう。

だがそういう訳にもいかないだろう。

ゲッシュは覚悟を決めて告げる。

「そして、そのスレイの足下に居る蒼い狼。紛れも無くスレイのペットなのですが。その狼の正体は欲望の邪神ディザスターです」

場が静まり返った。

と、面倒臭そうな事になりそうなので、ここで一先ず思考を加速する事にするスレイ。

ディザスターを見やる。

相変わらず美しく峻烈でどこまでも蒼くシャープな肢体の、気高い狼の姿であった。

これで自らだけには可愛らしく甘えてくるのだから、飼い主冥利に尽きる。

しかも修行の手助けから何から、なんでもござれだ。

力に関しては言うまでも無いだろう。

一度戦った時の、出会いの時を思い出す。

あの時は勝利を譲られたが、実際は圧倒的な力の差だった。

だが関係無いと思う。

相手が何者であろうと、どれだけの力の差があろうと、戦う以上は勝利は常に俺の物だ。

例え命を賭けても、ほんの刹那先に相手を殺してから自分が死ぬ、とそう決めている。

しかしまあ、こいつとも、もう戦う事は無いのだろうか、とまた苦笑が浮かぶ。

思考の加速を解除する。

途端、何を言っているんだこいつは？という視線がゲッシュに集まる。

何処か可哀想なものを見る視線すら集まっていた。

胃がキリキリと痛むゲッシュ。

だがここで引く訳にはいかない。

ゲッシュはスレイに何とかしてくれよう、目線で合図する。

スレイは面倒くさそうにしながらも、ディザスターを円卓の上に乗せ、ディザスターに耳元で何か告げた。

円卓の上に乗せられたディザスターと乗せたスレイに対し、かなりの者から何処か馬鹿にしたような視線が向けられる。

だが、次の瞬間。

場が、先程までの静寂とは違う真の意味での静寂に包まれた。

一部の者はその周囲の様子にキョトンとするか、過去の事を思い出し蒼くなる。

だが一流と呼べる以上の探索者達、それに人外の者達の反応は皆一様に揃ったものだった。

今回は証明する相手は全員一流以上の探索者や戦闘種族で構わない。

他の一般の者や二流以下の探索者達は、例え高い地位の者であっても自らの傍に在る者を信頼しその言を信用するだろうし、最低限の相手に絞って問題無いだろう。

まあ、一部自らの上の者の言葉すら信用せず騒ぎそうな者達も居るが、黙らせてくれそうな相手もいるので問題無い。

勿論過去に既に証明済みの相手、既に信じてる相手も対象外で問題無い。

ディザスターは判断すると、そのまま自らの力を制御し、対象となる相手のみにプレッシャーを送る。

途端、圧倒的なプレッシャーを受け、自然と戦闘体勢へと移行する対象者達。

やはり周囲の者は困惑している。

対象者の誰もがその圧倒的に過ぎるプレッシャーの前に、神々にプログラムされたままに恐怖の感情を麻痺させ、自然と肉体を戦闘体勢に移行し、ただ表情のみ、ごく普通に驚愕の視線をディザスターに向けていた。

スレイのみが、そんな周囲の様子を気にもせず、お茶を飲もうとして、空になっている事に気付き、侍女に替えを頼む。

周囲の様子に困惑しているだろうに、ただ自らの職務を忠実に遂行する侍女。

美人な上にデキる女性、実にいい女だと姿を眺め堪能しつつ、やはり口説くスレイ。

あまりにも場違いな光景。

ディザスターはすぐにプレッシャーを止めた。

途端、場は大きくざわめき出す。

「静粛に！！皆様、静粛に！！」

ゲツシュがなんとか場を沈めようと怒鳴るも、全くこの場の者達に聞こえてる気配は無い。

自らが議長を務める会議でこの醜態。

またも胃が痛む。

ディザスターはそのままスレイの足下に戻るも、対象者達のディザスターを見る目は極端に変わっていた。

警戒、畏怖、困惑。

面白いくらいの変貌ぶりである。

場の一同が平静を取り戻すのには、かなりの時間がかかるのだった。

「スレイくん、君はいつたいディザスター殿に何を言ったのかね？」
ゲツシュがこめかみに青筋すら浮かべてスレイを問い質す。

あれから暫く経ち、流石は各国でも有数の者達だけあり、なんとかこの場は一部を除き常態へと戻っていた。

ちなみに一部とは3人の職業・勇者達で、彼らは何も理解できずに、周囲の様子が変わった事に騒ぎ、その所為でアルスからの叱責を受けていた。

その為、今はスレイとディザスターに、恥をかかされたという憎しみの視線を向けている。

スレイもディザスターも全く気にしてはいなかったが。

ともかく、対象者達が周囲の者達に事態を説明し終え、驚きや疑惑の視線なども在ったが、場がようやく落ち着きを取り戻した現在。侍女にまた茶のお替わりを頼み、新しいお茶菓子が出され、ティーカップを傾け、そのお茶菓子を摘むスレイ。

ちなみに先ほどからこれだけ飲み食いしても問題無いのは、当然肉体が既に通常の人間とは違う物だからだ。

何も飲食しなくても問題無いが、どれだけ飲食しても問題無い、つまりお金さえあったり、いくらでも飲み食いできる機会があれば、ひたすら味覚を楽しませる事が出来る。

便利な肉体だ。

そんな合間合間にスレイに口説かれつつも、ただひたすらに黙々と仕事をこなす侍女。

まさにプロフェッショナルである。

だが、少しずつではあるが、やや、スレイの口説き言葉に頬に赤みが差すようになってきていた。

よし、これは何としても今日中に口説き落とす。

そう心に誓うスレイ。

しかし、先程の騒動の原因でありながら、関係無いとばかりに悠然とお茶を嗜み侍女を口説くスレイの姿に、流石のゲッシュも怒りを隠さず、さらに詰め寄ってくる。

そんなゲッシュに肩を竦めると、スレイはあっさりと答えた。

「『この場の分からず屋どもに、ちよっとお前の力を見せてやれ』
そう言ったただけだが？」

僅かの反省の色も無いスレイ。

それどころかゲッシュが何を怒っているのかと疑問の視線すら向けてくる。

そんなスレイにゲッシュは諦めたような表情で首を横に振ると、周囲に視線を移した。

場にはきちんと全員揃い、今はきちんと落ち着きを取り戻し、会議が続けられる状態に戻っている。

流石に先程の事態に、今でもディザスターに対して警戒を隠せない一部の者達だが、ディザスターのスレイの足下で、スレイに甘えるように足に纏わり付く姿を見て、なんというか判断に困る表情を浮かべていた。

どう見ても主人に甘えるペットにしか見えない。

さらにスレイの右肩の上に鎮座するフルールが、スレイの周囲一帯の雰囲気コミカルなものに変えてしまっている。

周囲の困惑も仕方あるまいと思いつながら、中断してしまった会議を続ける為、ゴホンと咳払いをしてゲッシュは告げた。

「えー、アクシデントもありましたが、我ら探索者ギルドの代表の紹介は以上です。それでは次にホストであられるこの城の城主、クロスメリア王国・国王アルス陛下とそのご息女であられるカタリナ殿下、そして臣下の方々のご紹介をして頂きたいのですがよろしいでしょうか？」

「ああ、構わないよ」

そしてゲッシュが座り、代わりにアルスが立ち上がった。

「それではまず私から自己紹介させてもらおう。私はアルス・クロスメリア、このクロスメリア王国の国王であり、称号…勇者である者だ。故に“勇者王”などと過分な二つ名で呼ばれる事もあるね」
落ち着いたにこやかな表情で告げるアルス。

周囲の視線を気にすることもない。

流石に称号…勇者で国王ともなれば、いくら周囲の者達が特殊だとはいえ、その視線に萎縮することも無いのだろう。

羨ましい限りだとゲッシュは内心思う。

ただ、アルスの視線はどうやらスレイに集中しているようである。先程の事態を引き起こしたスレイの足下のディザスターではなく、スレイ自身に向けられたどこか面白そうな視線。

それに何か厄介事の種を感じ、ゲッシュは頭が痛くなる。

運勢…Gというのは、こういう厄介事も引き寄せるものなのだろうか、などと疑問に思う。

そんな中スレイは静かに思考を加速させていた。

何やらアルスが自分に向けてくる意味ありげな視線。

やや気にはなるが、今は気にしても仕方無いだろうと、素直にアルスを観察させてもらう事にする。

なるほど、これは本物だ。

始めに浮かんだのは純粋な感心の念だった。

純粋な剣士という訳ではないが、おそらくは剣と盾を用いた戦闘術が主体だろう、立ち姿や、その重心、肉体のバランスなどから目測するに、超一流と呼ぶに値する技量の持ち主だろう。

分野こそ違えどクロウにも劣るまい、これは確かに鬼刃ノブツナと並び称されるに値する。

何より3つもの究極級のシークレットウェポン。

全てが究極級としても異常な領域にある。

どのような効果までは楽しみが薄れるので推測するのも止めておくが、全てとんでもない効果を持つと一目で知れる。

これはもう、探索者としては超一流の領域すら超越しているかもしれない。

器の大きさは折紙付きだろう。

為政者としての優秀さまでは分らないが、この圧倒的なまでの威風。

その輝きは人を引き寄せ、圧倒的な力で人を率いて行く男、王道を行く男だと見るだけで理解できる。

これはまた、色んな意味で楽しめそうな好敵手だ。あそびあいて

そう内心笑うと、スレイは思考の加速を切った。

「さて、続いて私の娘を紹介させてもらおう。実にお転婆極まりなく、18歳で王城から出奔し、迷宮都市アルデリアで探索者となり、たった5年で勇者の称号を得て城に戻って来て近衛隊の隊長となった、才能だけなら私以上の化物と言っても過言ではないじゃや馬姫だ。世間では“姫勇者”などと呼ばれているらしいね？クロスメリア王国・第一王女カタリナ・クロスメリア」

「どうも、皆さん、カタリナと申しますわ。お父様の戯言は本気にせず、どうぞよろしくお願い致しますわね」

カタリナがこめかみに青筋を浮かべながら悠然とやはり王者の威風を持って立ち上がり優雅に礼をするとしとやかに席に着く。

どうやら父親の言葉に相当異論があるようだ。

だがその瞳が向いている先にゲッシュは気がつく。

カタリナの視線は情熱的な色で以ってスレイに向けられていた。なんとなく、ああまたか、とゲッシュは諦めた心地になる。

どうやら王女とまで何時の間にか“そういう”関わりを持っている

たようだ。

スレイという青年に関しては、そういう方面でも、もはや何があっても驚くまいとゲツシュは強く決心する。

また思考を加速させるスレイ。

カタリナ王女。

久しぶりに見るが、やはりこの場でも飛び抜けた、規格外の美女の一人だ。

標準的なハイエルフと同等の美貌だろう。

しかもハイエルフには無いような圧倒的な色香を漂わせている、それでいながら陽性の美女。

人の上に立ち人を率いるのが当然といった太陽の様なオーラは父親から引き継いだものだろうか？

武器は噂にも聞き以前も見たようにハルバード、技量は一流の領域に過ぎないと見えるが、これは単純に経験不足の問題だろう。

才能や潜在的なカリスマ性は、アルス王すら超える物を感じる。

そして経験不足でありながら探索者としては既に超一流、流石だ。だがまあ、まだ敵として味わうには未成熟か。

しかしこれほどの規格外の美女、是非ともモノにしなければ、などと考えつつ、思考の加速を切った。

「続いて、同じく称号・勇者にして、まあその内カタリナに抜かれるだろうが、今の所はこの城で、私に続く二番手の実力者。近衛隊副隊長“狂風”ジルドレイ・アステッド」

ジルドレイはやや呆れたような表情で主であるアルスを見て立ち上がり、無造作に一礼して座り直す。

ジルドレイの視線もスレイに興味深げに向けられているのを見て、いったいスレイは何をやらかしたのかとゲツシュは胃に痛みを感じる。

スレイはまた軽く思考を加速していた。

狂風ジルドレイ。

以前に剣を合わせたが、剣士としてはやはり一流止まりといった

ところか。

近衛隊の副隊長でさえこれなら、イレギュラーなアルス王は除き、称号…勇者の本領とは本来称号…勇者専門の装備である究極級アルテマのシークレットウェポンの力を扱う事にあるのかもしれない。

まあ、尤もカタリナを除けば、称号…勇者の優位性は、その経験にもあるのだろうか。

流石にクロウにまでは及ぶまいが、SS級相当探索者達の殆どは経験的に超えているように思える。

考えていると、ふいに、称号…勇者の者達が全員、自らに仕掛けている種に気付いてしまう。

これはまあ、なんとも……。

わざわざ研究させたのだろうか？

流石というべきかなんというべきか。

なににせよ、探索者としては当然超一流だ。

さて、風剣ミストラル、その力、どれほどのものか？

剣技に期待できない以上は楽しみはそこだな、と思うと思考の加速を解除した。

「さて次に、同じく称号…勇者であり、近衛隊所属、“闘仙” マグナス・スライカン」

30代ほどに見える、落ち着いた風貌の、スキンヘッドの黒い瞳の男が静かに立ち上がり、一礼して静かな仕草で席に着く。

再びスレイは思考を加速する。

ふむ、と思う。

闘仙マグナス。

やはり技量は一流止まりだろうか。

だが魔闘術ぐらいいは極めているだろう。

どんな姿だろうか？

格好良いと楽しいのだが……と脱線してしまった。

ともかく経験と仕掛け、この2つについてはやはり面白い。

そして何より、やはり究極級アルテマのシークレットウェポン、神拳スパ

ルタクス、この力がどれほどのものか？

やはりそこに落ち着き思考の加速を解除する。

「続いて、また称号…勇者であり、近衛隊所属、“火炎姫”マリア・フレイム」

燃えるような赤い髪に赤い瞳の挑発的な視線をした20代後半に見える美女が勢い良く立ち上がり傲然と一礼して席に戻る。

またも思考を加速するスレイ。

火炎姫マリア。

二つ名通りに情熱的な髪と目の色合い。

それだけでなく、その扇情的な服装も、その表情も、何もかもが情熱的だ。

これはこれでそえられるな、とスレイは笑う。

やはり彼女もモノにしたいところだ。

そう考え、次は実力を測る。

火の属性に偏っているのは分かる、だがやはり一流止まりであろうか？

だが経験と仕掛けは他の4人と変わらない。

とりあえず、炎の精霊王の加護、これだけは彼女には隠さなければいけない、と思う。

何となく嫌な予感、というよりここまで来ればもう確信だろう。

だが、それを餌に、などとも考えてしまう辺り、我ながら人ではないか、と笑う。

そして見た、究極級シークレットウェポン、炎杖カグツチ。

これは、と思わず戦慄する。

神殺しの神の死体を素材とした杖。

脳裏に瞬時に情報が浮かび、すぐさま、脳の情報遮断する。

危ないところだった、せっかく楽しめそうな玩具なのに、種が分かっては面白くない。

このぐらいなら問題無いだろうが。

とりあえず、炎の精霊王の加護のある自分でさえ支配できない炎

が、あの周囲に広がっているのは認知した。

それで十分だ。

女としても敵^{あそびあいて}としても楽しめそうだ、とおもいつつ、思考の加速を解除した。

「次に、生まれついでての職業…勇者、近衛隊所属、ヤン・ブレイブ」
茶髪茶瞳のプライドが高そうな10代後半の青年が傲然と立ち上がり礼をすると何かを言おうとするが、アルスが視線に力を込めると口を噤み席に戻る。

「続いて、同じく生まれついでての職業…勇者、近衛隊所属、エミリー・ブレイザー」

軽いウェーブがかかった茶髪茶瞳の周囲を蔑むような眼をした10代後半の美少女が、同じく傲然と立ち上がり礼をして、彼女もまた何か言おうとするが、アルスが鋭い視線で制すると、そのまま席に着く。

先程から何なのだろうか、とゲッシュは気になるが、生まれついでての職業…勇者の三人について、集めた情報から、きっとろくでもないことを言おうとして、それをアルス王が制しているのだろうと判断する。

別の意味での問題児を抱えているゲッシュは、なんとなくアルス王に共感を覚えた。

「最後に、また同じく生まれついでての職業…勇者、近衛隊所属、ライバン・クロステッド」

金髪碧眼の傲慢そうな10代後半の青年がまたも傲然と立ち上がり、彼もまた何かを言おうとして、アルスの険しい視線に黙り込んだまま、席に座った。

ここでやっとスレイは思考を加速する。

今回の場合、1人1人を見定める必要が無いと判断したのだ。

実力は二流だな、と全員を見やり溜息を吐く。

紅一点の少女も、美少女は美少女だが、なんというか、自分を分かってない感じが残念だ。

あのレベルでも、きちんと自分を分かった上での洒落などをしていたら守備範囲だったのだが、と切って捨てる。

経験も不足に過ぎ、仕掛けも無い。

噂の封術とやらも、使い手がこれでは、宝の持ち腐れだろう。

装備である究極級のシークレットウェポンも同じだ。アルテマ

3人全員が同じ物な所為で、見る目が無い物は見縊るだろうが、あのシークレットウェポン、勇者シリーズは、面白い特徴を持っているようだ。

それが何かまではただ“見る”だけでは分からないが、相当な物だと感覚が言っている。

だがそれもまた持ち腐れ。

勿体無い、と溜息を吐きつつ、スレイは思考の加速を解いた。

「さて以上、私も含めて8名が邪神対策における我が国の代表と考えて貰って構わない。よろしく頼むよ」

そう告げると、片目を瞑りウインクなどしてみせつつ、アルスは悠然と席に座る。

再度ゲッシュが畏まって立ち上がり、ゴホンと咳払いをする。

その様子を眺めつつ、スレイは再び茶のお替りを要求しつつ、侍女を再び口説いている。

やや頬の赤みの強さと、赤くなっている時間が増してきた侍女。

あれだけの堅物そうな相手を、いったいどれだけ情熱的な言葉で口説いているというのか。

自陣営のサクヤ以外の女性達の様子を見ないようにしながらまたも溜息を吐くゲッシュ。

そして悩みながらも次に話を振る相手を考え、そして意を決して告げる。

「それでは、次に、この場に最初にいらっしやいましたシチリア王国とデイラク島の方々にご紹介をお願い致します」

あくまでこの場に来た順番であると告げる事で、ゲッシュは何とか角を立てずに話を振る。

「ふむ、ノブツナ殿。私達から自己紹介を始めさせてもらっても構わないかな？」

「ああ、順番なんか気にしちゃいねえから構わねえぜ」

ノブツナの了承を取ると、灰色の短い髪に碧眼の無表情な壮年の男が立ち上がる。

「それではまず私から自己紹介をさせて貰おう。私はシチリア王国国王アイス・コルデリア。何故か理由は分からないが“氷王”などと呼ばれているらしいな。よろしく頼む」

淡々と無表情なままに告げるアイス。

全くといっていいほどその表情は動かず、視線は絶対零度の冷たさを感じさせる。

その視線に職業・勇者の3人が何処か怯えたような表情になる。もつともアイス自身に自分がそのような視線をしているという自覚は無いのだが。

周囲からいくら見られても全く動じた様子の無いその様子に、ゲツシュは羨ましく感じる。

そこで思考を加速したスレイは自らの故国の国王を見やる。

確かに冷然とした能面の様な無表情だ。

瞳も一見冷然としているように見える。

だが確かにその瞳には温かみが存在した。

国王たるに相応しい深みと器も感じる。

そして彼が成した事を思い出す。

これが、自分の故国の国王か。

スレイをして感慨深い思いを抱かせるだけの男であった。

穏やかな気持ちでスレイは思考の加速を止める。

「そして、我が国の宮廷騎士団長と宮廷魔術師団長を兼任する、我が国の要、“魔狼”フェンリル・ノースエッジ」

自らの主の言葉と共に灰色の腰まである髪と灰色の瞳を持った美女がしなやかな仕草で立ち上がり礼をするとそのまま席に着く。

スレイは思考を再び加速する。

魔狼フェンリル。

やれやれ厄介な事だ、と改めて思う。

仕官などする気のないスレイとしては、2人の師から聞いていた相手とはいえ、目を付けられるのは気が重い。

だが、とフェンリルの容姿を見やる。

なるほど、魔狼の二つ名に相応しくしなやかでシャープな美女だ。それでいて胸は大きい。

女としては是非モノにしたいところだと思う。

実力については、剣技も魔法も極めてるが故にどちらも一流止まりといったところか。

だが、組み合わせでの戦いはどうか未知数だ。

あと魔法、明らかに水氷魔法が得手とを感じるが、何か違和感がある。

それと乗騎として、自らと同じ名を持つ、シチリア王国内の絶対凍土に棲まう、魔狼フェンリルを召喚するのだったな、と思い出す。シークレットウェポンは、ミソロジー剣技と魔法の使い手に相応しく、剣と杖、しかも両方とも神話級か、と見定める。

やはり女としては物にしたいが、あそびあいて敵としてはどれだけ楽しめるか？そんな感想を抱きつつ、思考の加速を解除した。

「以上、私を含めて2名が我が国の代表となる」

そしてそのままアイスは席に着くとノブツナに告げる。

「それではノブツナ殿、続いて頼む」

「おう」

ノブツナは軽く返事をする、そのまま立ち上がる。

「俺はノブツナ・シュテン、“鬼刃”ノブツナなんて呼ばれてるな。そこのガキみたいになりしたクロウって爺の息子で、一応ディラク島でも最大の規模を誇る国の国主をやってるからディラク島代表と考えて貰ってかまわねえ」

伝法な口調の自己紹介に一部の者が眉を顰めるが殆どの者は気にした様子も無い。

名指しされたクロウなどはやれやれといった様子である。

だがノブツナの隣に座る美少女は恥ずかしそうに身を竦めていた。ここでスレイはまた思考を加速する。

今度はかなり期待していた。

鬼刃ノブツナ。

そしてほう、と感嘆する。

期待通り、いや期待以上だ。

紛れもなくその刀術の技量、経験共にクロウと同等。

それでいながらクロウとは異質の刀術を使うと明らかに分かる。

大体にして武器は長大なシークレットウェポンのディラク刀が一刀のみだ。

それだけでもクロウとの違いは明白だ。

何よりそのシークレットウェポン、究極級^{アルテマ}、降神刀フツノミタマ。

名だけでその力が理解できてしまうのが残念だが、これはまた規格外に過ぎる。

なるほど、確かに剣神の正規の最高傑作というだけはある。

そしてそれを、勇者で無い身与えられたイレギュラーなノブツ

ナという存在。

こいつは喰いでのありそうな好敵手^{あそびあいて}だと獰猛な笑みが浮かぶ。

あわてて鎮めつつスレイは思考の加速を切った。

「次に、俺の娘のシズカ・シュテン。特に戦える訳でもないのに何故かついて来ちまったんだが、よろしく頼む」

「どうも、シズカ・シュテンです。父が大変不調法ですみません。

父に代わって謝罪させていただきます。それと、父はこのように言っています、探索者ではありませんが一応小太刀二刀流と方術の心得はありますので、戦う事は可能です。どうぞよろしくお願いいたします」

ストレートの黒髪に黒い瞳の雪のように白い肌の美少女がしとやかに立ち上がりつつましく礼をして、ノブツナの不作法を詫びる、と同時にノブツナを睨んだ。

その台詞と態度に、一同は何故シズカがノブツナについてきたのか、つまりシズカの役割がノブツナの手綱を引く事だと悟った。

一方娘の台詞に苦い顔になるノブツナ。

そのまま恥ずかしそうに席に座るシズカ。

そこでスレイはまた思考を加速させてシズカを見る。

先ほど見た時もあったが、黒髪と白い肌のコントラストと、そのディラク風の巫女装束の調和した、やはり神秘的な美少女だ。

同じ神秘的でもマリーニアが大陸風なのに対し、シズカはディラク風と対照的か。

なんにせよ、この清楚さ、やはりモノにしたいと思う。

などと思いつつ、自分の思考のワンパターンさに、流石にスレイは苦笑する。

ノブツナへの態度を見る限り、性格的にはかなり生真面目で厳しそうだ。

とりあえず、探索者でない以上、現時点では敵^{あそびあいて}としては不適合。結論と同時、加速を切った。

「まあ、以上2名がディラク島の代表ってことで、よろしく頼むわ」
告げて、ノブツナは荒々しく席に座った。

そんなノブツナを睨むシズカ。

その様子にまた、なんとなく共感を感じてしまうゲッシュ。

再度ゲッシュは立ち上がる。

「それでは次に晃竜帝国の方々にご紹介をお願い致します」

そして再びゲッシュが座り、代わりに黒髪黒瞳の壮年の威厳ある男が立ち上がる。

「ふむ、それではまず私から自己紹介させて頂こう。私は晃竜帝国が皇帝、竜皇ドラグゼス・ドラグネス。当年きって205歳のまだ若造だが、よろしく頼むよ」

どこか軽いユーモアを交えたような態度でそう告げる。

実際探索者でもないただの人間ならば205歳というのはとんでもない高齢だが、竜人族ともなれば205歳というのは本当にまだ

まだ若造に過ぎない。

そこらへんの年齢感覚の違いを使ったユーモアである。

当然ここでも加速するスレイ。

そして観察。

竜皇というだけあり、若いとはいってもその威厳は相当な物だ。

一部の地域では神聖視までされているだけはある。

しかし流石に技量もそれなりに伴っているようだが、まだ一流止まりと言ったところか。

竜人族としては若い部類だけあり、生来の力頼りからは抜け切れていないようだ。

竜化すれば、ここにいるかなりの者が勝てない程度にはなるだろう。

天狼と並ぶぐらいだろうか？

はて、敵^{あそびあいて}としてはどれほど楽しめるか？

そう思いつつ解除。

「次に我が娘達の紹介をさせて頂こう。まず我が長女、世間では“闘竜皇女”などと呼ばれているお転婆娘のイリナ・ドラグネス」

「どうも。オレがイリナ・ドラグネスだ。よろしく頼む」

勢いよく立ち上がり力強い礼をする見事なまでに煌く長い黒髪に意志の強さを感じさせる黒い瞳の、まるで強さが人の形を取ったかのような美少女。

その瞳は今、好戦的な色を宿してスレイを見つめていた。

ゲッシュは、この円卓の間に入って来た時、彼女がスレイに対し『久しぶり』と言っていたことを思い出し、またか、と諦観を以って受け入れる。

再び加速。

やはりイリナは相変わらず強さを具現したような美少女で、性格は面倒臭いが女性としては興味深いとスレイは思う。

服装も明白に竜帝国様式の武術着ではあるのだが、黒という色と身体のラインをはっきりと浮き立たせる身体に張り付いた様子は

扇情的で素晴らしい。

だが戦闘者として見るならば、今にして見ると生来の力任せで技量が全く伴っていない。

などと考え、彼女と戦った時の自分などはそれこそ生来のスピードに任せた回避と連撃の手数押しのみ。

知っていたのは剣の握り方と振るい方ぐらいで、型の一つも知らなかったと苦笑する。

気を取り直し、彼女が竜化したとしても、ここに居る中でも上位の者達なら殆どが倒せるだろうとも考える。

まあ女性としてはモノにしたいが、敵として^{あそびあいて}はもう不足かな、などと考えつつ解除した。

そのままイリナはこれまた勢い良く席に座り、ドラグゼスが続ける。

「続いて我が次女、これもまた世間では“癒しの竜皇女”などと呼ばれている、まあ、我ながら良くできた娘だと思っている、エリナ・ドラグネス」

イリナが不本意そうな視線をドラグゼスに向ける中、たおやかに立ち上がる白髪に赤い瞳のアルビノの美少女。

静かに一礼し、そのまま上品に座り直す。

スレイは再び思考加速。

エリナはアッシュの恋人とは思えない程に出来た少女に見えた。

儂げな美少女でありながら、芯はとても強そうだ。

外面も内面も魅力的と言えるだろう。

だがまあ、アッシュの恋人であるので、女性としての興味は湧かない。

戦闘者としては論外。

治癒の力には何やら特殊な秘密がありそうだが……。

などと考え、ふと強く“視て”しまう。

^{あそびあいて}まあ敵でないなら、“識る”のも問題無いだろうと考えてなるほど。

スレイは理解した。

魂と肉体の不適合、どうやらこれが治癒の力と、竜化が不可能な理由らしい。

魂がどうやら輪廻の輪の奔流に解けきらなかった癒神イアンナの寵愛者の物が大部分を占めているようだ。

80%程だろうか。

流石に神の寵愛者ともなれば、魂が解けるのにも時間が掛かる。

まあ、永遠に解ける事の無い自分の魂の様な特別製とはまた別だが。

ともかく偶然解けきらぬ内に、他の僅かの魂と混ざりすぐに転生してしまった訳か。

竜神に創造された種族の肉体と癒神の寵愛を殆ど受けたままの魂。それは魂と肉体にズレも出るだろう。

だがあくまでスレイは戦闘者、これまた興味の埒外だ。

何かあるなら恋人のアッシュが対処するだろう、まあアッシュから頼まれたならその時手助けしてやればいい、と言う事で片付けて、思考加速を解除した。

「以上3人が我が晃竜帝国の代表となる」

そして席に着くドラグゼス。

またゲッシュが立ち上がり告げる。

「続いて、フレスベルド商業都市国家の方々、ご紹介をお願いいたします」

ゲッシュが座ると同時に軽快に立ち上がる赤い髪に茶色い瞳の明るい雰囲気のある男。

「どうも、始めまして。フレスベルド商業都市国家の議会で議長を務めさせてもらっているカイト・ギルスだ。一応S級相当探索者でもある。だから“商王”などという二つ名で呼ばれているね、よろしく頼むよ」

明るく告げてウインクなどしてみせる。

加速するスレイ。

まず警戒心が湧きあがった。

先ほどは背負っているダマスカスの弓の所為で、あの、クロウですらも対処できたかどうか怪しい様な狡猾な罠を仕掛け、馬車に襲撃を仕掛けてきたライナという男を思い出したのだが……。

どうも、その瞳の明るい色の中に混ざる暗い狡猾さにも、あの男と同じ匂いを感じる。

しかもライナは所詮表で名前を知られているぐらいなので、SS級相当の実力を既に持ち、更に戦術レベルではクロウにすら対処の難しい狡猾さを発揮してはいても、おそらくは裏の世界での、戦いとは別の抗争では小物だと思われる。

それに対し、このカイトという男は戦術・戦略レベル、政争から謀略まで、相当な狡猾さを発揮するだろうと感じる。

しかも相当がめつそうな印象まである。

先ほどディザスターやフルールに向けた目など……。

スレイにとってみれば、面白い敵では^{あそびあつて}ないが、面倒臭そうな相手だという印象が強い。

しかもつまらない小細工の武具まで持っているようだし……。

まあ、何があってもどうとでもしてみせるが、そう思うと共に解除する。

「次に我が娘、アリサ・ギルス」

軽く立ち上がり礼をする、カイトと同じ赤髪をポニーテールにし、同じく明るい茶色い瞳をした美少女。

そのまま少女は軽く席に着く。

再び思考を加速させるスレイ。

赤毛の明るい印象の美少女。

その明るい瞳は、先ほどのディザスターとフルールへの目つきから分かるようにがめつさは感じるし、それなりに狡猾そうではあるが、カイトやライナのような陰の気が全く無い。

陽気な狡賢さと言ったところだろうか。

先ほどは少々挑発の為にそのかわいそうな胸に対し同情の視線を

向けてしまったものだが……。

悪くは無い、いや良いと思う。

胸はともかくその見目麗しさは中々の物だ、男達を惹き付けてやむまい。

ただ、今は女として目を付けるのも、見切るのも、どちらも止めておく。

ダリウスとの関係が読めないのだ。

今のところは家族のような親しさに感じるが、そこに恋愛感情が混ざるのかどうか？

いくらでも、どちらにでも転びそうな按配だ。

まあ、暫く様子を見ようと思い、思考の加速を解除した。

「まあ、今は大人しくしてるが、ちょっとやそつとじゃ扱いきれないような娘だね。この娘を扱いきれる自信のある男を募集中だから、よろしく頼むよ」

そんなことをほざいた父親カイトに娘のアリサが立ち上がると、どこからか取り出したハリセンで父親の頭を思いっきりはたく。

「何を言ってるのよ父さん！！」

と、アリサは周囲の視線に気付き、そのまま恥ずかしそうに座り、縮こまる。

図らずも、父親の言葉を行動で肯定してしまった形である。

「ハハハッ、ご覧の通りだね。いったい誰に似たんだか？」

「父さんに決まってるでしょ」

小声でアリサが突っ込む。

「続いて、私が個人的に雇っているSS級相当探索者“閃光”ダリウス」

黒髪に茶色い瞳の、どこか人生に疲れたような表情をした男が、しかし隙一つ無く立ち上がり一礼する。

そのままやはり隙一つ見せず座り直すダリウス。

再度思考加速するスレイ。

閃光ダリウス。

一目見てスレイは驚嘆する。

正直、彼には驚かされた。

SS級相当探索者の中でも特別有名な訳では無い。

だがどうだ？

紛れも無く探索者としても剣士としても超一流。

刀ではなく大陸の純粋な剣を扱う者としては始めて見る超一流の剣士だ。

と、アルス、クロウ、ノブツナ、ダリウス、と彼ら4人は紛れもなく天才なのだろうと考える。

同時に、ジンの事が思い浮かんだ。

彼も紛れもなく天才だった。

あの時は漢の浪漫に柄にも無く興奮してしまったが、冷静になると良く分かる。

刀剣と魔法、分野こそ違うが、紛れもなくこの4人に匹敵する技量だろう。

いや僅かに技量は劣っているかもしれない。

だが1番の天才を選ぶのならば、確実にジン一択だ。

天才の本質とは才能だけではない。

“閃き”即ち劇的な発想が無ければ、真の意味で壁を越える事は出来ない。

この世界ヴェスタの生命の情報全てを内包した系統樹の概念を具現化するなどという発想。

その系統樹を丸太として、更にドリルとして加工するなどという発展的な思考。

常軌を逸した、常人には決して理解できない馬鹿げたその“閃き”。

それこそが真の天才の証明と言えるだろう。

今更ながらにあの男の真価を理解する。

と、何故か少しばかり考えが脱線してしまったが、何やら不幸才ーラを絶賛漂わせ中だが、この男が紛れもなく超一流の強者なのは

間違い無い。

こいつも喰いでのありそうな好敵手あそびあいてだな、とスレイは笑う。

さて、アリサとこいつはどう転ぶんだろうな、などと余計な事も考えつつ、思考の加速を解除した。

「まあ、私と娘がこんなで暴走気味だから、そのお目付け役みたいなものかな？ 彼が居て実に助かっているよ」

「分かってるん但至少は自重してくれ！！」

思わず叫んでしまったダリウスは周囲の視線に気付き、黙り込むと疲れたような溜息を吐く。

「まあ以上3名が、フレスベルド商業都市国家の代表と考えてもらって構わない。よろしく頼むよ」

そしてまたカイトはウインクなどしてみせて軽快に席に座った。

どこか、場違いなコントを見せつけられたような空気が周囲に漂う。

尤も、この空気すら、カイトが作り出した物と考えたと、スレイとしては疑惑しか感じられないのだが。

慌ててゲッシュは立ち上がると、続きを促す。

「それでは続いて、聖王猊下とお付きの方々、ご紹介をお願い致します」

眩いばかりの黄金色の長い髪と黄金色の瞳を持った、豊かな胸の絶世の美少女が立ち上がる。

「どうも始めまして、わたくしヴァリアント聖王国の王とヴァレリア教の最高司祭を兼任させて頂いています、イリユアと申します。よろしく願いますね」

軽く礼をするとその豊かな胸が揺れる。

それに眼を奪われる男達。

途端イリユアの隣に座っていた金髪碧眼の美形の男が険しい眼差しで周囲を見て、んんつと喉を鳴らす。

そこでスレイは思考を加速する。

聖王イリユア。

なるほど確かにオーラが違う。

それにやはりここに居る中でも飛び抜けた美貌の美少女の一人だ。先ほども思ったがカタリナと同じく標準的なハイエルフにすら匹敵する規格外の美貌である。

ただし対極を成すのは魔王サイネリア。

それは置いておいて、あの大きな司祭服さえ押し上げる胸。

神々しい光の如きオーラと清純さとのギャップで、実に扇情的だ。男達が皆、目を奪われたのも仕方の無い事だろう……勿論自分も含めて。

これだけの規格外の、しかもオーラも違う美少女、是非ともモノにしたい。

特にあの胸など……思わず暴走しかけた思考を静止して、スレイは加速を解除した。

仕方無さそうに喉を鳴らした男を見やるイリュア。

そして続ける。

「続いて、わたくしの兄で、わたくしの護衛役である“聖剣”ヴァリアス」

周囲を睨み喉を鳴らした男が立ち上がり一礼すると、また周囲を険しい視線で睨んでから、席に座った。

スレイは加速。

聖剣ヴァリアス。

見た限り探索者としては超一流、しかし剣士としては一流といったところだろうか？

ただし聖王の守護者のみが受け継ぐという聖剣技には興味がある。

五つの剣理を超えた超剣技。

是非とも見てみたいものだ。

だが、とスレイはヴァリアスをじと目で見る。

あれはシスコンだ、どうしようもなくシスコンだ、紛れも無いシスコンだ、超シスコンだ。

聖剣シスコンなどと呼びたいところだが自重しよう。

解除。

「ここからは中央の都市国家群で活躍されているSS級相当探索者の方々になりますが、今回はわたくしについて来て頂きましたので、わたくしが紹介させて頂きますね。まずはSS級相当探索者でもクロウ様達が復帰されるまでは最古参として名高かった“拳聖”オウル様」

壮年にしか見えない茶髪茶瞳の男が立ち上がり一礼して席に着く。加速。

ほう、と感心する。

流石はクロウが復帰するまでは最古参のSS級相当探索者と呼ばれていただけはある。

その闘術は超一流の領域だろう、しかも先ほども思ったがクロウと同じく経てきた経験が違う。

そして間違い無く魔闘術も極めている筈。

いったいどんな姿になるのか。

格好良ければいいんだが……いかん、また脱線したとスレイは思考を切り替える。

ともかく、あとは、あのシークレットウェポンのセスタス。

実に面白い特徴を持っているようだ。

それこそ酷く応用性に優れているようで、オウルのその経験を活かせばどれほどの事をやってのけるのか。

面白そうだと笑い、解除。

「次に知者として名高いSS級相当探索者“賢者”アロウン様」

無造作に長く伸ばした茶髪に黒い瞳の男が周囲を興味深げに眺めながら立ち上がり一礼して座り直す。

再び加速。

やはり知性に溢れた目をした男だ。

どこかシエルノートの分体を思い出す。

まああんなに邪悪でもあんなに突き抜けてもいないが。

ともかく先ほども思ったように、一度語り合ってみたいものだ

思う。

あの魔導科学製の眼鏡はどんな機能を持っているのか。

それに時間魔法に特化した魔術師というのも極めて珍しい。

ただ、性格的に、戦いには向いていないようだ。

何せ迷宮での時間魔法を使った過去の遺物の研究がライフワークと聞いている。

迷宮に潜る以上、戦いも経験はしてるのだろうが、多分必要最低限だろう。

そうになると、やはり敵^{あそびあいて}としては不適合か。
解除。

「続いて、傭兵国家グラスベルの国王でもあられるSS級相当探索者“傭兵王”グラナル様」

黒いざんばら髪に黒い瞳、無精髯を生やした粗野ではあるが野卑ではない、そんな印象の男が立ち上がり、一礼すると席に乱暴に座る。

再び思考を加速するスレイ。

先ほども思ったが、このグラナルという男、どうも野望を持つという一点では自分と相似形に思える。

どういう野望かまでは知らないし興味も無いが。

ただし自分より器は大分小さい。

そして一流だとは思うのだが、一対一の決闘よりは、戦場で兵を率いて戦う事に向いていそうだ。

まあそれならそれで、敵^{あそびあいて}としては、彼が率いる一軍と戦っても構わないのだが。

だが逆に軍が邪魔になる可能性が高くてそこが悩みどころだ。

彼の近くに戦いに付いてこれるような精兵が居ればいいのだが。

そう思いつつ、解除。

「次にその数々の英雄的な行動で知られる“英雄”ブレイズ様」

金髪碧眼の爽やかな正義感溢れる表情をした男が立ち上がり一礼すると、静かに座り直した。

再度の加速。

ふむ、と思う。

やはりブレイズという男はグラナルの天敵と言った感じか。

野望を持つ者を阻む為に居るような男。

だからこそ英雄などと呼ばれるのだろう。

だが、自分とはやはりぶつかり合う気がしない。

まあ、自分の野望があまりに馬鹿げて、世間的にはアホらしいとか言われる類の物だからなのだろうが。

恐らくブレイズも、自分の野望を聞けば困ったように苦笑する事だろう。

あそびあいて
敵としてはグラナルと似たような感じだ。

対極にして相似とはまた良く出来ている、と思う。
再び解除。

「最後に女性でありながらSS級相当探索者であり、“毒蜂”と“毒蜘蛛”の二つ名を持つミネア様」

黒髪黒瞳で何処か陰を感じさせる暗い雰囲気を持つ絶世の美女が立ち上がり一礼するとそのまま音もさせずに席に着く。

スレイは少しばかり焦りを感じさせるぐらいの勢いで思考を加速させた。

毒蜂あるいは毒蜘蛛ミネア。

やはりカタリナと同じく規格外の、ハイエルフに匹敵する美貌の持ち主。

だが陰性の美貌で、まさにカタリナと対極。

絶対にモノにしたいと思う。

だがそれ以上に、今スレイの頭を占めるのは彼女との戦闘だ。あそび

彼女の戦闘方法はあまりに有名だ。

かつて大陸最大の闇と呼ばれた巨大暗殺組織があった。

それを潰したのはただ一人の幼い少女。

その組織には、オリハルコンの操糸術という、あまりにも異常な戦闘術を開発した創始者、史上初めて念操絃者の称号を得た、いや

称号を生み出した女が居た。

ミネアの師だ。

唯一その技を受け継いだのがミネア。

だが何を思ったか組織は、その貴重な継承者であるミネアを、強力な毒のモンスターを大量に使っての新しい蟲毒の法の実験の被研体を選んだ。

当然反対したミネアの師だが、またも組織は何を思ったか、そのミネアの師を謀殺した。

いやあるいは彼らでさえ恐れていたのかもしれない。

オリハルコンの操糸術、そのあまりにも異端な技を。

だが結果、組織はそれ以上の化物を生み出した。

新たな蟲毒の法の実験に成功し、奇跡的に生き延びたミネアは、当然、師の仇である組織に牙を剥いた。

だが、いかにオリハルコンの操糸術があつたとしても、ただ一人の少女が、大陸最大の闇とまで呼ばれた組織に適う筈も無かつた：
：新たな蟲毒の法の実験によって得た蟲毒血が無ければ。

絶対致死のその血は、傷ついた彼女の身から流れた血が揮発した、その空気のみで、組織の人間を殺し尽くしたという。

当然、ここに居るレベルの人間であれば、その程度であれば耐えられる人間はかなり居るだろう。

だがここに居るレベルの人間であつても彼女に触れば死ぬ、間違ひ無く……自分とペット2匹を除けば。

一般人レベルならば汗の揮発でさえヤバイくらいだが、探索者の肉体のシステムを活かし、彼女は自らの身体からの分泌物を全て抑えられるようになり、常にそうしているという。

オリハルコンの操糸術。

そしてあの呪いのシークレットウェポン吸血のレイピアで、蟲毒血を有効利用した小剣術。

大陸最大の闇と呼ばれた今は亡き巨大暗殺組織で叩きこまれた暗殺術。

はつきり言おう。

ただ殺す、おそらくそれだけならば彼女はここに居る自分とペツト2匹を除いた誰よりも長けている。

彼女と戦ってみたい、純粹にそう思う。

自らの興奮に気付いたスレイは、自らの熱を冷まし、思考加速を解除する。

「以上がヴァレリアント聖王国と中央の国家群の代表となりますわ」そしてイリユアは座りながら意味ありげな視線をスレイに向ける。それに気付いたヴァリアスが厳しい視線をスレイに向けた。

どちらの視線にも構わず、マイペースに再び侍女を口説きに戻るスレイ。

「ふむ、しかし万夫不当とも言われ、山河をも軽く砕く力を持ち、實際地形を変えるような真似を仕出かしては地図を塗り替えている化物達をこんなにも集めるとは、やはりヴァレリアント聖王国は恐ろしいな」

「あら？ 同じ様な化物を一国で占有している国の王様が言っても説得力はありませんわね」

アルスとイリユアがどこか挑発的に睨み合う。

その様子にまた胃の痛みを感じながらも毅然と立ち上がり、ゲツシュは告げる。

「続いて、ヘル王国の方々、ご紹介をお願いします」

途端、円卓の空気が凍り付いた。

闇の種族の国、ヘル王国。

それは今までかつての聖戦に参加しなかった故に、世界中から敵として認知され、蔑視されていた国であった。

その代表がこの場に立つ。

人間達どころか竜人族達まで全員が緊張を持ってその様子を伺う。いや、呼んだ本人であるゲツシュは変わらぬ態度だ。

やはりその辺の偏見や差別意識の無さ、そこは他のどこの勢力のトップよりもずば抜けている。

そしてスレイもまた相変わらずで、近くの女性陣の険しい視線を完全無視して、まだ侍女を口説き続けていた。

そのままお茶のおかわりなども侍女に要求する。

闇の種族達に身構える場の雰囲気は左右されずそれに答える侍女はやはりプロであった、がややその表情が緩んできている面が否めない。

そのスレイの口説きの技量に戦慄するゲッシュと、自らの城の侍女の、特にこの場を任される程の立場の者の職業意識を知るが故に同じく戦慄するアルス。

そのような空気の中蒼いストレートの長髪に、蒼い瞳の絶世の美少女が、何も気にした様子もなく立ち上がる。

「どうも人間のそして竜人族の皆さん始めまして、わたし初代にして当代の魔王サイネリアと申します、よろしくお願いしますね」にこやかに告げるサイネリア。

だがその闇の波動は周囲の者達にプレッシャーを与える。

ディザスターほどの圧倒的なものでは無かったが、それでもやはり周囲の者達はそのプレッシャーに冷や汗を掻いていた。

特に先ほどディザスターのプレッシャーに晒されなかった戦闘能力の無い者達などは哀れな程だ。

ただ1人スレイだけは、流石に侍女が硬直してしまったので、休ませてやる意味で、今度はお茶菓子をディザスターとフルールに食べさせる作業に没頭していたが。

尤もただの人間である侍女が硬直だけで済んでいるのも、十分以上のプロ根性の現れだと感心もしている。

しかし忘れずここで思考を加速する。

加速した時間の中でお菓子をペットにやりながら、サイネリアを眺める。

先ほども思った通りやはり規格外の、標準的なハイエルフ並の美少女だ。

しかも小柄な体格に大きな胸というギャップに色気を強調したド

レスは堪らないと思う。

そのオーラはやはり聖王イリュアと対極。

2人揃ってモノにしたいと思う。

だが竜皇と同じ様に、力は天狼級ながら、技量が一流止まりといった印象だ。

そもそも魔王に関しては、始めて誕生した存在なのだから、仕方の無い事かもしれないが。

やはり敵として^{あそびあいて}はどれだけ楽しめるか謎だな。

ペットにお菓子をあげ続けながら、思考加速を解除する。

周囲からはペットにお菓子をやり続けているようにしか見えないスレイ。

そんな様子を面白そうに眺めながらサイネリアは続ける。

「それでは次に、闇の種族の吸血鬼族の長にして、約5000歳のお婆ちゃん、“吸血姫”シャルロット」

「お婆ちゃんとは酷い言い草だのう」

そう言いながら豪奢な縦ロールの金髪に鮮血のような深紅の瞳の絶世の美女が立ち上がり礼をする。

「既に陛下から紹介に与ったが、妾は“吸血姫”シャルロット。かつての聖戦時から生きておるから、知識の面では力になれると思うゆえ、よろしく頼むぞえ」

そう告げるとシャルロットは席に着く。

ここで思考を加速するスレイ。

ふむ、と見やる。

やはり彼女も規格外の、標準的なハイエルフ並の美貌を持った大人の美女だ。

だが彼女と対極を成すような者はいない。

それに同じ規格外の美貌の持ち主といっても、他の4人とはやはり何かが違う。

吸血鬼族という種族故の特徴か、それとも積み重ねた歳月か。凄絶で妖艶な色香を帯びていた。

そして同時に、純粹な力では魔王に及ばないながらも、SS級相当の限界ギリギリまでの力を感じる。

それにやはり年齢故の、経験・知識・技量など、様々な物も持っていると感じられる。

正直主である魔王サイネリアよりも、こっちの方が敵として楽しめるかもな、などと思いつつ、スレイは思考の加速を解除した。

と同時に、愚かな事を言い出す者がいる。

「闇の種族はかつての聖戦時、戦いに協力しなかったそうじゃないか」

そんなシャルロットに対し、ヤンが無謀にもそんな野次を飛ばした。

途端シャルロットに睨みつけられ、ヤンは硬直し、そのまま冷や汗をたらす。

「ふむ、確かに闇の種族は種としては協力しなかったが、妾を含め数人の者はある男に従い聖戦に参加しておるぞえ。なんならその身で試してみるかのう？」

圧倒的な威圧感にヤンはただ震えるしかなかった。

そんなシャルロットをサイネリアが制する。

「止めておきなさいなシャルロット。弱い者いじめは感心しないわよ？」

「ふむ、そうだね」

途端あっさりと視線を逸らすシャルロット。

ヤンはほっとしながらも弱い者扱いされた事にプライドを傷つけられ、唇を噛み締める。

そんなヤンを他2人の職業…勇者が侮蔑するように見ていた。

まあ、そんな2人も含め、職業…勇者3人全員を、さらに周囲の者達が呆れたように見ていたのだが。

「続いて、闇の種族、魔狼族の長にして最長老でもある“魔狼王”リユカオン。彼も約3000歳のお爺ちゃんね」

「よろしく頼む」

リユカオンはその巨体をのそりと起こすと口内の空気を魔力で操作し、人の言葉で挨拶するとそのまままた蹲る。

再び思考を加速するスレイ。

ふむ、天狼と同じ様な大きさで、毛の色は漆黒と真逆だが同じく美しい、だが力は天狼より一段階劣るな。

出てきた感想はその程度だ。

あそびあいて

敵としては、年齢故の経験もあるし、それなりといったところか。加速を解除。

そしてスレイはその毛並みに酷く興味を惹かれながら、気になったように尋ねる。

「随分と大きいが、街中で騒がれたりはしなかったのか？」

「それは大丈夫よ。この城に来るまではわたしの影の中に潜っていたしね」

「ほう、面白い術だな」

スレイは感心したようにリユカオンを見つめる。

そんな主にディザスターが自らに感心を引くように足下で転がる。

「最後に闇の種族、鬼人^{オーガ}族の長、“鬼王”ダート。150歳の若者よ」

「よろしく願います」

三つの角を持つ大男が、立ち上がり礼をすると席に座り直した。

再び思考を加速するスレイ。

ふむ、と思う。

容姿は人間とほぼ同形ながらやや異形。

力は先程のリユカオンと同程度か。

あそびあいて
ただ、経験不足で、自分に自信も無いようだ。

敵としては少々不足か。

そして解除。

「以上4名がヘル王国の代表かしらね」

そういつて、サイネリアは優雅に席へと着き直した。

そしてゲッシュが立ち上がり、一息吐くと告げた。

「それでは、皆様のご紹介も終わりましたので、これから本題である邪神対策の会議を始めたいと思います」

2話

会議の本題に入る事を宣言したゲツシュは、冷静に、現状の確認から話を進める。

「さて、皆様に知らせを出した時とは状況が大きく変わった事もありますし、一通り現状の確認をしたいと思います」

「待ちたまえ、状況が大きく変わったのだと？ いや、確かにそちらのメンバーのスレイ殿の事情は聞いたし、ディザスター殿の存在もある。しかしこれ以上、まだ何かあるのかね？」

「それも含めてこれからお話させていただきたいと思いますので、話を進めさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「……ふむ、わかった」

このような事態でも落ち着いて質問し、あっさりと引き下がるアルス。

アルスが先陣を切って動いて、引き下がってみせた事で、周囲の者もその雰囲気呑まれ、静観の構えに入る。

勿論呑まれていない者達もいるが、そのような者達なら始めから騒ぐ訳も無い。

つまり敢えて自らが動く事で、アルスは意図してこの空気を作り出したのだろうと予想し、やはり役者が違うと、ゲツシュはやや苦笑した。

「それでは続けます。現在、邪神の封印が解けかかっているのは皆様ご存じの通りです。ただ封印が解けかけているとはいっても、マリーニアの見立てによると、まずこれは酷く恐ろしい事実なのですが、本来ならば最上級の邪神は既に封印を破る事が可能なのに、思惑は全く分かりませんが何故か始めから封印を破るつもりがないらしく。そして他は上級の邪神であと1年、中級の邪神であと10年、下級の邪神に至ってはあと数十年は封印は保つという事で、あとは何とか封印の地を見つけて、職業・勇者の方々の封術により封印を

再度強化すれば、何も問題は無いはずだったのですが……2つ、問題が起きました」

「問題は無いはず“だった”？それに、2つ問題が起きた？……そういうえば、その邪神ディザスター殿は、邪神としては何級なのかね？」

話を進めると言いつつ歯切れの悪いゲッシュに、再びアルスが問いかける。

「……まず、1つ目の問題がその質問されたディザスターの事になります。幸い、ディザスターはこちらの味方となりました……いえ、厳密にはスレイの味方なのですが。しかし、我々としては残念な事に、ディザスターはあれほどの力を持ちながら、邪神としては下級なのです」

ざわっ、と場がざわめく。

先程、圧倒的なプレッシャーで以って、この場の実力者達を圧倒してみせたディザスターが下級の邪神ということに、実力者達は誰もが驚きを隠せずにいた。

まあ、肝心のディザスターといえば始めから変わらず主の足下でくつろぎ中で、その主のスレイに至っては、1人ティータイムと洒落込みつつ、未だ侍女を呼ぶ度、侍女が近づく度に口説き続けているのだが。

そしてその地道な努力は、急速に身を結びつつある。

どこまでも真面目に引き締まっていた表情は時折笑みが浮かぶようになり、頬もやはり赤らむ頻度が増え、プロフェッショナルに客人全員に対し仕事をこなすのは変わらねど、ややスレイの元へと足を運ぶ頻度が増えているように見える。

何より今の状況では、侍女に色々注文する相手などスレイぐらいのものだ。

先ほどゲッシュとアルスをすら戦慄させた、その口説きの技術は伊達ではない。

周囲の女性陣の視線も、今の状況ではスレイに向く事は無く、そ

れすらも相手の侍女の緊張を解くのに一役買っている。

この真剣な場の空気すら侍女を口説くのに利用しているスレイは、まさに不真面目の極地であった。

当然、そんなスレイは置き去りに、深刻な会議は続く。

「待ちたまえ！先程、“星詠”マリーニア殿の見立てで、下級の邪神の封印は、あと数十年は保つと言ったね？それならば、何故その下級の邪神であるディザスター殿がここに居るのかね？いや、そもそもその見立てを聞いた時から、例え下級でないとしても、ロドリゲーニの様な例外は除き、邪神が既に復活している事自体を疑問に思っていたのだが」

ドラグゼスが力強い声で質問する。

流石に、これは見逃せない事態だ。

何しろ全ての大前提が崩れている。

理由が分からなければ、邪神に関して何があっても不思議が無いと言う事にもなりかねない。

故にドラグゼスの視線はゲッシュを逃さないとばかりに見据えていた。

勿論、他の者達とて一部の例外を除けば同様だ。

ドラグゼスの視線の強さにたじろぎかけたゲッシュだが、何とか踏み留まる。

覚悟を決め、一度目を閉じ、ゲッシュは一息吐くと、キツと眦を上げ、大きな声で答えた。

「実は、それが2つ目の問題となります。これはそのディザスターから齎された情報ですが、ドラグゼス殿が例外と仰った、約二年前に復活した、“黒刃”スレイの幼馴染だった、覚醒した邪神ロドリゲーニの転生体が、他の邪神の封印を解除して回っているらしいのです。ディザスターも、ロドリゲーニによって封印から解放されたそうです」

やはり場にざわめきが巻き起こる。

当然だ、邪神が邪神の封印を解いている。

証明となる存在もこの場に存在している。

先ほどのような疑問ではない、もはやこれは誰もが戦慄する事態だ。

「ふむ、それでは既に最上級の邪神や上級の邪神の封印すら解かれているかもしれないという事かね？」

そのような事態にも関わらず、落ち着き払った無表情のままではアイスが静かに問いかける。

アイスの落ち着きぶりは、僅かとはいえ場に安心感すら与える力があつた。

アイスによって僅かに静まった場の空気に後押しされるようにゲツシュが答える。

「いえ、それはありません。先ほども申し上げましたが、マリニーアの見立てでは、最上級の邪神は何故か既に封印を破れるにも関わらず、そもそも始めから封印を破るつもりが無いらしく。上級の邪神達については先の一件のように、自分の一部を外へと送還するなど、自らの力で封印を破る為に幾つも特殊な試みを行っていて、また自らの力で封印を破る事に拘っているのです。ロドリゲーニとしては彼らに干渉するつもりはないらしいです。なのでロドリゲーニの封印の解除は、あくまで下級と中級の邪神に限られるとか」

「その情報もディザスター殿から？」

アルスの問いに重々しくこくりと頷くゲツシュ。

緊張は残しつつも、僅かに場の空気が弛緩する。

ほんの少しであっても安心材料が出たのだ、仕方の無い事だろう。

だがすぐに、そんな場の空気を引き締め直すように、鋭い声での質問がイリュアから飛ぶ。

「つまり、残り二柱の下級の邪神と三柱の中級の邪神は、既に封印が解かれているかもしれない、という事ですな？」

僅かに弛緩した場の空気が、先ほど以上に緊迫した。

先程思い知ったディザスターの力と同格の敵が二柱、それより上位の敵が三柱も既に封印を解かれているかもしれない、などと考え

れば当然である。

ディザスター一柱にさえ、この場の総力を結集しても勝てるかどうか……認めたくは無いが無理な可能性が高いと、この場の實力者達は思い知ったのだ。

理解できなかった者達も、實力者達が発する鬼氣に近しいその空気に当てられ沈黙せざるを得ない。

尤も、そんな空気を良い事に、自分の傍にそのような空気を遮断した空間を作り上げ、お茶を嗜むのは一休みし、ペット達を愛でながら、その職業意識の高さでも、流石に空気に押されてスレイの傍に無意識に近付いてしまう侍女を、スレイは口説き続けていたが。

そのスレイに与えられる安心感も相まって、侍女は今まで以上に急速にスレイに傾いていた。

この会議の空気をそんな意味で有り難がるスレイ。

もはや不真面目の極みすら越えていた。

勿論、会議は真面目に続く。

イリュアの鋭い質問、今まで以上に緊迫した空気、その中でゲッシュは丹田に力を込め、地を踏み締める様に力強く立って、その空気に対抗するように答える。

「いえ。まず、一つ訂正させて頂きます。下級の邪神はディザスター以外に、あと二柱ではなくあと一柱だけ。もう一柱は、かつての聖戦においてある男に滅ぼされたそうです」

邪神が既に一柱滅ぼされていた。

しかもそれがただ1人の男によって成された。

明かされた信じ難い事実にまた場がざわめく。

ただ1人、シャルロットのみがわかりきった事実だというように頷いていたが。

「そして中級の邪神は三柱にして一柱たる存在。実質一柱と考えて構わないそうです。その分強力な力を持つが故に中級としても最上位の存在だという事です」

中級の邪神についての知られざる実体を知り、やはり場がざわめ

く。

ただシャルロットのみがやはり既知の事実を聞いただけと言う様に落ち着いている。

シャルロットの様子に気付いたサイネリアは、問いかけるように睨みつけた。

シャルロットはやや苦笑し、後でと言わんばかりに目線でゲッシュの方を見るように促した。

不満気にしつつも、必ず聞きだすと言わんばかりに強く睨んでから、ゲッシュへと向き直るサイネリア。

やれやれとシャルロットは肩を竦める。

そんな中、空気の質が変わった事で、侍女、いやスレイはとっくに名前を聞きだしていたので内心、どこるか声に出しても既にエリシアと呼んでいたが、エリシアは、気を取り直すように真面目な表情に戻り、職務に忠実であろうと、円卓の客人達の冷めてしまっただろうお茶を注ぎ直しに、スレイの傍を離れる。

尤もスレイは、それが無理をしていると分かり、もう殆どモノにした感触を得て、内心ガッツポーズをしていたが。

だが、王城へ来る機会などあまり無いだろうから、もう一押し、時間を置いても問題無い様に、完全に堕としておきたい所だと考える。

いくらスレイが“個”として世界から隔絶しているが故に、何ものにも縛られず、完全なる自由を体現した存在だと言っても、もはやここまで来るとただの女好きでしかない。

……いや、実際その通りで、それを野望の一つとまであちこちで公言している訳なのだが。

世界にとって紛れもなく重要人物でありながら、世界などどうでも良いと考えているスレイを置いて、会議は続く。

「それで結局、もう下級の邪神と中級の邪神の封印は解かれたと考えるべきなのかしら？」

今度はサイネリアが質問した。

やはりイリユアを意識しているのだろうか？

何せ聖王と魔王。

世界の表舞台で最も輝かしい頂点に居る者と、世界でも差別された種族の頂点たる者。

光の神の最高の寵愛を受ける者と闇の神の最高の寵愛を受ける者。あらゆる意味で対極な存在だ。

実際、今の発言を受け、イリユアもまた、僅かばかりサイネリアを意識したような視線を向けた。

周囲の実力者達ですら気付かない、微妙な空気。

だがスレイは敏感にそれを嗅ぎ付けて、聖王と魔王か、両方とも絶対モノにしてやるが、この2人を同時にとか……、などと不埒な事を考えている。

闘争の場に於いての凄絶な姿など、見る陰も無かった。

だがディザスターにしてみれば、戦闘欲求だろうと性欲だろうと、どちらにしても異常を通り越した圧倒的な欲望として、自らに力を供給してくれるので、そんな姿も全肯定するが。

ただ、やはり戦闘欲求の方がかなり強いだろうか？

神々に埋め込まれた異常な戦闘本能に加え、最近気付いたのだが、スレイ自身が育んだ、神々に埋め込まれたそれを遥かに越えた闘争への飽くなき探究心が合わさり、相乗効果でとんでもない事になっている。

そのスレイ自身が育んだ闘争への探究心もまた、探索者だというのにイミテーションの欲望ではない。

全く性欲といい闘争への探究心といい、探索者としての改造により奪われた筈の本物を、しかもただの人間など比較にならない程に強く、何故持ち続けているのか、ディザスターは疑問に思いながらも面白いと感じ、スレイへの忠誠心をなお厚くする。

だが、それがいかなスレイの強さを支え、またディザスターのスレイへの忠誠心を深めるものだとしても、場に合わない不真面目な態度には変わらない。

ましてやそんなスレイの精神構造など理解できない者にとつてみれば尚更だ。

現にサイネリアに質問を受けたゲツシュは、スレイとペット2匹の周囲のみ、あまりにも場とかけ離れた空気を醸し出している事に、こめかみに青筋を立てつつ、なんとか自制しながらディザスターに話を振った。

「……ディザスター？」

『ふむ。下級の邪神、絶望クライスターの気配は感じるが、中級の邪神、三位一体トリニティの気配は感じない。どうやら現在、まだ中級の邪神の封印の解除中といったところらしいな』

「だ、そうです」

ディザスターが告げた言葉を以って、ゲツシュはサイネリアへの解答とし、それを聞いていた場の空気は微妙なものになる。

中級の邪神がまだ復活していないのは歓迎できる事実だが、下級の邪神が既に復活しているのはディザスターの力を片鱗とはいえ感じた場の実力者達にすれば戦慄すべき事だ。

しかも、ディザスターを見ている、どうも彼は邪神としては例外らしい。

伝え聞く邪神の行状からは全く想像できない姿だ。

だからこそ、他の邪神はいったいどんな行動をしてくるのか、いや今既にもう何かをしているのかも知れない。

圧倒的な力を持った世界の敵が復活しているというのに、世界に何も変化が起こっていない、その事が逆に疑問を掻き立て、場の者達を混乱させる。

「ちなみにですが」

場の空気を察し、少しでも良い材料を提供しようとゲツシュは続ける。

「本来ロドリゲーニは上級の邪神なのですが、人の身に転生することでその力は下級の邪神よりも弱くなっているそうです。それでもEX級相当の力を持つらしいですが。それと、弱くなった代わり

に今この時も使われている封印解除を含む、特殊な力を幾つか手に入れたと聞きました」

「ふむ、なるほど。そのような状況だからこそ、他の邪神の封印を解除するなどという行動に出た訳か。いや、邪神の行動を我々の常識で図っていいものかは難しいところだが。ところでディザスター殿は本当に味方と考えていいのかね？彼もまた、ロドリゲーニが解放したのだろうか？」

納得したように頷きつつ、アルスが懸念を表明する。

今の姿を見ている限り、完全にスレイに対し忠実で、心配する必要があるとは思えない。

だが、ディザスターの力は強大に過ぎる。

だからこそ、どのような姿を見ようと安心せず、常に警戒しなければならないと、称号…勇者にして一国の王たる身としては、気を緩められない。

『我は主に従うのみだ。主が望むならお前達が相手でも、最上級邪神であるイグナートが相手であろうと滅ぼしてみせよう、例え存在の全てが喪われる事になろうとも』

「という事ですので、スレイが居る限り心配は無いでしょう」

アルスの問いにディザスターは、敢えてプレッシャーは放たず、しかしその深淵の奥深くから宇宙創成の爆発の眩い輝きを放出してゐるが如き圧倒的な美しさの瞳に、どこまでも強い絶対の意志を込めてアルスと目を合わせた。

そのあまりにも強い意志の力に、名伏し難き感情を覚えるアルス。自身でも理解できないその感情。

だが一つ理解できた。

ディザスターのスレイへの忠誠が絶対のものだという事だけは。スレイの為ならば、この場に居る者達全ても敵に回す、そう本気で言ってみせた事で、自分達に対して見せ掛けの友好などそもそも見せる必要も無いのだと、アルスに理解させた。

その一時で以ってアルスはとりあえずの、一時の安心を得る。

しかしその後言った、恐らくは人間で言えば命を賭けてという意味になるのだろう、そこまでしてスレイの為なら最上級邪神だろうと滅ぼしてみせる、実際に邪神の本当の力という物を知る訳でない自分にも、その格差を考えれば絶対に不可能だと分かるそれを、本気でやると言つてのけているのを理解させるほどの覚悟の籠った言葉。

王たる身としては、ただ一人からでもこれほどの忠誠受けられるのならどれほどの喜びであろうか、そう感じさせる程のものであった。

しかも邪神たる身にそれ程の忠誠を誓わせるとは。

ディザスターを叱っているらしい……恐らくはその存在の全てが喪われるという言葉に怒つての事だろう……そんなスレイを見て羨ましいと、そしてそれを叱ってみせる主というその信頼関係は尚羨ましいと感じた。

そしてスレイとはいったいどれほどの人物なのかと、恐怖に近い感情さえ覚える。

正直、話には色々と凄いその功績や実力を聞いてはいた。

だがこの場に現れてから見ているのは、ふざけた姿ばかりだ。

少々疑いが生じてさえた。

この青年が本当にそれほどの者なのだろうか。

だが今の一時で以ってスレイに対する疑念は薄れ、なんとなく理解する。

スレイとは恐らく自分達とは見ている物も感じている物も何もかもが違う人間なのだ。

規格外、一言で言い表すとそういう事だろう、国も権力も権威も何もかも、彼にとってはどうでもいいものなのだ。

この場に來たのとて、邪神や世界の危機、などと言う事より、彼なりの何かの価値観によってなのだろう。

驚くべき洞察力で以って、ディザスターとの一事から、内心でスレイに対する理解まで深めてみせているアルスに、ゲッシュがディ

ザスターの言葉を補足するように言っていた。

尤も、もはやアルスにとって、そのような補足は不要な物だったのだが。

「それでは結局私達はどうするべきなのかな？」

カイトがこの場にありながら軽い口調で結論を尋ねる。

スレイと同じ様に不真面目なように見えるが、そうではない。

彼の瞳の奥には常に狡猾な光が宿っている、常に取っている軽薄な態度は相手の油断を誘う為の物だ。

このような場ですらそれを通すのは筋金入りだが、それを常態としていた故の失態でもあろう。

常なる癖で、この場ですらその態度を通して見せてしまったことで、この場にいる見識の深い者達は、彼という人間について、ある程度理解を深めてしまった。

当然カイトはすぐに気付き、この場の、つまり彼が常に駆け引きするべき世界の権力者達相手に、自分という人間をある程度理解させてしまった事に、その事による損失に、思わず舌打ちをし掛けるが、慌てて押し留める。

バレてしまったのなら仕方がない、もう隠しても意味が無いのだから、だったら気楽にこのまま通す事にしようと思う。

気付いてない馬鹿共は逆にいくら見せても、いつまで経っても気付かないだろうしな、と辛辣に一部の人間を内心笑うと、そのままの態度を通した。

「……そうですね。まず、既に復活している邪神、絶望クライスターに関しては、なんとかディザスター殿を中心に討伐し、次にまず最優先で中級邪神、そして次に上級と最上級邪神の封印の地を探し出して、中級邪神の封印解除前にロドリゲスを討伐後、職業・勇者様達の封術で全ての封印を最盛期のレベルまで強化する。これが最善だと思います」

「なるほどね」

僅かにカイトに警戒の視線を向けつつも、この場では問題無いと

判断し、すぐに答えたゲツシュに、カイトも他の者達も、皆が納得したように頷く。

「それで、その邪神達は大まかにはどこに封印されてるんでえ？探すつうくらいだから、そのディザスターって邪神も知らないって事だろうが、仮にも今でも恐れられてる邪神どもだ、ある程度ヒントになるような伝承の類ぐらいいは残ってんだろ？」

「それが、探索者ギルドの諜報員達を総動員し調べたのですが、何処の地域にも、全く何の伝承も伝わっておらず、逆に迷宮都市、しかも探索者ギルドの古い文献で一応の情報は掴めたのですが、全ての邪神が迷宮都市の迷宮に封印されているという事と、それが何処かの未知迷宮の最奥という事ぐらいしか……」

「はぁ？」

ノブツナの問いに対する弱弱しいゲツシュの答えに、ノブツナは思いつきり呆れたような声を出す。

表情も大げさなまでの呆れ顔だ。

「それじゃ何も分かってねえのと一緒じゃねえか？そうだ、そんな時こそあんたん所の“星詠”の占術で何かわかんなかったのか？」

「それが、かつての職業…勇者様達が、……こういつては何ですが、我がギルドの古い文献に残る記述によると、かつて邪神との戦いに身を投じていた称号…勇者様達やSS級相当探索者達、それに精霊王達や他にも様々な種族がいましたが、その中でもある男を除けば、当時10000歳を越えていたというもはや神々に近しかったその代の竜皇と並び、3人共最大の戦力の一角だったそうで」

「そいつは、また……随分と今代のとは出来が違うんだなあ？」

職業…勇者の3人を、見下すように見て言ったノブツナの言葉。

顔を真っ赤にして何か怒鳴ろうとする3人を、アルスが疲れたように手を上げて制する。

アルスの表情にやや青くなり何もいえず、そのままの3人。

「あと、そのある男ってのは何者でえ？」

「恐らく、私の想像では、その男こそが、下級邪神の石柱を滅ぼし

たある男、だと思い、ディザスターに確認を取った所、それは肯定されたのですが、何者かという件に関してはディザスターが口を閉ざしてしまい」

「はぁ？おい、その狼、何でそいつを教えねえ？」

ノブツナの質問に返されたゲッシュの答えに、ノブツナは恐れ知らずにも、ディザスターに対し喰ってかかる。

ノブツナとてディザスターのプレッシャーを感じた一人だ。

そしてこの場でも最強の一角である。

力の差を分らない訳でもないのにこの胆力。

少しばかり感心するスレイ。

だがディザスターは違った。

何せスレイに色々と面倒臭そうだから、スレイの前世とスレイが繋がるような情報については伏せるように言われている。

スレイ自身もまだ完全に思い出せた訳では無いが、前世について“識った”ある程度の記憶と、出会いの時のディザスターの言葉から、ディザスターが過去の聖戦で忠誠を誓っていたのがスレイの前世である事は分かっている。

だからこそディザスターに対するお願いだ。

ディザスターからすれば主からの頼みだ、それに触れたノブツナは即ちディザスターの逆鱗に触れたに近い。

先を越える圧倒的なプレッシャーがノブツナを襲った。

『一つ言っておく、我は過去の聖戦でその男に忠誠を誓い他の邪神達と戦った身だ。そしてその男に自らの事は話さぬ様頼まれている。我に我が忠誠を破らせようというのなら、相応の覚悟は出来ていような？』

あまりのプレッシャーに、恐怖が麻痺し、戦闘体勢に入りながらも、先ほど以上の驚愕に襲われるノブツナ。

触れてはいけない事に触れていると理解し、ここは引く事にする。ノブツナ程の男がその程度の判断を出来ない訳がない。

「悪かった、すまねえ。この事についてじゃあ今後一切聞かないと約

束する。許しちゃあくんねえか？」

『聞かぬというのであれば、何も問題は無い』

ノブツナの謝罪に、謝罪に興味は無いが、弁えるというのならば良からうと、プレッシャーを収めるディザスター。

麻痺していた恐怖が戻ると同時に、ドッと汗が噴出し掛けるのを、意識して汗腺を閉ざし、汗となりかけた水分も全て血液へと戻すノブツナ。

落ち着いた事で、話を脱線させていた事に気付き、自らが勝手に脱線した事を棚に上げ、ゲッシュに対し、再び問いかける。

「良く考えたらかつての職業…勇者や、下級邪神を滅した男なんて何も関係無いじゃねえか。で、占術はどうしたんでえ？」

「ええ、つまりその、それだけ優秀だった職業…勇者様達の封術ですので、緩み綻びが生じていてもその力は強大な物で、封じる術です。で力の気配は完璧に隠され、逆に封印から漏れ出る邪神の気配は強大に過ぎて世界全てにすら広がり、中心点が分からない程で…：つまり、マリーニアの占術でも何も“視えない”と」

「は？なんだそりゃ？完璧に隠されてるのに世界に広がってるてえのは意味不明だろうが？」

ノブツナが言うのに、とりあえずは全てノブツナに任せ様子を伺っていた一同も、一様に頷いてみせる。

「ええ、まあ。そんな矛盾すらも当然に起こすようなそれだけ無茶苦茶な力だという事で」

「はあ、意味不明なのは変わんねえが、つまり結論としちゃ、“星詠”は役立たずで、結局は何もわからないのと同然、とそういうことだな？」

ノブツナの厳しい言い草。

だがその通りなのでゲッシュは何も言えない。

同じく役立たずと言われたマリーニアも俯き黙り込むだけだ。

ケリーは姉のその姿に拳を握り締めるも、ケリーにも何も言える事が無く、また相手が自らより遥かに強大な相手な為に無謀に突っ

掛かる事も出来ず、ただ唇を噛み締める。

そんな弟子の様子を見て、やれやれまだまだだな、と肩を竦めるクロウ。

「まあ落ち着けクソ息子」

「なんだとっ、このクソジジイ！」

弟子の代わりに仕方なく、しかし妙に楽しそうにクロウが乱雑な言葉でノブツナを嗜め、ノブツナがそれに思わず強く反応する。

「ゲッシュ殿達を責めても仕方あるまい、分からぬ物が彼らを責めて分かる様になる訳ではなからうに。それよりはもっと建設的に物事を考えるべきじゃろう？」

「うぐっ」

クロウのもっともな意見に、悔しいが納得するしかなく、一つ唸り黙り込むノブツナ。

「ふむ、それではクロウ殿はこれからどうするべきだと思いますか？ここは一つ、ご教授願いたいですね」

賢者アロウンが興味深そうにクロウに質問する。

嫌味な言い方に聞こえるが、本人にそんな意図は全く無い。

ただ純粹に、ここでクロウがどんな考え方をするのか興味があるのだ。

ひたすらに好奇心の塊なのである。

勿論過ぎた好奇心が自らを殺しかねない危険な物だという事は理解している。

より多くの物事を知りたい身としてはその命は永らえたい。

それでも変えられない性分なのだ。

業が深いと心中苦笑を漏らすアロウン。

「まあ、まずせっかくSS級相当探索者や人外の強大な存在がこれだけおるんじゃ。未知迷宮を虱潰しに探索して封印の地を探し出すしかないじゃろう」

「まあ確かに、未知迷宮を最奥まで探索できる可能性があるのなんて俺達SS級相当探索者やそれ以上の力を持つ人外の連中ぐらいだ

ろうしな。だが、ただ働きてのは無体だろう？報酬は出るのかい？」

クロウの言葉を軽く肯定するグラナルだが、ここにこれだけの者が集まった理由などは無視して、当然とばかりに報酬の話を持ち出す。

「この阿呆。ただでさえこのような事態だからここにこれだけの者が集ったというのに、自らにも関係の無いこの事態に報酬を求めるのも論外だが。そもそも未知迷宮を探索すればそれだけで十分以上の収入が得られるだろうが。その上さらに報酬を求めるなど、どれだけ馬鹿だ、お主は」

オウルに叱責され、流石にオウルには頭の上がないグラナルは、罰の悪そうな表情になる。

「しかし、いくらこれだけのSS級相当探索者や強大な人外が存在が居るとはいえ、封印の地を見つけ出せるかどうかは賭けになると思いますが？」

ブレイズが真面目な表情で意見を述べる。

「そうさねえ。それに私らだって最奥まで探索できるかどうか分からない迷宮だって存在するんだ。それこそ探索の数をこなすのなら戦力を分散させなきゃいけないが、分散させ過ぎても最奥まで辿りつけなきゃ意味がない。さて、いったいどうするんだい？」

どこか面白そうに、意地悪気に告げるミネア。

「申し訳ないが、私は聖王猊下の傍を離れるつもりは無いので協力するつもりはない」

ヴァリアスが一人、己が主張を告げ、協力を拒否する。

「それを言うなら俺だって、カイトのおっさんの傍を離れる気はないぜ？」

ダリウスも同調するように告げた。

「それなら私も立场上、それほど国を空ける訳にも行きませんが」
フェンリルまで同調してそう言い出す。

当然他にも様々な立場を持ち事情を抱えながらも協力するつもり

でいた者達は、こいつらは何を言っていると言わんばかりに睨み付ける。

対抗するように睨み返す3人。

カイトは面白そうにしていたが、イリユアは頭を痛そうに抑え、アイスは無表情ながらフェンリルを責める様な瞳で見ていた。

「あらあら、随分と意思がバラバラね？ かつての聖戦時、協力せずに傍観に徹していたが故に今でも世界中から差別を受けているわたし達、闇の種族としては、この状況はとてじゃないけど納得できないわねえ？」

「むう」

「うぐっ」

「くっ」

サイネリアの痛烈な皮肉に、3人は思わず唸り、俯く。

そんな3人を顰めるように見つめ、なお何を言ってやろうかと考えているようなサイネリア。

だが、そんな中、何かを考えていたシャルロットが提案する。

「ふむ。妾はただ封印の地を探すだけではなく、いざという時に備え、戦力の増強を図るべきだと思うのだが、どうかのう？」

「戦力の増強とは言っても、既にここに居る殆どの探索者が限界レベルまで到達していますし、人外の種族の方々も短期間での急激な成長など不可能でしょう？ そうでないのは職業…勇者の方々や、ケリーとマリーニア、それにスレイぐらいのものだと思いますが」

ゲッシュが言うのに、シャルロットはやれやれ分かってないのうと言わんばかりに首を振り、他にもこの中でも一部の者達は、シャルロットに同調するように、ゲッシュの言葉に否定的な視線をしている。

だがシャルロットは、ゲッシュに言っても結局は理解できないだろうと思い、それでも一応は告げる。

「ふむ、そうだのう。その5人には、まあスレイ殿は除いて、他の者達には安全の為に実力者を一人は付けて、普通に未知迷宮を探索

すると同時にレベルを上げてもらい、他の探索者達と人外の者達は同じく迷宮を探索しながらの技量の底上げかろう？」

「それだけで劇的な戦力の増強が図れるとは思えません？」

「やり方次第ではそうでも無いのだがのう……。まあこれはある程度以上の者でなければ分からなくとも仕方無いか。後はまあ、どうやら妾も含め色々面白い事を考えてる、しかも一部は実用化さえしてるらしい連中に、それを提供させるのは当然として……。まあ、後はここにはシークレットウェポン持ちが多いとはいえ、使い所によつてはそれ以上に役に立つ場合もある武具の収集、それに迷宮探索で手に入れた非常に効果的なレアアイテムの共有。それに各地の神獣などと交渉し助力を頼み。封印が破れた場合は封印の維持から解放された神々の助力もあると、期待するしかあるまいて」

疑念を示すゲッシュに対し、やはりやれやれと肩を竦めつつも暢気に返すシャルロット。

シャルロットの提案に、一部の者達が、露骨に嫌な表情を見せている。

当然一部の者達のその表情は、見破られている、という事とそれを提供させられる、という事への拒否反応だろう。

そうでない探索者達は、レアアイテムの共有という提案に対する拒否反応だ。

彼らにとってみればレアアイテムとはいざという時の切り札なのだから。

だが他の、ゲッシュや大部分の者達は、理解できない提案内容の一部に、疑問の表情を浮かべるのみだ。

これは期待薄かとやはり肩を竦めると、仕方なくシャルロットは最も手っ取り早く、しかも何の障害も無い提案をする。

「ついでじゃ、属性面での戦力の増強が図れるじやろうから、我ら闇の種族はとりあえず最初に【闇の迷宮】に挑ませてもらおうかう」

「なっ！？ 未知迷宮について知識をお持ちなのですか！？ しかも属

性面での戦力の強化とは!？」

「ああまあ、これも年の功というもののかのう。【闇の迷宮】には異界の闇の神々が封じられているであろう? 闇を扱う我ら闇の種族にしてみれば、その力を吸収し、己が強化に使えるのじゃよ。尤も我ら闇の種族単独では流石に神たる身に対抗は不可能じゃから、ある男に協力を頼む事になるじゃろうかの」

未知迷宮への知識を持ち、しかも自らが知らぬ提案を述べるシャルロットに驚愕し、強く疑問の声を投げかけるゲッシュ。

サイネリアも、またも臣下が自らの知らぬ事を知り、それを自らに秘していた事に、怒りの目を向ける。

シャルロットはゲッシュに軽く答えつつ、サイネリアの視線を無視し、誰にも気付かれぬ様、軽くスレイの方を意味ありげに見やっ

た。

だが、スレイがエリシアを完全に堕とす為の機会を図り、エリシアの様子を熱心に伺っているのを見て、途端不機嫌な表情になる。

「あの、ある男とは?」

「……秘密じゃ」

何故か不機嫌そうに、そう答えられ、目を白黒させるゲッシュ。そこで話を聞いていたドラグゼスが興味深そうに尋ねる。

「それでは、我々竜人族が属性の強化の為に、最初に探索すべき未知迷宮なども心当たりがおありかな?」

「うむ、御主等竜人族は【竜帝の迷宮】に挑むのが良いとおもうぞえ。異界の竜の神々が封じられておるからの」

「なるほど。ゲッシュ殿、探索者ギルドに【竜帝の迷宮】についての情報はありますか?」

「え、ええ。未知迷宮でも屈指の難易度の高さの物として有名ですので、ほんの表層階に限られますが、一応は」

「それではその情報を後程教えていただけますかな?」

「は、はい。それは当然」

ドラグゼスの質問と要求に、ゲッシュは流されるように答える。

だがそこで、シャルロットが待ったを掛ける。

「まあ、待て。【竜帝の迷宮】についても、妾の方が有用な情報を与えられると思うぞえ？とりあえず一つ忠告じゃ。あそこの神は皆強力じゃから、当然竜人族単独で挑むのは止めるべきじゃろう、後で協力を得るべき男について教えてやろう。あと、あそこの最下層の神はこの世界で強大な力を手に入れた上に狂っておるからのう。注意せねばならんぞえ」

「……シャルロット殿、失礼ですが、何故それほど強力な神が居るという迷宮の最下層の情報まで貴方はご存知なのでしょう？」

思わず疑念を抱き質問するドラグゼス。

当然他の者達も同様の疑問を抱いている。

「簡単じゃ、妾は約5000年前、当時の最盛期の魔導科学の知識も持ち、魔導科学の研究者でもある……まあ、ここ暫くはサボっておったがの。その中の装置の一つに、占術の真似事を出来る装置があつての。ただし、酷く限定的な上、不安定なので、知る事が出来たのは当時特に必要な無かった知識で、しかもとくに壊れてしまったがの。しかも妾でも修復不可能な当時の神々の手による遺物と来た物じゃから、既に手に入れた情報以外は提供しようが無いがの」

「なんと!？」

「え？シャルロットってそうだったの!？」

驚愕するドラグゼスに何故か追隨して疑問を投げかける主の筈のサイネリア。

他の者達も驚愕し、更に一部の者達は狡猾に計算高く目を光らせている。

「ちなみに、役に立つ物なら提供しても構わんが、趣味の代物じゃから、あまり戦闘で役に立つ物は……あるといえはあるが、お主らの趣味には合わんとおもうぞえ？それに、お主らでは神々の遺物を研究しても何も分からぬように、妾の知識や妾の製作した装置を研究しても何も分からぬぞ？」

その言葉に、一部の者達は露骨に表情を落胆のものに変えていた。
「ついでじゃ、聖王殿？お主も光神ヴァレリアの神子故に、肉体の改造は受けない身であろうが、逆にそれ故に異界の光の神々が封じられし【光の迷宮】に挑めば、光の神々の力を吸収し、どのような物かは分からぬが相当な力が得られる筈じゃ」

「なっ！？戦う術の無い聖王猊下に迷宮探索に挑めというのかっ！
！」

「その為のお主であろうが？」
シャルロットの正当極まりない指摘にうぐつと黙り込むヴァリアス。

「尤もお主では不足じゃから、後で聖王殿にも手を借りるべき男について教えてやろう。お主といい竜皇殿といい、これは破格の情報なのじゃから、あくまで好意で提供するのじゃ、そこは忘れるでないぞ？」

「貴様っ！！」

「ヴァリアスッ！！……ありがとうございますシャルロット殿、感謝しますね」

シャルロットの、自分に対する力不足という指摘、それにイリュアに対する態度に激昂するヴァリアスをイリュアが静止し、僅かに挑むような視線でシャルロットに礼を述べる。

だが軽く受け流すシャルロット。

これも年の功と言う物か、流石は約5000歳の超お婆ちゃん、お婆ちゃんの知恵袋だな。

何時の間にか、エリシアについては一時保留し、見物人と化していたスレイが、自分の女にしようという相手に対し、随分と失礼な感想を内心で呟いていた。

「さて、それでは他に何かあるかのう？」

何時の間にか、場はシャルロットに仕切られていた。
やはりこれも年の功というものだろう。

流石……。

再び内心の失礼な呟きを繰り返すのを途中で止め、スレイが質問する。

「神獣の助力を願う交渉は、誰が行うんだ？」

「それはまあ適時、適当にのう」

「いい加減だな」

スレイに声を掛けられ、やや嬉しそうなになったシャルロットに気付かず、呆れたようにスレイがぼやいた。

「そうそう。スレイ殿、お主には是非とも【邪龍の迷宮】に是非挑んでもらわねばな」

「俺が？何かあるのか？……それに俺は今レベルをなるべく上げたくないんだが」

スレイの宣言に場がざわめく。

当然だろう。

探索者がレベルを上げたくないなどという宣言をすれば、普通は正気を疑う。

だがディザスターは満足げに頷きつつ、シャルロットの提案にも肯定の視線をスレイに向けていた。

それに気付き、スレイは【邪龍の迷宮】には何かあるのだろうか？と思う。

ディザスターはディザスターで、スレイに完全に忠実なのだが、あまり多くを語らないので、色々と分からない事があって困るな、とも思った。

シャルロットも何故か満足げに頷きつつ、質問に答える。

「まあ、あの迷宮とお主に関しては、必然がある、とだけ言っておこう」

スレイは特に拘らずその答えで納得し黙る。

むしろ周囲の方が疑惑の感情の色合いの籠った視線をスレイとシャルロットに向けていた。

「私からもいいかね？」

そこへふと、アルスが口を挿む。

「ふむ、何かのう？」

「いや、ここに居る全員の現在の力をこの眼で確認してみたいと思
ってね？探索者に関してはカードを見せてもらうのは当然だが、能
力値では本当の力を把握できないし、人外の方々はそもそもカード
が無いから、軽く適当な組み合わせで手合わせなどしてみたいと思
ってね？」

そう言いながらも、アルスの視線は強くスレイに向けられている。
場の殆どの者達はアルスの『能力値では本当の力を把握できない』
という言葉に、一国の王に対して不敬な、何を言ってるんだコイツ
は、という視線を向けている。

だが一部の者達は当然といったように頷いていた。

「ふむ、なるほどのう。それは良い考えだの」

シャルロットも賛同し、まずは探索者達がカードを見せ合う事にな
った。

「ところで、先程は探索者ギルドの代表者達から先に紹介をしてい
たであろう？今度は逆に妾達から力を見せていくのはどうかの？」

「し、しかし力を見せるとはいったいどうやって？探索者でないあ
なた方はカードなど無いでしょう？」

いきなり、先ほどの決定の前提を覆すシャルロットの台詞に、ゲ
ツシュは思わず疑問の声を上げる。

ゲツシュの疑問にさもありなん、と頷いたシャルロットはその方
法を語る。

「なに、先程そちらのディザスター殿がやってみせてくれたように、
妾達も力の波動を解放してみせてはどうかと思っただろう。ここに居
る者達の殆どは、それで十分妾達の力量を読み取れよう？妾達はデ
ィザスター殿程器用な真似は出来んが、邪神には遥か及ばない妾達
の力の波動程度ならただの人でも耐えられん事はないだろうしの」

「あら、いいわね、ソレ」

サイネリアが面白そうに賛同する。

「ふむ、しかし力を見せると言っても我ら竜人族は竜化せねば本来の力を見せる事はできないのだが？ここで竜化する訳にもいかんし、どうすればいいかね？」

「それでは城の練兵場に行きましょう。ドラグゼス殿達がこちらにいらした際も着陸に使っていただいた場所ですので広さに問題はありませんし、王都の民も王城に貴方達が滞在している事を既に知っていますので、竜の姿を見せても混乱を招くことは無いでしょうからね。もちろん一応知らせは出しますが。それにその後の手合わせにも丁度良いでしょう」

ドラグゼスの言葉にアルスが提案する。

場の一同も賛同する。

そしてそのまま練兵場へと場を移して、力を見せ合う事になり、次々と室内から全員が退出していく。

そんな中一人、スレイはエリシアに向き合うと告げた。

「エリシア、あんたの淹れたお茶は実に美味しかった。何よりあんたの仕事ぶりには感心させられた。もしまたここに来る機会があったら是非あんたの淹れたお茶をまた飲みたいと思う」

「は、はい！ありがとうございます！雇われている私などが本来言えた台詞ではありませんが、またのご来訪、是非お待ちしております」
エリシアが、スレイの言葉に顔を明るくして嬉しそうに答える。

もう完全に堕ちていた。

内心で完全に勝利宣言しながら、そのまま退室するスレイと名残惜しげに見送るエリシア。

すると、扉を出てすぐの所にいた、探索者ギルドの代表として来ている女性陣、真紀、出雲、セリカ、マリーニアなどが呆れた視線をスレイに向けていた。

「ん、なんだ？」

「いえ、確かにあんたの野望とやらは聞いたけど、まさかあんな場で、しかも王城の侍女まで口説くなんてね」

「うん、今回のスレイには流石に驚いた」

「本当に、どんだけ女の扱いに手慣れてるのよ」

「そうやって犠牲者を増やしていくんですね、貴方の手口は良く分かりました」

次々と言われ、スレイは目を白黒させる。

特に出雲に驚かれるなんて、と、マリーニアは“まだ”関係無いだろうにと内心思う。

「まあ、言ってる事はその通りだが、責められる筋合いは無いぞ？」

スレイの言い草に、内心色々思えども、納得するしかない女性陣は、諦めたような顔で、そのまま先に場内の廊下を進んで行く。

尤もスレイとしては言われた事に本当に納得した訳では無かったのだが、方便という奴だ。

先程までのあまりにも傍若無人にして自由奔放なスレイの振る舞い。

だがそれは当然の事だった。

例えば戦いの分野を限定すれば、スレイと拮抗ぐらいはしてみせる相手もあの場には確かに何人か居た。

だが全てを出し尽くすというのならば、あの場に居た者でスレイ以上なのは、成長途上の今でさえディザスターとフルールくらいのものだろう。

別に力に驕っている訳ではない、これはただの事実だ。

そしてそのディザスターとフルールにすら戦うならば、いかな手を尽くしても勝つ。

まあ、尤もディザスターとフルールがスレイと戦う事などもはやありえないのだが。

ともかくその事実、スレイという存在からどんどん枷を無くしていく。

スレイが成長すればする程にだ。

現在この城に集まっている者達は、それこそこの世界屈指の強者、しかも数の論理など無視した馬鹿げた個の力を持つ者ばかりだ。

それはこういう意味も持つ。

スレイならば、今でさえ、この世界全てを敵に回しても勝つ事が出来る、と。

人が社会という枠組みに掎ひとこわれるのは、偏ひとへにそれがその人間にとっても必要な事だからだ。

スレイにはその必要が無く、更に時を経る毎にますます枷は外れ、より社会に迎合する必要が無くなり、その在り様は自由さを増していく。

現在この城に集っている者達の地位も権威も力もスレイには何の意味も成さなくなっていた。

だから特に意識せず、いや意識する必要すら無く、スレイの行動はあまりにも常識から逸脱したものになっていた。

振舞いがあまりに好き勝手が過ぎたのも、円卓で職務に忠実にどのような状況でもプロフェッショナルに徹しようとしていたエリシアを口説き堕としたのもその表れに過ぎない、……恐らく……多分。しかし、とスレイは思わず口に出す。

「圧倒的な知識量、しかも自分の物では無いとはいえ経験まで伴っている物とは相当に使えるな、相手の性格から嗜好から何まで推測し、導き出した最適なタイミング、最適な口説き文句の効率ときたら。後はシチュエーションまでこの知識量を利用し、自分で演出すれば、もっと効率が上がるな」

『主よ、……なんというか、能力を絶賛無駄遣い中だな』

流石に呆れたようにデザイナーが言う。

「何を言う、俺の野望は何度も聞かせただろう。女を堕とす為に能力の全てを駆使するのは、むしろ俺の本道だ」

「まあ、確かにそうなんだろうけど」

フルールさえも面白そうどころか呆れた顔になっている。

「とは言えだ、勘違いするなよ？俺は女性を簡単だなんて思っていない、むしろ逆だ。女の方がよっぽど狡猾で、男の方がよっぽど単純で馬鹿だ、当然俺も含めてな」

『いや、主よ、さっきと言っている事が……』

「何を言う、頭の良い馬鹿なんてありふれているだろう？頭の良い男ってのは大体その頭の良い馬鹿だぞ、当然俺が筆頭だ」

『……』

「……」

もはや黙り込むしかない2匹。

「黙るなよ、これほど分かり易い理屈も無いと思うがな？自らの相手に見目の良さ、なんて物を第一に選ぶ比率の高さの男女比。それだけ見ても分かるだろう？他の男の女を除いた美女・美少女を全て俺のモノにするなんて言ってる俺なんて、最も単純明快じゃないか」

『主……』

「スレイ……」

何故か、むしろ楽しそうに自らの馬鹿さを熱弁するスレイに、2匹は微妙な表情だ。

「逆に女は本能レベルで狡猾だぞ？かなりの割合の女が、ちゃんと優秀な、つまり使える男を無意識に選んでる。散々墮とすだの何だの言ってるが、結局俺は俺の有用性を、つまり能力を効率的にアピールしてるだけだ。俺がいればいかな危険からも護られるし、色々便利だし、望む事は大抵叶いますよ、ってな。多少、ミューズの魂の波動の後押しもあるが、それもアピールの効率を上げているだけだ。結局、俺という男が、誰よりも強く、誰よりも優秀で、誰よりも使えるから、女は俺に恋愛感情を抱いてくれる訳さ。一目惚れしてくれた連中なんてそれだけ直観に優れてるんだろうな。まあ尤も、女自身裏にあるそんな計算自覚してないし、実際それこそが本来の生物としての当然の本物の恋愛感情って物だから俺としては全然問題無い。つまりちゃんと俺に恋愛感情を持ってくれて、俺が独占さえできる訳だしな」

もはや恋愛観すら世間とは隔絶した主に、頼もしく思ふべきか、悲しむべきか、判断に迷う2匹であった。

王城内練兵場。

確かにそこは広かった。

巨大な竜の10頭ほども、軽く動き回れそうな規模である。

その中心へと集まる一同。

そんな中、練兵場の外れから、クロスメリア王国の王城詰めの兵士達が、伺うようにこちらを見ている事についてスレイは尋ねる。

「あいつらは、問題ないのか？」

「ああ、あの位置ならば特に邪魔になることもないし、色々と経験にもなるだろう。それにここで機密情報を話す訳でもあるまい。ここに集った面々に憧れている者も多いだろうし、あのまま見物させてやってくれ」

「まあ、あんたが良いんなら、別に俺はどうでもいいんだが」

アルスに対し当然の様にタメ口を聞くスレイに、ゲッシュは仮にもこの場での立場的にはスレイの監督者という事になるので、思わず胃が痛み、頭を抱えるが、スレイにとってはこれが普通だし、アルスもまた器の大きさを見せ、別段気にした様子もなくにこやかに答える。

「待つて頂きたい、我々のステータスともなれば、十分に機密情報に値すると思うのだが」

だがそれにヴァリアスが声高に反論した。

傍ではイリユアがやや頭を抱えている。

……まあ、探索者として限界レベルに至るまでは迷宮都市に居たとはいえ、聖王と迷宮都市の関係を考えれば、聖王国のバックアップを存分に受けての事だったのだろうし、それ以外は恐らく光神の神殿に籠り切りだった筈。

ならばあの未熟もまた仕方あるまい。

むしろどうして同じく、いや探索者になった経験も無く、もっとうつと神殿に籠り切りだっただろうイリユアがあればど世間ずれしてるかの方が不思議だが。

と思いつつ、ふと周囲を見ると、何やらフェンリルやグラナル、ブレイズなど他にも頷いている物が居た。

ケリーやマリーニアなども、クロウやサクヤに静止されて何のアクションも見せていないが、その表情は物言いたげだ。

一番騒ぎそうな職業…勇者の3人については、自分達にとっての庭という事もあるのか、珍しく大人しいものだ。

やや頭が痛くなるスレイ。

他にも同じ気持ちを共有している者が数人いるようだ。

一応は、グラナルやブレイズなどは、戦争での戦闘の経験は豊富だろうから、やはりそういうのとはズレがあるのだろう。

改めて“今の”探索者達の限界を思い知る。

……ふと、また意識せずに、余計な知識を“識って”しまった事に気付き、再度スレイは頭痛を感じた。

「ふむ、まずは現状を考え、我々同士でカードを見せ合う事には同意して貰ったと考えていたのだが違うのかな？」

「それはっ！？しかし彼らは！！！」

「確かにあの中には探索者出身の者も混じっているし、その者達ならここでカードを見せあっても、カードを覗き見る事ができるかもしれないが、そもそも、実力の拮抗した我々同士で知られる事にこそ問題はあれど、彼ら程度に知られて何か問題があるのかね？」

「っ！！！」

アルスの理路整然とした質問に何も答えられないヴァリアス。

他の者達も同様らしい。

勿論アルスのこれは方便だ。

そもそもステータス程度にこれだけ拘っている時点で、彼らはこの中でも一段劣っているとは思えない。

スレイとしても先程の評価を下方修正せざるを得ないと思った程だ。

そして、どれだけ格下の相手であろうと、本来なるべくなら自らについての情報を知られるのは避けるべきだ。

まあスレイは自分だけは例外だと思っているし、あくまで自分についての情報は戦闘者としてはどのような相手でもなるべくなら全

て秘すべき、というだけであって、その情報の中でも特にステータスの重要度が高い訳では無い事に変わりはないが。

だが本音を隠し、場を纏めてみせたアルスの手腕にはやはり感心せざるを得まい。

そして互いの力の確認が始まる。

まあスレイとしては大まかには先程測り終えているし、これ以上は実際の戦いでも見なければ大きな情報を得られないと思っているが、多少の参考にはなるだろうと大人しく参加する事にする。

まずは先程、自己紹介のトリを飾った、ヘル王国の代表である闇の種族達がその力を見せる事になった。

「それではまず、不肖の身ですが鬼人族の長を務めさせて頂いている、私ダートから参ります」

堅い言葉遣いの、三つの角と大きな身体のほぼ人と変わらないながらもやや異形の青い肌の生真面目な青年である鬼王ダートが、一同の中心に進み出て立つ。

そしてその三つの角が闇を纏い共振しながら、どんどんと闇の力の波動を大きくしていく。

周囲にかかる圧迫感。

ゲッシュにケリーにマリーニア、職業…勇者の3人、アイスにシズカにエリナにアリサと、潜在的な力を含めてもSS級未満の探索者以外と、レベル80未満の神々のシステムの恐怖を麻痺させる補正を持たない探索者の面々は地に膝を着く。

遠く離れて見ている兵士達は全員が地に膝を着いていた。

ただ一人、イリュアだけは、戦闘能力を持たない身ながら平然と立つ。

強大な光の力を持つだけあり、闇の力への抵抗力も強大だという事だろう。

ただ膝を着いた者達の中でもアイスは無表情を崩さない、流石に役者が違っている。

逆に、職業…勇者という身でありながら、膝を着いている3人は

面目丸潰れである。

僅かにアルスとカタリナ、それにジルドレイが頭が痛そうに溜息を吐いていた。

そのまま鬼王ダートは力の波動を治める。

今の力の波動で周囲の者達はだいたいダートの力を把握していた。SS級の中堅あたり、そのぐらいの力である。

尤もスレイはそこに、経験不足という下方修正を入れている訳だが。

「それでは次は我の出番かな？」

そういつて、10メートル近い巨体の黒い狼、魔狼王リユカオンが身を起こしダートと入れ替わるように中心に立つ。

今更ながらこれだけの巨体が平気で廊下を通れるのだから、この王城の規模の大きさが知れる。

リユカオンはそのまま天を向き、遠吠えを上げた。

その遠吠えで空の雲に穴が開く。

途端広がる闇の力の波動。

先程と同じ面々が地に膝を着く。

周囲の者達はSS級の上級あたり、先程のダートの力より一段上と判断していた。

スレイはそこに、約3000年という経験を加味し、もう少々上方修正しているが。

スレイはふらふらと吸い寄せられるようにリユカオンに近付き尋ねる。

「なあ、身体に触ってみてもいいか？」

「うむ、構わんが？」

肯定の返事を聞くと、スレイは思いつきリユカオンの巨体を撫で回す。

毛並みの感触が心地良い。

どうやらその毛並みの感触が気に入ったようで、スレイは暫くそのままリユカオンの毛並みの感触を楽しみ続ける。

リユカオンはどこか困ったような表情をしているように見えた。
スレイの後ろから、ディザスターの唸り声上がる。

主の関心を奪われて嫉妬しているようだ。

そしてようやくスレイはリユカオンから手を離すと告げた。

「うん、良く手入れされたい毛並みだ。素晴らしかった」

「……そうか、褒め言葉、有難く受け取っておこう」

やはり困ったように答えるリユカオン。

満足げに元の位置に戻るスレイの足下にディザスターが飛びつき、フルールが右肩の上に乗る。

どうやら二匹は今のスレイの行動にお冠のようだ。

苦笑しつつ二匹を宥めるスレイ。

そんなスレイを周囲の全員が呆れたように見ていた。

それでも周囲など全く気にしないスレイは紛れも無く大物だろう。

いや“個”として世界と隔絶してしまっているのを、大物と呼ぶのが正確なのかは不明だが。

「そろそろ、いいかな」

そう告げ、リユカオンは力の波動を治める。

そして元の位置に戻り、のそりと寝そべった。

「次は妾の番かのう」

言ったシャルロットが中心へと進み出た。

「それでは行くぞえ？」

前置きし、そして次の瞬間、深紅の闇の波動が迸った。

今度は先程までの面々に加え、フェンリル、イリナ、ヴァリアス、グラナル、ブレイズまでもが膝を着いていた。

スレイが独自に測った實力から考え、彼らより戦闘力に於いては劣る者も平然と立つ中、彼らが地に膝を着いているのは、これに關しては純粹に経験などが大きいかと思う。

大体、彼らは探索者なのだから恐怖の感情は麻痺し、肉体は戦闘体勢へと移行している筈なのだ。

それでこの有様は、心にも肉体にも隙があったのだろう、神々の

システムの補正が間に合わない程に。

シャルロットの力の波動はSS級でも最上級、もはやSSS級に紙一重の領域にまで達していた。

スレイは更に5000年の経験を加味し、あるいはSSS級の存在にも勝つかもしれないと考える。

続いてぼんやりと、なんとなくこの深紅の波動は、やはり血という共通点も有り、アスラに近いかな、とも考えた。

そんな主の考えにプライドを傷つけられた様に、自分の方が遥かに上だと主張するように、左腰のアスラが震える。

スレイは分かっているというように、そんなアスラをポンポンと叩く。

実際似ているだけで格は違う、当然の事だ。

シャルロットが力を治め、元の位置に戻っていった。

周囲のかんりの者が、今まで敵として認知してきた闇の種族の、しかもナンバー2でこれほどの力を持っている事に警戒の表情を浮かべるようになっていた。

「それじゃあ最後はわたしね」

にこやかに告げ、サイネリアが中心に進み出る。

「それじゃあ行くわよ？ちゃんと身構えてないと、どうなっても知らないからね？」

告げると同時に、サイネリアの周囲が一瞬、沈黙に包まれた。

瞬時、爆発的に広がる闇の波動。

物理的な圧力すら伴い周囲を席捲する。

先程まで膝を着いていた面々は当然また同じ様に跪き、地に手すらついて伏せる。

他の探索者の面々は流石だろう、神々のシステムを最大限利用し、あくまでその身体を戦闘体勢へと移行させる事で、膝を着くなどという無様は晒さない。

だがその彼らをして予想はしていただろうに驚きを隠せない。竜皇もまた自らと同格の相手に驚いているようであった。

配下である闇の種族達は、やはり力の属性の問題か、むしろ安らぎすら感じているようだ。

イリユアに至っては、戦闘能力を全く持たないというのに、その光のオーラのみで拮抗してみせていた。

そんなイリユアに笑みを浮かべて挑発的な視線を向けるサイネリア。

同じく挑発的な視線を返すイリユア。

いや、ヴァリアスじゃどうしようもないんだから、止めておいてやれよ、ストレスで死ぬぞ、と何となく友人以外の男の事などどうでもいい筈のスレイが同情してしまう。

だが、なにせよ紛れも無くSSS級の力である。

全く反応を示していないのはスレイと2匹のペットぐらいのものであろう。

まあスレイにすれば、経験不足で力だけ、という印象が強いので、警戒の対象になり得ないのだが。

その点、先程のシャルロットの方がまだ、警戒に値する。

スレイがそんな失礼な感想を抱いてるとはいざ知らず、サイネリアは力の波動を治めた。

「まあ、こんなものかしら。これがわたし達、闇の種族の力よ」

どこか誇らしげに告げると、サイネリアは元の位置に戻っていく。

「それじゃあ次はわたくし達ですね？」

イリユアがやはりサイネリアを身ながらどこか挑戦的に告げる。

「聖王サマは戦闘能力は無いんじゃないのか？」

恐れを知らないスレイが楽しそうに笑いながら軽く言い放った。

「……まあ、確かに戦闘能力は無いのですが。その代わりに、わたくしの持つてる力をお見せしますね？」

スレイのどこまでも恐れを知らぬ態度に、キョトンとした後、むしろ楽しそうに笑いイリユアはそう告げる。

ヴァリアスはやはりスレイを睨み付けるが、先程無様を晒した手前、逆に全くと言っていい程弱さを見せなかったスレイ相手だと、

やはりどこか視線も弱くなってしまおう。

そんな様子も楽しげに見つつ、中心に進み出ると、イリュアは祈るような姿勢をとった。

一瞬の静寂、そしてイリュアを中心として光の波動が広がっていく。

それは戦いの猛々しさとは関係の無い柔らかな波動であったが、圧倒的な影響力を持ってその場に居た人間族の者達に内側から湧き上がるような活力を与えていく。

だがスレイは特に何も感じていない。

同じく竜人族の面々も何も感じていないようであるし、闇の種族の面々はどこか不快そうに表情を歪めている。

暫くしてイリュアが祈る姿勢を止めると、その波動は静かに消え去った。

ヴァレリア・プレス

「これが光神の祝福。ヴァレリアの神子であるわたくしだけが使える、代々聖王が引き継いできた秘儀。周囲の、光神の被造物である人間族を、それこそ軍勢単位で力を増幅して強化する、秘中の秘です」

人間族の力を増幅する筈なのに、自分が特に何も感じなかったのは何故だろうか？とスレイは疑問に思う。

やはり特性…天才は魂の素材が超神ヴェスタの遺骸、と若干ミューズの魂、なので、種族…人間であっても、厳密には光神の被造物である人間族には分類されないのだろうか？

など、考察してみるも、別に大した事とも思わなかったので、考察をすぐに止め、そのまま忘れる事にした。

「それでは、ここからは探索者カードを見せる場面ですね。ヴァリアス、あなたからお見せなさい？」

「はっ！」

イリュアの命令に勢い良く返事を返すヴァリアス。

そのまま素直に従いヴァリアスは中心に立った。

先程の失態を取り戻そうというのだろうか、やたらと気合が入っ

ている様に感じる。

いや、ステータスだけじゃ意味が無いと内心突っ込みつつも、興味はあるので何気に楽しみではあるスレイ。

周囲の者達は全員カードの表示を見る為に、ヴァリアスへとやや近付く。

そしてヴァリアスはカードを取り出しステータスを表示してみせた。

ヴァリアス

LV..95

年齢..32

筋力..S

体力..S

魔力..SS

敏捷..EX

器用..SSS

精神..SS

運勢..S

称号..不死殺し(アンデッド・キラー)、竜殺し(ドラゴン・バスター)、聖剣技の使い手、光神の神殿騎士、聖王の守護者

特性..闘気術、魔力操作、聖剣技、思考加速、思考分割、剣技上昇、聖属性、光属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福..光神ヴァレリア

職業..剣皇

装備..聖剣ヴァレリア・ソード、神殿騎士のブレストプレート、神殿騎士のバックラー、光狼の革のジャケット、光狼の革のズボン、光狼の革靴

経験値..9999 次のLVまで0

預金…0コメル

「聖剣技の使い手」とは「聖剣技」の特性の持ち主に与えられる称号である。そして「聖剣技」とは代々の「聖王の守護者」に伝えられる神聖なる剣技で、五つの剣理を超えた超剣技で構成されるとされる。そして「聖王の守護者」とは光神の神殿騎士筆頭に与えられるものであり、「聖剣技」を習得する資格を与えられ、また聖王の傍に侍る事が許される称号だ。

「SS級相当探索者なのに預金は0コメルなんだな」

興味深そうにスレイが呟く。

「当然だろう？ 預金のままじゃ迷宮都市内でしか使えないんだ、迷宮都市の外に住むとなったら預金を引き出していくのは常識だろう？」

「そうなのか、なるほどな」

納得したように頷くスレイ、そんなスレイを呆れたようにヴァリアスが見ているが、スレイとしては気にもならない。

結局、彼に関しては「聖剣技」のみが興味の対象というのに変わりは無いと見切ったからだ。

「ふむ、それでは次は儂かのう」

そう言うと、オウルがヴァリアスと入れ替わるように中心に立つ。彼に関してはヴァリアスとは逆に、その技量と経験こそが本領と分かり、またシークレットウェポンの能力も実際見なければ分からないし面白くないので、ステータスにはあまり興味が湧かないスレイ。

オウルが探索者カードを取り出し、ステータスを表示する。

オウル

LV…97

年齢…90

筋力…SS
体力…SS
魔力…SS
敏捷…EX
器用…SS
精神…SS
運勢…A

称号…不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、闘術を極めし者、纏う者

特性…闘気術、魔闘術、思考加速、思考分割、格闘技上昇、無拍子、寸勁、浸透勁、化勁、明鏡止水、無念無想、心眼、聖属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福…闘神バルス

職業…闘師

装備…聖拳スラッシュ、飛竜の革の武闘着、飛竜の革の帯、飛竜の革靴

経験値…9999 次のLVまで0

預金…0コメル

「闘術を極めし者」とは、ほぼあらゆる流派の格闘技を極めた証の称号であり、特性の格闘技上昇に加え、更に重複して補正がかかる。

「ほう」

「こりゃあ」

一同が唸り、中でもクロウとノブツナがその特性に驚いたような顔で感心した声を上げる。

スレイもまた興味が無かっただけに、逆に予想もしなかった内容に笑みが浮かぶ。

「闘術を極めし者」の称号を得ているとは……それに何より。

「オウルはグランド家に師事した事があるのか？」

特性を見て思わず浮かんだ興奮のままにスレイが質問する。

「いや、師事したことはないぞい。ただいくつかの分家に道場破りをして、ついでにいくつか技を盗ませてもらったがの」

「なるほど」

オウルが物騒な答えを返し、特に気にする事もなくむしろ感心してスレイは頷いた。

大陸中に権勢を誇る闘術の大家グランド家、分家とはいえその一門に道場破りをし掛けるとは。

実戦での力がどれほどのものか、実に楽しみになる。

物騒な会話に何人かが顔を引き攣らせていたが、気にも留めない。オウルはそのまま元の位置に戻っていった。

「さて、次は私ですかね？」

代わりにアロウンが中心に立つ。

彼に関しては知識面にこそ期待してるのだが、何かオウルのように隠し玉があったりするのだろうか？と少し楽しみなスレイ。

アロウンはカードを取り出しステータスを表示した。

アロウン

L v.. 9 5

年齢.. 4 0

筋力.. B

体力.. A

魔力.. E X +

敏捷.. S S S

器用.. S S S

精神.. S S S

運勢.. S S

称号.. 不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、魔導を極めし者

特性…魔力操作、思考加速、思考分割、魔法上昇、全魔法効果上昇、
高速詠唱、無詠唱、融合魔法、時属性、炎耐性、水耐性、土耐性、
風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福…時間神クロノス

職業…魔賢帝

装備…時の魔杖、赤竜の革のローブ、赤竜の革靴

経験値…9999 次のLvまで0

預金…0コメル

スレイは少しがっかりした。

あまりに予想通りに過ぎたからだ。

だが一部の者にとってはそうでは無かったらしい。

「あら、珍しい。貴方、時間魔法の使い手なのね」

あのサクヤが驚いたような声を出した。

それほどに時間魔法の使い手とは珍しいものなのだ。

だが彼が時間魔法に特化した魔術師というのは最近では割と有名な話だ。

隠棲していたサクヤだからこそその感想だろう。

「ええ、まあ。しかしここに居る方々の殆どは平気で光速を越えるような化物ばかりなので、私の時間魔法も戦闘では通用しないでしょうがね」

やや自嘲気味に告げるアロウン。

光速を越えるような規格外な者達は、時間の束縛すらも超越している、故に彼の言う事は事実であった。

だが、果たしてそうだろうか。

僅かにスレイは疑問を覚える。

彼の實力ならば、光速の数十倍の速度域へと突入できる者はともかく、光速や光速の数倍程度なら何とかできそうな感じも受けるのだが。

どちらにせよ戦闘を苦手とするのは事実だろうが。

「それでは次の方、お願いしますよ」

そう言ってアロウンは元居た場所に戻っていく。

「それじゃあ次は俺の番かねえ」

代わりに出てきたのはグラナルであった。

彼の場合の得手は一对一での戦闘ではなく、軍勢を率いる事にあると見切っているのです、それに関する特性などを、傍観者として楽しませてもらおうと、スレイは思う。

グラナルはカードを取り出しステータスを表示させる。

グラナル

LV..96

年齢..40

筋力..SSS

体力..SSS

魔力..A

敏捷..EX

器用..SSS

精神..S

運勢..S

称号..不死殺し(アンデッド・キラー)、竜殺し(ドラゴン・バスター)、バーサーカー、モンスター・ライダー魔物騎兵、傭兵王

特性..狂化×5、思考加速、戦技上昇、指揮能力上昇、士気高揚、モンスターライディング魔物騎乗、霸属性、魔属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒

耐性、光耐性、闇耐性

祝福..戦神アレス

職業..霸戦士

装備..霸王のランス、霸王のツーハンデッドソード、霸王のプレートメイル、霸王の大盾

経験値..9999 次のLVまで0

預金..0コメル

「魔物騎兵」モンスター・ライダーとは、「魔獣騎乗」モンスター・ライディングの特性を持った者に与えられる称号であり、「魔獣騎乗」モンスター・ライディングとは魔獣に騎乗する事ができる特性である。

「指揮能力上昇」とは、軍を指揮する能力が上昇補正される特性だ。

「士気高揚」とは、軍の士気を高揚させる能力が上昇補正される特性である。

スレイは僅かばかり、お?、と思う。

モンスター・ライディング「魔獣騎乗」の特性と「魔物騎兵」モンスター・ライダーの称号を見てだ。

これはどんな魔獣を乗騎としてるのか楽しみになったな、と思う。だが他は予想通り軍勢を率いる事に特化していた。

「ほう、これは」

「流石は実際の戦争を数多く経験している傭兵王ということですかな？」

アルスとアイスが、その指揮能力向上と士気高揚の特性を見て感心したように話す。

やはり彼らも王である以上、軍を率いた経験はある。

アイスのような探索者でない者として、軍を率いる事自体は可能なのだ。

前線はフェンリルに任せる事になるのだが。

だが彼らの経験した戦いの全ては魔物や野盗相手の小規模な物に過ぎない。

故に、その特性には注目せざるを得ないのだろう。

「父上は、未だ激戦の続くディラク島の最大国家の国主でありながら、全くこういう特性を習得してませんよね? いつも単騎で突っ込んで行きますから」

シズカの皮肉にノブツナは罰が悪そうにそっぽを向く。

「ふむ、グラナル殿の乗騎といえば、グリフォンでしたな。ペガサ

スに騎乗したブレイズ殿とのぶつかり合いなど実に幻想的な光景だったのを覚えておりますぞ」

オウルがどこか懐かしそうに呟き、グラナルは僅かに嫌そうな顔をする。

「……」

楽しみにしていた乗騎についてあっさりとネタバレ、しかもブレイズの物まで、されてしまった事にスレイは僅かに落ち込む。

いや、実際に見る楽しみは残っているのだが。

そのままグラナルは元の位置に戻り、代わりにブレイズが中心に立つ。

それを見て、ブレイズもまた軍を率いての戦いを得手とするタイプ、しかもどうやらペガサスという事は聖獣に騎乗するらしい。

どこまでも相似で対極なのは興味深いが、グラナルと似たような能力だろうと、やや興醒めなままに見やるスレイ。

「それでは、次は私が」

そしてブレイズはカードを取り出しステータスを表示した。

ブレイズ

L v .. 9 6

年齢 .. 3 5

筋力 .. S S

体力 .. S S

魔力 .. A

敏捷 .. E X

器用 .. S S S

精神 .. S S

運勢 .. S S

称号 .. 不死殺し（アンデッド・キラ）^{ホーリー・ライダー}、竜殺し（ドラゴン・バスター）、^{ホーリー・ライダー}聖獣騎兵

特性 .. 闘気術、魔力操作、思考加速、剣技上昇、カリスマ、^{ホーリー・ライダー}聖獣騎インク

乗、光属性、聖属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、
光耐性、闇耐性
祝福…剣神フツ

職業…剣皇

装備…英雄のロングソード、英雄のブレストプレート、英雄のバツ
クラ、英雄の服、英雄のズボン、英雄の靴

経験値…9999 次のLVまで0

預金…0コメル

「ホーリー・ライダー聖獣騎兵」とは、「ホーリー・ライディング聖獣騎乗」の特性を持った者に与えられる

称号である、そして「ホーリー・ライディング聖獣騎乗」とは、聖獣に騎乗する事ができる
特性である。

「カリスマ」とは、人心を惹きつける魅力が上昇補正される特性
だ。

はて？とスレイはやや予想が外れた事を疑問に思う。

ペガサスに騎乗する特性と称号については予想通りだった。

だがやや若干、戦いのスタイルはグラナルよりは個人戦向けに思
える、ほんの僅かだが。

それに、軍を率いての戦いに関係ありそうな特性はカリスマのみ。
カリスマ…：…どうも、人を率いるというよりは、人に支えられる
ような感じに思える。

グラナルが自ら軍を纏め率いて戦うなら、ブレイズは軍勢の旗頭
に祭り上げられる感じだろうか？

それならば、これもまた相似にして対極という事で納得できると
スレイは考えを纏めた。

「これは、また」

「グラナル殿とは実に対照的ですな」

そのカリスマと聖獣騎乗の特性を見て、グラナルと比較し、感心
したように頷くアルスとアイス。

霸王と英雄、実に対照的な2人だと、王道を行く王たる身としては思ったのだろう。

ましてや覇道を行くグラナルはいずれ彼らにとっても敵となるかもしれない。

逆にそうなれば英雄であるブレイズは彼らにとっての味方となるだろうから。

このような時でも、世界だけでなく、自らの国の事も考えねばならぬ事に苦笑しあう2人。

「それでは、これで」

そのまま遠慮深く、元の位置に戻っていくブレイズ。

「それじゃあ次は私かねえ」

そう言って、ミネアが中心に立つ。

思わずスレイは身を乗り出す。

今までどこまでも悠然としていたスレイのその様子に周囲の者は驚いたように見ているが気にも留めない。

分かっている、そう彼女の戦闘スタイルは分かり切っているのだ。

だがそれでもなお興味深い。

どこまでも惹きつけられる。

そういった類の物だった。

ミネアを知りながら、むしろどこまでも興味を示してくる、今までにないスレイという男に、ミネアも面白げな笑いを向ける。

ミネアはそのままカードを取り出すと、ステータスを表示した。

ミネア

L V .. 9 8

年齢 .. 3 4

筋力 .. S S

体力 .. S S

魔力 .. A

敏捷 .. E X

器用…EX

精神…SSS

運勢…A

称号…不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、蟲毒の主、念操絃者、バーサーカー

特性…狂化×5、思考加速、思考分割、戦技上昇、蟲毒血、オリハルコンの操糸術、毒属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福…戦神アレス

職業…覇戦士

装備…吸血のレイピア、オリハルコンの糸、ミスリル絹のタンクトップ、ミスリル絹のスパッツ、地竜の革のハイヒール

経験値…9999 次のLvまで0

預金…0コメル

「蟲毒の主」とは、強力な毒性モンスターを大量に使った、特別な新しい蟲毒の法の実験で生き残り、最兇の「蟲毒血」を得た者に与えられる称号であり、「蟲毒血」の致死性はどれほど強力な毒耐性を持っても防ぐ事はできず、歴史上この蟲毒の法が行われたのは一度のみの為、ミネアのみが持つ称号である。「蟲毒血」とは、その歴史上一度だけ行われた、強力な毒性モンスターの大群の中に探索者一人を放り込むという、新しい特別な蟲毒の法の実験が奇跡的に成功し、生き残ったミネアのみが持つ、絶対致死の毒性を持った血の事であり、強い毒耐性を持った探索者でさえ、血の一滴に触れたのみで死に至る、のみならずその肌に触れただけでさえ死ぬと言う。

「念操絃者」とは、「オリハルコンの操糸術」を極めた者のみに与えられる称号であり、そもそも「オリハルコンの操糸術」の創始者であるミネアの師匠が新しく生み出した称号である。「オリハルコンの操糸術」とは、精神感应金属オリハルコンのマイクロ単位の細

さとキロ単位の長さの糸を、特殊な方法で体内に埋め込み、生体的に自らと同化させ、自己修復能力など備えた自らの一部と成し、自らの意思で思いのままに伸縮させ、太くも細くもでき、また無数に分裂させ、超振動させ、千切れた一部を遠隔操作するなど、自在に操る事が可能な特殊な技法の特性であり、歴史上、この技を修めたのはミネアとそもそもこの技法を編み出したミネアの師匠の二人しかいなく、現在生き残っているのはミネア一人のみである。

思わずスレイは獰猛な笑みを浮かべていた。

やはり良い、こいつは最高だ、堪らない。

女としても是非モノにしたい相手ではあるが、それ以上にこの好敵手と戦えるのなら、と心が猛る。

自らの女にしたい相手だというのに自制しなければ危うく殺してしまうかもしれない。

ミネアとは、それほどに異端な戦闘者であった。

「ぬう」

「これは」

知識としては知っていたこととはいえ、やはりオウルとヴァリアスが思わず唸る。

それだけでなく他の誰もが知ってはいても、驚きを隠せないでいた。

蟲毒血とはミネアのみが持つ絶対致死の毒性を持つ血。

あり得ない奇跡の末に生まれた人の闇の結晶である。

しかも吸血のレイピア。

これは本来持ち主の血を啜れば啜るほど力が増すという呪われた伝説級のシックレットウェポンだが、その持ち主が蟲毒血の持ち主となれば、一滴の血で十分、それだけで、掠れば相手を死に至らしめる凶悪な武器となる。

さらにオリハルコンの操糸術。

精神感応金属であるオリハルコンの、ミクロ単位の細く、キロ単

位の長い糸を、自らの身体に埋め込み、自らの意思により自在に操る技術。

まさに“毒蜂”“毒蜘蛛”の二つ名通りの存在である。

しかも自らが潰した過去に大陸最大の闇とまで呼ばれた巨大暗殺組織に仕込まれた暗殺技術。

殺す事に特化した戦闘者。

この場に居る程の、圧倒的な力を持つ者達であれ、誰しものが、決して力のプレッシャーではなく知識として与えられる恐怖の為、神々のシステムも働かず、僅かな恐怖を隠せない中、全く動じていないのはスレイとディザスターとフルールくらいのものだ。

むしろスレイなどは目を爛々と輝かせ、ミネアを見つめている。

そんなスレイを興味深げに見返しながら、ミネアは元の立ち位置へと戻っていった。

3話

続いて、相変わらず明るい表情でカイトが告げる。

「それでは次は私たちかな？とはいえアリサは全く何の能力も無いので除外して、私とダリウスということになるね」

だが、やはりその瞳の奥は狡猾に光り、この場すら自らの利益に利用しようというのが伺える。

間違はなくステータスという面では特別な物はないだろうカイトだ。

それをすら、自らを侮らせるのに使おうというのだろうか、当然その程度見抜いている者はこの場には幾人もいた。

探り合うような、駆け引きするような、読み合いの視線が交差する。

面倒臭い空気だなど、どうでも良さに眺めやるスレイ。

別にこいつが何を考えていようがどうでもいいし、もし自分に関わってくるならば、力で一蹴するなり、謀略がお好みならば、徹底的な謀略のコンボで嵌め尽くしてやってもいいのだが、と考える視線が逸れる。

アリサ・ギルス。

あいつの場合、ダリウスとどうなるか分からんから今のところ保留だが、俺の女にする場合、こいつが義父になる訳か。

ダリウスとどうこうならなかった場合に自分の女にするのは確定事項で考えているスレイ。

実際、始めから惚れている男でもない限り、場合によっては惚れてる男がいても、自分という存在を手にする事の圧倒的メリットを徹底的なアピールで相手に知らしめれば、ミューズの波動の後押しも多少あるし、殆ど無意識的に相手を自分に惚れさせるのは可能だとスレイは確信している。

そもそも自分と他の男達では存在としての規格が違うが故に。

まあ、そういうのに関わり無い無償の愛だの、与える愛だのの存在も信じているが故に他の男の女に手は出さないというのがスレイの不文律な訳だが。

当然その不文律を破る場合もある、あくまでそのような感情がなく、仕方がなく他の男の女になってる美女・美少女の類が相手の場合だ。

まあその時はその時で色々面倒臭いんだろうなと思いつつ、それ以上にこいつが義父になるのは面倒臭そうだがと、カイトを見ながら考えるスレイ。

だが、実際そうなったとして、どうしてもできるんだから、どうでもいいか、とあっさりと考えるのに飽きたスレイは、一種のパフォーマンス、ブラフに過ぎないカイトのステータスの公開を適当に見る事にする。

本当の楽しみは後に待っている事だし、と僅かにカイトの傍に侍るダリウスの方を見やる。

そんな風にスレイが色々と考えている間に、カイトは場の中心に進み出ていた。

「それじゃあまずは私から。SS級相当探索者の皆さんの後に見せるにはお粗末で恥ずかしい限りなんだが、そこは勘弁してくれ」

そう言ってウインクして見せると、カイトはカードを取り出しステータスを表示する。

全くお寒い限りだと思いつつ、軽く肩を竦め眺めやるスレイ。

数人の者はカイトの言い草に、ますます警戒を強めながらも、ステータス自体は一応見ておこうという感じだ。

人の上に立つってのも大変だねえ、いや、ほんと。

などと完全に他人事のスレイ……実際に他人事なのだが。

カイト

Lv..85

年齢..40

筋力…A
体力…B
魔力…B
敏捷…S
器用…SSS
精神…SSS
運勢…EX
称号…不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、見習いバーサーカー、フレスベルド商業都市国家・議会・現議長
特性…狂化×3、思考加速、戦技上昇、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性
祝福…商神ギルス
職業…聖戦士
装備…オリハルコンのロングソード、ダマスカスの弓、アダマンタイトのブレストプレート、アダマンタイトの大盾、ミスリル絹の服、ミスリル絹のズボン、牛鬼の革靴
経験値…8440 次のLvまで60
預金…0コメル

「この能力値の偏りは、また」

「流石は“商王”……か」

「……運勢…EXとは驚きました」

アロウンが興味深げに呟き、警戒したようにグラナルが言い、ブレイズが驚きを露にする。

グラナルと同じく、カイトのステータス自体にはそれほど興味を寄せてなかった者達も、S級相当探索者でありながらのその運勢には注目し、ますます警戒を強めたようだった。

尤も運勢とはいっても本来は、迷宮探索やそれに類する世界の様々なモンスター出現地帯などでの探索に関わる物でしかないと言わ

れている。

運勢が高ければレアアイテムの入手率が上がり、運勢が低ければ自らを危険へと追い込む強いモンスターとの遭遇率が上がる。

だが、探索者のステータスの場合、人には解明できていない部分も多すぎる。

一応脳裏に情報は刻まれるが、それとて神々が都合の良いように取捨選択した一部の情報に過ぎない。

もしかするとそれ以上の何かがある可能性も未だ否定できないのだ。

今までの長年の探索者の歴史においてさえ、それらを考察する為の情報はあまりに少なすぎた。

もしかすると日常の生活にすら影響があるかもしれない、だがやはり無い可能性も高い。

そんな曖昧な状態。

その上、探索のみの効果としても、レアアイテムを高確率で入手できるというのは、カイトの立場からすると大きい。

カイトはその立場からは考えられない事だが、未だに時折、そのレアアイテムの入手の為に迷宮探索を行っているというのは有名な話だ。

当然SS級相当探索者であるダリウスを護衛に連れてだが。

ダリウスはその度に説教しては言い負かされて、疲れた雰囲気が増して行っている、などと巷で噂になるほどだ。

入手したとされるレアアイテムが市場に出回る事は無い、自らの切り札として温存してるか、自らが個人的に所持する研究機関に提供でもして新たな技術の開発に利用しているのか。

なんにせよ幸運がEXともなれば、そのレアアイテムの入手率も並大抵ではないだろう。

ますます警戒は深まる。

それすらもカイトの計算と思えるのが、なお恐ろしい。

そんな中、そんな緊張とは無縁に、スレイは地に両膝と両手を着

き項垂れていた。

「運勢…EX……いや、いいんだ。俺の運勢は強敵を引き寄せるものだからいい筈なんだ。だが……なんだ？この言い知れぬ敗北感はない？」

ただどこまでも弱々しく言葉を吐き出すスレイ。

今まで感じた事など無い敗北感が強烈にスレイを打ちのめしていた。

絶対の筈の自らのあらゆる存在への勝利への確信が揺らぐ……こんなアホな事で。

『主！どうした！？大丈夫か！？』

「スレイ！大丈夫！傷は浅いよ！！立つんだスレイ！！」

ディザスターとフルールがスレイに呼びかける。

そんな三者を探索者ギルド組が、いったい何をやっているんだかと呆れたように見ていた。

だが逆に、元の立ち位置へと戻ろうと踵を返すカイトの視線は、明るく見えながらも、実に鋭く暗い色合いを持ってそんな三者を見据えている。

スレイといい、二匹のペットといい、あまりにもその経歴が異常で異端だ、規格外に過ぎる、カイトを以ってしても測り知れない。

あのようなふざけたパフォーマンスすらも計算、いや計算などではない、純粹に絶対の余裕の表れにさえ見えてくる。

カイトは傑物の溢れるこの場でさえ、最も警戒しなければならぬ相手を、この三者と見定めていた。

しかし対策が何も思いつかない。

謀略の類など力尽くで食い破られるだけだろう、交渉もまた欲しい物などその気になれば自分で全て物にするだろう彼ら相手には成立しない、数で力押し？最も論外だ、そんな事を実行しようとした瞬間自分ごと叩き潰されて全てが終わる。

化物め、と心中悪態を吐く。

警戒すべき、しかし警戒してもどうにもならない相手に対する結

論。

単純明快だ、手を出さない、関わる時は友好的に。

まさか自分がそんな下らない結論しか出せないとは屈辱に過ぎるが、屈辱などどうでもいい、利を取るのが商人というものだ。

カイトはその商人としての嗅覚を以って、この場の誰よりも速く、スレイ達に対する対応の最適解を導き出していた。

やはり年齢による経験すら超越し、この場で最も狡猾な存在はカイトのようである。

僅かばかり立ち直ったスレイは、弱々しい視線でようようカイトに視線をやりつつ、それでもなお大体カイトが巡らせた計算をあつさりで見抜く。

全く、あれで職業が聖戦士とは、いや本当に全くお寒い限りだと再度強く思った。

「それじゃあ、次は俺かな」

そういつて主とは違い、その疲れたような表情を本気で素直な明るい物へと変えつつ、ダリウスがカイトと交代に中心に進み出る。

あまりに純粹に過ぎる、なんでこいつがカイトみたいなのと上手くやっついていられるのか？

同じ様な疑問はカイトの本質を見抜いている場の幾人もの者達も抱えているようだった。

だが、人間関係とは得てしてそのような物かもしれんな、で済ませるスレイ。

無駄に考察を深める事も、そもそも必要も無い。

だいたいにしてそんな事などどうでもいい。

再び、思わずスレイの心が熱く滾った。

冷静に、自らを抑えて、外には悟られぬように熱心に視線を鋭くする。

自分を抑制できてはいる、だがそれは決してミネアに対する興味に劣るという事を示す訳では無い。

ミネアはあまりに異端な戦闘者であった、例えるなら稀少な珍味

のような物だ、故にがつついた態度を取ってしまった。

だが高級で美味な食材であれば、希少価値はともかく、味で稀少な珍味に劣る訳ではない。

故にダリウスのスレータスにも俄然強い興味が湧く。

例えダリウスの本領が、その大陸の正統な剣術の超一流の技量にあると分かってはいてもだ。

超一流の大陸の正統な剣士との戦いなど経験した事が無い。

彼もまた是非ともじっくりと味わいたい好敵手だ。あそびあいて

心中スレイは舌なめずりすらしていた。

そしてダリウスがカードを取り出し能力値を表示する。

ダリウス

Lv..98

年齢..38

筋力..SSS

体力..SSS

魔力..SSS

敏捷..EX+

器用..EX

精神..SSS

運勢..F

称号..不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、神剣の主、剣術を極めし者

特性..闘気術、魔力操作、思考加速、剣技上昇、光属性、炎耐性、

水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福..戦神アレス

職業..剣皇

装備..神剣マルス、オリハルコンのブレストプレート、オリハルコンのバックラー、光竜の革のジャケット、光竜の革のズボン、光竜の革靴

経験値…9999 次のLvまで0
預金…0コメル

「神剣の主」とは、主を選ぶ神剣の主として認められた証の称号であり、この称号を持つ者がいる場合、主以外の者は該当する神剣に触れる事すらできなくなる。

「剣術を極めし者」とは、ほぼあらゆる流派の大陸の正統派剣術を極めた証の称号であり、特性の剣術上昇に加え、更に重複して剣技に補正がかかる。

「なんと！」

「こりゃあ」

「おお！！」

さしもの、クロウとノブツナが唸った。

それもそのはず、2人を以ってしても驚愕させるだけのステータスである。

2人と同じくダリウスもただのSS級相当探索者という枠を越えていた。

たかがステータスとは思っても、ここまで来れば感嘆せざるを得ない。

それは他の者達も同じだ。

クロウと同じく自力で光速の数十倍の速度域に到達可能な敏捷と強化。

クロウ以上にバランスの取れた、総合的に優れた能力。

クロウの刀術に掛かる補正に比べれば、剣術に掛かる補正が少ないなど、特性はそれほど特別な物は無いが、この領域まで来ればそんな事など関係無い。

果たして、どれほどの剣技の使い手か。

刀剣を扱う者であれば、誰もが心を昂ぶらせずにはられない、それほどの物だった。

まさかたかがステータスでこれほど心を昂ぶらせてくれるとは、と数人の者はダリウスに対する視線を今まで以上に強い物に変えていた。

そんな中、一人スレイのみが別の意味で瞳を輝かせ、仲間を見るような目でダリウスを見ている。

その視線に気付き、不思議そうにして、首を傾げながらもダリウスは元の位置へと戻っていった。

背中に漂う苦労人の哀愁にスレイは憧れの視線すら向けている。運勢がF。

自分程では無いが、自分に近しい存在。

まさか巡り合えるとは。

勿論彼のその剣士として卓絶したステータスを見て、彼を味わう楽しみはいや増した。

だが今回ばかりは、同類を見つけた喜びが勝ってしまったている。

そんな中、新たに名乗り出る者達がいる。

「それでは次は私達かな？」

そう告げドラグゼスが前へ進み出る。

一緒にイリナも進み出ていた。

竜。

或いは力の象徴とも言えるかもしれない存在。

そしてこの世界に最も古くから存在する戦闘種族。

誰もが緊張を以って臨んでいる。

スレイと二匹のペット以外は。

スレイとしては少々残念な気分になっていた。

先程聞いた、そして自らが“識った”知識の欠片にも僅かに含まれている齡五桁に及ぶ竜皇の化物ぶりを知るが故にだ。

自らもまた、五桁とまでは言わないが、四桁の竜皇の時代に立ち合いたかったと思う。

果たして力も増大し、経験を経て、狡猾さも増した竜皇とは如何ほどの者か？

知りたいと思う。

ドラグゼスに代替わりしたのは何十年前だろうか？

そういえば、先代の竜皇はどうしているのだろうか？

何とか会えないものだろうか、などと、実にドラグゼスに失礼な事を心中で考えていた。

ちなみにイリナは論外。

既に竜化した姿すらも見ている。

今となってはあの程度、そよ風程度のプレッシャーも感じない。

デカイだけなど話にもならないと溜息を吐く。

そんなスレイの心中など当然知らず、ドラグゼスは周囲の者に注意を喚起する。

「それじゃあすまないが、皆さんここから……そう、半径500メートルほど離れて頂けるだろうか？」

その言葉に素直に従い、ドラグゼスとイリナのみを残し、全員が周囲に散っていく。

スレイもまた素直に従った。

別に必要も無いのだが、逆にその場合色々と面倒を引き起こす。

それだけの価値すらも無いと判断したのだ。

どこまでも容赦の無い男であった。

心の中で済ませているだけ、まだ良心的かもしれないが。

そんな中、ドラグゼスとイリナも邪魔にならないよう、お互いの距離を十分な程に開く。

「それでは、イリナ！」

「おう！」

そうして2人の姿が光に包まれ、その光の塊が、どんどんと巨大なものへと変化していく。

どこまでも膨れ上がる光。

そしてやっと膨張が止まり、光が収まった時、そこには全長300メートル程の漆黒の竜と全長150メートルほどの漆黒の竜が佇んでいた。

周囲の者達が、野次馬の兵士達も含め、驚いたような声を上げる。それ程に勇壮で、どこまでも雄雄しい姿であった。

その姿のみでプレッシャーを感じさせる程だ。

だが、ただ1人、スレイのみはどうでも良さそうに、欠伸までして、退屈さを表現している。

そんなスレイを苦笑して見る二匹のペット。

誰もが竜の姿に気を取られ、気付かないでいるのは幸いだろう。あまりにも礼儀に欠いている。

尤もそれすらどうでもいいとスレイは思っているのだが。

この段階でスレイは見切ってしまった。

やはりその巨体と力だけだと。

先程も思ったように、年齢が四桁以上に及ぶ竜皇であれば、この巨体であっても、竜気を巧みに利用し、超絶の技巧を発揮してみせてくれたのであろうが、と思う。

やはり何とか先代の竜皇に会えないだろうか。

既にスレイの興味はそちらだけだ。

勿論スレイの心情など関係なく場の状況は進む。

他の誰もが息を呑み見守る中、ドラグゼスとイリナは告げる。

『それではいかせてもらうよ、皆さん準備は大丈夫かな?』

『気絶しちゃっても構わないぜ!』

念話が響き渡り、同時に、二頭の竜は空を仰いだ。

空には先程のリュカオンの遠吠えで一部に穴の開いた雲がある。そして。

一瞬の沈黙。

次の瞬間、竜の咆哮が辺りに圧倒的な圧力を以って響き渡った。

その衝撃とプレッシャーに殆どの者が地に伏せる。

全く平然としているのはスレイと二匹のペットくらいのものであるろう。

スレイなどはただの虚偽脅しと断じる。

だが、流石に先程魔王のプレッシャーに耐えてみせた者達は、同

じく竜皇のプレッシャーにも耐えて見せてはいるが、それでも驚きは隠せないでいる。

咆哮が収まった時、空にあった雲は全て消し飛び、ただ青い空のみがあった。

欠片ほどの雲も残ってはいない。

リユカオンの咆哮とは格が違っていた。

まあ、以前にイリナが咆哮で山を消し飛ばすのを見たこともあるスレイとしては驚くことでも無かったが、というか、やはりこの程度か、という感慨が強い。

天狼の咆哮を思い出す。

実に制御された、技巧の感じられる物であった。

確かに魔王と竜皇は天狼に匹敵する力を感じる。

だが果たして戦って対等足り得るだろうか？

その経験と技量を感じ、どうしても疑問に思わざるを得なかった。

当然イリナは論外だ。

アース師の魔法はアートだという言葉が少しばかり理解できてしまった。

尤も派手さは邪魔でしか無いと思うので、その点で決定的に噛み合わないが、そうではない。

スレイは、どこまでも無駄を削ぎ落とされ洗練され練磨された力とは、一種の機能美、それも圧倒的な物を持つと、今までの経験からそう確信するに到っている。

天狼の力の流れは美しかったと、そう思うのだ。

だが、魔王と竜皇。

この両者の力を見ていて思った事がある。

無駄……果たして無駄を極めた先に威力の極みというのはあるのだろうかという疑問だ。

当然、無駄など削ぎ落とし、徹底的に一極集中した方が良いとは思うのだが、一度くらいは戯れに試してみてもいいかと思う。

まあ、なににせよ、彼らが期待外れだった点は否めないが。

やはり、いずれ、先代の竜皇について聞いてみようとスレイは内心で決意を固めるのだった。

スレイがそんな事を考えている間に、二頭の竜が光に包まれる。縮まっていく光。

そして光が収まるとそこには二人の竜人族の父娘が立っていた。

その傍にゆっくりと歩み集まっていく一同。

ふと周囲を見回していたドラグゼスが呟く。

「ふむ、すまないアルス殿。今の咆哮でどうやら城にダメージを与えてしまったようだな」

城の壁や周囲の様々な所に罅が走り、特に練兵場は、竜達が立っていた地面に亀裂が走り、酷い事になっていた。

だから無駄が多いというんだ、と内心悪態を吐くスレイ。

その損害の大きさに流石に城の主として蒼褪めるアルス。

「エリナ」

だがドラグゼスは落ち着いてエリナを呼ぼう。

呼ばれたエリナはこくと頷く。

「それでは、丁度良いので、エリナの力も見て頂きましょう」

言うと同時に、エリナが柔らかで幻想的な光に包まれる。

そして光は広がり、地を、練兵場中を、そして城中を光が包んでいく。

光に包まれると同時に、みるみる間に罅が、亀裂が、様々なダメージが消え去っていき、光が収まった時には、竜の咆哮により刻まれたダメージは完全に消え去っていた。

「む、無機物を治癒魔法で癒したのですか!？」

彼女の誇る圧倒的な魔法理論の知識をして、あまりに非常識な出来事に、サクヤが珍しく驚いたように叫ぶ。

「わ、私の操る時間魔法には、物体の時間を巻き戻し、状態を回復させるという魔法もありますが、この場合は全く違う。真正正銘ただの治癒魔法で無機物を“癒して”回復させている」

アロウンも驚愕を隠せない。

なまじ別の手段で同じ結果を出せるだけに、その違いが明らかに
見えて、驚愕がひとしおなのだろう。

「出雲、あなたこれできる？」

「ううん、無理。別の方法ならある。だけどこの方法は無理」

真紀の質問に、一つの世界の魔法体系を極めた大魔導士である出
雲すらが不可能と断ずる。

他、少しでも魔法の知識があるものは、ただその非常識さに驚く
だけであった。

竜達の咆哮が引き起こした破壊は、ここに居る者達にとってみれ
ば、それほど非常識な物ではない。

軽く山河を砕き、地形を変える程の力を、殆どの者が持っている
のだ。

だからこそ、竜達が成した破壊よりも、エリナの“癒し”の力こ
そに誰もが驚愕を感じざるを得ない。

スレイも僅かに驚きの視線をエリナに向けた。

完全ではない癒神の寵愛者の魂を持つ者でこれなら、完全な癒神
の寵愛者とはどれほどの“癒し”の力を持つのだろうか。

ましてや癒神その者であれば。

スレイは少しばかり、自らの中の神々に対する評価を上方修正す
る。

結局、それが竜人族達への評価へ繋がらない辺り、スレイという
のはとことん冷静……いや冷徹と言ってすらいい感性の持ち主だっ
た。

だが、この光景を見ると少しばかり思う事も当然ある。

“癒しの竜皇女”、か。本気でアッシュは大変だな」

軽く肩を竦めると、友人に対し、まあ頑張れ、と心の中で再度無
責任なエールを送るのだった。

少し経ち、場が落ち着くと、ノブツナが中心に進み出る。

またもスレイの心は滾り、その瞳は鋭くなる。

特にノブツナの場合は、クロウとの差異が気になって仕方が無い。
熱い視線を向ける先で気楽そうにノブツナが告げる。

「そいじゃあ次は俺の番だな、よく見てくんな」

そしてカードを取り出しステータスを表示した。

ノブツナ

Lv..98

年齢..40

筋力..SS

体力..SSS

魔力..C

敏捷..EX

器用..EX

精神..SSS

運勢..SS

称号..不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、降神刀の主

特性..闘気術、魔力操作、思考加速、剣技上昇、刀技上昇、無拍子、明鏡止水、心眼、神属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福..剣神フツ

職業..剣皇

装備..降神刀フツノミタマ、ヒヒイロカネの武者鎧

経験値..9999 次のLvまで0

預金..0コメル

流石の能力値だが、彼の場合有名であるが故に、その力が広く知られているので、新鮮な驚きは無い。

どころか、いくら駆け引き次第でどうにでもなるとはいえ、その敏捷のステータスにがっかりしている風情の物さえいる。

確かに最も有名なSS級相当探索者、というには不足に感じる者もいるのかもしれない。

だがスレイとしては、あれほど明らかな称号で分からないのだろうか、と一部の者の見識不足には呆れざるを得ない。

だが、やはりステータスでは読めなかったな、と苦笑する。

刀術を極めし者の称号は持たないらしい。

だがそれでクロウに劣るとは思わない。

果たして彼が修めた大太刀一刀による刀術、それとクロウの刀術、その違いは如何程のものか？

結局実際見てみるしかないか、と結論付ける。

そんな中、何故か親子喧嘩が勃発していた。

「ふんっ、進歩が無いのう、クソ息子」

「なんだとクソ親父!!」

「父上!! お爺様!!」

クロウが罵倒しノブツナが睨み返し、2人はシズカに諷められる。どこまで子供なのだこの2人という空気が周囲に漂う。

自分にも色々と思いついた事のあるスレイは、ただ沈黙を守るのみだが。

そうして、場を呆れさせながらも、ディラク島最高の剣士のステータスの公開が終わるのだった。

「さて、次はフェンリルお前の番だな」

「はっ」

主君であるアイスの言葉に従いフェンリルが中心へと進み出る。

彼女の場合は、先ほど感じた違和感の正体が明らかになればいいのだが、程度の軽い期待に留まる。

彼女の場合、多彩な才能が感じられるのはいいのだが、その多彩さの所為で特化できていない。

それに多彩な能力が真価を発揮するのは老練の境地に達してからだ。

特に老いによる衰えが無い探索者の場合はその傾向が強い。

老練の経験があつての駆け引きこそ、その多彩な能力を活かす、最も最適な戦い方なのだ。

今の彼女ではむしろその多彩さを持て余すだけだろう。

とはいえ、あくまで超一流の領域の戦いでの話したが。

スレイはそう考えを締め括り、後は大人しくステータスを見る事にする。

フェンリルが探索者カードを取り出し、ステータスを表示した。

フェンリル

Lv..95

年齢..29

筋力..SS

体力..SS

魔力..SS

敏捷..EX

器用..SS

精神..SS

運勢..SS

称号..不死殺し(アンデッド・キラール)、竜殺し(ドラゴン・バスター)、モンスター・ライダー魔獣騎兵、氷雪の制覇者、シチリア王国・宮廷騎士団長、シチリア王国・宮廷魔術師団長

特性..闘気術、魔力操作、思考加速、思考分割、魔法上昇、戦技上昇、モンスター・ライディング水氷魔法効果上昇、高速詠唱、無詠唱、多重魔法、氷精霊の加護、魔獣騎乗、水属性、氷属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福..水神スサ

職業..騎士王

装備..氷剣アブソリュート・ゼロ、氷杖ステイシス、オリハルコンのブレストプレート、氷竜の革のジャケット、氷竜の革のズボン、

氷竜の革靴

経験値…9999 次のLvまで0

預金…0コメル

「氷雪の制覇者」とは、氷雪に包まれた地域でも平常に行動できる者に与えられる称号であり、氷原や雪原などで戦闘力に最高に補正がかかる。

「く精霊の加護」とは、く属性の上級精霊に気に入られた加護を得た者に付く特性であり、その上級精霊を召喚し自らの傍に侍らせ、力を借りる事ができる。

ほう、と僅かばかりスレイは認識を改める。

先ほど感じた違和感は氷属性の加護だったかと。

氷雪の制覇者という称号といい、どうやら氷水、特に氷属性には特化しているようだと思ひ、属性戦になれば、相性が良ければ自らよりも強い相手にも勝ち、相性が悪ければ自らより弱い相手にも負けかねない、リスクな能力だな、面白いが、と完全に楽しんでいく。

他の者の反応はやはりスレイとは違う。

「ほう。これは、多才多芸ですのう」

「貴方達の特化された能力値を見せられた後にそれを言われても、嫌味にしか聞こえませんかよ」

オウルの感心したような言葉にフェンリルは苦笑する。

「確か、嬢ちゃんの乗騎は、自らと同じ名を冠する魔狼フェンリルだったな？」

「じよ、嬢ちゃん？確かに私の相棒は、大陸北に生息する、私と同じ名の魔狼フェンリルですが。しかし、嬢ちゃんという呼ばれ方は」
グラナルに対し困惑するフェンリル。

「ははは、まあ俺とあんたの年の差を考えれば嬢ちゃんの間違いないだろう」

気にせず笑うグラナルに、フェンリルは諦めたように溜息を吐いた。

なかなか面白い会話だな、と呑気に観察するスレイ。そしてどうやらステータスの公開は次に移るようだ。

「それでは次は、我が国の勇者達の出番かな？」

アルスが悠然とそう言って、まずはヤンに中心に立つよう促す。周囲の殆どの者はどこかどうでも良さそうな空気さえ漂わせている。

まあ、今までの流れを見れば当然だろう。

スレイは思う。

勇者というのは殊ステータス面じゃ色々勘違いされやすいんだが、果たしてここにいるどれだけ真贋を見抜けるのだろうか、と。そして、散々馬鹿にしていた職業…勇者の面々に対してすら、真剣な目を向けた。

それに気付いたものが驚いたような表情をしているが、どうでもいい。

職業…勇者に関しては“現在”ではなく“未来”だ。

果たしてどれだけ伸び代が残っているか……。

ヤンは強気で傲慢な表情で中心に立つと、カードを取り出し、ステータスを表示した。

ヤン

L v .. 7 8

年齢 .. 1 8

筋力 .. S S

体力 .. S S

魔力 .. S S

敏捷 .. S

器用 .. S

精神 .. S

運勢…S

称号…不死殺し（アンデッド・キラー）、クロスメリア王国・一代大公、クロスメリア王国・近衛隊隊員

特性…闘気術、魔力操作、思考加速、思考分割、剣技上昇、格闘技上昇、魔法上昇、戦技上昇、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、封術

祝福…光神ヴァレリア

職業…勇者

装備…勇者の剣、勇者の盾、勇者の鎧

経験値…7705 次のLvまで95

預金…0コメル

「へえ、元々戦技上昇の中には剣技上昇と格闘技上昇も弱いとは言え含まれているのに、更に重複して剣技上昇と格闘技上昇がかかっているのか」

「封術ってのがこの世界の狭間に邪神を封印する為の術って訳だね。なんでも勇者の名を冠するシークレットウェポンはその世界の狭間の力を利用できるとか」

「職業…勇者ってのは素質としては大したもんみたいだが、でも今の所それ以上見るべきところはないねえ」

ブレイズが僅かに感心した声を出し、カイトが商人としての知識を披露し、ミネアが最後に総評を下し締める。

スレイはただ無言。

ヤンは反論できず、悔しそうな憎悪に燃える目をしながら戻っていった。

「それでは次にエミリー」

アルスと呼ばれ、ヤンに対する評価でやや及び腰になりつつもエミリーが中心へと進み出て、カードを取り出し、ステータスを表示する。

エミリー

L v.. 79

年齢.. 18

筋力.. S

体力.. S

魔力.. S S

敏捷.. S

器用.. S S

精神.. S S

運勢.. S

称号.. 不死殺し（アンデッド・キラー）、クロスメリア王国・一代大公、クロスメリア王国・近衛隊隊員

特性.. 闘気術、魔力操作、思考加速、思考分割、剣技上昇、格闘技上昇、魔法上昇、戦技上昇、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、封術

祝福.. 光神ヴァレリア

職業.. 勇者

装備.. 勇者の剣、勇者の盾、勇者の鎧

経験値.. 7811 次のLvまで89

預金.. 0コメル

「ふうむ、こりゃあさっきの奴とあんまり代わり映えしねえなあ」

「父上、失礼でしょう!!」

やはりスレイは無言。

ノブツナの評価にやはり悔しそうな憎しみに燃えた瞳をしながら戻っていくエミリー。

「最後にライバン」

ライバンが、やはり前の2人に対する評価にビビりながらも中心へと進み出て、気が進まなそうにしながらカードを取り出し、ステータスを表示する。

ライバン

L v.. 7 6

年齢.. 1 8

筋力.. S

体力.. S

魔力.. S

敏捷.. S S

器用.. S S

精神.. S S

運勢.. S

称号.. 不死殺し（アンデッド・キラー）、クロスメリア王国・一代大公、クロスメリア王国・近衛隊隊員

特性.. 闘気術、魔力操作、思考加速、思考分割、剣技上昇、格闘技上昇、魔法上昇、戦技上昇、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、封術

祝福.. 光神ヴァレリア

職業.. 勇者

装備.. 勇者の剣、勇者の盾、勇者の鎧

経験値.. 7 5 0 8 次のL vまで9 2

預金.. 0 コメル

「職業.. 勇者ってのは没個性だな」

「まあ、これからの成長を期待すれば、全てにおいて優れている者になれる可能性もあるということでは？」

「どちらかというと器用貧乏になりそうな気がするのう」

グラナルが酷評し、少しばかりの共通点を見出したフェンリルがフォローし、オウルが駄目だしする。

そしてやはりライバンもまた悔しそうな憎しみの籠った瞳をして戻っていく。

が、ドンッ、と周囲が震える程の振動が響き渡り誰もが視線をその音の元へと集中させていた。

スレイである。

その足は地にめり込み、そして周囲に亀裂が奔る。

誰もが驚きざわめくが、スレイは気にも留めない。

職業…勇者の3人のステータスを、最後まで大人しく見ていたスレイは、自分でも少し信じられない程に落胆し憤っていた。

今は弱くても、せめてもの可能性を信じたかったのか、と自分の心情を悟る。

何せ職業…勇者とは、言わば生まれつきの探索者だ。

そもそのスタート地点が違う。

いったい努力次第でどれだけステータスを上げる余地があった事か？

スレイは“識っている”、職業…勇者とは人にながらSSS級相当の領域に足を踏み入れる事ができる可能性を持った存在なのだ。

だが彼らはもう駄目だ、その可能性を既に失っている。

それだけじゃない、生まれつきの探索者ということは、理外の技、化外の技に容易く辿り着き、或いは今、スレイよりも高い技量を持っていた可能性もあったのだ。

尤もそれでも戦えば必ずスレイが勝つし、すぐに技量も越えてみせたが。

しかし彼らはその可能性すらもまた既に失っていた。

いったい彼らはどれだけの可能性を無駄にしたのか？

いったい誰が彼らの可能性を無駄にさせたのか。

あまりの勿体無さに、スレイは怒りすら覚え、思いつき足を踏み締めた後、落ち着く為に目を閉じ暫しそのまま佇むのだった。

触れられないような空気を醸し出すスレイだが、一応足は地から抜いている。

せめてもの気遣いだろう。

エリナが慌てて地面を修復する。

だが、誰もがスレイの発するあまりにもピリピリとした空気に気圧されていた。

状況的に自分達が原因だと推測できる職業…勇者達など、先ほどまで瞳に宿していた憎悪など消え去り、ひたすら顔を蒼くして硬直している。

誰もが動けないまま暫し時が過ぎた。

ふっ、と顔を上げると、スレイは落ち着いた表情と声で問いかける。

「どうした？次の紹介はまだなのか？」

どっ、と緊張から解き放たれたような一同。

その勢いのままにアルスが告げる。

「さて、それでは今度は称号…勇者の面々の紹介に移ろう。マリア」
アルスの声に応え、マリアが中心へと進み出て、カードを取り出し、ステータスを表示する。

マリア

Lv…99

年齢…40

筋力…S

体力…S

魔力…EX

敏捷…SSS

器用…SS

精神…SS

運勢…SS

称号…不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、勇者、クロスメリア王国・一代大公、クロスメリア王国・近衛隊隊員

特性…魔力操作、思考加速、思考分割、魔法上昇、高速詠唱、無詠

唱、炎属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福…火神アグニ

職業…魔賢帝

装備…炎杖カグツチ、竜革のローブ、竜革の靴

経験値…9999 次のLvまで0

預金…0コメル

「称号…勇者と言っても俺達とあまり変わらんみたいだな」

「ええ」

ヴァリアスにブレイズが同意する。

ピクリと反応するも、スレイは黙して何も語らない。

特に声に反応する事も無く、マリアは落ち着いた表情で、そのまま静かに戻っていく。

「それでは次にマグナス」

アルスの言葉にマグナスが静かに中心に立ち、カードを取り出しステータスを表示する。

マグナス

Lv…99

年齢…42

筋力…SS

体力…SS

魔力…S

敏捷…SSS

器用…SS

精神…SS

運勢…SS

称号…不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、纏う者、勇者、クロスメリア王国・一代大公、クロスメリ

ア王国・近衛隊隊員

特性…闘気術、魔闘術、思考加速、格闘技上昇、聖属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福…闘神バルス

職業…闘師

装備…神拳スパルタクス、オリハルコンのブレストプレート、ミスリル絹の服、ミスリル絹のズボン、竜革の靴

経験値…9999 次のLvまで0

預金…0コメル

「やはり称号…勇者とSS級相当探索者の間に差が無いって話は事実なのか？」

「今の所、そう見えますね」

グラナルにフェンリルが同意する。

スレイはやはり沈黙。

マグナスもまた特に反応することなく、静かな表情のまま元の位置へと戻っていった。

「それでは次に、近衛隊副隊長・ジルドレイ」

アルスの言葉に従いジルドレイが中心に立ち、カードを取り出し、ステータスを表示する。

ジルドレイ

Lv…99

年齢…53

筋力…SS

体力…SS

魔力…S

敏捷…EX

器用…SS

精神…SS

運勢…SS

称号…不死殺し（アンデッド・キラ）（アンデッド・キラ）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、バーサーカー、勇者、クロスメリア王国・一代大公、クロスメリア王国・近衛隊副隊長

特性…狂化×5、思考加速、戦技上昇、狂属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福…戦神アレス

職業…覇戦士

装備…風剣ミストラル、オリハルコンのプレートメイル、オリハルコンのバックラー

経験値…9999 次のLvまで0

預金…0コメル

「あの“狂風”ジルドレイでもこの程度か」

「いや、称号…勇者の方々の武器は全て究極級アルテマのシークレットウェポンですから、そこが重要なかもしれません」

ヴァリアスに対し、ブレイズが見解を告げる。

やはりジルドレイも特に反応することなく呑気な表情で元の位置へ戻る。

流星にこれだけ言われて何も反応を示さない称号…勇者達に、先ほどから寸評していた一部の者達は僅かに不審を感じる。

だが本当の意味での実力者達は理解していた。

反論などする必要も無いのだと。

当然のように沈黙を保っていたスレイだが、次の者の名に僅かばかり目を開ける。

「さて、続いて近衛隊隊長・カタリナ」

アルスが自分の娘に声をかける。

カタリナは中心に立つと、カードを取り出し、ステータスを表示した。

カタリナ

L v .. 9 9

年齢 .. 2 3

筋力 .. S S

体力 .. S S

魔力 .. S S

敏捷 .. E X

器用 .. S S S

精神 .. S S

運勢 .. S S

称号 .. 不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、勇者、クロスメリア王国・王女、クロスメリア王国・近衛隊長

特性 .. 闘気術、魔力操作、思考加速、思考分割、魔法上昇、戦技上昇、高速詠唱、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性

祝福 .. 戦神アレス

職業 .. 騎士王

ホーリー・クロス

装備 .. 聖十字斧槍ストライク、オリハルコンのブレストプレート、オリハルコンのバックラー、フェザーブーツ

経験値 .. 9 9 9 9 次のL v まで 0

預金 .. 0 コメル

やはりS S級相当探索者とそれほど変わるようには見えない能力値に、一部の者達が落胆の空気を醸し出す。

だが気にした様子も無く戻って行くカタリナ。

実力者達は逆に、僅かに緊張した空気を醸し出していた。

スレイもまた、カタリナはまだ未熟と見定め、そして実際未熟な事には変わりはないと分かっている、それでも多少の驚きを隠せなかった。

称号…勇者としてのバランスの取れたステータス、それでいて本
当にSSS級相当寸前。

まだアルス王のステータスを見た訳ではないが、どうやら才能の
みならず、基礎能力でもアルス王より上らしい。

そしてその才能は、先程測った時に既に分かっている事だが規格
外のものだ。

今は未熟なれど、或いは人の技の限界に囚われた身ながら、経験
を積みめばその殻を破り、自分と同じく理外の技、化外の技の領域へ
と至るかもしれない。

それほどの才能である。

だがあと1点、将来的にアルス王を完全に越える為には絶対必要
な要素がある。

シークレットウェポンだ。

カタリナのシークレットウェポンの内、フェザーブーツは軽い補
助にしかなるまい。

しかし聖十字斧ホーリー・クロス銃ストライクは間違いなくアルス王の三つのシー
クレットウェポンと同じく究極級アルデマのシークレットウェポンの中でも
最上位の物だ。

されどやはり数が違う、これは大きい。

だが、とりあえずは聖十字斧ホーリー・クロス銃ストライクがアルス王のシークレ
ットウェポンの盾を破れるか？

まず大前提条件がそこだ。

どちらの性能も正確には知らないが、どうも対極の性能を持ち、
拮抗しているように思える。

矛盾。

そう、ならばどちらが勝るか、実際にぶつかり合わねば分かるま
い。

その上で、もし聖十字斧ホーリー・クロス銃ストライクが勝ったとして、残り2つ
のアルス王のシークレットウェポンの性能とはどのような物か、そ
れらをカタリナが破れるか。

カタリナが将来アルス王を越え得るかどうかは、それで決まる。
勿論彼らのシークレットウェポンの能力の詳細についても“識る”事は可能だが、それではあまりにつまらない。

実際に見るその時まで待とうと思う。

なにせよ、カタリナがスレイにとって楽しめる好敵手になるにはまだ時間が必要だが。

まあ、美味な果実が熟すのを待つのもそれはそれで乙なものかとスレイは密かに口元を吊り上げ笑った。

ちなみに関係の無い事だが、神拳スパルタクスもまたアルス王の盾と対極の性能を持つように感じた。

だが同時に神拳スパルタクスは究極級のシークレットウェポンの中では中堅といったところ、格の違いで確実に負けるな、と見定めている。

尤も、そもその実力も才能もマグナスではアルスに遠く及ばないのだが。

「さて最後に私の番だね」

言葉にまたもスレイの心は滾った。

勇者王アルス。

剣と盾を使った戦闘術において、超一流の騎士。

しかもその剣と盾、更には鞆までが究極級のシークレットウェポンでも最上位ときたものだ。

他の者達の癖のある強さとは違う、王道を極めた強さ。

これもまた最高の好敵手だ。

たかがステータスと分かってはいても、興味は抑えられない。

スレイの双眸が鋭さを増す。

その眼差しに気付きながら、自ら名乗り進み出たアルスは、カードを取り出し、ステータスを表示する。

アルス

L V · 99

年齢… 55
筋力… SS
体力… SS
魔力… SS
敏捷… EX
器用… SS
精神… SS
運勢… SS
称号… 不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、勇者、クロスメリア王国・国王
特性… 闘気術、魔力操作、思考加速、思考分割、魔法上昇、戦技上昇、高速詠唱、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性
祝福… 戦神アレス
職業… 騎士王
装備… 絶対王剣エクスカリバー、絶対王権の鞘、オリハルコンのプレートメイル、イージスの盾
経験値… 9999 次のLvまで0
預金… 0コメル

かの勇者王でさえ、やはりSS級相当探索者達とそう変わらないステータスである事に、一部の者達の落胆の色が濃くなる。

スレイは思う。

何も分かっていない、このステータスはそれだけバランスが取れていて隙が無いということだろうに。

だがまあ、速度差など覆せるものだとは認識してない者達はこんなものかと、逆にアルスのステータスを見て見縊った一部の相手の評価をまた下げるスレイ。

「ふん、どうもこいつも気楽なもんだ」

やはりノブツナは、当然のようにアルスの力の真価を理解してい

た。

一度戦って引き分けたなどという話も聞く。
当然の事だろう。

他の実力者達も、どこか慄然とした空気を漂わせる。
そしてスレイもまた興奮を隠せなかった。

紛れも無い。

カタリナより才能は劣っているのかもしれない。

だがカタリナとは違う。

完全に完成した強さだ。

現時点では、カタリナなど比較にもならない。

さて、どう楽しませてくれるかな。

スレイの心は躍る。

様々な感情が混ざり合った場の空気を全く気にした様子も無くア
ルスは告げる。

「さて、これで我々の紹介は終わりだね。ゲッシュ殿、続きを頼む
よ」

そしてアルスは悠々と元の位置へと戻っていった。

「ふむ」

勇者達のスタータスの開示が全て終わった後、スレイが目を閉じて
いる間に他の者達が再度色々と反応をし話し始める。

やはり話す相手は自分と同レベルの相手になるようだ。

見解が異なってくるのだから当然の事だが。

まあ、ケリーなどは優秀な師がいるので、そこら辺、良く言い聞
かせられているようだ。

とクロウに説教されて反論してるように聞こえるケリーの声を聞
き、思わず軽く笑みを浮かべる。

そして、それらの声に合わせ目を開き、他の者とは関係無く一人
納得するスレイ。

なるほど、と思う。

やはり勇者のステータスとは皆、総合力的なバランスを重視し、偏りが少ない為に、特化した物が無い様だ。

逆に言う欠点が無いという利点なのだが。

しかしこれは確かに一点特化タイプ、殊に速度特化の相手には相性が悪いだろう、とは思う。

だが既にその点は先程実力を測った際に、克服している事を把握している。

職業・勇者の3人は問題外として、称号・勇者にまで、つまりレベル99にまでなったような者達は、総合的なバランスに優れる事から考えても、職業の系統に係無く魔法にも練達しているだろう。全員、加速魔法も心得ているはずだ。

ならば速度特化の相手の戦いの際は、加速魔法を使うタイミングを作れるかどうかの、計算、駆け引き、或いは予測などの初手が勝負になる訳か。

その辺り、経験則でアルスとジルドレイ、特にアルスが優れているのだと感ずる。

尤も無詠唱で使えるマリア辺りは駆け引き以上に有利な気もするが。

そこらへんは実際に見れば面白そうなんだが。

だが、全員がその駆け引きすらも必要の無い手妻の種まで仕込んでいる以上、そのような場面が見れる可能性は低いだろうな、とも思う。

なにせどうやら探索者の認識外の危機感知に使われる超感覚と繋げてあるようだ。

まあ、常に自動発動するようにしては勿体無いだろうし、その辺りも考え、ロックする仕組みもあるのだろうか……今回ばかりは集まるメンバーがメンバーだけに、始めからそのロックも解除してあることだろう。

駆け引きでステータス差を覆してみせるアルスやジルドレイの姿と、ステータス差を覆されて呆然とする相手の姿は、是非見てみた

かったな、と僅かばかり残念に思う。

ともあれ、これに気付いてない連中はあっさりとやられるだろうな。

そう思いながらも、自らとペット二匹を除き、SS級相当探索者や人外の化物達が集っているこの場といえども、その辺りに気付いている者はやはりクロウ、サクヤ、ノブツナ、ダリウス、オウル、ミネア、シャルロット、リュカオンなど、特に技量や経験のどちらか、或いは両方に長けた者達、それに占術の使い手であるマリーニアぐらいか、と考え、ふと気付く。

商王カイト、賢者アロウン、彼らの視線もまた他と違っていた。なるほど、それぞれ性質は違えども、知に長けた者達もまた気付くか、と思う。

カイトについてはあのような狡猾さが鍵になる手妻については、むしろ彼ら称号…勇者達よりも長けているかもしれない。

或いは同等かそれ以上の仕掛けを、専門の研究施設でも造って研究させているという事も十分考えられる、……なにせあのような細工のアイテムも持っている事だし。

アロウンについては単純明快極まり無い、彼は時間魔法に特化している魔術師、しかも研究者、となればまさに正に専門分野だ、そもそもが気付かない訳が無い。

我ながらまだまだだな、と苦笑しつつ、まだ視線の違う者のいる事に気付く。

聖王イリュア。

彼女については全く予想外で想像の埒外だ。

だが……。

聖王とは光神の神託を受ける事が出来るのだったか、ならばやや限定された占術のようなものと、少し考え納得する。

女としてはとびっきりの興味の対象だったが、それ以外の興味もやや湧いてきたな、と口の片端が吊りあがり、笑みが浮かんだ。

アルスから紹介を引き継いだゲッシュが自らの陣営の者の名を呼ぶ。

「それではまずクロウ」

ゲッシュは紹介の時と同じ順番で行く事にして、まずはクロウのステータスの開示を願い出た。

「ふむ、これでいいかの？」

クロウは中心へと進み出ると、カードを取り出し、ステータスを表示する。

クロウ

LV..98

年齢..84

筋力..SS

体力..SSS

魔力..C

敏捷..EX+

器用..EX

精神..SSS

運勢..SS

称号..不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、双神刀の主、刀術を極めし者

特性..闘気術、魔力操作、思考加速、思考分割、剣技上昇、刀技上昇、二刀流、無拍子、合気、明鏡止水、心眼、鋼属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性、魔耐性

祝福..剣神フツ

職業..剣皇

装備..神刀アマノムラクモ、神刀アメノハバキリ、白竜革の着流し、

白竜革の草履

経験値..9999 次のLVまで0

預金..0コメル

「ほう」

「流石は」

オウル、ダリウスと続き、特に敏捷の能力値とその刀術系特性の多彩さに、皆が感嘆の声を上げる。

何よりも刀術を極めた者とは良く言ったものだ、その称号に賛嘆の視線が向けられた。

スレイとしてはやはり楽しい好敵手である事に変わりはないが、やはり戦う前程の心の滾りを感じない。

「続きまして、サクヤ」

「はい」

サクヤは頷くとクロウと入れ替わりに中心に立ち、カードを取り出し、ステータスを表示する。

サクヤ

Lv.. 98

年齢.. 72

筋力.. B

体力.. B

魔力.. EX+

敏捷.. SSS

器用.. EX

精神.. SSS

運勢.. SSS

称号.. 不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、魔導を極めし者

特性.. 闘気術、魔力操作、思考加速、思考分割、魔法上昇、全魔法効果上昇、高速詠唱、無詠唱、多重魔法、融合魔法、光属性、魔属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、光耐性、闇耐性、魔耐性

祝福…光神ヴァレリア

職業…魔賢帝

装備…オリハルコンのレイピア、カドウケウスの杖、ミスリル絹の着物、白竜革の草履

経験値…9999 次のLvまで0

預金…0コメル

「これは、また」

「驚かされるな」

アロウン、フェンリルと声を上げ、やはり他の者も感嘆する。

特に全魔法効果上昇と、多重魔法と融合魔法の両方の特性を持つあたり、他の魔術師達とは違っていた。

スレイもまた、楽しいな笑みを浮かべる。

女として興味は無いが、敵としては、クロウより恐らくは下だろ
うが、タイプが違うだけになかなか楽しめそうだ。

特にここまで魔法に特化した敵というのもなかなかイイと思う。

そのままサクヤは元の位置へと戻って行く。

「次にケリー」

ケリーが緊張した表情で歩み出る。

何せ彼にとっては雲の上の面々が居る中で自分のステータスを開示するのだ。

緊張は並々ならぬものであった。

その緊張の中、カードを取り出し、ステータスを表示する。

ケリー

Lv…79

年齢…19

筋力…SS

体力…SS

魔力…C

敏捷…SS

器用…SS

精神…SS

運勢…A

称号…不死殺し（アンデッド・キラ）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、探索者ギルド特別工作員

特性…魔力操作、隠密行動、思考加速、剣技上昇、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性

祝福…戦神アレス

職業…剣皇

装備…桜花、散葉、オリハルコンのロングソード×2、オリハルコンのブレストプレート、ミスリル絹のシャツ、ミスリル絹のズボン、翼竜の革の靴

経験値…7802 次のLvまで98

預金…116060コメル

「ふうむ？」

「こりゃあ？」

アルスとノブツナが声を上げ、他の面々も困惑する。

S級相当探索者としてはかなりのステータスではあるが、刀神の弟子というには少々物足りなさを覚える。

僅かに刀神の名残を見出せるとしたら、そのヒヒイロカネのディラク刀二本であろうか。

だが、ここにいる面々は知らないとはいえ、ケリーがクロウに鍛えられたのは僅か一ヶ月。

その短期間で驚異的な成長を望む方が無理であろう。

スレイとしてはこれから期待するべきだと思うのだが、それはいかに実力者とはいえ一目で悟れというのは無理な話か。

僅かに恥じ入りながらケリーは元の位置へと戻っていく。

スレイは僅かに同情した。

かつて闘技場でのクロウとの戦いの後、クロウの取り成しで見せられた時と変わっているのは預金だけ。

まあ、クロウへの弟子入りや、クロウを再び現役へと引き戻すのが任務だったという事なので、恐らくはその報告書の作成や、ギルド本部の滞在に任せ、クロウが扱きでもして、他の任務や迷宮探索どころでは無かったのだろう。

クロウが相手ではゲッシュも遠慮しただろうし、と考える。

クロウとは、刀を本気で交えた相手だ、大体の性格は読めている。技量的にはかなり伸びている筈だから、レベルが上がれば相当に伸びると思うが……。

やはりどうも、神々のシステムに頼るという事に良いイメージが無い所為で眉を顰めてしまう。

ただそれにしては預金が7000コメルも減っているのは。

流石に子供の時からギルド抱えの探索者だけあり贅沢に慣れているのだろう、と僅かに僻んだ思考をしてしまう。

「次はマリーニア」

マリーニアがどこか萎縮しながらも中心へと歩を進め、能力値を表示したカードを差し出す。

マリーニア

Lv..77

年齢..20

筋力..B

体力..B

魔力..SSS

敏捷..SS

器用..SS

精神..SS

運勢..S

称号..不死殺し（アンデッド・キラー）、探索者ギルド特別工作員、

占師

特性…魔力操作、隠密行動、思考加速、思考分割、魔法上昇、高速詠唱、無詠唱、光属性、魔属性、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性、占術

祝福…光神ヴァレリア

職業…魔賢帝

装備…真実の杖、ミスリル絹のローブ、ミスリル絹のスカート、翼竜の革の靴

経験値…7654 次のLvまで46

預金…113060コメル

「なるほど占師に占術か」

“星詠”の二つ名の由来だね」

グラナルがマリーニア固有の称号と特性に注目し、カイトも頷く、他の面々も納得したように頷いていた。

他の者が持たない固有の称号と特性を持っているということとは、それだけで瞠目に値するという事だろう。

ステータス的にはケリーと同じく白姫の弟子というには不足だと思ふのだが、それがたった一つの特技で評価が引っくり返るのだから、と僅かに呆れるスレイ。

そのままマリーニアは萎縮しながら元の立ち位置へと戻っていた。

スレイは思う。

マリーニアのステータスもまた、闘技場でのクロウとの戦いの後に見せて貰った時と同じままだった。

彼女もまたケリーと同じ様な事情だろう、まあ、彼女の立場を考えれば、占術を用いた任務くらいは幾つかこなしたのかもしれないが。

サクヤに関しては、クロウのように刀を交えた訳では無いが、探索者ギルド本部のゲッシュの個室での一件で分かる。

間違いなくドSだ。

少しばかりマリーニアへの扱きを思い、マリーニアへと同情の涙を流す。

しかしやはり他の者達も、彼女に関して注目するのは占師、占術といった称号、特性のようだ。

まあそれだけ稀少で価値のある物なのだから当然ではあるのだが……やはりまた呆れてしまうスレイ。

しかし預金が10000コメルも減っているとは……。

ケリーと同じ様に贅沢に慣れているのだろうか……3000コメル分は女としての嗜みと好意的に捉える事にする。

「それでは次に更科真紀」

真紀の名が呼ばれ、真紀は中心へと立つ。

なにせ異世界の勇者などという眉唾ものの存在だ、何をするのかと注目が集まる。

「それじゃあ、私もこの世界の魔王殿に倣わせて貰おうかしら」

そう告げると、真紀はアラストリアにおいて手に入れた、異世界の勇者の力を全力で解放する。

一瞬の沈黙後、広がる力の波動。

単純に強力なプレッシャー。

それは魔王サイネリアや竜皇ドラグゼスに匹敵するものであった。流石に圧倒的なプレッシャーの連続に慣れたのと、そのプレッシャーがあまり威圧的な物では無かった為だろう。

膝を着くまでする者はいなかったが、スレイ達以外の誰しもが驚愕の表情を浮かべている。

だがスレイとしてはやはり違和感を感じてならない。

そして真紀が力の波動を治めると共に、誰しもが安堵に吐息する。そのまま真紀は元の位置へと戻っていった。

「そ、それでは次に、神代出雲」

出雲は中心へと立ち、一言告げた。

「行く」

瞬時に広がる力の波動。

真紀とは質が違うが同等のそれに、心構えもできずに曝された面々は硬直する、だがもはや驚愕というより諦めの表情を浮かべていた。

それを見てつまらなそうな出雲。

そして出雲は波動を治めると、そのまま戻っていった。

だがスレイはやはりまた違和感を覚えて、どうにもこうにも治まらない。

「つ、次はセリカ・J・スミス」

セリカがやり難そうにしながらも中心へと立つ。

「それじゃあ芸が無いけど、私も前の2人と同じ事をするわね」

そしてやはりセリカも異世界の勇者の力を全開で解き放った。

やはり魔王や竜皇に匹敵する力の波動。

それに面々は慣れてしまい、もう本当に表情に呆れを浮かべるだけだ。

なんというか、凄い力というものも、ここまで連続で繰り返されると、飽きのような物さえ生まれてくるのだろう。

尤もスレイはやはり感じる違和感に、引っ掛かりを覚えて、どうしても納得できずにいたが。

そしてセリカは波動を治め、そのまま元の立ち位置へと戻る。

「それでは次にスレイ」

ようやくここまで来たかと思いつながら、ゲッシュはこの後に起こるだろう騒動を思い、やはり胃を痛める。

スレイは右肩にフルールを乗せ、ディザスターを足下に従えたまま中心に立つ。

一同の殆どは、市井の探索者でありながら刀神クロウに勝利したというスレイを、どこか懐疑的に見ている。

「やはり俺もステータスを見せなければ駄目か？」

「ああ、頼むよ。他の方々も見せているのだから、君だけが見せないという訳にはいくまい」

ゲッシュに言われ、仕方なさげにスレイはカードを取り出す。
ステータスなんてどうでもいいと思うんだがな、と思いつつ。
実際、もはやステータスを見せる事自体には抵抗が無くなっていた。

どうでも良いとさえ感じている。

ああ、と一つだけ思い出す。

そういえば、マリアって女に炎の精霊王の加護を見られるのは、
煩そうでちよつと嫌だったな、と。

問題といえばそれぐらいのものだ。

本気でどうでもいい。

当然だ。

自分の何を知られようが、自分の勝利は揺らがない。

軽く肩を竦め面倒臭そうにしながらも、スレイはカードを取り出し、ステータスを表示する。

スレイ

Lv..43

年齢..18

筋力..A

体力..S

魔力..A

敏捷..SSS

器用..SS

精神..EX

運勢..G

称号..不死殺し（アンデッド・キラ）、神殺し（ゴッド・スレイヤー）、双刀の主

特性..天才、闘気術、魔力操作、闘気と魔力の融合、思考加速、思考分割、剣技上昇、刀技上昇、二刀流、無拍子、化勁、明鏡止水、無念無想、心眼、高速詠唱、無詠唱、炎の精霊王の加護、炎耐性、

毒耐性、邪耐性、神耐性

祝福…無し

職業…剣鬼

装備…紅刀アスラ、蒼刀マーナ、鋼鉄のロングソード×2、ミスリル絹のジャケット、ミスリル絹のズボン、牛鬼の革のスニーカー

経験値…4202 次のLvまで98

預金…7000コメル

「れ、Lv43の中級職!？」

流石にアルスが啞然とする。

「それでクロウ様に勝利した!？」

呆然とするマグナス。

「そ、それよりも炎の精霊王の加護っていったい何処で炎の精霊王に会ったというの!?!？」

マリアなど今にもスレイに詰め寄りそうな勢いである。

ああ、やっぱりか、これが面倒だったんだとスレイは内心溜息を吐く。

「はっ!？」

「なっ!？」

「えっ!？」

職業…勇者の面々はただ呆然とするのみだ。

「これは……、フェンリル、お前は知っていたのか？」

「いえ、クリス爺とアース爺から聞いていたので多少の予想はしていましたが、まさかこれほどとは。刀術のみならず魔法系の特性まで……」

アイスに問われ答えるフェンリル。

事前に多少の心構えがあったのだが、それでも流石に驚きを隠せない。

「つーか、こんだけ刀術系のスキルがあるたあ」

「すごい」

ディラク刀最高の剣士ノブツナとその父を良く知るシズカの父娘をして驚愕するのみだ。

「ダリウス……精神…EXなど聞いたことはあるか？」

「いえ、噂にすら聞いた事も無いぜ。というか俺としては運勢…Gつてのが」

ただ驚いたままダリウスに聞くカイト。

化物だとは予想していた、それ故に色々と警戒もしていた。

だが、老獪なカイトが、それでも尚予想の更に斜め上を行かれ、流石に動揺を隠せない。

聞かれたダリウスは答えつつも、どこか同類を見る視線をスレイに向ける。

「ヴァリアス、特性…天才って何でしょうか？」

「い、いえ。私もそのような特性など聞いた事もなく」

純粋なイリュアの質問に、呆然としたまま答えるヴァリアス。

「つーが無茶苦茶だな、闘気と魔力の融合ってなんだそりゃ？」

「長年生きて色々な経験をしてきたが、この年になってこれほど驚かされようとはのう」

「神殺し（ゴッド・スレイヤー）とはいったい何をしたのだろう？」

「邪耐性と神耐性という特性も考えると、その称号は恐らく邪神の分体を倒した事で身につけたと思われませんが、何にせよ前代未聞です」

グラナル、オウル、ブレイズ、アロウンとやはり啞然としている。

「この男が私の毒に耐えられるって男かねえ？」

ミネアの興味はスレイが自らの毒に耐えられるかどうかにあった。

「スレイの野郎、とんでもなく成長しやがって」

「アッシュから話には聞いていましたが……これほどなんて」

「と、いうか彼が探索者になってからまだ数ヶ月だろう？」

竜皇とその娘達すら驚きを隠せない。

「ねえ、シャルロット。貴方はあまり驚いてないみたいだけど何故かしら？」

「ふむ、妾ほど長生きすれば色々と知っておりますからの」

「私も何となく話で聞いたことはあるような気はしますが……」

「正直、私のような若造は全く心当たりがありません」

闇の種族では約5000歳のシャルロットが何か知っているような思わせぶりの台詞を吐き、約3000歳のリユカオンが僅かに何か心当たりがあるような記憶を探るような表情をしている。

なんにせよ、場はスレイの能力値の無茶苦茶さに一気に空気を変えていた。

スレイのステータスを見て騒然とする場の面々。

スレイはニヤリと笑い、敢えて挑発的に言い放つ。

「ふん、ステータスなどに囚われているようでは話にならない。ステータスというのは所詮ただの基礎能力だ。実際の戦いにおいては確かに重要ではあってもただの一要素に過ぎん。そんな物にばかり拘っているからあんたらは其処止まりなんだよ」

挑発的な言葉に激発寸前の一部の者達。

「実際、これだけのステータス差がありながら儂が負けている以上、事実としか言い様が無いの」

クロウが宥めるように言う事で、場は静まり返った。

せっかく、楽しく遊べる敵がおもちゃ一気に増えるかと思っただのに、余計な水を差してくれた、とクロウを睨むスレイ。

当のクロウは視線を受け流し涼しい顔だ。

「し、しかしそれでも信じられん！！確かにレベルと職業に比して異常なステータスだというのは分かるが、このステータスでクロウ殿に勝つなど無理があるだろう！！いったいどんなイカサマをした！？」

「ヴァリアス！！」

「やれやれ青いな、まだ言うか。先刻も言っただけだろう、ステータスで勝敗の全てが決まるなどというその考えが未熟と、まだ気付かないのか？」

強い疑惑の視線で睨み問い詰めるヴァリアスと、強く叱責し嗜め

るイリュア。

だがスレイはどこか呆れたように肩を竦めるだけだった。
いやむしろ楽しんでさえいる。

先ほどステータスなどに囚われているから其処止まりと挑発したのをクロウに止められ残念に思っていたのを、わざわざ話題を戻してくれたのだ。

楽しげに口元が吊りあがるのも仕方あるまい。

逆にクロウは額に手をやって天を仰いでいる。

「なっ！？確かに私とステータスの総合力だけで無く相性も勝敗に影響することぐらい分かっている！！だが圧倒的な速度差は埋めようが無からう！！クロウ殿と貴殿の速度差、それをどう説明するのだ！？」

「ヴァリアス！！お止めなさい！！」

「いやいいイリュア、折角だ、その未熟者に教授ってのをしてやろうと思うからあんたは口を出さないでくれないか」

「貴様！！聖王猊下の御名を呼び捨てにするのみならず、あんたなどと呼び、あまつさえ命令するだ！！」

「ん？ああ、すまない。昔から美人とはすぐに親しくなりたくてな、一方的に馴れ馴れしくしてしまう性分なんだが、不愉快だったか？」

「あら、うふふ」

ヴァリアスを止めようとするイリュアを逆に止めるスレイ。

あまりに親しげな態度に激怒するヴァリアス。

対しイリュアは面白げに笑う。

「スレイ殿はお口が上手いんですね、私、とても機嫌が良くなりましたので呼び捨てもその話し方も許します」

「せ、聖王猊下！？」

楽しそうにスレイに許しを与えるイリュアと、情けなさげな叫び声を上げるヴァリアス。

ああ、これはやはり相当なシスコンだな、とスレイは先ほどからの考えを内心完全に確信した。

「まあともかくだ、俺の場合は純粹に特性の賜物だ。闘気と魔力の融合、それは即ち純粹なエーテルによる強化の事であり、熟練度に応じ、＋3～＋5までのステータスの強化を可能とする。それによりクロウと同等の速度域に突入し、そして純粹に刀術の技量で勝利した。ただそれだけの事だ、なあ、クロウ？」

「儂としては積極的に肯定はしたくないが、否定のできない事実じやな」

「なっ!？」

驚愕の声を上げるヴァリアス、のみならず場の全員がざわめく。

何せ“あの”刀神クロウに純粹に刀術の技量で勝利したという事も衝撃的だが、それ以上に純エーテル強化、ここに居るレベルの者でやっと全員が知り得る事だが、最先端の研究で理論上在り得ないとされているソレを特性として持つというのだ。

しかもその内容もまた強力であった。

誰もが驚愕に包まれている。

「とまあ、俺とクロウの事に関してはこれで決着したが、あんたにはもうちょっと教授しておかないとな。なにせあんたの、いやあんた以外にもだな、一部を除いた者達の称号…勇者達を見る目が不当だったのだな。まあ職業…勇者の者達に対しては妥当だったと思うが」

「何？」

「なっ!」

「あなたっ!!!」

「お前っ!？」

純粹に疑問の声を上げるヴァリアスと、馬鹿にされ顔を赤くして怒声を上げる職業…勇者達。

スレイは職業…勇者の3人は無視して、ヴァリアスに説明を続ける。

何せこれでも職業…勇者達の将来性には期待していたのだ。

それがとくに無駄に食い潰されていると知った今、必要以上に冷たくなるのも仕方あるまい。

勿論喰らい付こうとする職業…勇者の3人だが、アルスによって止められ、不満そうにしながらも、黙り込むしか無かった。

「まずだ、速度もそうだが、ステータスを引っ繰り返して勝負を決める要素と言うのは相性以外にも存在する、それが経験量の差、それに裏付けされた駆け引きと、まあ当然技量といった類の物だな。だいたい、あんたの聖剣技だって、そういう類の物じゃないのか？」

「いかな技とて、そもそも使えなければ意味があるまい！！」
スレイに咄嗟に叫び反論するヴァリアス。

「ふむ、そうか。聖剣技というのはそこまでの物ではなかったか」
「あ」

「やはり青いな、まあまだ若いんだこれから経験を積んでいけばいいさ」

自らが、秘匿すべき光神の神殿騎士筆頭のみに伝えられる一子相伝の秘技の情報を一部とはいえ明かしてしまった事に気付き青くなるヴァリアス。

苦笑し、慰めるスレイだが、“若い”という言葉に対し、周囲から一斉に突っ込むような視線が突き刺さったのを無視して続ける。

「まあ、そもそもだ、称号…勇者というのは本来の探索者の完成形というだけあり、その総合力、完成度こそが求められた。そして確かに一点特化された圧倒的な力に欠ける嫌いがあるが故に用意されたのが究極級のシークレットウェポンだ、だから究極級は全て勇者専用となっている…まあ、例外もあるがな」

ちらりとノブツナに視線を向けるスレイ。

睨み返されるが視線を軽く受け流して逸らし、ヴァリアスに向き直る。

「だ、だがっ！ いか^{アルデマ}に究極級のシークレットウェポンが強力とは言え、速度を引き上げるような効果はあるまい！ 少なくとも私は聞いた事が無いぞ。そして速度差を覆せなければ、いかに強力な武器とて意味はあるまい！！」

「ふむ、まあ、確かに速度を引き上げる究極級のシークレットウェ^{アルデマ}」

ポンなんて、俺も存在を知らないな。まあ、だからと言ってそれをどうにかできる物が無いかどうかは分からないと思うが？」

後半は意味ありげにアルスを見ながら言う。

アルスは何やら苦笑していた。

「けどまあ、神々にとってはそんな事は関係無かったんだよ。何せ全ての己が戦力たる探索者達を光速の数十倍の速度域までは引き上げる事ができたんだからな」

「え？……あ？」

「そう、時間神クロノスだよ。あいつがいる限りは速度に特化した探索者なんて神々にとってはあまり有用でない手駒で、総合的に優れた手駒の方が余程に優れた手駒だったという訳さ」

スレイの説明に呆然とするヴァリアス。

だが再び猛然と反論を叩き付ける。

「だが、今、この世界に神が顕現してる訳でもなく、しかも探索者個人の戦いにおいて、そのような事、関係無いだろう！？」

「まあな、だからこそその、まあこの場合は駆け引きになる。断言する、称号…勇者の連中は確実に加速魔法を習得している。戦士職のジルドレイも闘士職のマグナスもだ。それこそその速度差を埋める為にな」

「え？」

スレイに操られるように称号…勇者の面々を見やるヴァリアス。

称号…勇者の面々は無表情のまま何も語らない。

だがそれが逆に答えとなっていた。

「だ、だがっ！無詠唱の特性を持つマリア殿を除き、他の面々は皆加速魔法を発動させるのに詠唱が必要な筈。対し、加速魔法など無くとも光速の数十倍の速度域に突入出来る者達は、何のタイムラグもなく一気にその速度域へ移行できる。やはり速度差は埋めようが無いだろう！！」

「だから青いんだと言う。それを埋めるのが駆け引きだろう。その速度域へ移行されたら対抗しようが無いのなら、移行させない、も

しくは自らも移行するまで時間稼ぎをする、その為に人間には口があるんだ。特にその商王のおっさんなんかは、駆け引きが上手そう、というかもはや超絶的に卑怯そうだ」

「ははは、褒め言葉有難く受け取っておこう」

スレイに対し笑って返すカイト。

やっぱり狸だな、などと思う。

他の面々も、クロウを含め、経験豊富そうな面々は皆、既に分かり切ってる話を聞いているという顔を見せている。

尤も、強力な力を持ち、約200年の時を生きながら、感心したように頷いている竜皇や魔王はどうかと思うが……まあ、種族としては若い部類だから経験不足という事なのだろう。

気を取り直し、スレイは続ける。

「ついでにだ、これからくるだろう、駆け引きなど通用しない相手の場合はどうするのか、という質問に先んじて答えておこう。世の中には加速葉、特に迷宮には光速の数十倍の速度域に突入可能な超高度な加速葉があるだろう？」

「か、加速葉があっても、あれだって飲むのに時間が……」

「馬鹿だな、飲むより余程速い方法があるじゃないか？」

「え？」

スレイの言ってる意味が理解できず、呆然とするヴァリアス。

だが、これには周囲の面々も理解できない様子だ。

ただ、称号…勇者の面々のみが表情を変えている。

あとはカイトが少し面白げな表情を見せていた。

ああ、カイトのおっさんのあの顔、あれはやっぱり構想段階か研究段階ってところだな。

そのように悟るスレイ。

だが構わずに続ける。

「体内に始めから仕込んでおくんだよ、魔法の膜で包んでな。しかも俺達探索者は、認識外でいかな速度だろうと自らにとって有害な存在には反応するという超感覚がある。この超感覚と魔法の膜とを

連動させれば、自ら意識して加速するだけじゃなく、光速の数十倍の速度域に突入した敵などに対し、同時に自らも加速できるという良い事尽くめだ。まあ場所については魔法薬という時点で通常とは吸収のされ方も違う上、俺達探索者自体肉体のシステムが根本的に違ってる訳だが、それでも念には念を入れて腸あたりだと思っかな？ちなみに超高度な加速薬のその価値に関しては、彼ら称号…勇者の立場を思い出せ、とだけ言っておこう」

「あ……クロスメリア王国国王に近衛隊」

「そういうことだな、なあ？」

呆然と呟くヴァリアス、驚きながらも納得したような周囲の面々、笑ってアルスに顔を向けるスレイ。

アルスは苦笑いしていた。

カタリナは何か目を輝かせ頬を赤らめてスレイを見やり、ジルドレイはやれやれと頭を掻いて苦い顔。

マリアとマグナスは険しい表情だ。

「やれやれ、大した慧眼だ。その若さ、探索者になってからの年月の浅さ、他色々と調べた経歴から考えても異常に過ぎるな。まあ、その通りだ、認めよう。我々にはそのような切り札がある」

「陛下!？」

「そのような!？」

マリアとマグナスが慌てたような表情になるが、カタリナとジルドレイは落ち着いたもの、そもそも職業…勇者の面々は付いて来てすらない。

アルスは片手で軽く2人を制すると告げる。

「いや、この場の面々ならば、スレイ殿の推測を聞いた段階でもはやほぼ確信に到っているだろう。だがそのままでは推測のままだ。そして推測のままなら警戒はされて、対抗手段を考えられても、確実な威圧にはならない。だから敢えてここで肯定して我らの力を知らしめておこうと思う。それに事実がどうあれ、スレイ殿の推測を聞いた段階で、彼らもまたその手段の実用化を検討、研究に入るだ

ろう。あるいはもうしている所も我々以外にもあるのかもしれないが。何にせよ、この場では認めてしまうのが正解だ」

「くっ」

「はっ」

アルスの言葉を聞きながら意味ありげにカイトを見やるスレイ。やはりスレイと同じくカイトの方を見やり意味ありげな表情を浮かべるアルス。

カイトは苦笑しつつも余裕の表情だ。

対しどこか憎々しげにスレイを見やるマリアとマグナス。

2人の視線などどこ吹く風と、軽く受け流すスレイ。

しかしスレイをして、やはりアルスの判断力・決断力には感心させられた。

「ところでスレイ殿。その双刀、紅刀アスラと蒼刀マーナというのは以前私がゲッシュ殿に売ったものだね？少し見せてもらっても構わないだろうか」

「止めておいた方がいいぞ」

アルスをスレイが制止するが僅かに遅く、刀の柄に触れたアルスの手が刀に拒まれ弾かれる。

「痛っ！」

思わず顔を歪めるアルス。

「こいつらは主を選ぶ刀だからな。俺を主にした時点で他の人間には触れる事もできなくなってる」

「そういえば確かにステータスには双刀の主なんて称号も存在していたね。しかし確かその双刀は伝説級レジェンドだったと思ったのだが、そんな機能があったのかね？」

不本意そうに震えるアスラにマーナ。

スレイは分かったというように刀を軽く叩き、柄を握ると僅かに双刀を引き抜いて見せる。

途端凄絶なまでに美しくも禍々しい強大な深紅のオーラと強大な蒼いオーラが場を覆い尽くした。

「なっ!？」

誰もが驚愕するが、特にアルスの驚愕は大きい。

「わ、私が手に入れた時にはこれほどの力は無かった筈!？」

「こいつらは主を選び、主を決めた段階から無限を超えて成長していく刀でな。紅刀アスラは敵の血を啜り、蒼刀マーナは敵の精神を喰らい、それこそ強度や切れ味など刀にとっての重要な要素を際限なく成長させていくのさ。だから以前と別物なのは当然だな」

その魔刀・妖刀と言っている類の能力にアルスは勿論、他の面々も畏怖の視線を向ける。

スレイは双刀を鞘に完全に納める。

「なににせよ、俺の頼もしい相棒達さ」

スレイの言葉に応えるよう、双刀は嬉しそうに鞘の中で震えた。

そして最後はスレイが完全に場を喰らい、それぞれの力の確認は終わったのだった。

4話（前書き）

「王剣」「恋愛遊戯」「霊喰らい（たまぐらい）」の2話も同時更新したので読んでもらえると嬉しいです。

4話

あれから暫く。

あまりにも色々な事があり、かなりの物が得た情報を完全には把握、整理できないでいる。

それを見て取った、結局何時の間にかゲッシュから主導権を自然と奪い取っていたアルスが一時の休息を宣言し、各々が身近な者と色々と語らい合う。

流石は勇者王、器が違うという事だろうか。

あまりにも異常な場の空気に吞まれたのと、アルスの振る舞いがあまりに自然だった為にヴァリアスからすら異論は出なかった。

というより気付いてすらいないだろう。

周囲の者達が、様々な情報の整理に終始する中、ただ1人スレイの振る舞いはあまりに逸脱していた。

ディザスターを枕とし、胸の上にフルールを乗せ、この悠々と寛いでいる。

この広い練兵場、ただでさえポツンとこの広さにすれば少ない数の者達が密集する中、1人少しばかり離れてそのように寛ぎ切ったスレイの様子はあまりに悪目立ちする。

この場の者達が、話し合いながらも流石に呆れ切った視線を向けるのに加え、練兵場のハズレの兵士達も目を丸くしてポカンとスレイを見詰めていた。

ゲッシュなどは胃の痛みがより激しくなった様子で、表情も非常に険しい物となっている。

まあ苦勞性かつ心配性の気もあるらしいと分かった将来の義父予定にこれ以上のストレスを掛けるのも多少は心苦しいと感じないこともないが、そもそもにしてスレイにはこれ以上整理する必要のある情報など何もない。

あとは実際見て確かめたいという欲求がある程度。

だからといっていきなり暴れだす訳にもいくまい。

いや、やってもいいのだが、流石に多少はこれでもゲツシュに気を遣っているのだ。

本当に多少に過ぎないのが、スレイらしいところだが。

だからこのようにペット達と共に好き勝手に寛がせてもらってる。場など関係ないのは散々繰り返した通りだ。

そもそもにしてスレイに場を弁える必要など欠片も存在しない。

全て分かった上で、敢えて好き勝手に振舞うのだから、本当に性質が悪い。

だがそれがスレイという人間であった。

そんな余りにも異質な空気を醸し出すスレイに敢えて近付いていく人影がいた。

「よう、坊や。始めましてだな？」

「……あんたは？」

気軽にスレイに声を掛けたのは傭兵王グラナル。

それに寝転び寛いだ姿勢を変える事も無く、ただ見上げ、胡乱気に応じるスレイ。

勿論名前や肩書きなどは知っている。

だが、わざわざ声を掛けて来るとは何のつもりだという意味を込めての質問だ。

「なっ、仮にも一国の王に対してあの態度っ!？」

常識的なシズカが近くで騒いでいるが2人は気にも留めない。

グラナルなどは相変わらず寝転んだままに自分を見上げてくるスレイに面白そうな視線を向けている。

「おう、すぐ先刻、紹介があったばかりだと思っただがな？ まあいい、俺は傭兵国家グラスベルの国王、傭兵王グラナルってんだ」

「いや、それは当然知っている。俺に何の用だ？ という意味で聞いたんだ」

未だ寛いだ体勢で、全く態度を変えぬまま、ひたすらどうでもよさ気に返すスレイ。

一部の者達は面白そうに一部の者達はハラハラと、一部の者達は憤慨してその様子を見つめている。

グラナルはこの程度で心を乱す事は無かった。

「いや、何。お前さんに俺と同類の匂いを感じたんでな、ついつい声を掛けちゃったんだ」

「俺をあんたと一緒にするな」

「いやいや、隠すなよ。お前さんも俺と同じだ、その心の中に野望を抱いてる口だろう？ちなみに俺は俺の国を大きくして、いずれこの大陸に“覇”を唱える野望を抱いてる訳だが」

場が静まり返る。

各国の首脳が集まるこの場で、この大陸に対する“覇”を唱える野望を堂々と告げたグラナルに、流石に場に緊張が走った。

特に英雄ブレイズは己が天敵を見る様に、険しい視線をグラナルに向ける。

しかしやはりスレイは寛いで寝転んだその姿勢を変える事すら無く、どうでもよさそうに告げる。

「まあ、確かに、今の俺には自分が野心家だという自覚はあるし、あんたとは一種の相似形だとは思うが、一緒にするな。俺の野望はあんたほど小さくない」

「へえ、そいつはまた。それじゃあ聞きたいね、お前さんの野望ってのはなんだい？」

この世界に“覇”を唱えたグラナルの野望を小さいと言っただけでスレイの答えに、周囲の注目が集まる。

「なに、実にシンプルさ、男ならだれでも抱くような野望だ。最強と女、誰よりも強くなり、あらゆる美女・美少女を己が下に侍らせる、まあ一応他人の女に手を出す気はないが。まあその2つだけだ」
「ははははははっ、おいおい。個としての最強と、たかが美女・美少女を侍らせるなんて野望で、この大陸の天下統一を謳う俺の野望を小さいだって？」

どこか期待外れな答えを聞いたというように、馬鹿にしたように

笑うグラナル。

周囲の者達も拍子抜けしたような表情だ。

英雄ブレイズに至っては、どう判断すれば迷うような困惑の表情。だがスレイは逆に馬鹿にしたように告げる。

「おいおい、何か勘違いしてないか？俺の言ってる最強と女の意味が分かってないようだな。いいか、俺の言う最強というのは、人だけじゃない、他のあらゆる種族、そして神々、更には邪神……“真の神”、それだけじゃない世界全て、いやこの世界だけじゃない、無限を超えたあらゆる世界、それらの世界の外の果て無き果てに到るまでに在る全ての存在に法則に理に概念に宿命に運命に常識、それら全てを超える……だけじゃない。もし必要ならばそれら全てを俺1人でぶち壊し、己が道を貫き通す、そういう意味の最強だ。女に関しても、人の女には手を出さないが、それ以外なら無限を超えたあらゆる世界とその外の果て無き果てに到るまでに存在する、俺の美的感覚に叶う美女・美少女ならあらゆる存在を俺の女にする、そういう意味の侍らせるだ。分かるか？言い換えればこの世界全ての戦力を超えた圧倒的な戦力に俺1人が単騎で成り、さらにはほぼ世界、まあこの世界だけじゃないんだがそれはこの際置いておこう、その、どのくらいになるのかな？まあ少なくとも国一つじゃ効かないだろうかなりの人数を俺個人に侍らせるって言っているんだよ。この野望に比べれば、たかが一世界の一大陸の天下統一なんて“覇”を唱える程度が、小さくなくてなんという？それに一部が騒いでたあんたに敬意を払わない理由も単純だ。あらゆる全てを敵に回そうと俺1人で勝つと言ってるのに、たかが一国の長たる国王などに敬意を払う理由が無い。分かるか？お前の野望が小さいとはそういう事だ」

哑然とする周囲。

流石にどこか馬鹿を見るような視線が集まり、呆れた空気が漂う。グラナルもまた馬鹿にしたように嘲笑し、告げた。

「おいおい、ただだけ夢見がちな坊やだ？本気で言っているとしたら

頭がおかしいとしか思えないな？どうやら確かに俺の勘違いだったようだ。お前さんはただの馬鹿だな、しかも救いようのない大馬鹿だ。構う価値すらなかったようだ」

「待て」

そういつて立ち去ろうとしたグラナルをスレイが呼び止める。

「あん？なんだ。もう俺はお前さんに用事なんてっ……！？」

獐猛に光る瞳。

いや、瞳と呼ぶのは果たして適当だろうか？

“ナニ”を“視て”いるのか、視点が違う、観点が違う、感性が違う、論理が違う、何もかも全てが違う。

“ソレ”がグラナルを捉える。

動けなかった。

恐怖はとつくに麻痺している。

それでも尚ただその場に凍りついたように固まるグラナル。

「なんだったら今、この場で、“結果”で以って、俺の野望の実現性を証明してやろうか？」

相変わらず悠然と寝転んだまま、ただ淡々と告げる、その言葉。

周囲の空気全てが圧倒的な密度を持ち、押し潰すような重圧を纏う。

グラナルと同じく感情が麻痺しているにも関わらず動けない実力者達。

それ以外の者達は言わずもがなだ。

異常な事態。

先程から何度も述べているが、レベル80を超えた一流の探索者は自らより遥かな強者を前にした時恐怖を麻痺させ、戦闘に最適なコンディションへとシフトする。

即ち今彼らを縛り付けるこれは恐怖では無い、それ以外の“ナニ”かだ。

と、スレイはふっ、とグラナルの武器に目を向けた。

覇王の名を冠するシークレットウェポン。

それがグラナルではなくスレイに反応し輝いていた。

視線を向け、その事実には驚愕するグラナルとその場の一同。

仮にも一度所有者を選んだシークレットウェポンが宗旨替えするなど、歴史上一度もそのような事実はない、あまりにも常識に過ぎる。

だがスレイは興味無さげに告げる。

「引け、俺はたかが“覇”などに興味はない。自らの身の丈に合った主に仕え続けるんだな」

静かに告げたその言葉に気圧されたように、霸王の名を冠したシークレットウェポンは、その輝きを大人しく収めていった。

場に静寂が戻る。

気にした様子もなく、もはや瞳さえ閉じ、悠々と寝そべったまま、何もかもを無視したように寛ぐスレイ。

自らが既にスレイの眼中にさえ無いことに気付くと、グラナルは悔しげに舌打ちすると、しかし分が悪いと冷静に判断し、そのまま身を翻し、元居た場へと戻っていく。

先程のスレイの視線に凍り付いた自らを忘れようとしながら。

そしてまた周囲も、今の一幕の非常識さに、敢えて全てを忘れるように努めていた。

それほどに非常識で、彼らの価値観を狂わせるような、常軌を逸した一幕であった。

ただ一つ、誰もが理解する。

スレイという存在、それが自らの常識では測れない存在だという事。

それが、今の一幕でただ一つ誰もが理解した結論であった。

そのような一幕があり、場が落ち着きを取り戻すのには更に時間が掛かった。

それでもある程度場が落ち着きを取り戻したのを見計らったアルスがようやく告げる。

「ふむ、それでは互いにある程度の力は把握したと思うので、適当

な相手と手合わせを始めようか」

流石に“勇者王”。

次々に与えられた動揺からも既に立ち直っている。

「それではまずS級相当の力量の者達から手合わせをしてもらいた
いと思う。カイト殿とヤン、マリーニア殿とエミリー、ケリー殿と
ライバン。この順番で手合わせしてもらいたいと思うのだが構わな
いかね？」

順当な組み合わせだ。

特に異議の声は上がらなかった。

だがただ一人スレイがアルスに不思議そうに尋ねる。

「いや、俺もS級相当なんだが？」

「ははっ、クロウ殿に勝ったなどという話で、あんな無茶苦茶なス
テータスで色々は無茶苦茶をやらかしてくれた君を、S級相当と言
うのはかなり無理があると思うよ？それに君には私と手合わせして
もらいたいと思っていてね」

アルスが何故か娘のカタリナを意味ありげに見つめながら言う。

カタリナはその視線に何故か僅かに頬を赤く染めた。

ノブツナがアルスに詰め寄る。

「あ、ずりいぞアルス！またいいところ取りするつもりだな！！」

「ふむ、そうは言うがちゃんと君には因縁の相手がいるだろう？」

慌てず落ち着いて返し、クロウを指し示すアルス。

「まあ、そりゃあそうなんだが」

未練を残しつつも、その言葉の正当性を認め、渋々と引き下がる
ノブツナ。

逆にスレイはアルスの台詞に異論がありそうな顔をしつつも、諦
めたように嘆息し、別の事を指摘する。

「しかしステータスの相性どころか他の諸々も考えてこの組み合わ
せにしたとしたら、相当に意地が悪いなあんだ。特に身内に」

「さて、何のことやら」

スレイの指摘に空とぼけるアルス。

そんな中、平気でこの国の王に対しタメ口を聞くスレイに、ゲッシュがやはり胃の痛みを感じ、かといって口を挟む訳にもいかず、再び胃薬を飲んでいた。

相当な傑物なのは間違いないというのに、スレイが関わると常に強いストレスを与えられる。

ゲッシュも損な役回りだ。

「それでは、まずはカイト殿とヤンから頼む。ちなみに時間制限無し、それこそ何でも有りで。あとエリナ殿がいるから回復に関して心配が無いので、死なない程度ならいくらでも傷つけて構わないということで行こうか」

アルスが楽しげに吐き出した物騒な台詞に、一部は顔を蒼褪め、一部は面白そうな顔をする。

そんな中、やはり意地が悪いなど、肩を竦めてスレイは呟いていた。

中心を広く空け、円形に囲むように立つ一同。

「やはり小細工だな」

「うお！君は……」

戦いの場に向かおうとするカイトに、何時の間にか傍にいたスレイが声を掛ける。

全く何も感じずいきなり声を掛けられた事に、探索者になって以来始めての事態とあって流石に驚くカイトだが、相手がスレイと知れると慎重に警戒しつつも、相手からわざわざ声を掛けてきた事にむしろ興味を惹かれた視線になる。

「何か私に用かい？」

狡猾に計算を巡らせながら、どこまでも明るい声で告げるカイトに、いや、とスレイは首を横に振ると、ふう、と溜息を吐く。

「ただ言っておきたかっただけさ。小細工だな、とな」

「おや？あっさり見抜く目は流石だと思うが、君はこういう事に否定的なのかい？だとしたら少々興醒めなんだけどね」

少しばかり眉を顰めるカイト。

いかにこのスレイという青年がクロウに勝てる程の超一流の実力を備えてはいても、もし正々堂々だの、そんな事に拘っているようであれば、たかが知れていると思ったのだ。

先程、謀略の類も平気で食い破りそうな化物だとまで考えただけに、それが買い被りだとなれば尚更落胆させられる。

……まあ、得体の知れない汎次元竜だの、下級とはいえ邪神などという化物をペットにしているという今までの常識を全てぶち壊されそうな事実は一先ず置いておいて、だが。

「いや？むしろ感心してさえいるさ。創意工夫というのは人間の無限を超えた可能性、その開拓の一翼を担う物だ。小細工上等だと思うぞ？それにその程度の小細工、見破れないような奴に、そもそも勇者を名乗る資格は無い」

「ははっ、そいつはまた。その資格を与えたのは神なんだよ？」

「そう、所詮はたかが神程度が与えた資格だろう？正直あいつら程度に勇者を名乗る資格があるのかどうか疑問なんだがな」

「……そいつはまた、なんとも豪気な台詞だねえ」

蔑んだような目で職業・勇者達を順に見やったスレイのその台詞の物騒さに、別に敬虔な商神の信徒という訳ではないが、それなりの信仰を持ち祝福を受ける身として、流石に明るさを常に維持した、余裕を保った表情を、僅かに引き攣らせるカイト。

だがなんとかすぐに気を取り直し、スレイに尋ねる。

「それじゃあまた、何故わざわざそのような事を言いに？」

「単純にアンタみたいな裏で色々動くようなタイプが嫌いだからかな？少しばかり馬鹿にしておきたかった。いやさっきも言った通り小細工自体は好きでむしろ凄いと感心させられる物も世には山ほどあるんだがな？あんたがやってると思うと無性に馬鹿にしたくて仕方無くなってな」

「……それはまた、率直極まりないなあ」

流石にまた、僅かに頬を引き攣らせるカイト。

「しかし、嫌いなだけかい？随分と好き勝手言ってくれるけど、裏で色々と動かれるのは苦手ではないのかな？」

流石にここまで言われっ放しなのもなんなので、試しに脅しを掛けるように軽く言ってみるカイト。

だが、先程自分で既に結論を出していたというのに、つつい我ながら舌打ちしたくなるような未熟さを見せ、感情に任せてそのような事を言った事をすぐに後悔する事になる。

「なに、俺相手に裏で色々やってくるような奴がいるなら、例え相手が何者だろうと何だろうと、全て根こそぎ丸ごと消し飛ばすだけさ」

「……はは、……そいつはまた。本当に、豪気だなあ」

掠れた笑い声を上げるカイト。

先程、既に自分で予測していた事とはいえ、それを本人に言われるとやはり洒落にならない。

クロウを倒したというその実力、そしてその常識外れのペット二匹。

いかに自分があらゆる手段を用いても、本気で消し飛ばされる未来しか思い浮かばない。

「何を緊張してる、今のおんたの敵はあそこの自称…勇者だろう？消し飛ばされたくないのなら、単純に、俺を敵に回さなければいいだけの話だ。そういうのはあんたみたいなタイプの得意とするところだろう？」

「いやいや、一応彼は他称…勇者だよ？あくまで一応ね。しかしそうだった、忘れてたよ。私の本分は探索者でなく商人だ。いや、あまりにも君が規格外に過ぎて、つつい調子が狂ってしまったのかな？」

完全に明るい表情を取り戻し、カイトは軽く笑う。

実際、先程そのような結論を自分で既に出している。

それでいながらカイトほどの者の調子を狂わせるこの青年に、カイトはますます警戒を強めた。

「それに少しばかり君がわざわざ私に話しかけた訳が分かったよ。つまり君は釘を刺しに来た訳だ」

「ふうん？俺があんた程度に釘を刺す必要があるとでも？」

「勿論違うとも。少しばかり君の性格が読めたのさ。つまり君は、私に君に対して裏で色々と動かれるのが『面倒臭い』と思ったんだろう？だから始めからその可能性を潰しておいたと、いや、とんでもないなあ」

笑って言うカイトだが、スレイの表情には少しばかり感心の色が浮かんでいた。

流石にそこまで読むとは思ってなかったので、カイトを甘く見ていたと、カイトの評価を僅かばかり上昇補正する。

あくまで能力についてだけだが。

「それじゃあ、行かせてもらうよ？安心してくれ、君を敵に回すような馬鹿な真似をする人間じゃないさ、私は」

告げると、カイトは再び戦いの場へ歩き出す。

目指す先では、ヤンが何やら怒ったようにしていて、これは上手いこと、相手の冷静さを失わせる結果にもなって、なかなか悪くないかなと思いつつ。

カイトを見送ったスレイは、やはり肩を竦めて、そのまま元の位置へと戻っていった。

見物人と化した会議の参加者達が円形に囲む中心に、カイトとヤンが離れて立つ。

勿論練兵場の外れからは兵士達も何とか見物しようと色々と工夫を凝らしているようだ。

カイトは柔軟性に富んだダマスカスの弓を何度も試すように引き、ヤンは剣を構えて立つ。

弓を弄るばかりのカイトを、ヤンは怒ったような馬鹿にしたような顔つきで眺めている。

ああ、駄目だなこれとはと、溜息を吐くスレイ。

他にも見ているだけで気付いている者は相当数居るというのに。

その者達も当然呆れ顔だ。

未だそのような反応が出る辺り、やはり職業…勇者に対する期待は未練がましくも捨て切れないうる、という事だろう。

まあ、仕方の無い事かとスレイは思う。

「それでは、始め!!」

アルスが合図を出すと同時に、やはりカイトは弓を引き、手を離していた。

今回だけは何故か合図を出される前、弓を引く直前に一度、腰に手をやっていたのだが。

しなったダマスカスの弓が元に戻り、弦を震えさせる。

そして闘気術と魔力操作を併用し、急激な加速でカイトに突っ込もうとしたヤンは、そのまま突然姿勢を崩し倒れていた。

ちなみに関係無い事だが、ヤンの闘気術と魔力操作の併用を見たスレイは、そのロスが多さにまたも評価を下げていた。

「ぐあっ!!」

痛みに呻き声を上げ、地面を転がるヤン。

ヤンは右の太ももを押さえている。

そして右の太ももには何故か穴が開き、血が流れていた。

そのままヤンに歩いて近付き、悠々と首筋にオリハルコンのロングソードを突きつけるカイト。

「これで、私の勝ちで構わないかな?」

アルスに対し気楽に問いかける。

「ああ、それまで! カイト殿の勝ちだ!」

途端、エリナがヤンに駆け寄っていく。

そして……太ももから透明な、そう血が付いていなければ全く存在に気付きさえしなかっただろう矢を抜き取ると、そのまま治癒魔法をかける。

現にこの小細工に気付いて居たであろう者達も、スレイを含むごく一部を除き、流石に驚いた表情をしている。

それほど隠蔽性であった。

ヤンの傷を一瞬で癒したエリナにカイトが声をかける。

「おっと、その矢は貴重なものなので、返して頂けるかな？」

カイトをキッと睨みつつも矢を投げて返すエリナ。

「おっとっとっと」

カイトは慌てて矢を落とさないように慎重に受け止める。

そんなエリナを、ヤンは頬を赤く染めつつばおーっと見つめていた。

スレイは頭が痛くなり、エリナに対し怒りさえ覚える。

博愛精神なんぞ、もっとそれを受けるに値する、社会的弱者達に発揮しておけと。

生まれつき恵まれた立場で生まれ、図に乗って、今でもその生まれだけで、責任も果たさず豪勢な生活をしてるだろう馬鹿相手に優しさなんぞ見せてどうするぞと。

おかげでスレイまで厄介事に巻き込まれる事が確定したような物だ。

何せどう見てもヤンはエリナに惚れたのが明らか。

おまけに性格の歪んだ職業…勇者様と来てる。

人間の姿のまま変化できないとはいえ、一応は竜人族の身体能力を持つエリナ。

だが明らかに人間の姿のイリナ未満、つまりS級未満だ。

対しヤンはあの有様でも一応はS級相当。

アッシュの友人である身としては、ヤンにも気をつける必要が出てしまった。

勿論アッシュの為に動くのはちっとも苦ではない。

友人の為に無償で動くのはむしろ当然の事だと思う。

むしろ今までにない事で楽しいとすら思う。

しかしその原因を作ったのがエリナという事にはやはり怒りを隠せない。

なんでこんな馬鹿女の為に苦勞をと思う。

アッシュの為に動くのは楽しい。

だがエリナの為と思うとムカつく。

アンビバレンツ
二律背反だ。

スレイは自分のモノにするつもりが無い女性に対しては、相手が美女だろうが美少女だろうが基本厳しかった。

溜息を吐きつつ目的の場へ向かう。

「それで、その矢はなんなんだ？」

「うおっ!？」

突然後ろからスレイに声をかけられ、またもカイトが驚きの声を上げる。

今回もいきなり現れたようにしか感じられなかったのだから驚いて当然だろう。

だがスレイは構わず続ける。

「透明な矢を腰に差しているのは気付いていたが、それはどういう原理なんだ？」

「ははっ、いきなりだなあ君は。まあいい、その内大々的に売り出すつもりの技術だし、私としては君相手には友好関係を築いた方が得策だと判断してるからね、説明するよ。オリハルコン製の矢に、光輝魔法による光学迷彩を施した代物さ。いや、あの勇者殿の鎧が軽装で助かった。もし全身がシークレットウェポンの鎧で覆われていれば、オリハルコン製の矢といえども軽く弾かれただろうしね」

「それならそれで、あんたは別の何かをしそうだがな。ところでそれだけじゃあないだろう？ あんたにしちゃお粗末な誤魔化しだな。光の透過程度じゃあ探索者の目を誤魔化せる訳が無いのなんて常識だろうが」

「……いや、あの勇者殿相手なら、それでも誤魔化せた気がするんだけどね。本気で肉体の性能を全く発揮できてない様だし、……生まれつき改造された肉体を所有してたというのに、アレは逆の意味で驚異的だね」

スレイの質問に軽く答えるも、容易く誤魔化しと見破られ、心中

舌打ちしながらヤンを蔑む事でさらに誤魔化しにかかるカイト。

尤も無駄だろうとは理解していたが。

「ふむ、まあ確かにそれはそうだが、本題をずらしているな。まあ勝手な所見では、闘気と魔力を透過する加工に、狂気や聖気や竜気や恐らくは龍気まで、その上精霊の力にそれに闇の力、更には妖気までか。ここまでの迷彩、更に別の特異な力を操る者か、よほど高位の存在じゃなければ見抜けないだろうな。まあ見抜けなくても対処できる存在はそれなりに居るだろうが」

「ははは……コレの存在に気付いてる者だけなら他にも居るが、そこまで完全に見抜く君は何者だい？」

「当然よどこるか圧倒的に高位な存在だが？」

思った通り容易く誤魔化しを見抜きつつも、辛辣にヤンに対する評価には賛同するスレイに苦笑するカイト。

だが次の、自らが開発させた矢に対するほぼ完全に正解の解答には驚愕する。

思わず質問が零れ出るも、返って来た答えはあまりにも単純明快で……恐ろしい物。

さしものカイトも肝を冷やす。

「が、それだけじゃないな。ふむ、オリハルコン製か……、あんた自身の精神波のパターンを登録して、あんただけに感応・認識できるようにしてるな？ そんな代物、いったい開発に幾らかかった？」

「おおっと、お目が高いね。研究費自体は色々な研究に散ってて、それらの研究結果の産物である技術の幾つかを使って開発した代物というだけだから正確な金額は把握が難しいが、間違いなくそこらの小国の2つや3つ軽く買えるぐらいの金額さ」

スレイは思わず硬直し矢を見つめる。

この矢を開発するのに国の2つ3つ買える金額。

いや、技術の開発なのだから、後々他への転用で更なるリターンがあるのは勿論分かる。

大体この矢を作る為だけの研究では無い事も。

いやカイト自身が言っていたではないか、他の研究の産物である技術を使って開発した代物だと。

だが、そんな技術を結集して、矢一本を創らせ、それをヤン一人を倒すために使ってみせる。

当然、ヤンなどこの会議前はともかく今となってはカイトの眼中にある筈がない。

恐らくは一種のデモンストレーションだ。

これも商売に利用するつもりだろう。

「なんというか……大人は汚いな。染まりたくないものだ」

「いやあ、照れるなあ。だがまあ、出来れば、汚いではなく賢いと言ってほしいものだね」

全く悪びれる様子の無いカイト。

流石にこの手の中傷には慣れた物だ。

「まあ、確かに勝負にあらゆる手を尽くすのは当然の事だが。こんな手合わせでそこまでするのだから恐れ入る。……いや、それすらもデモンストレーションの機会に利用する商売人根性に、かな？だが、手合わせの事なんて知りもしなかったんだから、開発後は普段から携帯していたのだろう？ いったい幾つくらいそういう隠し玉を持っているんだ」

「そいつは秘密って事で」

カイトは快活に笑いウィンクして見せる。

スレイにとってダメージがある事ではないが、多少なりともスレイの予想をさえ上回ってみせた事には、カイトであっても爽快感があったのだ。

そうしてアリサとダリウスの元へと歩いて戻っていく。

そして何やらアリサとダリウスに突っ込まれている。

ダリウスは常識的な突っ込みを入れていたが、アリサはむしろ貴重な物を無駄に使うとか、そういった類の突っ込みを入れているようだ。

……アリサの場合、これすらも機会と取るような狡猾さは無く、

純粹にがめついだけらしい、いや、多少は予想がついていたのだが。精神の安寧の為にそれは無視することにする。

ちなみにエリナもドラグゼスとイリナの元にとっくに戻っていた。ヤンはそんなエリナの方を頬を赤く染めてみながら、ぼんやりと他の職業…勇者達の元へと歩いていつている。

他の職業…勇者達、エミリーやライバンから馬鹿にしたように見られているが、気付く余裕も無いようだ。

そんな様子に肩を竦めながら、スレイはゲツシュの元へと戻っていった。

「それでは次！マリーニア殿とエミリー」

途端、場が静まり返る。

注目が、自分ではなくマリーニアに集まっていることに気付き、不機嫌そうにするエミリー。

マリーニアはそんな注目に萎縮したようになっていた。

しかし、とスレイはマリーニアを見て呟く。

「マリーニアは事前に加速魔法を使うつもりは無いんだな」

「何を言っているんだ、当然だろう？姉さんの速度はSS級つまり超音速、魔力操作で強化すればSSS級で雷速だ。相手のエミリーって女の速度はS級で音速、闘気術と魔力操作を使えるんだから両方で強化すれば姉さんと同じくSSS級の雷速になる。手合わせが始まる前に加速魔法を使って、自分を有利にするようなことを姉さんがする訳ないじゃないか」

大真面目に言うケリーと、萎縮しながらもしっかりと相手を見据えるマリーニアを見て、最後にカイトに視線を移し、スレイは呟いた。

「大人が汚いのか、子供が未熟なのか、はてさて？」

「？」

不思議そうなケリーに何でもない返し、スレイはそのまま視線を中央に戻す。

「では、始め!!」

そしてケリーが言ったようにマリニアは魔力操作で、エミリーは闘気術と魔力操作の併用で自らを強化し、雷速で以ってぶつかり合う。

当然エミリーの闘気術と魔力操作などヤンと同じくスレイからすれば無駄の多い未熟な物であったが、このレベルの戦いなら誤差の範疇だろう。

エミリーは思考加速と思考分割を用いて怒涛の如く剣を繰り出し、短い呪文の魔法を選択し幾つも撃ち放つが、それら全てを同じ雷速でありながら、マリニアはまるで一瞬先を動いているように、容易く躲してのけている。

実際マリニアには一瞬先が“視”えているのだろう。場に、ほうつと感心した空気が流れる。

「流石は“星詠み”か」

スレイは淡々と事実を確認するよう口にしてみせた。特に感慨は無い。

占術などなくともあの程度スレイでも出来る。

だが他の者達の感心は一人のようだった。ひとしお

もはや誰もが勝者を確信する中、エミリーはムキになったように攻撃を繰り出し続ける。

しかし最初から全力全開で以って攻撃を繰り出し続けたエミリーの息は確実に切れ始めていた。

それに気付き距離を取るエミリー。

マリニアは追わず、その場に留まる。

それを優位にある者の驕りと見たのか、瞳に憎しみを宿らせるエミリー。

そして魔法の呪文とは違う、何か特殊な呪文を唱え始めた。

剣に盾、鎧から発せられる不思議な光。

ヴェスタの力の残滓によって生まれた強大なる“歪”。

その力を利用した封術と、封術を封印だけじゃなくより直接的に

戦闘に応用するためのシークレットウェポン勇者シリーズ。

多少使える程度の技量はあったか、とスレイは軽く鼻を鳴らす。

「いかん！止めるエミリー、そこまでだ！！」

自国の王に制止され、動きを止めるエミリー。

まあ妥当だろう。

職業…勇者共の力量は話にならないが、だからこそ強大なる“歪”の力など使わせたら何とかに刃物だ。

危なっかしい事この上無い。

そんなアルスの配慮にも当然エミリーは気付かない。

「命拾いしたわね“星詠み”さん？この“歪”の力を以ってすればあなたなんて敵じゃなかったんだけど」

どこか優越感を漂わせ告げるエミリー。

「あら、どんな力でも、当たらなければ意味がありませんよ。“勇者”さん？」

それに言い返すマリーニア。

僅かに驚くスレイ。

存外マリーニアは負けず嫌いな面もあったようだ。

エミリーは負け惜しみと見たのか鼻で笑ってみせる。

マリーニアはアルスに告げる。

「どうか、このまま続けさせていただけませんか、アルス陛下？」

「しかし、“歪”の力は危険なものだ。もし本当に君が全て躲けるとしても、周囲に出る被害は看過できないものとなる」

「ふむ、なるほどね」

途端、アルスの目の前に何時の間にか白い小竜、時空竜フルールが居た。

僅かに驚愕の表情を浮かべるアルス。

「さっきから思ってたんだけど、手合わせて言っても竜皇とか魔王とか、あのあたりがちよっと本気を出しただけで、この王都そのものが消し飛びかねないし、無理があると思わないかい？」

「そ、それはその通りだが」

自分にタメ口を聞いてくるフルールに、どんな反応を返していいか分からず困惑しながら頷くアルス。

「それじゃあ、ディザスター」

『なんだ？いくら同じ立場になったとは言え、主でもない者が我を気楽に呼ぶな』

不機嫌そうなディザスターに、フルールがスレイに尋ねる。

「それじゃあスレイ、ちよつとディザスターの力を貸してもらってもいいかな？」

「ああ、構わないが」

主が許可したことで、ディザスターはフルールに協力する気になったのか、素直に尋ねる。

『ふむ、それで力を貸すとは何をすればいいのだ？』

「いや、ちよつと君の記憶を借りるだけさ」

そういつてフルールはディザスターの頭の上に乗った。

「それで見物人としては、野次馬の一般兵達は除外して、この場に
いる各国代表達だけでいいよね？」

「あ、ああ。構わないが」

困惑しながら答えるアルス。

「それじゃあ、行くよ」

途端、世界が歪んだ。

そして現れる広大な無の空間。

闇に包まれながら全てが見通せる矛盾。

ただ地面のみがどこまでも果てが無いかのように続いている。

その場に移動させられた一同はスレイを除き全員がただ困惑し、
ざわめいていた。

「こ、ここは？」

「世界の墓場さ」

「世界の墓場？」

アルスの質問にフルールが答え、それに更にアルスが質問を重ねる。

見ると、どこかディザスターは機嫌が悪げだった。

「そう、ディザスターが創造し、破壊して、再生して、また破壊する、そんな事を繰り返した、数え切れない程の無数の世界の墓場。そこに全員を移動させたんだ。ちなみにこの広大な地面や君達が呼吸している空気は、ここに漂う元々は世界を構成していた要素を使って僕が創り上げた即興のものさ」

あまりの話の規模の壮大さにアルスは理解が追いつかなかった。

スレイを除けば他の面々も同じようである。

スレイの場合、ただ単にどうでも良いといった感じで、何時の間にか先程の円卓の間から魔法の袋に詰めて全て持って来た茶菓子を摘んでいるだけだが。

流石に、いくら工夫があるといっても、弱者の戦いばかり見せられて飽きてきたと言ったところだ。

「というか本当に工夫をしていたのなんてカイトぐらいのものであったし。」

「しかしディザスター、君の世界の壊し方って随分適当だねえ。ほら、ごらんよ。超巨星が一個残って、今こっちに向かってきちゃってるじゃないか？もうかなり近いよ？」

「ふむ、フルールくん。アレは危険なものかね？」

「まあ、そりゃああのままこっちに来てぶつかれば、一部を除いて全員お陀仏だね。そうだ、なんなら竜の姿のブレスで破壊に挑戦してみる？本気の本気でブレスを吐ける機会なんて滅多に無いでしょ？」

ドラグゼスの質問に答えるとフルールは何処か挑戦的にドラグゼスを睨けてみた。

ちなみに、大分距離は遠いが、この場にある者の殆どは、今現在の、全く時差の無い超巨星の姿を捉えている。

当然だ。

探索者として肉体改造した者や戦闘種族と呼ばれる者達は、そもそのあらゆる五官のシステムが人間の物とは違う。

光のように「とろい」ものなど物の認識に使用する事はない。

尤も、実際に自分自身が光速を越えられる者は限られるが。

「ふむ、そうだね。やってみるとしようなか」

ドラグゼスは面白そうにフルールの挑発に乗って見せ、そのままその場で竜の姿へと変化していく。

そして体長300メートルの漆黒の巨竜がその場に現れた。

「少しお待ちいただけますか、皆さん」

そこで突然、アロウンが待ったを掛けた。

「少しばかりお時間を頂きたいのですが、構いませんか？」

「いや私は構わないが」

ドラグゼスがその巨体で頷き、他の者達も続いて頷く。

「それでは、失礼」

言うと同時に、アロウンは時の魔杖を掲げ、杖に秘められた力を解放する。

光りに包まれるこの場に居る者達。

「？これは？」

その場に居る者の疑問の声にアロウンが答える。

「流石に肉体までは無理ですが、皆さんの意識のみをあらゆる時の束縛から解放しました。これから行われる竜皇陛下のデモンストレーションも、そして実力者達の戦いも、とてもではないですが私を含め一部の方の実力では追いつけない速度域での戦いがある事でしょう。何より戦闘に関わりの無い方もこの場にはいます。ですがこれで全員が全てを観賞することが可能となりました……っ!？」

と、アロウンの言葉が詰まり、視線が一点で凝固する。

自然周囲の視線もアロウンの視線を追った。

視線の先に居るのはスレイと二匹のペット達だ。

ちなみにフルールはドラグゼスを挑発するだけして、既にスレイの右肩に戻っている。

アロウン以外の者も、スレイの周囲の空気に漠然とした違和感を感じていた。

「あなたはっ!？」

「ふむ、正直必要無いと思ったので、勝手だが無効化^{キャンセル}させてもらったぞ。ペット達も同じようだ」

淡々と告げる言葉に、アロウンはただ絶句。

シークレットウェポンの能力を、防御するのではなく、こうまで自然に無効化する。

異常に過ぎる。

アロウンの様子に事態を理解した一部の者達が再び警戒の眼差しをスレイに向ける。

疼くな、などと思いつつただ口元をニッと吊り上げるスレイ。

ふと、自分の表情筋は退化してるらしい、探索者に改造されても変化無しとは筋金入りだな。

などとすっ呆けた事を考えつつ、表情をデフォルトの無表情に戻す。

周囲の視線は完全に無視だ。

そもそも気にもならない。

そんな中、そろそろ驚くのものにも飽きたと言った感じでアルスがマリアに命じていた。

「ふむ、マリア。せっかくのアロウン殿の好意だ。無駄に加速薬を消耗してしまつては勿体あるまい。ロックを掛けて、その者の戦いの時にロックを解除するようにしてくれ」

「はい、分かりました」

軽く答え、称号・勇者の面々に僅かに杖を向けただけで終わった旨をアルスに報告するマリア。

あの様子からするに、自分達でもロックと解除は可能だが、無詠唱の特性を持つマリアにやらせるのが一番という事か。

そのようにスレイは予想し、そしてドラグゼスに視線を向けた。

他の者達も当然の様にドラグゼスに視線を向ける。

視線を向けられたドラグゼスは、舞台が整ったと理解し、超巨星へと向き直る。

そしてどうやら思考はアロウンのおかげで勝手に加速するらしいので放置し、肉体を光速の数倍の速度域へと突入させる。

他の者達も全員がその速度域を知覚できる思考速度となっていた。時の魔杖の力の賜物だ。

だが時の魔杖の力に関係無く当然のようにその速度域に加速していたスレイは、やはりこんな物かとがっかりしていた。

ドラグゼスの加速の限界にだ。

既にこれが限界と見切ってしまった。

いや、ポテンシャルはあるのだ、こんな物ではないもっと圧倒的なポテンシャルが。

だが若い、如何せん竜人族としては若すぎる。

その事をまた残念に思うスレイ。

そんな中ドラグゼスも他の者達も、そう普通の人間でさえ皆、現在の超巨星の姿をリアルタイムで全くの時差無く捉えて、見つめている。

スレイもややがっかりとしつつまたそちらに視線をやった。

恐らくは個人としてだけでなく、種としても若いサイネリアも同じ様な物だろうと予測を付けながら。

加速した巨竜、ドラグゼスは大きく顎を開いていた。

見た目だけなら大した迫力だ。

実際見ている者達の殆どが息を呑んでいる。

スレイからすれば虚偽脅しのようにしか感じられなかったが。

ドラグゼスの喉の奥から光が溢れ出る。

と、次の瞬間。

周囲を震わせる圧倒的なプレッシャーと共に、広大な光速の数倍の速度の特殊な光のブレスが放たれた。

暫しの時間を置き、超巨星へとブレスが着弾する。

そして、ほんの僅か、欠片ほどの欠落が超巨星に生じていた。

漆黒の竜は大きく顎を開いたまま硬直し、その様からは冷や汗を流しているような雰囲気すら感じられる。

他の者達も同様に、殆どの者が啞然としていた。

そのまま呆然とし続ける一同。

そこへフルールが呑気に明るい声を上げる。

「おー、大したものだね！あれなら大陸の一つくらいは軽く吹き飛ばせるんじゃないかな？」

「ふむ、面白そうだな。俺も挑戦してみるか」

1人、大した見物ではないと、あっさりと見切りを付け、何時の間にか悠然とその場に座り込み、茶菓子を摘みながら適当に見物していたスレイが、立ち上がり前に進み出ると、闘気と魔力を速やかに融合し、エーテル強化を果たして、鞘に納まった双刀に、エーテルを限界以上に注ぎ込む。

エーテル強化により一気に光速の数十倍の速度域へと到達したスレイは、軽く刀の柄に手を添える。

「“今”の君じゃあ、まだあれを破壊するのは無理だと思うよ？」

「さて、どうかな？どうもここに来てからどうもやたらと調子が良くてな。それにちょっと試したい事もある」

そう言い放つと、スレイは意識を集中する。

試したい事というのは先立ってドラグゼスとサイネリアの力の無駄な放出を見た時に思った、無駄を極めた先に威力の極みはあるか否かという疑問への挑戦だ。

つまりは今までの自分が追求してきた戦闘スタイルである徹底的に無駄を削ぎ落とし疾さを追求した“最速最適最善の動作”の極致と真逆の、敢えて徹底的に不必要なまでに無駄に大きな動作で極大の威力を求めた“一撃必殺の極み”の極致を試してみようという挑戦でもある。

なにせ対象の大きさが大きさだ、ちょうど良い機会だろう。

自らを純エーテル強化により、現時点での最高の速度域へと強化するスレイ。

そして、まずは左手を右腰のマーナの柄に添え、身体中の筋繊維を全て一本一本徹底的に絞り、体内の純エーテルもまた必要部分の

みの強化を徹底的に高め一気に爆発させる時に備え、体外の純エネルギーでの法則操作もまたその威力を極める動作を助ける為だけの補助一点を高める。

以前二刀同時の抜刀術などをやったことがあるが、結局のところあれは肉体構造的にも、その他あらゆる力の性質的にも極大の威力を求めるには向かない、あくまで無駄を徹底的に削ぎ落とした最速の疾さでありながら最大の威力を出す為の一撃に過ぎなかった。

だが今回は違う。

敢えて最大を超えた極大の威力を求める為に、二刀を同時に抜き放つのではなく、まずは引き絞り徹底的に威力を高めた一刀目の抜刀術を放ち、その動作により逆方向に引き絞られ溜められた力を利用しての、更に高められた威力の二刀目の抜刀術を放つ。

それにより最大を超えた極大の威力を持った“一撃必殺”の斬撃を実現してみようというのだ。

そして高められた力がピークに到達した一瞬。

まず徹底的に絞り込まれた力は解放されたバネの如く弾け、螺旋状に力が身体中を伝動し終点に至るまで徹底的に増幅され、左手で引き抜かれたマーナが超絶の速度で蒼い斬撃波を解き放つ、その回転の勢いのままに左側に先ほど以上の力で捻り込まれ引き絞られ、圧倒的な力を溜め込まれた肉体、同時にスレイは左腰のアスラの柄に右手を掛け握る、身体中を軋ませながらも先ほどまでよりも更に絞り込まれた力が螺旋状に伝動し終点に至るまで更に徹底的に増幅され、右手で引き抜かれたアスラが更なる超絶の速度で紅い斬撃波を解き放った。

蒼い斬撃波よりも強大な力で解き放たれた紅い斬撃波は、蒼い斬撃波を超えた超絶の速度で以って蒼い斬撃波に追いつき、蒼い斬撃波と紅い斬撃波がクロスし融合し、紫色の×字型の極大の威力を秘めた斬撃破が、超絶の速度のままにその大きさを拡大させつつ超巨星に迫り、そして×字型に斬り裂き、超巨星を四つの塊へと分断していた。

「ふむ、こんなものか」

どこか納得がいかないうような、それでいて分かり切っていたというような矛盾した風情ながらも、スレイはそのまま納刀し、自然体へと立ち戻る。

ただ哑然とするだけの周囲。

だがまだ終わってはいなかった。

スレイの放った斬撃波は超巨星を分割した後、更に威力が極まり、放ったスレイですら捉えきれなくなりそうな更なる速度域へと加速し、まだまだ拡大を続け、そして極大の威力を超越し更なる先へと至らんとした刹那……突然、消失した。

後には、虚空に突如として現れた、時空も次元も位相もなにもかも切り裂いた末の、あまりにも巨大な×字型の裂け目のみが残る。

その×字型の裂け目の先には、ただただ虚無が覗くのみ。

と、ふとその虚無の先から、深淵を覗き込み深淵から覗き込まれるような、得体の知れないプレッシャーがその場の全員を襲う。

咄嗟にフルールが時空の力を用いて防御結界を張る。

あらゆる脅威から完全に遮断された空間。

それでも尚、スレイ、ディザスター、フルールの三者を除き、狂いそうな程の畏怖と驚愕に襲われ続ける一同。

まして恐怖という物を麻痺させる機能を持った探索者や戦闘種族までもが、全く以って抵抗できていない。

これでディザスターの防御結界が無かったらどうなっていたことか。

そこへディザスターがスレイへ声を掛けた。

『ふむ、主。すまないがそこをどけてくれないか?』

「ん? ああ」

軽く答え、身体を横にずらすスレイ。

そしてディザスターは、地に伏せたまま、ただ軽く片目を開き、虚空を睨む。

ただそれだけで四つに分断された元超巨星の塊は刹那に消滅し、

更に虚空に開いた裂け目までもが消失していた。

時の束縛を越え、視覚とは違う領域で、その様子を知覚していた者達は、ただただ畏怖と驚愕の感情に支配されるのみだ。

『主よ、主は未だ自らの成長速度を把握し切れていないようだ。なるべくならこのような自らの限界に挑むような無茶は止めて欲しい。なにせアレらは特に強いとも思わんが、ただひたすらに相手するのが面倒臭い相手なのでな。それに、もしこの場にいるのが我と主とそこの小竜だけならばアレら相手でもどうとでもなっただろうが、流石に他の者達を完全に庇えたかどうかは怪しいところだ』

「ふむ、そうか。まあ確かにただのお遊びに過ぎないただの大道芸じみた真似に、そんな余計な手間暇を掛けるのも馬鹿らしいしな」
強いとも思わないというディザスターの言に多少萎えかけるも、あくまでそれが“今”の自分より遥かに強い“真の神”であるディザスター基準だと思い直し、興味が再び湧き上がる。

その為、言葉とは裏腹に、先ほどの得体の知れないプレッシャーを放つ相手への、戦闘意欲的な未練を表情に僅かに残しながらも、スレイは納得し、頷いた。

なにせフルールの結界により時空間的に完全に遮断され得体の知れないプレッシャーは確実に届かなかったというのに、それでもなお未だ他の者達は、抑えきれない恐怖に身を震わせている。

もし直接浴びていたなら、おそらくは深い狂気に囚われ壊れていたであろう。

流石に自らの戦闘欲求に、関係ない人間まで巻き込む訳にはいかない。

その程度の常識はスレイにもある。

そう考えつつも、自らがそのような感覚を全く感じて居ない事に、自分が人として壊れているという自覚を深めるスレイ。

それと結局、無駄を極めた先の、一撃の威力を求めた上での、溜めの時間を徹底的に掛けての“一撃必殺の境地”など自らの求めるところでは無く、自らが理想とする戦闘スタイルには程遠い事も分

かった。

結局は無駄は無駄に過ぎないという事だ。

威力など求めず溜めなど必要とせずとも、全ての攻撃が最速にして最適にして最善。

のみならず当然の如く自然に“一撃必殺の境地”の極大の威力を発揮する。

それくらいでなければ自らの戦闘技術とするには意味が無い、そう確信を得る。

その意味では今回のこの試みも、まあ無意味では無かったのだらう。

目指すべきはより練られた技量の境地、いや力の高み、いや違う。理を超えそれを為すのだから、自らの存在そのものの進化だ。

構えも溜めも無しに“一撃必殺の境地”と言える己が極大威力の斬撃を、間すら空けず幾らでも続けて使える様にならねばならない、それが結論。

戯れではあったが、色々な意味で得た物は多い。

そうして、スレイにとっては意義深かったが、他の者達にとっては、驚き呆れ畏怖するしかないスレイとディザスターとフルールの力を見せ付けるだけの、その一幕は終わりを告げた。

暫しの間、誰もが驚愕し続けるだけの時間が続いた。

何時まで経っても再開しない手合わせ。

もはやどうでも良さそうに地にあぐらを掻き、ペット二匹と共に魔法の袋に何時の間にかたっぷり詰め込んできた王城の高級なお茶菓子を食べて寛いでいるスレイ。

正直こう言っではなんだが、舞台が変わろうがどうしようが、マリーニアとエミリーの手合わせ程度に興味は湧かない。

いや、その後には楽しい手合わせがあるのも分かってはいるのだが。

スレイはそれほど気が長くなかった。

飽きたようなスレイに代わり、フルールがパタパタとアルスに飛び寄って声を掛けようとする。

すると、そんなフルールに気付いたアルスが、フルールが何か言う前に尋ねてきた。

「聞くのだが、アレで、間違いなくディザスター殿は“下級”の邪神なのだね？」

「うん、というかアレでもまだ力の一部に過ぎないよ」

アルスの言葉をあっさり肯定するフルール。

そして本題を告げる。

「さて、ご覧の通り竜皇や魔王が思いっきり暴れても問題ない舞台を用意したんだから、“歪”の力とやらだって問題ないでしょ？ 続きを始めようよ」

フルールは気楽に言う。

だが、確かにこうしていても仕方が無い。

アルスは呆然とした表情をしながらも、マリーニアとエミリーの手合わせの再開を宣言するのだった。

どこか白けた空気が漂う中困惑したようにマリーニアとエミリーが見つめ合う。

「そ、それじゃあ行くわよ“星詠み”さん」

「え、ええおいでなさい“勇者”さん」

互いにわざとらしく挑発し、やっと我を取り戻すと、今度は睨み合い、そしてエミリーが思いっきり剣を振るった。

まだ剣と盾と鎧に不思議な光は宿っている。

マリーニアは横に大きく跳んだ。

エミリーが振るった剣から直線上に際限なく底の見えないほど深い亀裂が走り、創られた地の果てまでもその亀裂は届く。

途上にいた見物人達もその力を回避していた。

先程見せられた物に比べれば見劣りするとはいえ、この“歪”の力も十分に驚異的なものである。

いやエミリーが未熟な為この程度だが、世界ヴェスタの“歪”とは邪神すらも封印してのけた空間である。

力の質という面で見れば、それは非常に優れたものであった。

だがマリーニアが言ったように、どのような力も当たらなければ意味はない。

何より本来の“歪”の力の、封術の応用の仕方とはこのような単純な物ではないのだ。

次々と繰り出される“歪”の力は幾つも底の見えない亀裂を作りながらも、マリーニアには決して当たらない。

マリーニアは余裕すら持って躲し、のみならずその亀裂によって狭められる行動範囲さえ苦にしていまいようであった。

そして“歪”の力を次々と繰り出した事で疲労によりエミリーの動きが衰えた瞬間。

マリーニアはその思考の間隙を突き、一気にエミリーに詰め寄ると、それに気付きエミリーが繰り出した剣を躲し、背後に回り込む。そして杖の先端を、エミリーの首の後ろに当てていた。

そこに込められた力に動けなくなるエミリー。

「アルス陛下」

マリーニアの促す言葉に頷くと、アルスは決着を告げる。

「それまで！マリーニア殿の勝ちだ！」

悔しそうに唇を噛み締めるエミリー。

マリーニアは敗者に何を告げるという事もせず、ただ静かに探索者ギルドの陣営へと戻っていく。

そしてエミリーも悔しそうな顔のまま、ヤンとライバンの元へと戻っていった。

ヤンはエミリーに視線も向けず、ただエリナをぼおーっと眺めている。

それに気付いたイリナが苛立たしげにヤンを害虫を見るように睨んでいる。

ライバンはやはり侮蔑の表情でエミリーを見やる。

本来ならば秘すべき“歪”の力さえ使いながらも、破れたエミリーに対し、ただただ呆れた様子だ。

職業・勇者が2人敗れた今、本来の“勇者”の力を示すのは自分しかいない、という自負を抱きライバンは呼ばれる前から中心へと進み出て行く。

と、気付くと地に走っていた筈のいくつもの亀裂が消えていた。他の者達も不思議そうな表情で地面を見ている。

「あ、地面の亀裂だったら僕が修復しておいたから気にしないで。地面にだったらいくらダメージを与えても僕が修復するから気にしないで戦ってね」

思わず硬直する一同。

何と言うか今日は常識外れの出来事ばかり体験して、全員が全員精神的な疲れを感じていた。

そんな中気にせずスレイは、相変わらずどうでも良さそうに茶菓子をやディザスターと共に食べながら座り込んでいる。

次の手合わせにも興味など湧かないのだから仕方が無い。

「あ、ずるい。僕もお菓子食べたいから混ぜてよー！」

そんな一人と一匹の元へとフルールはパタパタと飛んで戻っていた。

再び沈黙に満ちる空気。

「ごほんっ！それでは、次！ケリー殿とライバン」

そんな空気を打ち消すように、アルスが大きな声で2人の名を呼ぼう。

ケリーが中心へと進み出て、既にそこに立っていたライバンと睨み合った。

「それでは、始め！！」

開始の号令と共にケリーは魔力操作で雷速に至り、ライバンは闘気術と魔力操作の併用で亜光速へと至った。

スレイの感想は相変わらず職業・勇者の闘気術と魔力操作の併用は無駄が多いな、程度だ。

ケリーの友人志望の割には冷たい感じだが、案外そうでもない。仮にもクロウの弟子である以上、まだ未熟といえど、あの程度のステータス差程度、技量でどうにかしてみせるだろうと信賴してるのだ……これでも。

強化した今では、速度では完全にライバンが上を行き、他のステータスも互角かライバンの方が上である。

ステータスの差を利用し、連続で剣を繰り出し、思考分割で並行して短い呪文の魔法をも繰り出し怒濤の攻撃を仕掛けるライバン。

しかしケリーはそれらを上手く受け流し、あるいは避け、二刀を活用することでステータスの差を埋め、何とか凌いでいた。

ライバンは全力で攻めるも、ケリーが隠密行動により気配を消している為、目の前にいるのになにやら気配を捉え難いケリーに戸惑い、狙いがいい加減になる。

何よりケリーの刀術には上手さがあつた。

やはり僅か一ヶ月とはいえクロウの薫陶を受けた身である。

格上との戦いにも慣れているケリーは、寧ろライバンの未熟を突き、だんだんと攻勢に出るようになっていた。

もちろんケリーの刀速程度、ライバンは容易く捉えて見せる。

それでいながら、その二刀の変幻自在な軌道は、ライバンの予想を時に超え、だんだんとライバンを捉え始めていた。

ライバンは困惑を感じる。

今まで格上の相手に敗れる事はあっても、格下の相手はステータス差で強引に押し込み勝利してきた。

格下の相手がここまで自らとやり合った経験など一度も無かったのだ。

対し、ケリーは、クロウの一ヶ月の薫陶に加え、幼少期から探索者ギルドの子飼いとして色々と経験を積んでいた。

その経験がクロウとの一ヶ月の修練により洗練され、そしてここに来て丁度絶妙に自分より僅かに格上の相手と戦う事で花開いてきた。

とたん、より刀が手に馴染み、一体感を感じさせ、二刀をバラバラにそれでいてより繊細に緻密に振るえるような感覚がその身を走り抜ける。

そしてケリーはより変幻自在となったその二刀の軌道で、ライバンを翻弄し、攻勢に転じてみせた。

ライバンはその事実には驚き、剣技に乱れが出る。

その隙を更にケリーが突く、とケリーにとっては最善の展開で事は循環していく。

攻められているという事実についてライバンが焦れて、“歪”の力を使おうとするも、この場合それは悪手だ。

力を使う為に引こうとしたのが更に隙を生み、そのまま“歪”の力を使う余裕など与えずケリーは怒涛の如く攻め込む。

本来ならば速度差で引き離せる筈が、近接での斬り合いで僅かの隙も見出せず、引く為の隙が見つけれなかった。

更に困惑し戸惑うライバン。

もはや流れは完全にケリーにあった。

そんな中、見物していたクロウがポツリと呟く。

「ほう、こりゃあ少しばかり化けたかの？」

弟子の成長に、僅かに嬉しそうな口調である。

そのままケリーはライバンに流れを変える間を与えない。

そして、ここだ！と機を得ると、ケリーは瞬間限界以上の力を発揮して見せた。

怒涛の如き二刀の連撃がライバンを翻弄する。

そして次の瞬間。

二人は静かに動きを止めていた。

ライバンの剣がケリーの首筋に当てられ、ケリーの二刀がライバンの首筋と心臓に当てられていた。

「これは、引き分けかな？」

「いや、俺の負けだ」

ケリーに対し、ライバンが自らの敗北を宣言する。

「お前の刀が俺の首筋と心臓の位置を捉える方が、俺の剣をお前の首筋に当てるよりも早かった。完敗だよ」

ライバンはどこか爽やかな顔でそう告げた。

その表情には先程までは無かった明るいつもりの笑顔がある。

いや顔つきまでもどこか陰の抜けた、いい表情になっている。

そうすると、本来の素の顔が出て、ごく普通に好青年といった雰
囲気すら生まれていた。

ほうっ、と少しばかりスレイは興味を示す。

あいつ、もしかすると職業…勇者の本来の力、それを引き出す為
の素材と成り得るか？

何せこちらにはスレイもディザスターもフルールまでいる。

その気になれば、その者自身に芯があるならば、まだ鍛え上げ、
食い潰された才能をどうにかする事もできるかもしれない。

ふむ、密かにあいつのレベルを上げるのは邪魔しつつ、技量は上
げるような状況を作り出しつつ、暫し様子見、見込みがありそうなら
拉致するか。

無駄に力を使い、裏で色々仕込んで、それ次第では……などとも
はや犯罪者とは思えない思考をするスレイ。

そしてアルスが結果を告げる。

「それまで！ケリー殿の勝利だ！！」

ライバンは剣を引くと右手をケリーに差し出した。

ケリーも答え二刀を引き、納刀すると、右手を差し出す。

そして2人は握手を交わし、笑い合うとそのまま振り返り背中を
向け合い各陣営へと戻っていく。

その時ライバンに、アルスが声をかけた。

「ほう、いい顔をするようになったな」

「ええ、勝ちたい相手が出来ましたから」

嬉しそうな顔で告げるライバンに、自らの、“勇者”であること
に奢った表情は無くなっていた。

これは上手い事化けてくれたな、とアルスは嬉しげに笑う。

一方ケリーはクロウから思いっきり背中を叩かれていた。

「ようやったのう、ケリー」

嬉しげなクロウだがケリーはそれどころではない。

「ちょっ、いた、痛いですってば。強く叩きすぎです」

「いやあ、すまんすまん。弟子の成長が嬉しくての。カードを見てみるといいぞい」

「カードをですか？」

疑問の表情を浮かべながらも、ケリーはカードを取り出して見る。

ケリー

L V .. 7 9

年齢 .. 1 9

筋力 .. S S

体力 .. S S

魔力 .. C

敏捷 .. S S

器用 .. S S

精神 .. S S

運勢 .. A

称号 .. 不死殺し（アンデッド・キラー）、竜殺し（ドラゴン・バスター）、探索者ギルド特別工作員

特性 .. 魔力操作、隠密行動、思考加速、剣技上昇、刀技上昇、二刀流、炎耐性、水耐性、土耐性、風耐性、毒耐性

祝福 .. 戦神アレス

職業 .. 剣皇

装備 .. 桜花、散葉、オリハルコンのロングソード×2、オリハルコンのブレストプレート、ミスリル絹のシャツ、ミスリル絹のズボン、翼竜の革の靴

経験値 .. 7 8 0 2 次のL Vまで9 8

預金 .. 1 1 6 0 6 0 コメル

「これは!？」

ケリーは「刀技上昇」「二刀流」と二つの特性が増えている事に驚きを感じる、と同時に納得もしていた。

戦いの最中、突然湧き上がった今までに無い感覚、それはこの二つの特性を得た事によるものだと思えたのだ。

「だがまだまだ未熟なのは変わらん、これからビシビシ鍛えてやるから覚悟しておくのじゃぞ？」

「は、はい!!」

師の言葉と、先程出来た自分と実力も年も近い、負けたくない相手の存在に、ケリーは満面の笑みを浮かべる。

スレイも目的ではあるが、あまりにも高みにありすぎる。

そういう意味で等身大のライバルが出来た事はケリーの成長にとって大きな意義を持つのであった。

「ふむ、それでは次からは皆SS級相当以上ということになるかな?」

「だから俺はS級相当だと何度言えば……」

アルスに突っ込みを入れるスレイ。

だがアルスは相手にしない。

僅かばかり不機嫌になるスレイ。

「やはりまずは我が近衛隊の者達の力を見てもらいたいと思うので、マリア!と、ふむフェンリル殿お願いしてもよろしいですか?」

「はっ! 私は構いません」

生真面目に答えるフェンリル。

「どういう人選なんだ? フェンリルの方がステータスだけなら格上には見えたが、どう考えてもマリアの方が経験に長け、更に属性の相性でも上回っているだろう。あまりに不公平だと思うぞ?」

「ふむ、君ならそう見るだろうね。しかし少しかり称号…勇者の本領を分かっている者達が多いので、それを見てもらおうと思っ

たのさ」

「ほう、なるほどな」

アルスに対し、面白げに返すスレイ。

確かにそういう分かってない連中に、予想を覆す結果を見せるのは面白い。

だがまあ、フェンリルにも氷精霊の加護があるので、全ての不利を覆せる可能性が無い訳でもないのだが。

しかし、とスレイはマリアの持つ杖を見やる。

やはりアレの存在はデカ過ぎるな、と。

ちなみに、そんなスレイのアルスと対等に話す姿を見て、ゲッシユはやはり胃をキリキリと痛めていたのだった。

悠然と中心に進み出るマリアとフェンリル。

そこでフェンリルが述べる。

「マリア殿。先ほど聞いた仕込んでいるという加速薬、こんな事で使うのは勿体無いだろう？ ロックを解除せず、普通に加速魔法を使ってもらって構わないぞ？ ただし私も加速魔法を使わせてもらいたい。何せ加速魔法が無ければ私は光速の数倍の速度域が限度なのでね」

「あら、そうね。確かに私も仕掛けを使えばすぐに光速の数十倍の速度域に突入できるけど、それを除けば明らかに貴方に速度が劣っているし、最上級の加速魔法を使えるから一応無詠唱で光速の数十倍の速度域に突入はできるけど、駆け引きしようにも既にバレている状態だから使うのは難しい。そう考えると私の力があくまで仕掛け頼りと考えられるのは癪だから、この場合互いに条件を揃えた上で手合わせした方が、どちらにとっても納得できる形よね」

「ああ、私もそう思って提案させてもらった」

「そうね、その提案ありがたく受けさせてもらおうわ」

そう告げて、加速魔法を自らにかけるマリア。

しかもただの加速魔法ではなく、最上級の加速魔法だ。

フェンリルも最上級の加速魔法を自らにかける。

この場合元々の速度は関係無い。

これでお互いに光速の数十倍の速度域へと突入できるようになった。

アルスはこれを見て考える。

他の称号・勇者の時も、相手次第では今のルールを提案しようかと。

やはり幾ら豊かな国と言っても最高位の加速薬はかなりの出費なのだ。

「さてと、もう一つ準備させてもらいたいのだが宜しいだろうか」

「ええ、構わないわ。最善の状態の貴女を叩きのめしてこそ勝利にも価値があるという物だもの」

どこまでも挑戦的に笑うマリア。

その炎のように情熱的な性格が、フェンリルの提案を断る事を自らに許さない。

僅かに苦笑するフェンリル。

幾ら相性が悪い相手とはいえ、ここまでどこまでも自らを誇る相手に、少しばかりせこい手を使っている自分を嗤っての事だ。

「さて、フルール殿、だったか？一つ尋ねたいのだが、ここでは元の世界より召喚をすることは可能かな？」

「あー、大丈夫大丈夫、そういうのは全部繋げてあるから」

「そうか、では、『来い、フェンリル！！』」

詠唱する事無くただ純粹に力有る言葉で自らの乗騎を呼ぶフェンリル。

そして魔法陣が浮かび上がり、そこより新雪の如き白い毛皮の、

全長5メートル程の巨大な狼が飛び出して来る。

シチリア王国の永久凍土に棲まう魔狼フェンリル。

だがその大きさは通常の個体ものではない。

「うわぁ、ねーねー見てよスレイ。あれ特殊個体だよ？グラナルって人のグリフォンとかブレイズって人のペガサスとかも特殊個体なのかな？」

「恐らくな、そうでなければ自ら走った方が速いのだから意味が無いだろう。しかし天狼ほどの迫力は感じないな」

「当たり前だよ、そんなの。神獣と他の聖獣・魔獣を同列に語る事自体が間違いだってば」

フルールがはしゃぐのに冷静に返すスレイ、そこに更にフルールが突っ込みを入れる。

まるで神獣である天狼を実際に見たかのように語るスレイに疑問の視線が周囲から向けられる。

スレイは無表情なまま、何事もなかったかのように泰然としている。

別にバレても今更どうでもいいが、ただ面倒臭い。

このまま何も言わなければ、気の所為で済まされそうだし、そうしておこう。

そういう計算だ。

そんなスレイとは関係無く、フルールにあっさりとネタバラシをされ、どこか気まずそうにしながらも、フェンリルはマリアに語る。

「もう言われてしまったが、このフェンリルは特殊個体、元より光速での移動を可能とするが、当然私が加速魔法をかければ光速の数十倍での移動も可能となる訳だ」

そう告げて、当然の様に最上級の加速魔法を乗騎のフェンリルにかける、フェンリル。

「さて、まだこれだけでは無いぞ、『出でよ、氷精霊スレッジ！』」

┌

途端また魔法陣が浮かび上がり、そこより氷が人型をとったような、僅かに女性的な曲線を描く存在が現れる。

その存在にも最上級の加速魔法をかけるフェンリル。

「へえ、それが貴方に加護を与えている氷の上級精霊って訳ね」

「その通りだ、ついでに私のシークレットウェポンの効果を解説させてもらおう。まずこの氷剣アブソリュート・ゼロ、これは絶対零度の刃を以って敵を斬り裂き、更に周囲一帯の分子・原子運動すら

停止させる事が可能、また停止させる粒子の種類は私の力次第でどのような粒子をも停止可能な剣だ。そしてこの氷杖ステイシス、これは私の氷魔法の効果を最大限高める力を持った魔導触媒たる杖だ」

「あら、そこまで解説するなんて、本当に余裕なのね？」

「先程も言ったと思うが、余裕という訳ではない。ただ、これは実戦でもなければ試合でもない、力を見せ合う手合わせだ。力を出し惜しみなどされて終わってしまっただけは意味が無いだろう？」

自らの能力を解説するフェンリルにマリアは呆れたような声を出す。

しかし語られた理由に、やはり余裕じゃない、と肩を竦めながらも自らの杖を掲げて見せた。

実際フェンリルが、自らの能力をバラしたのも、マリアなら乗って自らの力をバラしてくれるだろうという駆け引きなのだが。

なにせ、相性が絶対的に悪い。

炎と氷だ。

それを分かっているマリアは当然のようにその駆け引きに乗ってみせる。

それがマリアという女だった。

「それじゃあ私も能力を解説しておこうかしら。と言ってもそのまま火炎魔法が得意ってだけで、別に特殊な特性も持ってないけど。ただこの炎杖カグツチは別よ？」

掲げた杖から漂う威圧感。

思わずフェンリルは冷や汗を垂らす。

「この炎杖カグツチは、召喚した時に何故か既に死んでいた異界の炎の神の遺骸から、同じく異界出身の神である火神アグニが創り出したと言われる究極級のシークレットウェポンよ。それこそその炎は何故か神殺しの炎とさえ謳われ、最低でも半径数十キロ四方を容易く炎で焼き尽くせるわ。私の力次第ではもっといくわね」

「それは大したものだね」

ごくりと唾を飲みながら言うフェンリル。

そんな中離れた場所では真紀がやや呆れたように呟いていた。

「というかカグツチにアグニって、異世界くんだりまでやって来て、元の世界の神話の神様の名前を聞く事になるなんてね」

「本当、節操無い」

出雲も頷いて返した。

「さてと、お互い準備もできたようだし、そろそろ開始の合図をお願いできますか？アルス陛下」

フェンリルにアルスは頷く、そして告げた。

「では、始め！！」

途端、フェンリルは光速の数十倍の速度で自らの乗騎ごとマリアに突撃する。

フェンリルは突撃しながら、まず氷精霊スレッジの力を借り、氷杖ステイシスで強化した氷魔法を限界まで多重魔法により重ねて、周囲一帯、干渉できる時空間・次元・位相全てを凍結させると、更に闘気術と魔力操作を以って自らのシークレットウェポン氷剣アブソリュート・ゼロを強化し、周囲一帯の原子運動を停止させ、全時空間座標、全次元座標、全位相の高低といった光速の数十倍の速度域に突入することによって干渉可能になったあらゆる全ての方向に絶対零度の刃を連続で繰り出した。

対してマリアは、ただ炎杖カグツチを地面に突き、そのまま自らの火炎魔法を上乗せし、カグツチの力を解放する。

途端、停止させられていた全ての時空間・次元・位相の周囲一帯の原子運動は激しく活動を再開し、超絶的な高温が二人の周囲一帯を包み込む。

それだけではなく超高密度の炎がマリアの周囲を包み、物理的な干渉力すら持って覆い尽くした。

フェンリルが繰り出した絶対零度の刃は、マリアの周囲を覆った

“炎の壁”によって全て受け止められ、マリアに届く事は無い。

それを見て、フェンリルはそのまま停止するとアルスに宣言した。

「私の負けです、アルス陛下」

敗北を認める言葉を聞き炎を収めるマリア。

「ただ一度無数の攻撃を繰り返して防がれただけだったと思うが？」

観戦していたアルス王がフェンリルに尋ねる。

「ええ、その通りです。ただその攻撃を私は私自身の全力を以って繰り返しました。ですが彼女の、マリア殿の作り出した炎の障壁を突破する事はできなかった。だから、私の負けです」

「なるほどな、分かった。それではマリアの勝ちだ!!」

アルスが宣言すると、マリアは拍子抜けしたような表情で肩の力を抜き、火炎魔法とカグツチによって作り出していた炎の領域と超高密度の“炎の壁”を解除する。

周囲の見物人達はその熱量に暑さを感じ、汗を掻いていたため、ほうつと溜息を吐く。

相変わらずスレイと二匹のペット達は涼しげな顔で、高級なお茶菓子に舌づつみをうっていたが。

なんとなく、話の流れを聞いていて、ああ、これは戦いの流れも見えたなと思い、興味が失ってしまったのだ。

尤も、カグツチの力だけは存分に見せてもらったが。

なるほど、あの炎の質は異常だな。

それがスレイにとっての収穫だった。

「称号…勇者の本領、究極級アルテマのシークレットウェポン、その力存分に見せてもらったよ」

「それじゃあまるで私がシークレットウェポンに頼ってるだけみたいじゃない。私の最上級火炎魔法、是非見せたかったんだけどね」

「ふふっ、そう聞こえたのならすまない。だが称号…勇者が伊達じゃないというのは存分に理解させてもらった。戦友としては頼もしく思うよ」

フェンリルは乗騎たる魔狼と氷精霊を魔法陣を作り出し送還し、

そのまま主君、アイスの元へと戻っていく。

マリアもどこかしら憮然としながら、同じ称号…勇者、カタリナやジルドレイ、マグナスの元へと戻っていった。

「それでは続いて、オウル殿とマグナス！」

おお、と場がざわめく。

なにせ“拳聖”の二つ名を持つSS級相当探索者と、“闘仙”の二つ名を持つ称号…勇者の対決だ。

その格闘戦に期待が高まる。

スレイもこれは非常に期待できると思っていた。

称号…勇者であるマグナスも駆け引きに長けていると思う。

だが何よりもオウルだ。

やはり年期が経験が違う。

暫く隠棲していたクロウと違い、ずっと現役でいる辺り、もしかしたら経験だけならクロウも上回る可能性もある。

それにオウルはあのグランド家の技さえ一部盗み出している。

そしてオウルのシークレットウェポン、究極級アルテマのような圧倒的な力は感じない、代わりに何か細かい応用に優れた能力を感じるあのセスタス。

感じる通りの能力であれば、圧倒的な経験量と技量を誇るオウルとの相性は凶悪なまでに良い筈だ。

そして何より、そう何よりだ！！

この2人の戦いが楽しみな最大の理由。

変身するのだ、この2人は！！

変身だ、変身。

実に少年の心が刺激される。

そう、スレイは未だ少年の心を持つ男なのだ。

さて、いったいどんな格好良い姿になってくれる事やら。

今回ばかりはお菓子を放置し、2人の姿に釘付けのスレイ。

仕方なく主に習うペット二匹。

そして中心へと進み出るオウルとマグナスの2人。

「さて、儂もフェンリル殿に倣って解説でもさせてもらおうかの。とはいえステータスに関しては見たままじゃしな。スレイ殿との会話で儂の技に関する程度理解しておるじやろうし。解説が必要なのはこのシークレットウェポンぐらいのものかの。とはいえこれも実に単純な代物でな、装備した者の闘気と魔力を完全に徹す、ただそれだけの代物じゃ。ただ徹し方次第で、色々と出来るかの」

「それは、所有者の力量が真に問われる、実に扱いの難しいシークレットウェポンですね」

オウルの解説にマグナスが静かに返す。

「それでは私も私の能力について解説したいところですが。先程ご覧になられた通り、私の能力など貴方のように多彩な特性などありませんからね。ステータスの解説は貴方とは違う意味で不要でしょう。ですので神拳スパルタクス、私のシークレットウェポンについて解説させて頂きます。これもまたある意味単純な能力です。敵のあらゆる防御をすり抜け、数十キロ先まで届く光の拳撃を放つ事ができる、そういうシークレットウェポンです」

「そりゃあ、なんとまあ。つまりお主の攻撃は受ける事なく完全に躲さなければいけないという事になるのう。苦労しそうじゃわい」

マグナスの言葉に飄々と返すオウル。

そのような事を言いつつも、ちっとも自分のシークレットウェポンの力を恐れているようには見えないオウルにマグナスは苦笑する。

「さて、双方準備はいいかな？」

「ええ、何時でも」

「おう、構わんぞい」

アルスの声に同時に肯定の返事を返す二人。

アルスは大きく息を吸い大声で告げる。

「それでは、始め！！」

途端双方共に魔闘術を用いる。

魔力が装甲化し身を覆っていく双方。

そして魔力の装甲化は終わる。

そこには異形の人型と化した、オウルとマグナスの2人が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3599q/>

シーカー

2012年1月15日07時16分発行